目　次

〈資料集〉

〈解説〉

共通語の発音とアクセント

金田一春彦

全日本の発音とアクセント

平山輝男

共通語のアクセント

秋永一枝

数詞・助数詞の発音とアクセント

桜井茂治
秋永一枝

共通語の発音で注意すること

桜井茂治

1　知っておきたい10の知識"Q＆A"

Q&A

Q. この辞典では、発音やアクセントをどのように表記しているのですか

A. まず、**発音**については、太字のカタカナで示し、「発音表記」を採っています。したがって、多くの国語辞書の見出しのような現代かなづかいによる表記とは必ずしも一致しません。

〈例〉　**ガッコー**（がっこう）　**ヒョージュン**（ひょうじゅん）
　　　カナズカイ（かなづかい）　**アルイワ**（あるいは）

また、特別な表記もあります。ガ行音は、一般には［ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ］ですが、ガ行鼻音（解説228ページ）の場合は、［カ゚・キ゚・ク゚・ケ゚・コ゚］で示しました。また、◌で囲んだところは、母音の無声化（解説227ページ）を示しています。

ことばによって２とおり（またはそれ以上）の読み方がある場合は、２とおり（またはそれ以上）の読み方を見出しに記載しています。イソン、（イゾン）依存　サッキュー、（ソーキュー）早急のようなカッコ内の読み方は、放送では〈許容〉として認めているものです。

次に**アクセント**については、発音表記のカタカナの上に￣で示しました。横線のある部分は高く発音され、横線のない部分は低く発音されます。横線の最後の部分が￢になっている場合は、その次の音から下がります。

ことばによっては、一つの語に２種類（またはそれ以上）のアクセントを記載しているものがあります。それは共通語アクセントが２種類（またはそれ以上）あることを示しているわけですが、この場合は共通語アクセントとしてよりふさわしいと思われるものを先にしました。

また、アイカキ゚、（アイカキ゚）合かぎ《鍵》のようなカッコ内のアクセントは、放送では〈許容〉として認めているものです。

Q&A

Q. 共通語のアクセントにはどのような特徴がありますか

A. 共通語のアクセントの特徴を二つあげるとすれば、次のようになるでしょう。

1．高いところは1拍か、そうでなければ連続した拍です。

例

ココロ（心）○○○、ヤマザクラ（山桜）○○○○○

ですから、○○○○型や○○○○○型のように、一つの語の中に高いところがはなれて出てくることはありません。

2．第1拍が高ければ第2拍は低くなり、逆に第1拍が低ければ第2拍は高くなります。つまり、第1拍と第2拍は高さがかならず違います。サクラ（桜）というような京阪式アクセントはないのです。共通語のアクセントは型が京阪式よりも単純であると言えます。

共通語のアクセントでもう一つ申し上げておきたいことは、最後の拍が高い語は、そのあとに助詞などが続くと、音が下がるものと下がらないものがあるということです。

共通語の型は大きく分けると平板式と起伏式の二つがあります。そして起伏式は、頭高（あたまだか）型、中高（なかだか）型、それに尾高（おだか）型の三つに分かれますから、四つの型があることになります。詳しくは解説をご覧いただくとして、先ほどの下がる音に関連して平板型と尾高型を説明します。

サクラ（桜）とヤスミ（休み）、あとに助詞「が」がつくとサクラカ゜は音が下がりませんが、ヤスミカ゜は助詞「が」が下がります。下がり目のない語が平板型で、最後の拍のあとに下がり目がある語を尾高型といいます。

詳しくは、解説174ページをお読みください。

余談ですが、共通語のアクセントの整然とした体系が、日本語の音声情報処理の開発をすすめるのに寄与しているといわれています。

Q&A ※

Q. 動詞・形容詞は「活用」しますが、アクセント辞典には終止形しか載っていません。活用形のアクセントはどうなっているのでしょう

A. まず動詞の終止形は、例外はありますが、基本的には２種類のアクセントしかありません。

２拍語は平板型と頭高型、３拍語は平板型と中高型、４拍語は平板型と中高型というようにそれぞれ２種類です。

２拍語を例にとると

平板型：ナル（鳴る）　頭高型：ナル（成る）の２種類です。

この二つの語が活用するとアクセントは次のようになります。

ナル（鳴る）ナラナイ、ナリマス、ナッテ、ナレバ、ナレ

ナル（成る）ナラナイ、ナリマス、ナッテ、ナレバ、ナレ

３拍語はどうでしょう。

平板型：ハレル（腫れる）　中高型：ハレル（晴れる）

ハレル（腫れる）

ハレナイ、ハレマス、ハレテ、ハレレバ、ハレロ

ハレル（晴れる）

ハレナイ、ハレマス、ハレテ、ハレレバ、ハレロ

「～マス」がつくと同型のアクセントになりますが、そのほかの活用形ではそれぞれ違うアクセントになっています。

このアクセントの型と拍数と活用形式（五段活用か一段活用か）とがすべて同じであれば，活用させてもそれぞれが同じアクセントになります。解説の200ページに動詞の活用表を載せてありますので、他の動詞についてもここから活用形のアクセントを導き出してみてください。

終止形のアクセントが基本的に２種類で，活用させてもその区別が保たれるということは、形容詞の場合もほとんど同じです。

詳しくは解説の202ページをご覧ください。

Q&A

Q. 同じことばで終わる複合名詞のアクセントに共通性はありますか

A. 複合名詞は「二つ以上の語が結合してできた名詞」をいいます。

例えば「遊び＋相手」の場合、「遊び」を前部要素、「相手」を後部要素と呼びますが、この二つのことばが結合して「遊び相手」という複合名詞になります。

では、複合名詞のアクセントに共通性はあるのでしょうか。

複合名詞の主要なものを整理して、表（資料集30ページ以降）にまとめましたのでご覧ください。複合名詞のアクセントの型を表で調べる方法として、次のような表示法を使っています。

（A型）　…○○○●●●　（後部要素の第１拍まで高い型）
　（例）アソビアイテ　（遊び＋相手）　和語
　　けんか～、話し～
（B型）　…○○○●●　（前部要素の最終拍まで高い型）
　（例）ガクシイン　（学士＋院）　漢語
　　人事～、参議～
（B＊型）　…○○○●●　（前部要素の最終拍の前まで高い型）
　（例）クナイチョー　（宮内＋庁）
　　防衛～、消防～

「～相手」のように、後部が漢字２字以上の名詞はアクセントの例外が少ないのですが、「同窓会」や「声明文」のように後部が漢字1字の語にはアクセントの例外が多くみられます。

なお、この辞典の本文に複合名詞（「○○調査」）、複合した地名（「○○山脈」）の参照見出しを、次のような形で作りました。

例　**…チョーサ（…調査→付P.53）**
　　…サンミャク（…山脈→付P.20）

（注１）　（B型）のうち、前部最終拍が、つまる音、はねる音、長音、二重母音後部などの場合に（B＊型）になる。

（注２）　以上のほか、○○○イインカイ（～委員会）などのように後部要素のアクセントを生かす複合名詞のアクセントがあるが、これには型名を付けていない。

Q&A

Q. 数詞に助数詞が付いたときの読み方やアクセントに、わかりやすい法則はあるのでしょうか

A. 数詞に助数詞が付いたときの読み方（発音）やアクセントは、きわめて複雑です。

まず、数詞の読み方には大きく分けて次の三つがあります。

①和語の系列（ヒト、フタ、ミ…）
②漢語の系列（イチ、ニ、サン…）
③外来語の系列（ワン、ツー、スリー…）

助数詞にも同じように和語、漢語、外来語の系列があって、それらが組み合わされて使われることも、読み方やアクセントを複雑にしている一つの理由です。「缶」を数えるときは、「ヒトカン」「フタカン」「サンカン」「ヨンカン」…と数えます。数字の「ヒト」「フタ」「ヨン」は和語、「サン」は漢語の読み方です。

さらに、助数詞の読み方は数詞によって変わる場合があります。例えば、助数詞の「本」は、イッポン（半濁音）、ニホン（清音）、サンボン（濁音）…となります。

詳しくは解説の223ページの「数詞・助数詞の発音とアクセント」をお読みください。

また、アクセントも助数詞によって変わってきます。

例えば、数詞に助数詞の「時間」が付くと、イチジカン、ニジカン、サンジカン、ヨジカン…のように、すべて規則的に○○ジカンの型をとります。しかし、助数詞が「年」になると、イチネン、ニネン、サンネン、ヨネン…のように、数詞によってアクセントの型が変わります。

「数詞＋助数詞の発音とアクセント」の用例は、資料集の63ページ以降の一覧表をご覧ください。

Q&A

Q. 「外来語」のアクセントにはどのような特徴がありますか
また、最近の傾向は？

A. 外来語、カタカナ語のアクセントには一つの傾向があり、多くの語が当てはまるので、比較的覚えやすいのが特徴です。

1．2拍、3拍の短い語は頭を高く発音する
例　ガス　ペン　グラス　テレビ　ファイル
2．4拍以上の語は終わりから数えて3拍目まで高く発音する
例　スカード　ブラウス　ストライキ　エレクトロニクス
ヒューマニズム　オーストラリア
3．古く入った語など、日本語になりきった語は平らに発音する
例　ガラス　ボタン　カステラ　ピストル　アルコール

もちろん例外はありますので、詳しくは解説186ページの「共通語のアクセント」第2章第5節をご覧ください。

また、外来語のアクセントの最近の特徴としては、「ドラム」「トースト」のように下がり目のあるアクセントの語を、「ドラム」「トースト」のように平らに発音する人が増えていることがあげられます。これは**「外来語アクセントの平板化」**と呼ばれます。

平板化は、とくに若い人に多くみられます。さらに、コンピューター関係の人は「ディスク」「データ」、音楽関係の人は「ギター」「サックス」のように、ある分野に関係した人びとにも専門用語の使い方に平板化の傾向がみられます。

この辞典では，調査などの結果、かなり定着したものについてのみ平板アクセントも取り入れました。今回新たに平板アクセントを採用したものには次のような語があります。「グラフ」「スクーター」「スニーカー」「オープニング」

Q&A

Q. 放送では地名の地元アクセントをどのようにしていますか

A. 放送などで地名（市町村名、旧国名、自然地名）を読むアクセントは２通りあります。一つは、「共通語（東京式）アクセント」で全国的に広く使われているアクセントです。もう一つは、「地元の慣用に従ったアクセント」で全国のそれぞれの地域で使われているアクセントです。

例えば、「台風19号では**青森**のリンゴ農家に大きな被害が出ましたが、**青森**だけではなくリンゴ産地の**長野**でも被害がありました」という放送文を、アナウンサーは共通語アクセントで「アオモリ」「ナカ゚ノ」のように発音します。ところが、地元アクセントで発音している人たちにとっては、なんとなく違和感があるという意見があります。

ＮＨＫでは、これまでこの２通りのアクセントについて論議してきました。現在では「地名のアクセントについては、全国放送では共通語アクセントを用いるが、地域放送では地元視聴者の要望が強く、地元の慣用によるアクセントを用いるほうが親しみやすいという場合には、地元アクセントを用いてもよい」ことにしています。

地名のアクセントは、その地域の慣用から生まれてきたもので尊重しなければなりませんが、全国の地域名を地元アクセントで発音し、放送することはかなり難しいといえます。

地元アクセントと共通語アクセントの違いの例は、次の通りです。

〈例〉	地元アクセント	共通語アクセント	〈例〉	地元アクセント	共通語アクセント
名寄	ナヨロ	ナヨロ	河内	カワチ	カワチ
青森	アオモリ	アオモリ	呉	クレ	クレ
長野	ナカ゚ノ	ナカ゚ノ	萩	ハキ゚	ハキ゚
栃木	トチキ゚	トチキ゚	高知	コーチ	コーチ

（なお、地名の共通語アクセントの例は資料集P.28参照）

Q&A

Q. 鼻濁音とはどのようなものですか

A. マミムメモを鼻をつまんで発音しようとするとどうなるでしょう。言えないことはありませんが変な発音です。マ「ｍａ」でいえば母音の「ａ」は口を開いたとき発音されますが、鼻をつまんでいると「ｍ」がよく発音されません。「ｍ」は鼻からも抜けていく発音だからです。そこでマ行は鼻音といっています。

では、ガ行音のガギグゲゴはどうでしょう。鼻をつまんでもだいたい発音することができます。これは破裂音です。ところがこのガ行音は地域にもよりますが、鼻へ抜ける、いわば、鼻にかかった発音もあるのです。このようにガ行音の鼻音化したものを一般的に**鼻濁音**（ガ行鼻音）といっています。

どのような場合に鼻音化するかといいますと、次の太字にしたところ、例えば、オン**ガ**ク（音楽）の「ガ」、ハイ**ゴ**（背後）の「ゴ」のように、ことば（語）の語中や語尾に出てくるガ行、また、「桜**ガ**咲イタ」「鳥**ガ**飛ンデイル」などの助詞のところです。一方、ガッコー（学校）、ギンコー（銀行）のように語頭に出てくる場合は鼻音化しない破裂音になります。

ところで、鼻濁音を全国的にみると、古い時代から鼻濁音を発音してきた地域と、発音してこなかった地域に分かれます。解説「全日本の発音とアクセント」の171ページにその図があります。

話はさかのぼりますが、1925年（大正14年）日本で放送がはじまった頃、放送への批判の中に、鼻濁音の出せないアナウンサーを指摘する声がありました。鼻濁音を発音する地域の人にとって、鼻濁音の出ないアナウンサーの発音は違和感があったからでしょう。

最近では、これまで鼻濁音を使っていた地域でも、若い人びとの間で鼻濁音はさらに減ってきています。

しかし、鼻濁音の持っているまろやかな響きは日本語の発音の美しさの一つである、と考える人びともまだ多いのです。現在ＮＨＫのアナウンサー教育では鼻濁音の指導をしています。鼻濁音の法則について、詳しくは解説の228ページをご覧ください。

Q&A

Q. 母音の無声化とはどのようなことですか

A. 元気よくアイウエオと発音してみてください。響きのある声が聞こえたと思います。これは発音したとき、声帯が振動したからです。試みに耳をふさいでアイウエオと発音してみましょう。耳によく響いてくるのがおわかりでしょう。これが有声音といわれる音です。「静かにしなさい。シー」といいますね。もう一度耳をふさいで「シー」と言ってみてください。たぶん今度は耳に響かなかったと思います。これは声帯が振動していないからです。このような音を無声音といいます。この場合、シ［ʃi］の母音［イ］は声帯を振動させていません。また「菊」（キク）という語を標準的に発音すると、［ki］の母音は口構えだけを残して、声帯を振動させず、息だけで発音している現象がみられます。これを母音の無声化といいます。共通語では、主として口構えの狭い母音［イ］・［ウ］が無声化しますが、それには一般的な決まりがあります。

決まりを一つ紹介します。

《キ》《ク》《シ》《ス》《チ》《ツ》《ヒ》《フ》《ピ》《プ》《シュ》などの拍は、《カ》《サ》《タ》《ハ》《パ》などの各行の拍の前にきたときに無声化します。前者をA、後者をBとして表にしてみます。Aの部分の拍（点線の部分）が無声化します。

A

カ行	キ・ク
サ行	シ・ス
タ行	チ・ツ
ハ行	ヒ・フ
パ行	ピ・プ
	シュ

＋

B

カ行	カキクケコ
サ行	サシスセソ
タ行	タチツテト
ハ行	ハヒフヘホ
パ行	パピプペポ
	シャシュショ

例えば
キ＋ク＝菊
ク＋サ＝草
ヒ＋カリ＝光

無声化について、詳しくは解説の227ページをご覧ください。

Q&A

Q. 「手術・技術」などは［シュジュツ・ギジュツ］と表記されていますが、そのとおりに正確に発音しなければなりませんか

A. 放送では［シジツ・ギジツ］に近く発音することを認めています。このような［シャ・シュ・ショ］などの音を、拗音（ようおん）といいます。拗音を含むことばには「新宿・出陣・美術・祝日」などがあります。こういったことばの拗音部分を、［シン**ジュ**ク・**シュ**ツジン・ビ**ジュ**ツ・**シュ**クジツ］のように意識してきちんと話そうとすると、発音がかなり難しくなります。そこで実際には［シンジク・シツジン・ビジツ・シクジツ］に近い発音をする人が多いようです。

また「手術」などは［シュ］と［ジュ］の二つもの拗音が続き、発音がさらに難しくなっています。実際には［シュジュツ・シュジツ・シジュツ・シジツ］という具合にさまざまな発音が考えられますが、文字で表せない違いも考えれば、各人各様の発音がありそうです。

そこで放送では、［シュ］や［ジュ］を含むことばの中で特に発音しにくいものについては、［シ］［ジ］に近い発音をしてもよいことにしています。「下宿・野宿・宿題・学習塾・半熟・外出・著述・宿舎・輸出・歳出」などのことばがその例です。

けれども「出典（シュッテン）」のように「失点（シッテン）」と聞き誤るようなおそれのあることばについては［シ・ジ］の発音は認めていません。同じく「出頭（シュットー）」と「執刀（シットー）」、あるいは「移出（イシュツ）」と「遺失・異質（イシツ）」なども明確に発音しなければなりません。同様に、「傑出・出品・出発」なども［ケッシツ・シッピン・シッパツ］と発音したのでは意味が伝わらなくなってしまいます。

なお、以前ＮＨＫが全国のアナウンサーを対象に行った調査でも、発音しにくいことばの中に「手術・著述」など拗音を含んだものがあげられています。

2　地名の発音とアクセント

地名は、原則として、本文の見出し項目からはずし、一括して示した。

2.1　複合した地名

地名のうち、「○○県、○○市、○○山、○○川、○○湖、○○半島、○○平野」などの「複合した地名」は、規則的なアクセントを持っているので、後部要素ごとにまとめ、それぞれ50音順に配列した。

また、「平板」、「尾高」など、普通に用いられる名称以外のアクセントの型の名称（例. A型、B型など）は、「複合名詞の発音とアクセント」と一致させた。30ページを参照されたい。

〜池　（B型）　○○○イケ

大鳥〜、神之(ゴーノ)〜、湖山(コヤマ)〜、東郷〜[1]　(注)[1]は（B＊）。

〜海　（B型）　○○○ウミ

内(ウチ)〜[1]、中(ナカ)〜、中ノ〜　(注)[1]一般用語としては（A）。

〜浦　（B型）　○○○ウラ

阿字ケ(アジカ゚)〜、伊ノ〜、海府(カイフ)〜、鹿島(カシマ)〜、霞ケ(カスミカ゚)〜、甲(カンノ)〜、鯛ノ(タイノ)〜、妙ノ(タエノ)〜、田子(タゴノ)〜、壇ノ〜[1]、檀ノ〜[2]、十府ノ(トフノ)〜[3]、西〜、東〜、屛風ケ〜、平砂(ヘイサ)〜、御火(ミホノ)〜、和歌(ワカ)〜　(注)[1]山口県。[2]香川県。[3]「トーノ〜」とも。

〜運河　（A型）　○○○ウンカ゚

利根(トネ)〜、スエズ〜

〜駅　（B型）　○○○エキ

粟生(アオ)〜、厚狭(アサ)〜、旭川(アサヒカワ)〜、安栖里(アセリ)〜、左沢(アテラザワ)〜、愛子(アヤシ)〜、石原(イサ)〜、石蟹(イシカ゚)〜、五十公野(イジミノ)〜、石動(イスルキ゚)〜、指宿(イブスキ)〜、動橋(イブリハシ)〜、有年(ウネ)〜、祖母島(ウバシマ)〜、瓜連(ウリズラ)〜、頴娃(エイ)〜、置賜(オイタマ)〜、麻植塚(オエヅカ)〜、大神(オーカ゚)〜、大嵐(オーゾレ)〜、大更(オーブケ)〜、大歩危(オーボケ)〜、越生(オゴセ)〜、大畑(オコバ)〜、音威子府(オトイネップ)〜、麻績(オミ)〜、尾鷲(オワセ)〜、柏原(カイバラ)〜、各務ケ原(カカ゚ミカ゚ハラ)〜[1]、風合瀬(カソセ)〜、勝木(ガツキ゚)〜[2]、冠着(カムリキ)〜、狩留家(カルカ゚)〜、川水流(カワズル)〜、川渡(カワタビ)〜、苅田(カンダ)〜、木下(キオロシ)〜、木次(キスキ)〜、北一已(キタイチャン)〜[3]、厳木(キユーラキ゚)〜、国包(クニカネ)〜、甲賀(コーカ゚)〜、桑折(コーリ)〜、特牛(コツトイ)〜[3]、坂祝(サカホキ゚)〜、鹿折(シシオリ)〜、膳所(ゼゼ)〜、妹尾(セノオ)〜、洗馬(セバ)〜、財部(タカラベ)〜、月寒(ツキサップ)〜[4]、光岡(テルオカ)〜、撫牛子(ナイジョーシ)〜、沼垂(ヌッタリ)〜、直

方(ノーガタ)〜、日生(ヒナセ)〜、南弟子屈(ミナミテシカガ)〜、三次(ミヨシ)〜、行縢(ムカバキ)〜、温泉津(ユノツ)〜　(注)(1)市名の公称は「カカミガ゜ハラ」。(2)新潟県。(3)は(B＊)。(4)町名は「ツキサム」。

〜園　(B型)　○○○エン

偕楽〜、兼六〜、後楽〜、六義(リクギ)〜

〜大島　(A型)　○○○オーシマ

奄美〜、周防(スオ)〜

〜海　(B型)　○○○カイ

有明〜、宇和〜、エーゲ〜、オホーツク〜、カリブ〜、不知火(シラヌイ)〜(1)、瀬戸内〜(1)、バルト〜、東シナ〜、ベーリング〜(2)、南シナ〜、八代〜
(注)(1)は(B＊)。(2)は[ク゜]。

〜海峡　(A型)　○○○カイキョー

明石(アカシ)〜、大隅〜、関門〜、紀淡〜、来島(クルシマ)〜、宗谷〜、平舘(タイラダテ)〜、津軽〜、対馬(ツシマ)〜、ドーバー〜、鳴門〜、根室〜、バシー〜、ベーリング〜(1)、ホルムズ〜、マゼラン〜、豊予〜　(注)(1)は[ク゜]。

〜潟　(B型)　○○○カ゜タ

邑知(オーチ)〜、河北(カホク)〜、八郎〜(1)、福島〜　(注)(1)は(B＊)。

〜川　(清音B型)　○○○カワ

安倍〜(1)、荒〜(1)、可愛(エノ)〜、大〜(2)、大白(オシラ)〜、紀ノ〜(2)、黒〜、江(ゴ)の〜、白(シラ)〜、十津〜(1)、直(ナオ)〜、早〜、斐伊(ヒイ)〜(2)、姫〜、富士〜(1)、緑〜、耳(ミミ)〜(1)、鵡(ム)〜、肱(ヒジ)〜　(注)(1)は(平板)。(2)は(B＊)。

〜川　(鼻音4拍)　(平板)

○○カ゜ワ

安曇(アド)〜、姉〜、阿武(アブ)〜、伊南(イナ)〜、揖斐(イビ)〜、揖保(イボ)〜、宇治〜、愛知(エチ)〜、江戸〜、小田〜、加古〜、加治〜、加茂〜、貴志〜、木曽〜、北〜、木戸〜、鬼怒〜、久慈〜、球磨〜、古座〜、犀(サイ)〜(2)、佐治〜、里〜、佐波(サバ)〜、蛇尾(サビ)〜、鮫(サメ)〜、沙流(サル)〜、庄〜(2)、周布(スフ)〜(1)、玉〜(1)、多摩〜(1)、茶路(チャロ)〜(1)、利根〜、豊〜(3)、那珂(ナカ)〜(1)、那賀(ナカ)〜(1)、沼田(ヌタ)〜、根尾(ネオ)〜、土師(ハゼ)〜、日置(ヒキ)〜、飛騨〜、日野〜、閉伊(ヘイ)〜(2)、ポー〜(2)、保津(ホズ)〜、真野〜、美嚢(ミノ)〜、宮〜、無加(ムカ)〜、武庫(ムコ)〜、野洲(ヤス)〜、矢田(ヤタ)〜、矢部〜、由良〜、淀〜、和賀(ワカ゜)〜　(注)(1)は(B)。(2)は(B＊)。(3)は市名は「〜カワ」。

〜川　(鼻音4拍以外)　(B型)

○○○カ゜ワ

吾妻(アガツマ)〜、阿賀野〜、阿寒〜(1)、芦田〜、芦別〜、梓〜、網走(アバシリ)〜、阿武隈〜、破間(アブルマ)〜、アマゾン〜(1)、綾北〜、有田(アリタ)〜、粟野〜、胆沢(イサワ)〜、石狩〜、五十鈴(イスズ)〜、夷隅(イスミ)〜、糸魚(イトイ)〜(1)、入間〜、岩木〜、岩国〜、魚野〜、請戸〜、碓氷〜(1)、浦幌〜、雨竜〜(1)、江合(エアイ)〜(1)、江別〜、エルベ〜、奥入瀬(オイラセ)〜、大阿仁〜、大井〜、大堰(オーイ)〜、大分〜、太田〜、王滝(オータキ)〜、大野〜、大淀〜、興部(オコッペ)〜、追波(オッパ)〜、音更(オトフケ)〜、小櫃(オビツ)〜、小丸〜、思(オモイ)〜(1)、小本(オモト)〜

～、雄物～、小矢部～、遠賀（オンガ）～、音別～、片品～、鏑（カブラ）～、釜無～、烏～、神崎～、神戸（カンド）～、神流（カンナ）～、神野瀬（カンノセ）～、上林（カンバヤシ）～、菊池～、北上（キタカミ）～、北山～、肝属（キモツキ）～、櫛田～、釧路～、九頭竜～[1]、熊野～、雲出（クモズ）～、黒井～、黒部～、小阿仁～、小糸～、小貝（コカイ）～[1]、五ケ瀬～、五行（ゴギョー）～[1]、厚東（コトー）～[1]、五戸（ゴノヘ）～、子吉（コヨシ）～、西城（サイジョー）～[1]、境～[1]、相模～、酒匂（サカワ）～、桜～、札内（サツナイ）～[1]、猿ケ石（サルガイシ）～、重信～、静内（シズナイ）～[1]、信濃（シナノ）～、標津（シベツ）～、島田（シマダ）～、四万十（シマント）～、常願寺～、渚滑（ショコツ）～、尻別～、神通（ジンズー）～[1]、新利根～、新淀～、鈴鹿～、隅田～、セーヌ～、川内（センダイ）～[1]、千代（センダイ）～、空知～、田～、大谷（ダイヤ）～、高津～、高時～、高梁（タカハシ）～、竹野～、只見～、筑後～、千種（チクサ）～、千曲～、千歳～、忠別～、鶴見～、天塩（テシオ）～、手取（テドリ）～、テムズ～、天神～[1]、天竜～[1]、銅山（ドーザン）～[1]、当別～、十勝～、常浪（トコナミ）～、常呂（トコロ）～、利別（トシベツ）～、ドナウ～[1]、巴～、豊似（トヨニ）～、豊平～、富田（トンダ）～、頓別～、ナイル～、長門～、長良～、夏井～、名取～、奈半利（ナハリ）～、名張～、名寄～、成羽（ナリワ）～、鳴瀬（ナルセ）～、新冠（ニイカップ）～、新井田（ニイダ）～、仁井田（ニイダ）～、錦～、西別～、仁淀（ニヨド）～、額平（ヌカビラ）～、迫（ハサマ）～、馬洗（バセン）～[1]、ハドソン～[1]、馬入（バニュー）～[1]、美瑛（ビエイ）～[1]、匹見～、菱田～、日高（ヒダカ）～、一ツ瀬～、涸沼～、広瀬～、広渡（ヒロト）～、風蓮（フーレン）～[1]、笛吹～、古利根～、箒（ホーキ）～、ボルガ～、槙尾（マキノオ）～、益田（マスダ）～、松浦～、松田～、万瀬（マノセ）～、馬淵（マベチ）～、円山～、三面（ミオモテ）～、三篠（ミササ）～、ミシシッピ～、南部（ミナベ）～、メコン～[1]、最上～、駅舘（ヤッカン）～[1]、矢作（ヤハギ）～、山国～、山田～、大和～、夕張～、湧別～、檮原（ユスハラ）～、養老～[1]、吉井～、吉野～、米代～、歴舟～、六郷～[1]、渡良瀬（ワタラセ）～、渡（ワタリ）～　（注）[1]は（B＊）。

～丘陵　（A型）

○○○キューリョー

魚沼～、奥能登～、笹森～、狭山（サヤマ）～、白糠（シラヌカ）～、宗谷～、多摩～、津名～、東頸城（ヒガシクビキ）～、房総～、宝達（ホーダツ）～

～峡　（平板）　○○○キョー

吾妻～、清津～、三段～、昇仙～[1]、層雲～、帝釈（タイシャク）～、長門（チョーモン）～、天人～、天竜～　（注）[1]は（B＊）も。

～橋　（平板）　○○○キョー

錦帯～

～区　（B型）　○○○ク

足立～、荒川～、板橋～、江戸川～、大田～、葛飾～、北～、江東～[1]、品川～、渋谷～、新宿～[2]、杉並～、墨田～、世田谷～、台東～[1]、中央～[1]、千代田～、豊島～、中野～、練馬～、文京～[1]、港～、目黒～

(注)[1]は(B＊)。[2]は(B＊)も。

〜郡　(B型)　○○○グン

英田(アイダ)〜、姶良(アイラ)〜、吾川(アガワ)〜、飽海(アクミ)〜、安芸(アキ)〜[1]、厚狭(アサ)〜、朝来(アサゴ)〜、足寄(アショロ)〜、足羽(アスワ)〜、厚岸(アッケシ)〜、阿武(アブ)〜、海部(アマ)〜[2]、阿山(アヤマ)〜、安房(アワ)〜、飯石(イーシ)〜、胆沢(イサワ)〜、出石(イズシ)〜、夷隅(イスミ)〜、員弁(イナベ)〜、揖斐(イビ)〜、揖宿(イブスキ)〜[3]、揖保(イボ)〜、印旛(インバ)〜、宇土(ウト)〜、枝幸(エサシ)〜、愛知(エチ)〜、麻植(オエ)〜、邑智(オーチ)〜、邑楽(オーラ)〜、雄勝(オガチ)〜、邑久(オク)〜、牡鹿(オシカ)〜、遠敷(オニュー)〜[8]、遠賀(オンガ)〜、海部(カイフ)〜[4]、刈田(カッタ)〜、可児(カニ)〜、鹿足(カノアシ)〜、香美(カミ)〜、上浮穴(カミウケナ)〜、上都賀(カミツガ)〜、上閉伊(カミヘイ)〜[8]、上益城(カミマシキ)〜、上水内(カミミノチ)〜、刈羽(カリワ)〜、川辺(カワナベ)〜、北安曇(キタアズミ)〜、北海部(キタアマベ)〜、北巨摩(キタコマ)〜、北設楽(キタシタラ)〜、北牟婁(キタムロ)〜、肝属(キモツキ)〜、玖珂(クガ)〜、郡上(グジョー)〜[8]、玖珠(クス)〜、国頭(クニガミ)〜、九戸(クノヘ)〜、甲賀(コーガ)〜、甲奴(コーヌ)〜、佐伯(サエキ)〜[5]、猿島(サシマ)〜、更級(サラシナ)〜、沙流(サル)〜、三島(サントー)〜[8]、宍粟(シソー)〜[8]、後月(シツキ)〜、標津(シベツ)〜、小豆(ショーズ)〜、紫波(シワ)〜、寿都(スッツ)〜、曽於(ソオ)〜、匝瑳(ソーサ)〜、小県(チーサガタ)〜、筑紫(チクシ)〜[6]、綴喜(ツズキ)〜、天塩(テシオ)〜、登米(トメ)〜、那珂(ナカ)〜、行方(ナメカタ)〜、新冠(ニイカップ)〜、新治(ニイハリ)〜[7]、爾志(ニシ)〜、西彼杵(ニシソノギ)〜、爾摩(ニマ)〜、丹生(ニュー)〜、婦負(ネイ)〜、能義(ノギ)〜、榛原(ハイバラ)〜、幡多(ハタ)〜、埴科(ハニシナ)〜、氷上(ヒカミ)〜、簸川(ヒカワ)〜、鳳至(フゲシ)〜、宝飯(ホイ)〜、飽託(ホータク)〜、益田(マシタ)〜、三井(ミイ)〜、三潴(ミズマ)〜、御調(ミツギ)〜、三養基(ミヤキ)〜、京都(ミヤコ)〜、武儀(ムギ)〜、桃生(モノー)〜、八頭(ヤズ)〜、八束(ヤツカ)〜、養父(ヤブ)〜、耶麻(ヤマ)〜、吉敷(ヨシキ)〜、度会(ワタライ)〜[8]、亘理(ワタリ)〜　(注)[1]は三重。広島と高知は「アキ」。[2]は愛知。徳島は「カイフ」。[3]は市名・駅名・温泉名の表記は「指宿」。[4]は徳島。愛知は「アマ」。[5]は広島。大分の市名は「サイキ」。[6]は郡名と「筑紫野市」は「チクシ〜」。旧国名・山地名・平野名は「ツクシ」。[7]は茨城。群馬の村名は「ニーハル」。[8]は(B＊)。

〜渓　(B型)　○○○ケイ

祖谷(イヤ)〜、面河(オモゴ)〜、寒霞(カンカ)〜、猊鼻(ゲイビ)〜、厳美(ゲンビ)〜、定山〜[1]、千丈〜[1]、断魚(ダンギョ)〜、耶馬(ヤバ)〜　(注)[1]は(B＊)。

〜渓谷　(A型)　○○○ケイコク

抱返(ダキガエリ)〜、中津〜

〜渓流　(A型)　○○○ケイリュー

奥入瀬(オイラセ)〜

〜県　(B型)　○○○ケン

愛知〜、青森〜、秋田〜、石川〜、茨城(イバラキ)〜[1]、岩手〜、愛媛〜、大分〜、岡山〜、沖縄〜、香川〜、鹿児島〜、神奈川〜、岐阜〜、熊本〜、群馬〜、高知〜、埼玉〜、佐賀〜、滋賀

〜、静岡〜、島根〜、千葉〜、徳島〜、栃木〜、鳥取〜、富山〜、長崎〜(1)、長野〜、奈良〜、新潟〜、兵庫〜、広島〜、福井〜、福岡〜、福島〜、三重〜、宮城〜、宮崎〜(1)、山形〜、山口〜(1)、山梨〜(1)、和歌山〜　(注)(1)は(BとB＊)。

〜湖　(B型)　○○○コ

青木〜、阿寒〜(1)、芦ノ〜、厚岸(アツケシ)〜、網走(アバシリ)〜、池田〜、エリー〜(1)、小川原(オガワラ)〜、奥多摩〜、オンタリオ〜、ガツン〜(1)、加茂〜、河口〜(4)、木崎〜、屈斜路(クッシャロ)〜、児島〜、西(サイ)〜(1)、相模〜、狭山(サヤマ)〜、サロマ〜、然別(シカリベツ)〜、支笏(シコツ)〜(4)、十三(ジューサン)〜(1)、精進(ショージ)〜、宍道(シンジ)〜、諏訪〜(2)、多摩〜、中禅寺〜、濤沸(トーフツ)〜、洞爺(トーヤ)〜、塘路(トーロ)〜、十和田〜、ネス〜、野尻〜、野反(ノゾリ)〜、能取(ノトロ)〜、バイカル〜、浜名〜、春採(ハルトリ)〜、榛名(ハルナ)〜、ビクトリア〜、檜原(ヒバラ)〜、琵琶〜(2)、風蓮〜(1)、摩周〜(1)、松原〜、三方〜、本栖(モトス)〜、山中〜、余呉(ヨゴ)〜(3)　(注)(1)は(B＊)。(2)は(平板)。(3)は「ヨコ°ノウミ」とも。(4)は(B＊)も。

〜越　(平板)　○○○コ°エ

岩館(イワダテ)〜、二戸平(ニヘタイラ)〜、八十里〜、六十里〜

〜公園　(A型)　○○○コーエン

上野〜、東山〜、日比谷〜、栗林〜

〜高原　(A型)　○○○コーゲ°ン

アルデンヌ〜、石見(イワミ)〜、吉備(キビ)〜、久万(クマ)〜、志賀〜、デカン〜、トランシルバニア〜、那須〜

〜鉱泉　(A型)　○○○コーセン

名栗〜、八塩〜

〜高地　(A型)　○○○コーチ

ギアナ〜、丹波〜、飛騨〜

〜崎　(B型)　○○○サキ

安乗(アノリ)〜、余部(アマルベ)〜、歌津〜、御箱(オハコ)〜、亀ケ(カメガ)〜、韓(カラ)〜、黒〜、洲(スノ)〜、乳ケ(チガ)〜、魹ケ(トドガ)〜、姫〜、真〜、三(ミ)〜、御〜

〜崎　(B型)　○○○ザキ

石廊(イロー)〜(1)、大戸瀬(オードセ)〜、大間〜、興津(オキツ)〜、大瀬(オセ)〜、御前〜(1)、樫野〜、叶(カナエ)〜、蒲戸(カマド)〜、梶取(カンドリ)〜、観音〜(1)、行部(ギョーブ)〜、九木〜、首(コーベ)〜、黄金(コガネ)〜、沢〜、潮(シオ)〜、志々岐(シジキ)〜、地蔵〜(1)、尻屋〜、関〜、芹〜、大王〜(1)、太東〜(1)、田倉〜、竜飛(タッピ)〜、剣(ツルギ)〜、鶴見〜、津和〜、泊〜、夏泊(ナツドマリ)〜、入道〜(1)、野島〜、野付〜、野母〜、弾(ハジキ)〜、八幡〜、鼻面(ハナヅラ)〜、艫作(ヘナシ)〜、松帆〜、三木〜、鎧(ヨロイ)〜(1)、禄剛(ロッコー)〜(1)、鷲(ワシ)〜　(注)(1)は(B＊)。

〜埼　(B型)　○○○ザキ

犬吠(イヌボー)〜(1)、塩屋〜　(注)(1)は(B＊)。

〜岬　(B型)　○○○ザキ

成生(ナリュー)〜(1)、鋸(ノコギリ)〜　(注)(1)は(B＊)。

〜山　(B型)　○○○サン

秋葉(アキバ)〜(1)、四阿(アズマヤ)〜、阿蘇

～、天城～、石鎚(イシヅチ)～、飯豊(イーデ)～、岩木～、岩手～、恵那～、大台ヶ原(オーダイガハラ)～、大滝根～、大万木(オーヨロギ)～、御岳(オンタケ)～(4)、月(ガッ)～(2)、葛城(カツラギ)～、鹿野(カノー)～(2)、加波(カバ)～、金峰(キンプ)～、金北(キンポク)～、九重(クジュー)～(2)、久住(クジュー)～(2)、九度(クド)～、高洲(コーノス)～、高野～、金剛～(2)、三瓶(サンベ)～、紫尾(シビ)～、至仏～、白根～、清冷～(2)、脊振(セフリ)～、祖母(ソボ)～、帝釈～、大満寺～、高尾～、高縄～、竜良(タテラ)～、玉置～、樽前～、鳥海(チョーカイ)～(2)、筑波～、剣(ツルギ)～、天上～(2)、苗場～、那岐(ナギ)～、那智～、七時雨(ナナシグレ)～、男体～(2)、難台～(2)、女峰(ニョホー)～(2)、根本～、野呂～、白(ハク)～(2)、白馬(ハクバ)～(3)、羽黒～、八海(ハッカイ)～(2)、八甲田～、花園～、早池峰(ハヤチネ)～、榛名～、磐梯～(2)、英彦(ヒコ)～、武甲～(2)、富士～(5)、両子(フタゴ)～、法沢(ホータク)～、宝達(ホーダツ)～、宝登(ホド)～、摩耶～、御岳(ミタケ)～、三峰～、三頭(ミトー)～(2)、身延～、妙義～、妙見～(2)、妙高～(2)、矢頭(ヤズ)～、八溝(ヤミゾ)～、湯殿～、両神(リョーカミ)～、六甲～(2)

(注)(1)は「アキバ～」とも。(2)は(B＊)。(3)は和歌山。(4)は(頭高)も。(5)は(頭高)。

～山　(B型)　○○○ザン

硫黄～(1)、有珠(ウス)～、大塔(オートー)～(1)、恐羅漢(オソラカン)～(1)、寒風～(1)、生藤(キトー)～(1)、金時～、金峰～(キンポー)～(1)、久能(クノー)～(1)、群別～、庚申～(1)、五剣～(1)、五葉～(1)、蔵王～(2)、三方(サンポー)～(1)、尺丈～(1)、勝光～(1)、皇海(スカイ)～(1)、千丈～(1)、船通(センツー)～(1)、大雪(タイセツ)～、太平～(1)、大無間(ダイムゲン)～(1)、筒上(ツツジョー)～(1)、天王～(1)、天目～、八剣(ハッケン)～(1)、比叡～(1)、鳳翩(ホーベン)～(1)、宝立(ホーリュー)～(1)、妙法～(1)、悠久～(1)、雷～(1)、利尻～、竜王～(1)、霊仙～(1)　(注)(1)は(B＊)。(2)は(B＊)、「～サン」とも。

～山塊　(A型)　○○○ザンカイ

御坂(ミサカ)～

～山地　(A型)　○○○ザンチ

朝日～、足尾～、飯豊(イーデ)～、石狩～、出水(イズミ)～、伊那～、伊吹～、ウラル～、笠置～、狩場～、関東～、冠山(カンムリヤマ)～、紀伊～、肝属(キモツキ)～、九州～、国見～、四国～、脊振(セフリ)～、太平～、高隈(タカクマ)～、高見～、丹後～、丹沢～、筑肥～、筑摩～、秩父～、中国～、津軽～、筑紫(ツクシ)～、剣(ツルギ)～、出羽～、天守(テンシュ)～、布引～、野坂(ノサカ)～、比良～、増毛(マシケ)～、真昼～、身延～、八溝～、諭鶴羽(ユズルハ)～、養老～、両白(リョーハク)～、六甲～

～山脈　(A型)　○○○ザンミャク

赤石～、阿讃～、アルプス～、アンデス～、石鎚(イシヅチ)～、和泉～、越後～、大峰～、木曽～、金剛～、讃岐～、鈴鹿～、飛驒～、ヒマラヤ～、ピレネー～、三国～、ロッキー～

～市　(B型)　○○○シ

安芸(アキ)～、赤穂(アコー)～(1)、旭川(アサヒカワ)～、足利(アシカガ)～、有田(アリタ)

～、安中(アンナカ)～、諫早(イサハヤ)～、石巻(イシノマキ)～、出水(イズミ)～、伊勢崎(イセサキ)～、糸魚川(イトイガワ)～、茨木(イバラキ)～、指宿(イブスキ)～(2)、今治(イマバリ)～、因島(インノシマ)～、臼杵(ウスキ)～、江刺(エサシ)～(3)、恵那(エナ)～、大洲(オーズ)～、大府(オーブ)～、大牟田(オームタ)～、青梅(オーメ)～、男鹿(オガ)～、小郡(オゴーリ)～、小千谷(オジヤ)～、小浜(オバマ)～、小山(オヤマ)～、尾鷲(オワセ)～、各務原(カカミガハラ)～、橿原(カシハラ)～、鹿角(カズノ)～、加須(カゾ)～、交野(カタノ)～、門真(カドマ)～、鹿沼(カヌマ)～、鹿屋(カノヤ)～、蒲郡(ガマゴーリ)～、観音寺(カンオンジ)～、北上(キタカミ)～、宜野湾(ギノワン)～(1)、行田(ギョーダ)～、桐生(キリュー)～(1)、釧路(クシロ)～、下松(クダマツ)～、熊谷(クマガヤ)～(4)、気仙沼(ケセンヌマ)～、更埴(コーショク)～、古河(コガ)～、湖西(コサイ)～(1)、越谷(コシガヤ)～、御所(ゴセ)～、狛江(コマエ)～、佐伯(サイキ)～(5)、寒河江(サガエ)～、坂戸(サカド)～、佐世保(サセボ)～、狭山(サヤマ)～、志木(シキ)～、新発田(シバタ)～、白石(シロイシ)～、白根(シロネ)～、新城(シンシロ)～、吹田(スイタ)～、宿毛(スクモ)～、須坂(スザカ)～、須崎(スサキ)～、逗子(ズシ)～、珠洲(スズ)～、諏訪(スワ)～、川内(センダイ)～(1)、総社(ソージャ)～、高梁(タカハシ)～、垂水(タルミズ)～、筑紫野(チクシノ)～、知立(チリュー)～(1)、都留(ツル)～、東金(トーガネ)～、常滑(トコナメ)～、鳥栖(トス)～、砺波(トナミ)～、豊明(トヨアケ)～、豊川(トヨカワ)～(6)、豊栄(トヨサカ)～、取手(トリデ)～、長門(ナガト)～、滑川(ナメリカワ)～、鳴門(ナルト)～、南国(ナンコク)～、新座(ニーザ)～、新津(ニーツ)～、新居浜(ニイハマ)～、直方(ノーガタ)～、羽咋(ハクイ)～(1)、秦野(ハダノ)～、羽生(ハニュー)～(1)、日田(ヒタ)～、美唄(ビバイ)～(1)、氷見(ヒミ)～、日向(ヒューガ)～、枚方(ヒラカタ)～、平良(ヒララ)～、豊前(ブゼン)～(1)、福生(フッサ)～、富津(フッツ)～、防府(ホーフ)～、保谷(ホーヤ)～、本渡(ホンド)～、松任(マットー)～(1)、三郷(ミサト)～、瑞浪(ミズナミ)～、水海道(ミツカイドー)～(1)、美祢(ミネ)～、箕面(ミノオ)～、三次(ミヨシ)～、向日(ムコー)～(1)、真岡(モーカ)～、焼津(ヤイズ)～、安来(ヤスギ)～、八女(ヤメ)～、四街道(ヨツカイドー)～(1)、留萌(ルモイ)～(1)、稚内(ワッカナイ)～(1)　(注)(1)は(B＊)。(2)郡名は「揖宿」。(3)は岩手県。北海道には、「江差町・枝幸町(郡)」がある。(4)「熊谷次郎直実」は「クマガ゜イ」。(5)は大分県。広島県の郡名は「サエキ」。(6)川名は「～ガ゜ワ」。

～支庁　○○○シチョー

網走(アバシリ)～、石狩～、胆振(イブリ)～、渡島(オシマ)～、上川～、釧路～、後志(シリベシ)～、宗谷～、空知～、十勝～、根室～、日高～、檜山～、留萌～

～島　(清音3・4拍)　(平板)

○○シマ

網地(アジ)～、粟～、伊～、家～、池～、浮(ウカ)～、宇久～、江の～(3)、男(オ)～(4)、大～(1)、黄(オー)～、椛(カバ)～、蕪(カブ)～、上(カミ)～、黒～、興居(ゴゴ)～、地ノ(ジノ)～(2)、菅(スガ)～、高～、鷹～、度(タク)～、竹～、角(ツノ)～、利(ト)～(4)、戸(ト)～、鳥～、直～、長～、奈留(ナル)～、沼(ヌ)～(4)、端(ハ)～、彦～、姫～、平(ヒラ)～、深～、福～、松～(5)、

見(ミ)～[4]、水～、女(メ)～[4]、八(ヤ)～[2]、屋久(ヤク)～、弓削(ユゲ)～、由利(ユリ)～　(注)[1]は(B＊)。[2]は(B)。[3]は(尾高)も。[4]は(B)も。[5]は(A)と(B)。

～島　(清音５拍以上)　(B型)

○○○シマ

青ケ(アオカ゚)～、淡路～、生月(イキツキ)～[1]、厳(イツク)～、祝(イワイ)～[2]、因(インノ)～、鵜来(ウグル)～、鵜度根(ウドネ)～、大津～、大三～、沖ノ～、隠岐(オキノ)～、小値賀(オジカ)～[1]、小呂(オロノ)～[1]、北木(キタキ゚)～、九十九(クジューク)～、口之(クチノ)～、神津(コーズ)～、神(コーノ)～、嵯峨ノ～、島野浦～、城ケ(ジョーカ゚)～、小豆(ショード)～、種子(タネカ゚)～、竹生(チクブ)～、徳之～、知夫里(チブリ)～[1]、友ケ(トモカ゚)～、中通(ナカドーリ)～[1]、中(ナカノ)～、中ノ～、西之～、能古(ノコノ)～、平戸～[1]、坊勢(ボーゼ)～[1]、馬渡(マダラ)～[1]、南島～、横当(ヨコアテ)～[1]　(注)[1]は(平板)。[2]は(B＊)。

～島　(濁音)　(平板)　○○○ジマ

悪石(アクセキ)～、伊江～、伊王～、硫黄～、生口(イクチ)～、藺灘波(イナンバ)～、伊吹～、西表(イリオモテ)～、江田(エタ)～、恵比須～、烏帽子(エボシ)～、御五神(オイツカミ)～、大毛(オーケ゚)～、大立(オータテ)～、青海(オーミ)～、大矢野～、男木(オキ゚)～、沖大東(オキダイトー)～、沖縄～、沖永良部(オキノエラブ)～、加唐(カカラ)～[1]、鹿久居(カクイ)～、笠戸(カサド)～、臥蛇(ガジャ)～、上蒲刈(カミカマカ゚リ)～、上甑(カミコシキ)～、喜界(キカイ)～[2][3]、北大東(キタダイトー)～、久六(キューロク)～、口永良部(クチノエラブ)～、倉橋～、玄界～[4]、幸(コー)～、御所浦(ゴショウラ・ゴショノウラ)～、崎戸(サキト)～、桜～、式根～、四阪(シサカ)～、下甑(シモコシキ)～、須美寿(スミス)～、諏訪瀬(スワノセ)～、仙酔(センスイ)～、平(タイラ)～、平良(タイラ)～、宝～、田代～、男鹿(ダンカ゚)～[1]、九十九(ツクモ)～、答志(トーシ)～、戸馳(トバセ)～、中(ナカ)～、中甑(ナカコシキ)～、新(ニー)～、仁右衛門(ニエモン)～、西～、能美～、野崎～、能登～、伯方(ハカタ)～、柱～、八丈～[2]、久賀(ヒサカ)～、日振(ヒブリ)～、日間賀(ヒマカ)～、枇榔(ビロー)～、蓋井(フタオイ)～、二神(フタカ゚ミ)～、舳倉(ヘグラ)～、弁天～、御蔵(ミクラ)～、神子元(ミコモト)～、水ノ子(ミズノコ)～、南大東(ミナミダイトー)～、宮～、三宅～、宮古～、六連(ムツレ)～、女木(メキ゚)～、屋代(ヤシロ)～、与論(ヨロン)～、若松～
(注)[1]は(B)。[2]は(B＊)。[3]古典などでは「キカイカ゚～」。[4]「島・灘」は「玄界」、町名は「玄海」。

～州　(B型)　○○○シュー

アイオワ～、アッサム～、アラスカ～、アリゾナ～、インディアナ～、ルイジアナ～

～鍾乳洞

○○○ショーニュードー、
○○○ショーニュードー

小半(オナカ゚ラ)～、日原(ニッパラ)～、風蓮(フーレン)～

～諸島　(A型)　○○○ショトー

天草～、奄美～、伊豆～、大隅～、小笠原～、芸予～、慶良間(ケラマ)～、塩

飽(シワク)～、尖閣～、南西～、歯舞(ハボマイ)～、備讃～、防予(ホーヨ)～、宮古～、八重山～

～水道　(A型)　○○○スイドー
壱岐～、伊良湖(イラコ)～、浦賀～、紀伊～、色丹(シコタン)～、多楽(タラク)～、豊後～

～関　(B型)　○○○セキ
美保(ミホ)～

～瀬戸　(A型)　○○○セト
阿伏兎(アブト)～、井ノ浦(イノウラ)～、黒(クロノ)～、早崎～、速吸(ハヤスイ)～、針尾～、備讃～

～山　(B型)　○○○セン
扇ノ(オーギノ)～、須賀ノ(スガノ)～、大(ダイ)～(1)、津黒(ツグロ)～、氷ノ(ヒョーノ)～、三国(ミクニガ)～、矢筈(ヤハズガ)～
(注)(1)は(B＊)。

～山　(B型)　○○○ゼン
上蒜(カミヒル)～(1)、霊(リョー)～(1)　(注)(1)は(B＊)。

～平　(B型)　○○○タイ
八幡(ハチマン)～(1)　(注)(1)は(B＊)。

～台　(B型)　○○○ダイ
秋吉(アキヨシ)～(1)、平尾～　(注)(1)「秋芳(アキヨシ)洞・秋芳(シューホー)町」。

～台地　(A型)　○○○ダイチ
下総(シモーサ)～、常総～、常陸(ヒタチ)～、武蔵野～

～平　(A型)　○○○ダイラ
銀山～、佐久～、菅(スガ)～、日本(ニホン)～

～滝　(平板)　○○○ノタキ
暗門(アンモン)～、華厳(ケゴン)～、銚子ノ～、轟(トドロキノ)～、吹割(フキワリノ)～、袋田(フクロダノ)～

～岳　(B型)　○○○タケ
犬ケ(イヌガ)～、牛ケ(ウシガ)～、可愛(エノ)～、御(オン)～(1)、駒ケ(コマガ)～、笹ケ(ササガ)～、爺ケ(ジーガ)～、獅子(シシガ)～、地蔵(ジゾーガ)～(2)、釈迦ケ(シャカガ)～、仙丈ケ(センジョーガ)～、塔ケ(トーガ)～、菱ケ(ヒシガ)～、平ガ(ヒラガ)～、仏経ケ(ブッキョーガ)～、御(ミ)～(3)、八ケ(ヤツガ)～、鑓ケ(ヤリガ)～、槍ケ(ヤリガ)～、竜ケ(リューガ)～　(注)(1)は(B＊)。(2)は栃木、群馬。山形は「ダケ」。(3)は(平板)。

～岳　(B型)　○○○ダケ
青井～、閼伽井(アカイ)～、赤石～、赤倉～、浅草～、朝日～、薊ケ(アザミガ)～、荒雄～、荒川～、石狩～、稲尾～、空木(ウツギ)～、海別(ウナベツ)～、雲仙～(1)、恵庭～、烏帽子(エボシ)～、雄阿寒～(1)、笈ケ(オイズルガ)～、大倉～、大鳥～、大鳥屋～、男鹿(オガ)～、乙部(オトベ)～、鬼～、伯母子(オバコ)～、開聞(カイモン)～(1)、川上(カオレ)～、鹿島槍ケ～、神威(カムイ)～、韓国(カラクニ)～、冠～、経ケ～、経読(キョーヨミ)～、鞍(クラ)～、黒～、黒法師(クロボーシ)～、御在所～、甲武信(コブシ)～、札内(サツナイ)～(1)、山上ガ(サンジョーガ)～、塩見～、地蔵(ジゾー)～(1)(2)、標津(シベツ)～、清水～、積丹(シャコタン)～(1)、斜里～、常念～(1)、暑寒別～、渚滑(ショコツ)～、白髪(シラガ)～、知床～、白～、白馬(シロウマ)～(3)、陣場～、守門(スモン)～(1)、大千軒～(1)、大日(ダイニチ)～、田代～、谷川～、多良～、

茶臼～、燕（ツバクロ）～、剱（ツルギ）～、鶴見～、光（テカリ）～、天塩～、天狗～、十勝～、中ノ～、名久井～、那須～、仰烏帽子（ノケエボシ）～、野口五郎～[1]、乗鞍～、函（ハコ）～、階上（ハシカミ）～、燧ケ（ヒウチガ）～、聖（ヒジリ）～、丁（ヒノト）～、蛭ケ（ヒルガ）～、広尾～、平家（ヘイケガ）～、穂高（ホタカ）～、幌尻（ポロシリ）～、真昼～、御神楽～、三国～、三国ケ（ミクニガ）～、三ツ俣蓮華～、宮之浦～、武利（ムリ）～、雌阿寒～[1]、文珠（モンジュ）～、薬師～、焼（ヤケ）～、焼石～、矢筈～、夕張～、遊楽部（ユーラップ）～、由布（ユフ）～、横津～、羅臼（ラウス）～、礼文（レブン）～[1]、和賀（ワガ）～、鷲羽（ワシバ）～　（注）[1]は（B＊）。[2]は山形。栃木・群馬は「～カ゚タケ」。[3]は富山・長野。

～谷　（B型）　○○○タニ

九十九（クジュー）～[1]　（注）[1]は（A）も。

～谷　（平板）　○○○ダニ

阿蘇～、木曽～、南郷～

～ダム　（A型）　○○○ダム

相俣（アイマタ）～、アスワン～、五十里（イカリ）～、小国（オグニ）～、佐久間～、山王海（サンノウカイ）～、須田貝～、二瀬～、三面（ミオモテ）～、御母衣（ミボロ）～、森吉～

～貯水池　○○○チョスイチ

三浦～

～島　（平板）　○○○トー

秋勇留（アキユリ）～、アッツ～、オアフ～、奥尻（オクシリ）～、グアム～、コルシカ～、サイパン～、シチリア～、色丹（シコタン）～、志発（シボツ）～、水晶～、大黒～、多楽（タラク）～、天売（テウリ）～、バリ～、平郡（ヘイグン）～、マウイ～、焼尻（ヤギシリ）～、利尻（リシリ）～、レイテ～、礼文（レブン）～

～洞　（B型）　○○○ドー

秋芳（アキヨシ）～、龍河（リューガ）～

～峠　（A型）　○○○ドーゲ゜

青山～、赤名～、足柄～、安房（アボー）～、板谷～、請取（ウケトリ）～、碓氷（ウスイ）～、内山～、宇津（ウツ）～、大～、大越（オーゴシ）～、逢阪～、大平（オーダイラ）～、大月～、雄勝（オガチ）～、乙女～、カイバー～、篭坂～、柏～、蒲生（ガモー）～、狩勝（カリカチ）～、雁坂（カリサカ）～、木芽（キノメ）～、紀見（キミ）～、孝子（キョーシ）～、区界（クザカイ）～、草津～、九十九曲（クジュークマガリ）～、国境～、小坂～、小仏～、金精（コンセイ）～、権兵衛～、境明神（サカイミョージン）～、笹子（ササゴ）～、笹谷（ササヤ）～、咲来（サックル）～、山王～、三平～、四十曲（シジューマガリ）～、十石～、十国～、志戸坂（シトサカ）～、渋～、清水～、十文字～、正丸～、地芳（ジヨシ）～、シンプロン～、鈴鹿～、仙岩（センガン）～、仙人～、大菩薩～、田代～、立丸（タチマル）～、谷田（タンダ）～、杖突（ツエツキ）～、土湯～、戸倉（トクラ）～、栃木（トチギ）～、鳥居～、長尾～、中坂～、長野～、中山～、鍋越（ナベコシ）～、二井宿（ニイジュク）～、新野～、人形～、野麦～、箱根～、発荷（ハッカ）～、花抜（ハナヌキ）～、引馬（ヒクマ）～、美幌（ビホロ）～、檜皮（ヒワダ）～、船坂～、帆坂～、保福寺（ホフクジ）～、馬篭（マゴメ）～、真弓～、三国～、矢立（ヤタテ）～、矢の川（ヤノコ）～、湯山～、余地

（ヨシ）〜、来満（ライマン）〜(1)、和田〜
（注）(1)は「クルミ」とも。

〜灘　（B型）　○○○ナダ
安芸〜、天草〜、伊予〜、遠州〜(1)、鹿島〜、熊野〜、玄界〜(1)、相模〜、周防（スオー）〜(1)、播磨（ハリマ）〜、燧（ヒウチ）〜、響（ヒビキ）〜、日向〜、備後（ビンゴ）〜、水島〜　（注）(1)は（B＊）。

〜沼　（平板）　○○○ヌマ
伊豆〜、印旛（インバ）〜、牛久（ウシク）〜、大〜(1)、尾瀬〜、小（コ）〜(2)、菅（スガ）〜、菅生（スガオ）〜、菅（スゲ）〜、手賀（テガ）〜、長〜、沼沢〜　（注）(1)群馬は古くは「オノ」。(2)群馬は古くは「コノ」。

〜野　（平板）　○○○ノ
安曇（アズミ）〜、印南（イナミ）〜、嵯峨（サガ）〜、武蔵（ムサシ）〜

〜原　（B型）　○○○バイ
笠野（カサン）〜(1)　（注）(1)は（B＊）。放送では、「カサノハラ」。

〜橋　（B型）　○○○バシ
吾妻〜、永代〜(1)、言問（コトトイ）〜(1)、白髪〜、水道〜(2)、数寄屋〜、太鼓〜(3)、二重〜(2)、日本〜(4)、丸木〜、両国〜(2)　（注）(1)は（B＊）。(2)は（平板）も。(3)は（平板）。(4)は東京「ニホン」（平板）。大阪「ニッポン」（B＊）。

〜鼻　（B型）　○○○ハナ
生石（オイシ）〜、多古（タコ）〜、宮崎ノ〜

〜岬　（B型）　○○○ハナ
由良（ユラ）〜

〜鼻　（B型）　○○○バナ
大崎〜、潜戸（クケド）〜、本牧（ホンモク）〜

〜浜　（B型）　○○○ハマ
桂〜、九十九里〜、五色（ゴシキ）〜、波止（ハシ）〜(1)、吹上（フキアゲ）〜、美津（ミト）〜(1)、宮ケ（ミヤガ）〜、八坂八（ヤサカヤ）〜、弓ケ（ユミガ）〜　（注）(1)は（平板）。

〜原　（B型）　○○○ハラ
明野（アケノガ）〜、磐田〜、尾瀬ケ（オゼガ）〜、笠野〜、相模〜、三本木〜、関ケ〜、戦場ケ（センジョーガ）〜、高師〜、田茂木野〜、天伯（テンパク）〜、那須野（ナスノガ）〜、牧ノ〜、三方（ミカタ）〜(1)、宮城野〜　（注）(1)は「ミカタガ゜〜」とも。

〜原　（B型）　○○○バラ
蒜山（ヒルゼン）〜(1)　（注）(1)は（B＊）。

〜原　（B型）　○○○バル
石垣〜、十文字〜

〜半島　（A型）　○○○ハントー
渥美（アツミ）〜、アラビア〜、伊豆〜、糸島〜、インドシナ〜、宇土（ウト）〜、大隅（オースミ）〜、男鹿（オガ）〜、牡鹿（オシカ）〜、渡島（オシマ）〜、カムチャツカ〜、紀伊〜、企救（キク）〜、北松浦〜、国東（クニサキ）〜、クリミア〜、児島（コジマ）〜、佐賀関（サガノセキ）〜、佐田岬（サダミサキ）〜、薩摩〜、シナイ〜、志摩〜、島根〜、島原〜、下北〜、積丹（シャコタン）〜、知床（シレトコ）〜、高縄〜、丹後〜、知多〜、朝鮮〜、津軽〜、長崎〜、西彼杵（ニシソノギ）〜、根室〜、能登〜、野間〜、野母（ノモ）〜、バターン〜、東松浦〜、フロリダ〜、房総〜、三浦〜

〜平野　（A型）　○○○ヘイヤ
青森〜、秋田〜、石狩〜、出雲〜、伊勢〜、今治（イマバリ）〜、越後〜(1)、大分〜、大阪〜、岡崎〜、岡山〜、関東

～、菊池～、九十九里～、国仲（クニナカ）～、熊本～、倉吉～、高知～、讃岐～、静岡～、庄内～、洲本（スモト）～、仙台～、川内（センダイ）～、高田～、津軽～、筑紫（ツクシ）～、天塩（テシオ）～、徳島～、鳥取～、砺波（トナミ）～、富山～、豊橋～、頓別（トンベツ）～、中津～、中村～、新潟～(1)、新居浜（ニイハマ）～、直方（ノーガタ）～、濃尾～、能代～、播磨（ハリマ）～(2)、播州～(2)、姫路～(2)、広島～、福井～、福岡～、福山～、本荘～、幕別～、松山～、宮崎～、八代（ヤツシロ）～、勇払（ユーフツ）～、米子～、和歌山～　（注）(1)(2)はそれぞれ同じ場所。

～牧場　（A型）　○○○ボクジョー
吾妻（アガツマ）～、神津～、新冠（ニイカップ）～、日高～、嶺岡～

～盆地　（A型）　○○○ボンチ
会津～、伊那～、上田～、上野～、大口（オークチ）～、大館～、大野～、近江～、勝山～、亀岡～、北上（キタカミ）～、京都～、甲府～、郡山～、小林～、佐久～、篠山～、新庄～、諏訪～、鷹巣（タカノス）～、高山～、秩父～、津山～、十日町～、豊岡～、長野～、奈良～、沼田～、秦野（ハダノ）～、日田（ヒタ）～、人吉～、福島～、福知山～、松本～、都城～、三次（ミヨシ）～、六日町～、山形～、山口～、横手～、米沢～

～岬　（A型）　○○○ミサキ
足摺～、井ノ～、伊良湖（イラゴ）～、牛首～、恵山（エサン）～、越前～、絵鞆（エトモ）～、襟裳～、落石（オチイシ）～、尾花～、門倉～、神威（カムイ）～、蒲生田（カモダ）～、川尻～、経ケ（キョーガ）～、御座（ゴザ）～、小泊～、佐多（サタ）～、佐田（サダ）～、汐首～、潮（シオ）～、積丹（シャコタン）～、白神（シラカミ）～、尻羽（シリパ）～、知床（シレトコ）～、高島～、立石（タテイシ）～、タンパケ～、常神（ツネカミ）～、都井（トイ）～、鳥ヶ首（トリカクビ）～、永田～、ノール～、納沙布（ノサップ）～(1)、野寒布（ノシャップ）～(2)、能取（ノトロ）～、野間～、日の（ヒノ）～、弁慶～、坊ノ～、ホーン～、真鶴（マナヅル）～、室戸～、茂津多～、本山～、和田～　（注）(1)「ノサップ岬」とも書く。(2)「ノシャップ岬」とも書く。

～御碕　（A型）　○○○ミサキ
日（ヒ）～

～港　（A型）　○○○ミナト
波浮（ハブ）～

～峰　（B型）　○○○ミネ
生石ケ（オイシガ）～、伯母（オバ）～、霧ケ（キリガ）～、櫛ケ（クシガ）～、笹ケ（ササガ）～、白（シロ）～、陣ケ（ジンガ）～、高千穂（タカチホ）～、段ケ（ダンガ）～、十種（トクサガ）～、八ケ（ヤツガ）～

～森　（平板）　○○○モリ
東三方ケ（ヒガシサンポーガ）～

～山　（平板）　○○○ヤマ
赤城～、朝日～、浅間～、愛鷹（アシタカ）～、吾妻（アズマ）～、愛宕～、安達太良（アダタラ）～、雨降（アフリ）～、雨包（アマツツミ）～、雨巻（アママキ）～、荒海（アラカイ）～、荒船～、飯縄（イイヅナ）～、飯盛～、池木屋～、生駒～、石立（イシタテ）～、市房（イチフサ）～、伊吹～、岩菅（イワスゲ）～、牛廻～、歌登～、雲辺寺～、江笠～、大～、大江

～、大岡～、大崩（オクエ）～、大楠～、大河内～、大白森（オージロモリ）～、大船～、大峰～、大室～、大森～、奥～、尾鈴～、落舟（オチフネ）～、鬼ヶ城（オニガジョー）～、鬼ノ目～、姨捨（オバステ）～、オプタケシケ～、角田（カクタ）～、笠置～、笠塔（カサトー）～、柏原（カシハラ）～、角（カド）～、金（カナ）～、釜無～、狩場～、冠～、キトウシ～、衣笠～、貴船（キブネ）～、清澄（キヨスミ）～、霧島～、工石（クイシ）～、崩平（クエンヒラ）～、国見～、雲早（クモソー）～、雲取～、位～、栗駒～、黒岩～、黒隅～、黒姫～、毛無～、御在所～、子持～、篠（ササ）～、猿政（サルマサ）～、白神（シラカミ）～、白砂（シラス）～、白旗（シラハタ）～、白馬（シラウマ）～(1)、仙ノ倉～、高尾～(2)、蕎麦粒～、高崎（タカサキ）～、高鈴～、高塚～、高畑（タカハタ）～、高原～、高見～、高峰～、立（タテ）～(3)、立石～、蓼科（タテシナ）～、束稲（タバシネ）～、俵～、丹後～、丹沢～、茶臼～、茶古志～、手稲（テイネ）～、頭巾（トキン）～、道後～、遠島（トシマ）～、戸隠～、氈（ト）～、鳥形～、鳥甲（トリカブト）～、長尾～、中ノ又～、西ノ俣～、鋸～、葉～(3)、博士（ハカセ）～、箱根～、鉢盛～、場照（バテリ）～、鼻曲～、万年（ハネ）～、東三国～、日名倉～、藤無～、船形～、舟鼻（フネハナ）～、武尊（ホタカ）～、御荷鉾（ミカボ）～、三草～、三国～、御大堂～、三石（ミツイシ）～、三峠（ミツトーゲ）～(4)、三峠（ミトケ）～(5)、三原～、三室～、宮塚（ミヤツカ）～、妙見～、行縢（ムカバキ）～、元清澄～、森吉～、焼（ヤケ）～、矢筈～、弥彦（ヤヒコ）～、諭鶴羽（ユズルハ）～、吉野～、米（ヨネ）～、羅漢～、綿向～、鰐塚～　（注）(1)は和歌山。(2)は兵庫。(3)は（B）。(4)山梨。(5)は京都。

～洋　（B型）　○○○ヨー

インド～、大西～(1)、太平～(1)、南氷～(1)、北（ホクホッ）氷～(1)　（注）(1)は（B＊）。

～嶺　（B型）　○○○レイ

大菩薩～

～列島　（A型）　○○○レットー

アリューシャン～、五島～、スンダ～、吐噶喇（トカラ）～

～湾　（B型）　○○○ワン

青森～、英虞（アゴ）～、浅茅（アソー）～(1)、渥美（アツミ）～、臼杵（ウスキ）～、内浦～、浦戸（ウラト）～、宇和島～、大阪～、大湊～、大村～、越喜来（オキライ）～(1)、追波（オッパ）～、女川（オナガワ）～、鹿児島～、釜石～、唐津～、金武（キン）～(1)、久美浜～、五ヶ所（ゴカショ）～、佐伯（サイキ）～、相模～、志布志～、島原～、宿毛（スクモ）～、駿河～、尖閣（センカク）～、慥柄（タシカラ）～、橘～、館山～、田辺～、千々石（チジワ）～、知多～、九十九（ツクモ）～、豆酘（ツツ）～、洞海（ドーカイ）～(1)、東京～(1)、土佐～、富山、名護（ナゴ）～、博多～、広島～、広田～、船越～、ペルシャ～、ベンガル～、舞鶴～、真野～、三河～、宮津～、三厩（ミンマヤ）～、陸奥～、山田～、両津～、和歌浦～、若狭～　（注）(1)は（B＊）。

2.2　日本の地名

ここには、山名・川名・都道府県名などのうち、「山」・「川」・「県」などを付けずに使うことの多い地名などを集めた。旧地名・地方名・街道名なども含んでいる。

アクセントを主体に分類したため、まず、拍数別に分け、それぞれを、アクセントの型別に分類して示した。

発音については、特に必要と思われるものにのみ、フリガナを付けた。

＜１拍＞

○̄……津

＜２拍＞

○̄○……安芸、阿蘇、安房、阿波、伊賀、壱岐、伊勢、伊予、羽後、宇治、蝦夷(エゾ)、隠岐、尾瀬、甲斐、加賀、賀茂、紀伊、紀和、球磨、呉、佐賀、嵯峨、佐渡、滋賀、志賀、志摩、逗子、須磨、諏訪[1]、瀬戸、千葉、土佐[1]、利根、灘、那智、那覇、奈良、能登、萩[2]、肥後[1]、飛騨、富士、三重、美濃[1]、陸奥、門司　(注)[1]は(尾高)も。[2]植物は(頭高・平板・尾高)。

○○̄……木場

○○̄……伊豆、江戸、男鹿(オガ)、岐阜、那須[1]、水戸　(注)[1]は(頭高)も。

＜３拍＞

○̄○○……愛知、明石、阿寒、奄美(アマミ)、秋田、熱海、天城、淡路、和泉、出雲、因幡(イナバ)、磐城(イワキ)、岩手、岩見(イワミ)、越後、愛媛、奥羽、大津、近江、青梅(オーメ)、尾張、香川、鹿島、春日、上総(カズサ)、河内(カワチ)、京都、桐生(キリュー)、近畿、熊野、久留米、黒部、桑名、群馬、高知、神戸、越路(コシジ)[1]、堺、相模[2]、佐倉、薩摩[2]、讃岐[2]、信濃[2]、島根、水府[3]、周防、駿河[2]、駿府[1]、摂津[2]、千島[4]、栃木[2][5]、富山、長門(ナガト)、長野、名古屋、成田、沼津、根室、播磨、榛名、比叡、肥前、備前、日高(ヒダカ)、日向、兵庫、備後(ビンゴ)、武州、豊前(ブゼン)、豊後(ブンゴ)、伯耆(ホーキ)、穂高(ホタカ)、摩周、宮城、妙義、武蔵、目黒、目白[1]、野州、大和、吉野　(注)[1]は(平板)も。[2]は(尾高)も。[3]水戸の異称。[4]は(中高)も。

○○̄○……紀州、草津、釧路、蔵王、四国、筑後[1]、秩父、筑波[1]、対馬[1]、日立[1]、常陸[1]、福井[2]、身延[2]　(注)[1]は(頭高)も。[2]は(平板)も。

○○̄○̄……会津[1]、飛鳥(アスカ)[1]、伊香保、伊東、浦賀[2]、浦和[2]、牡鹿(オシカ)、祇園、銀座、鞍馬、甲府、小倉、五島、佐世保(サセボ)、渋谷、下田、洲崎、鈴鹿、千歳[3]、銚子、築地、浪華(ナニワ)、難波(ナニワ)、博多、箱根、彦根、姫路[1]、別府、松江、三浦、室戸、真岡(モーカ)、八幡(ヤハタ)、結城(ユーキ)　(注)[1]は(頭高)も。[2]は(尾高)も。[3]は(中高)も。

＜４拍＞

○̄○○○(頭高)……雲仙、遠州、大

島、奥州、大分[1]、大隅[1]、関西、関東、九州、芸州、江州（ゴーシュー）、上野（コーズケ）、埼玉、薩州、三条、上州、信州、新橋、仙台、相州、中国、日光、播州、磐州、阪神、磐梯、備中[2]、房州、本州、舞鶴、前橋[3]、妙高　（注）[1]は（平板）も。[2]は（中高）も。[3]は（中高②型）も。

○○○○（中高②型）……青森、天草[1]、伊勢崎（イセサキ）、茨城（イバラキ）、今治[1]、岩国、岩代[1]、越前、岡崎[1]、岡山、尾道、金沢、川口、熊谷（クマガヤ）、塩釜、塩原、静岡、島原、下総（シモーサ）[2]、下野（シモツケ）、白河、住吉、高松、筑前、徳島[3]、長崎、西陣、八丈、花巻、浜松、弘前、福岡、福島、船橋、松阪（マツサカ）[1]、松前[1]、真鶴（マナヅル）、宮崎、室蘭、盛岡、山形、山口、山城[1]、山梨、米沢、陸前、陸中[3]、若松、和歌山　（注）[1]は（平板）も。[2]は（尾高）も。[3]は（中高③型）も。

○○○○（中高③型）……足利（アシカガ）、市川、越中[1]、住江（スミエ）、立川[2]、松島[2]、琉球　（注）[1]は（頭高）も。[2]は（中高②型）も。

○○○○（平板）……足摺、斑鳩（イカルガ）、石川、江の島[1]、大江戸、大阪、大宮、沖縄、小田原[1]、姨捨（オバステ）、帯広[2]、鹿児島、鎌倉[1]、川越、川崎、関門、木更津、北上（キタカミ）、北多摩、霧島、熊本、京阪[4]、京浜、西京（サイキョー）、坂本、札幌、更科、山陰、山陽、三陸、敷島、上越、常磐、白浜、知床、白馬、信越、新宿、高崎[2]、高砂、蓼科[2]、東海、東京、東国[3]、東北、鳥取、直江津[2]、難波津（ナニワヅ）[4]、新潟、乗鞍[2]、函館、広島、房総、北陸（ホクリク）[5]、松本、丸山、水上（ミナカミ）、水口（ミナクチ）[2]、美作（ミマサカ）[2]、宮島、桃山、柳川、横須賀、横浜、両国　（注）[1]は（尾高）も。[2]は（中高②型）も。[3]は（頭高）も。[4]は（中高③型）も。[5]は場合により「ホクロク」。

＜5拍＞

○○○○○（頭高）……宇治山田[1]、高円寺、由比ケ浜[1]　（注）[1]は（中高③型）も。

○○○○○（中高②型）……軽井沢（カルイザワ）[1]　（注）[1]は（中高③型）も。

○○○○○（中高③型）……旭川、尼崎、一ノ谷、厳島、桶狭間、上高地、下関、竜の口[1]、登別、平泉　（注）[1]は（平板）も。

○○○○○（平板）……宇都宮、小笠原、吉祥寺[1]、郡山[2]、衣川[2]、西宮、八王子[3]、東山　（注）[1]は（中高③型・尾高）も。[2]は（中高③型）も。[3]は（尾高）も。

3　複合名詞の発音とアクセント

複合名詞は、規則的なアクセントを持っているものが多い。

複合名詞のアクセントは、後部要素によって決まるものが多いので、この表では、後部要素の同一の複合名詞をそれぞれ一括し、後部要素の50音順に配列してある。

複合名詞のなかでも、後部要素が漢字２字以上のものは、アクセントの例外も少なく、漢字１字のものに、アクセントの例外が多い。この表では、後部要素漢字２字以上のものの用例は主要なものにとどめた。

複合名詞のアクセントをこの表で調べることによって、複合名詞のアクセントが自然に身につくようになることを期待して、次のようなアクセントの表示法を使った。

(A型)	○○○●●●	(後部要素の第１拍まで高い型。)
	(例)　アソビアイテ	(遊び＋相手)
(B型)	○○○●●	(前部要素の最終拍まで高い型。)
	(例)　セイフアン	(政府＋案)
(B＊型)	○○○●●	(前部要素の最終拍の前まで高い型。)
	(例)　ゲンゼイアン	(減税＋案)

(注１)（B型）のうち、前部最終拍が、つまる音（ッ）、はねる音（ン）、長音（ー）、二重母音後部などの場合に（B＊型）になる。(218ページ参照)

(注２) 以上のほか、○○○イインカイ（～委員会）などのように後部要素のアクセントをいかす複合名詞のアクセントがあるが、これには型名を付けなかった。

なお、複合名詞のなかでも、前部３拍以内の複合名詞には、ほかのアクセント規則に従うものが多いので、この表から類推せず、本文見出し項目によって、アクセントを確かめていただきたい。

～相手　(A型)　○○○アイテ
遊び～、けんか～、相談～、話し～

～油　(A型)　○○○アブラ
揚げ～、ごま～、サラダ～、食用～、つばき～

～雨　(A型)　○○○アメ
小ぬか～、通り～(1)、にわか～(1)、日照り～(1)　(注)(1)は（B）も。

～あらし《嵐》(A型)○○○アラシ
大～、磁気～、砂～、山～、雪～、夜(ヨ)～

～案内　(A型)　○○○アンナイ

営業～、職業～、水先～、道～、名所～、旅行～

～医　（B型）　○○○イ
開業～(1)、漢方～(1)、軍～(1)、外科～、校～(1)、産科～、歯科～、主治(ジ)～、専門～(1)、保険～(1)、名～(1)
(注)(1)は（B＊）。

～委員　（A型）　○○○イイン
教育～、公安～、執行～、常任～、全権～、懲罰～、統制～、民生～

～委員会　○○○イインカイ
教育～、公安～、小～、常任～、中央～、統制～、特別～、農業～、予算～、労働～

～医学　（A型）　○○○イガ゚ク
宇宙～、基礎～、現代～、法～、臨床～、老人～

～域　（B型）　○○○イキ
淡水～(1)、暴風～(1)、冷水～(1)
(注)(1)は（B＊）。

～意地　（平板）　○○○イジ
片～(1)、食い～(1)、底～、横～
(注)(1)は（尾高）も。

～意識　（A型）　○○○イシキ
階級～、競争～、自～、社会～、職業～、潜在～、美～、民族～、無～

～犬　（平板）　○○○イヌ
秋田～(1)、柴～、捨て～、土佐～、野良～　(注)(1)は（B）も。

～違反　（A型）　○○○イハン
憲法～、校則～、交通～、条約～、選挙～

～色　（平板）　○○○イロ
小豆(アズキ)～、黄土(オード)～、きは(わ)だ～、玉虫～、土気～、若葉～

～いわし《鰯》（A型）　○○○イワシ
赤～、うるめ～、塩～、せぐろ～、畳～、ま～

～員　（B型）　○○○イン
運動～(1)、外交～(1)、勧誘～(1)、技術～、記録～、銀行～(1)、組合～(1)、計時～、計測～、研究～(1)、検査～、甲板(パン)～(1)、公務～、指導～(1)、事務～、従業～(1)、乗務～、審査～、審判(パ)～(1)、随行～(1)、専門～(1)、測定～(1)、代議～、通信～(1)、特派～、乗組～、評議～、普及～(1)
(注)(1)は（B＊）。

～院　（B型）　○○○イン
回向～(1)、会計検査～、学士～、貴族～、芸術～、元老～(2)、孤児～、参議～、衆議～、修道～(2)、修(シュ)(2)学～、少年～(2)、女学～(3)、人事～、枢密～、整骨～、大学～、大(ダイ)審～(2)、美容～(2)、平等(ビョー)～(2)、立法～(2)　(注)(1)は（B＊）と（頭高）。(2)は（B＊）。(3)は（B＊）も。

～運動　（A型）　○○○ウンドー
解放～、準備～、選挙～、婦人～、平和～、労働～

～映画　（A型）　○○○エイガ゚
科学～、教育～、記録～、劇～、スリラー～、前衛～、短編～、ニュース～、無声～、立体～

～衛生　（A型）　○○○エイセイ
学校～、公衆～、精神～、不(フ)～

～駅　（B型）　○○○エキ

下車〜、終着〜、乗車〜、通過〜、民衆〜[1]　(注)[1]は（B＊)。

〜園　(B型)　○○○エン
果樹〜、植物〜、動物〜、保育〜、幼稚〜

〜炎　(B型)　○○○エン
外耳〜、関節〜[1]、気管支〜[1]、結膜〜[1]、耳下せん〜[2]、じんう〜、じん臓〜[3]、髄膜〜、せき髄〜[2]、胆のう〜[3]、中耳〜、虫垂〜[2]、内耳〜、皮膚〜、腹膜〜[1]、ろく膜〜[1]　(注)[1]は(平板)も。[2]は（B＊)。[3]は（B＊）と(平板)。

〜演習　(A型)　○○○エンシュー
機動〜、大〜、防火〜、防空〜、予行〜

〜演説　(A型)　○○○エンゼツ
応援〜、施政方針〜、立会〜、弾劾〜、名〜

〜往生　(A型)　○○○オージョー
極楽〜、大〜、立〜

〜おしろい《白粉》　○○○オシロイ
襟〜、紙〜、粉〜、寝〜、練り〜、紅(ベニ)〜[1]、水〜　(注)[1]は(頭高)も。

〜帯　(A型)　○○○オビ
岩田〜、男〜、女〜、しごき〜、昼夜〜、名古屋〜、博多〜、半幅(ハン/ハバ)〜、ひとえ〜

〜織物　○○○オリモノ、
○○○オリモノ
あや〜、絹〜、毛〜[1]、交ぜ〜、木綿〜、綿〜　(注)[1]は(平板)も。

〜音　(B型)　○○○オン
慣用〜[1]、協和〜、五十〜[1]、絶対〜[1]、装飾〜、爆発〜、破裂〜、無気〜、無声〜[1]、有気〜、有声〜[1]　(注)[1]は（B＊)。

〜音楽　(A型)　○○○オンガク
教会〜、近代〜、軽〜、現代〜、室内〜、宗教〜、西洋〜、電子〜、バロック〜、民族〜、ムード〜

〜科　(平板)　○○○カ
家政〜、家庭〜、技術〜、工業〜、高等〜、産婦（ア）人〜、耳鼻〜、社会〜、商業〜、小児〜、初等〜、神経〜、尋常〜、水産〜、精神〜、専修〜、中等〜、農業〜、バラ〜、婦人〜、普通〜、放射線〜、林業〜

〜家　(平板)　○○○カ
愛煙〜、愛妻〜、演出〜、音楽(ガク・/ガッ)〜、外交〜、鑑定〜、脚本〜、教育〜、恐妻〜、銀行〜、勤勉〜、金満〜、空想〜、芸術〜、劇作（サク・/サッ）〜、劇評〜、健脚〜、健たん〜、建築〜、交際〜、好事(ズ)〜、財産〜、作詞〜、作曲〜、事業〜、資産〜、慈善〜、思想〜、実業〜、資本〜、社交〜、宗教〜、収集〜、小説〜、図案〜、随筆〜、声楽（ガク）〜、政治〜、専門〜、戦略〜、蔵書〜、素封(ソホー)〜、彫刻〜、著作(サク・/サッ)〜、刀けい《圭》〜、道徳〜、篤農〜、徳望〜、努力〜、発展〜、批評〜、評論〜、文筆〜、勉強〜、法律〜、野心〜、雄弁〜、楽天〜、理想〜、理論〜、歴史〜

〜化　(平板)　○○○カ

一元〜、一体〜、簡素〜、戯画〜、機械〜、合理〜、自由〜、人格〜、先鋭〜、大衆〜、単純〜、通俗〜(1)、ドラマ〜、表面〜、民主〜
(注)(1)は（B）も。

〜課　（平板）　○○○カ
会計〜、学術〜、学生〜、経理〜、教務〜、庶務〜、人事〜、総務〜、秘書〜、文書〜

〜画　（平板）　○○○カ゚
鉛筆〜、活人〜、擦筆〜、山水〜、自由〜、宗教〜、肖像〜、人物〜、水彩〜、水墨〜、静物〜、西洋〜、石版(バン)〜、淡彩〜、テンペラ〜、銅版(バン)〜、日本(ニホン)〜、美人〜、風景〜、風俗〜、文人〜、ペン〜、毛筆〜、木炭〜、木版(バン)〜、油彩〜、用器〜(1)、裸体〜、歴史〜
(注)(1)は（B）。

〜カー　○○○カー、○○○カ゚ー
オープン〜(1)、ガソリン〜(2)、ケーブル〜、サイド〜、パトロール〜、ラジオ〜、リヤ〜　(注)(1)は（B＊）と（A）。(2)は（B＊）。

〜会　（B型）　○○○カイ
慰安〜(1)、委員〜(1)、育英〜(1)、慰労〜(1)、運動〜(1)、演芸〜(1)、演説〜(2)、演奏〜(1)、園遊〜(1)、音楽(カ゚ク・カ゚ッ)(3)〜、温習〜(1)、観桜〜(1)、観菊〜(2)、観月〜(2)、歓送〜(1)、競技〜、協議〜、共済〜(1)、敬老〜(1)、研究〜(1)、県人〜(1)、後援〜(1)、講演〜(1)、講習〜(1)、公聴〜(1)、校友〜(1)、懇親〜(1)、懇談〜(1)、座談〜(1)、茶(サ・チャ)話〜、参事〜、試写〜(4)、自治〜(4)、謝恩〜(1)、祝賀〜、常務〜、新年〜(1)、親ぼく〜(2)、壮行〜(1)、相談〜(1)、送別〜(2)、総務〜、抽選〜(1)、調査〜、町村〜(1)、町内〜(1)、聴聞〜(1)、追悼〜(1)、展示〜、展覧〜(1)、同好〜(1)、同窓〜(1)、討論〜(1)、独演〜(1)、読書〜、独唱〜(1)、二次〜(4)、博覧〜(1)、秘密〜、品評〜(1)、婦人〜(1)、舞踏〜(1)、父母〜、忘年〜(1)、保護者〜、力士〜、理事〜、若妻〜　(注)(1)は（B＊）。(2)は（B）と（B＊）。(3)「カ゚ク」は（B＊）と（平板）。「カ゚ッ」は（B＊）。(4)は（平板）も。

〜界　（B型）　○○○カイ
花柳〜(1)、金融〜(1)、工業〜(1)、思想〜(1)、実業〜(1)、社交〜(1)、水産〜(1)、天上〜(1)、文学(ガク)〜(2)、放送〜(1)
(注)(1)は（B＊）。(2)は（BとB＊）。

〜街　（B型）　○○○カ゚イ
歓楽〜、商店〜(1)、地下〜、中心〜(1)、繁華〜、ビル〜、名店〜(1)
(注)(1)は（B＊）。

〜改革　（A型）　○○○カイカク
行政〜、宗教〜、職制〜、税制〜、農地〜

〜会議　（A型）　○○○カイキ゚
円卓〜、外相〜、軍縮〜、軍法〜、講和〜、国際〜、親族〜、本〜

〜階級　（A型）　○○○カイキュー
勤労〜、支配〜、庶民〜、新興〜、知識〜、中産〜、特権〜、有産〜

〜外交　（A型）　○○○カ゚イコー
経済〜、招待〜、超党派〜、秘密

～、民間～

～会社　(A型)　○○○カ゚イシャ
営利～、親～、株式～、子～、合資～、合名～、個人～、証券～、製薬～、相互～、同族～、傍系～、有限～

～会談　(A型)　○○○カ゚イダン
外相～、頂上～、トップ～

～顔　○○○カ゚オ
赤ら～[1]、えびす～[1]、心得～、思案～、子細～、写真～、知らず～、手柄～[1]、得意～、慰め～[2]、にこにこ～、寝ぼけ～[2]、人待ち～[2]、舞台～、分別～、物知り～、笑い～　(注)[1]は(B)も。[2]は(A)も。

～価格　(A型)　○○○カ゚カク
基準～、協定～、公定～、実効～、消費者～、生産者～、賃貸～、独占～

～化学　(A型)　○○○カ゚カ゚ク
応用～、合成～、高分子～、生～、農芸～、無機～、有機～

～科学　(A型)　○○○カ゚カ゚ク
宇宙～、経験～、自然～、実験～、社会～、情報～、人文(ジ)～、文化～

～係　(A型)　○○○カ゚カリ
案内～、記録～、御用～、進行～、出納～、接待～、用度～

～稼業　(A型)　○○○カ゚ギョー
浮き草～、泥棒～、人気～

～学　(B型)　○○○カ゚ク
衛生～[1]、音響～[1]、音声～[1]、会計～[1]、解剖～[1]、幾何～、教育～、金石～、金属～、経営～[1]、経済～[1]、形じ上～[1]、言語～、建築～、考古～、鉱物～、国際～[1]、骨相～[1]、細菌～[1]、地震～[1]、社会～[1]、宗教～[1]、修辞～、朱子～、植物～、書誌～、心理～、人類～[1]、推計～[1]、水産～[1]、政治～、生物～、生理～、代数～[1]、地質～、地理～、程朱～、電気～、統計～[1]、動物～、人間～[1]、博物～、病理～、物理～、文献～[1]、放送～[1]、法律～、本草(ゾ)～[1]、民俗～、民族～、免疫～、優生～[1]、陽明～[1]、林政～[1]、倫理～、歴史～、論理～　(注)[1]は(B＊)。

～楽　(B型)　○○○カ゚ク
管弦～[1]、交響～[1]、室内～[1]、吹奏～[1]　(注)[1]は(B＊)。

～学士　(A型)　○○○カ゚クシ
医～[1]、工～、商～、農～、文～、法～、理～　(注)[1]はアクセント1拍うしろずれも。

～革命　(A型)　○○○カ゚クメイ
意識～、産業～、社会～、反～、ブルジョア～、プロレタリア～、無血～

～加減　(A型)　○○○カ゚ゲン
味～、さじ～、塩～、火～、服～、水～、湯～

～加工　(A型)　○○○カ゚コー
委託～、樹脂～、防縮～、防水～、放電～

～傘　(A型)　○○○カ゚サ
相合い～、こうもり～、番～[1]、破れ～、洋～[1]　(注)[1]は(平板)も。

～《笠》　（A型）　○○○カ゚サ
あじろ～、市女～、三度～、ひのき～　（注）「陣笠」は（平板）と（頭高）。

～火山　（A型）　○○○カザン
海底～、活(カツ・カッ)～、死～、複式～、複成～

～ガス　（A型）　○○○ガス
亜硫酸～、塩酸～、火山～、催涙～、水性～、石炭～、炭酸～、天然～、毒～[1]、排気～、プロパン～、メタン～　（注）「ガ」は日本語に溶けこんだものは「カ゚」にも。[1]は（平板）。

～課税　（A型）　○○○カゼイ
源泉～、総合～、大衆～、二重～、分離～、累進～

～家族　（A型）　○○○カゾク
遺～、核～、小～、大～、扶養～、母系～

～型　（平板）　○○○カ゚タ
血液～、タブロイド～、短冊～、手札～、北欧～、名刺～

～価値　（A型）　○○○カチ
貨幣～、希少～、交換～、国際～、文化～、余剰～、利用～

～楽器　（A型）　○○○カ゚ッキ
管弦～[1]、弦～、吹奏～[1]、打～、木管～[2]　（注）[1]は「ガ」も。[2]は「ガ」。

～学校　（A型）　○○○ガッコー
音楽～、高等～、出身～、女～[1]、小～[1]、私立～、神～[1]、専修～、専門～、中～[1]、兵～[2]、盲～[2]、料理～　（注）[1]は「カ゚」。[2]は「カ゚」も。

～活字　（A型）　○○○カツジ
アンチック～、ゴチック～、初号～、清(シン)朝～、宋朝～、明(ミン)朝～

～合唱　（A型）　○○○ガッショー
混声～、３部～、４部(シブ)～、女声～、男声～、同声～

～活動　（A型）　○○○カツドー
火山～、クラブ～、職場～、政治～、対外～、分派～、野外～

～活用　（A型）　○○○カツヨー
上一段～、五段～、下一段～、変格～

～歌舞伎　（A型）　○○○カブキ
大(オー)～、阿国～、女～、新～、野郎～、若衆(シュ)～

～ガラス　（A型）　○○○ガラス
安全～、板～、色～、切り子～、曇り～、すり～、つや消し～、窓～

～がるた　（A型）　○○○カ゚ルタ
いろは～、歌～

～側　（平板）　○○○カ゚ワ
うしろ～、日本海～、防御～、向かい～、向こう～

～為替　（A型）　○○○カ゚ワセ
円～[1]、外国～[1]、銀行～、送金～、直接～[1]、電報～、郵便～、輸出～　（注）[1]は「カ」も。

～感　（B型）　○○○カン
安定～[1]、遠近～[1]、距離～、空腹～、責任～[1]、読後～、疲労～[1]、満足～[2]、優越～[2]、劣等～[1]　（注）[1]は（B＊）。[2]は（B）と（B＊）。

～館　（B型）　○○○カン
映画～、公使～、公民～[1]、常設

〜(2)、水族（ゾク・/ゾッ）〜(2)、西洋〜(3)、体育〜(2)、大使〜、展示〜、図書〜
(注)(1)は（B＊）。(2)は（B）と（B＊）。(3)は(平板)と（B＊）。

〜官　（B型）　○○○カン
外交〜(1)、監督〜(2)、警察〜(2)、検査〜、検察〜(2)、裁判〜(1)、指揮〜、試験〜(1)、事務〜、書記〜、司令〜(1)、審議〜、審査〜、秘書〜
(注)(1)は（B＊）。(2)は（B）と（B＊）。

〜漢　（B型）　○○○カン
硬骨〜(1)、大食(ショク・/ショッ)〜(1)、熱血〜(1)、不徳〜(1)、無頼〜(2)、変節〜(1)、門外〜(3)、冷血〜(1)　(注)(1)は（B）と（B＊）。(2)は（B＊）と(平板)。(3)は（B＊）。

〜観　（B型）　○○○カン
終末〜、人生〜(1)、世界〜(1)、先入〜(1)、無常〜(1)、歴史〜
(注)(1)は（B＊）。

〜艦　○○○カン、○○○カン
海防〜、駆逐〜、主力〜(1)、巡洋〜(2)、潜水〜(2)、測量〜(2)、敷設〜(2)、フリゲート〜(2)、補助〜(2)
(注)(1)は(B)と(B＊)。(2)は(平板)のみ。

〜岩　（B型）　○○○ガン
火山〜(1)、火成〜(1)、玄武〜、酸性〜(1)、水成〜(1)、泥板〜(1)、粘板〜(1)、風成〜(1)、変成〜(1)　(注)(1)は(B＊)。

〜眼　（B型）　○○○ガン
遠視〜(1)、観察〜(2)、近視〜(1)、審美〜(2)、千里〜(1)、批評〜(3)　(注)(1)は(平板)。(2)は(平板)も。(3)は（B＊）。

〜関係　（A型）　○○○カンケイ
因果〜、姻せき〜、三角（カク）〜、相関〜、対人〜、賃貸〜、無〜、利害〜

〜監査　（A型）　○○○カンサ
会計〜、外部〜、行政〜、経理〜、内部〜、予算〜

〜漢字　（A型）　○○○カンジ
教育〜、人名用〜、常用〜、制限〜、代用〜、当用〜

〜勘定　（A型）　○○○カンジョー
売上〜、金（カネ）〜、清算〜、そろばん〜、損益〜、どんぶり〜、懐〜、目の子〜

〜関税　（A型）　○○○カンゼイ
差別〜、特恵〜、報復〜、保護〜

〜艦隊　（A型）　○○○カンタイ
第7（ナナ）〜、無敵〜、連合〜、練習〜

〜監督　（A型）　○○○カントク
映画〜、現場〜、助〜、美術〜、舞台〜

〜看板　（A型）　○○○カンバン
一枚〜、絵〜、表〜、金〜、立て〜、名題〜

〜管理　（A型）　○○○カンリ
共同〜、業務〜、経営〜、計数〜、事務〜、生産〜、品質〜、労務〜

〜記　（B型）　○○○キ
案内〜(1)、義経(ギケ)〜(1)、行状〜(1)、源平盛衰〜(1)、古事〜(2)、歳時〜、人国（コク・/コッ）〜(3)、神皇（ジンノー）正統（ショートー）〜(1)、創世〜(1)、道中〜(1)、年代〜(1)、評判〜(1)、風土(フド)〜、方丈〜(1)、明月〜(3)、旅行〜(1)

(注)⁽¹⁾は（B＊）。⁽²⁾は（頭高）。⁽³⁾は（B）と（B＊）。

～期　（B型）　○○○キ

開花～、渇水～⁽¹⁾、活動～⁽¹⁾、過渡～、結氷～⁽¹⁾、けん怠～⁽¹⁾、更年～⁽¹⁾、産卵～⁽¹⁾、思春～⁽¹⁾、少年～⁽¹⁾、新生児～、盛漁［リョ（ギョ）］～、出回り～、転換～⁽¹⁾、乳児～、農閑～⁽¹⁾、農繁～⁽¹⁾、排卵～⁽¹⁾、端境～⁽¹⁾、発情～⁽¹⁾、半減～⁽¹⁾、反抗～⁽¹⁾、変声～⁽¹⁾、幼児～、幼年～⁽¹⁾、揺らん～⁽¹⁾、離乳～⁽¹⁾、れい明～⁽¹⁾　(注)⁽¹⁾は（B＊）。

～旗　（B型）　○○○キ

軍艦～⁽¹⁾、信号～⁽¹⁾、星条～⁽¹⁾、日章～⁽¹⁾、万国［コッ（コク）］～⁽²⁾、優勝～⁽¹⁾
(注)⁽¹⁾は（B＊）。⁽²⁾は「コッ」（B＊）、「コク」（B）と（B＊）。

～器　（B型）　○○○キ

加熱～⁽¹⁾、ガラス～、金属（ゾク・ゾッ）～⁽¹⁾、計量～⁽²⁾、検温～⁽²⁾、検査～、検波～、呼吸～⁽²⁾、受話～、循環～⁽²⁾、消化～、生殖（ショク・ショッ）～⁽¹⁾、青銅～⁽²⁾、洗面～⁽²⁾、増幅～⁽¹⁾、送話～、測定～⁽²⁾、蓄電～⁽²⁾、注射～、聴診～⁽²⁾、抵抗～⁽²⁾、転てつ～⁽¹⁾、電熱～⁽¹⁾、点滅～⁽¹⁾、泌尿～⁽²⁾、分光～⁽²⁾、分度～、噴霧～、変圧～⁽¹⁾、冷却～⁽¹⁾、連結～⁽¹⁾　(注)⁽¹⁾は（B）と（B＊）。⁽²⁾は（B＊）。

～機　（B型）　○○○キ

印刷～⁽¹⁾、映写～、乾燥～⁽²⁾、原動～⁽²⁾、耕うん～⁽²⁾、航空～⁽²⁾、攻撃（ゲキ）～⁽¹⁾、洗濯～⁽¹⁾、双発～⁽¹⁾、超音速（ソク）～⁽¹⁾、彫刻（コク）～⁽¹⁾、偵察～⁽¹⁾、電話～、発電～⁽²⁾
(注)⁽¹⁾は（B）と（B＊）。⁽²⁾は（B＊）。

～キーパー（A型）　○○○キーパー

ゴール～、ハウス～

～議員　（A型）　○○○ギイン

下院～、国会～、参議院～、衆議院～、上院～、勅選～、民選～

～機械　○○○キカイ、～キカイ

印刷～、化学～、工作～、精密～

～議会　○○○ギカイ、～ギカイ

区～、県～、村～、地方～⁽¹⁾、町～、都～、道～、府～
(注)⁽¹⁾は「ギ」のみ。

～議会議員　○○○ギカイギイン、○○○ギカイギイン

県～、市～、村～、都～、道～、府～　(注)町は濁音のみ。

～期間　○○○キカン、～キカン

在学～、賞味～、通用～、服喪～、有効～、猶予～、冷却～

～機関　○○○キカン、～キカン

運輸～、行政～、金融～、交通～、娯楽～、蒸気～、通信～、内熱～、立法～

～企業　（A型）　○○○キギョー

親～、私～、下請け～、成長～、大～、中小～、放送～

～機嫌　（A型）　○○○キゲン

一杯～、上～、とそ～、ほろ酔い～

～記号　（A型）　○○○キゴー

化学～、高音部～、低音部～、発音～、不等～

～記事　（A型）　○○○キジ

囲み～、三面～、社会～、新聞～、特集～、トップ～

～基準　（A型）　○○○キジュン

広告～、番組～、放送～、薬価～、倫理～

～規則　○○○キソク、～キソク

行政～、施行～、就業～、不～

～客　（B型）　○○○キャク

観光～(1)、泊まり～、なじみ～、花見～、訪問～(1)、見込み～、見舞い～(1)、予約～　(注)(1)は（B＊）。

～級　（平板）　○○○キュー

バンタム～、フェザー～、フライ～、ヘビー～、ミドル～

～休暇　（A型）　○○○キューカ

一斉～、慰労～、夏季～、暑中～、生理～、長期～、冬季～、無給～、有給～

～級数　○○○キュースー

○○○キュースー

幾何～、算術～、等差～、等比～

～魚　（B型）　○○○ギョ

遠海～(1)、回遊～(1)、深海～(1)、淡水～(1)、熱帯～(1)、冷凍～(1)

(注)(1)は（B＊）。

～教　（平板）　○○○キョー

イスラム～、一神～、キリスト～、天主～、天理～、バラモン～、ヒンズー～、ラマ～

～橋　（平板）　○○○キョー

開閉～、可動～、鉄道～、歩道～

～鏡　（平板）　○○○キョー

近眼～、顕微～、三面～、双眼～、天眼～、内視～、望遠～、万華～

～業　（B型）　○○○ギョー

印刷～、建築～、自由～(1)、出版～(1)、水産～(1)、製紙～、倉庫～

(注)(1)は（B＊）。

～教育　（A型）　○○○キョーイク

一般～、英才～、音感～、学校～、家庭～、義務～、高等～、再～、視聴覚～、社会～、自由～、純粋～、生涯～、情操～、職業～、初等～、スパルタ～、性～、生産～、成人～、早～、中等～、通信～、天才～、道徳～、普通～、平和～、偏向～、放送～、無～

～教会　（A型）　○○○キョーカイ

浸礼～、長老～、天主～、東方～、福音～

～競技　（A型）　○○○キョーギ

公開～、10（ジッ/ジュッ）種～、水上～、団体～、投てき～、トラック～、氷上～、陸上～

～狂言　（A型）　○○○キョーゲン

顔見世～、通し～、能～、初(ハツ)～

～恐慌　（A型）　○○○キョーコー

安定～、金融～、経済～、世界～

～教師　（A型）　○○○キョーシ

家庭～、青年～、反面～、老～

～業者　（A型）　○○○ギョーシャ

印刷～、卸売～、建築～、広告～

～教授　（A型）　○○○キョージュ

客員～、個人～、助～、大学～、名誉～

～競争　（A型）　○○○キョーソー

過当～、自由～、生存(セイ/ゾン)～

～協定　（A型）　○○○キョーテイ
行政～、漁業～、支払い～、紳士～、報道～

～協力　（A型）　○○○キョーリョク
経済～、国際～、選挙～

～行列　（A型）　○○○ギョーレツ
仮装～、大名～、ちょうちん～、旗～

～漁業　（A型）　○○○ギョギョー
沿岸～、遠洋～、近海～、淡水～、北洋～、養殖～

～局　（B型）　○○○キョク
観光～[1]、検事～、書記～、電報電話～、放送～[1]、郵便～[1]、労働基準～[1]　(注)[1]は（B＊）。

～漁船　（A型）　○○○ギョセン
さけます～、底引き網～、トロール～、流し網～、はえなわ～[1]、巻き網～　(注)[1]はところにより「ノベナワ～」。

～距離　（A型）　○○○キョリ
遠～、近～、至近～、走行～、短～、中～、長～、直線～、等～

～記録　（A型）　○○○キロク
公認～、新～、世界～、タイ～、大会～、短水路～、日本(ニッポン・ニホン)～

～際　（平板）　○○○ギワ
往生～、死に～、瀬戸～[1]、波打ち～、生え～[1]　(注)[1]は（尾高）も。

～金　○○○キン、○○○キン
一時～、義援～[1]、寄付～[2]、救済～[1]、供託～、契約～[3]、奨学～、退職～[3]、弔慰～、補助～、予約～
(注)[1]は(平板)と（B＊）も。[2]は(平板)と（A）も。[3]は（B＊）も。

～金庫　（A型）　○○○キンコ
貸し～、信用～、手提げ～、労働～

～銀行　（A型）　○○○ギンコー
血液～、市中～、信託～、世界～、中央～、都市～、日本(ニッポン)～[1]
(注)[1]は「ニホン」も。

～金属　（A型）　○○○キンゾク
貴～、希少～、軽～、重～、非鉄～

～金融　（A型）　○○○キンユー
外貨～、自己～、消費者～、滞貨～、担保～

～金利　（A型）　○○○キンリ
基準～、規制～、低～、法定～

～ぐあい（具合）　○○○グアイ
出来～[1]、腹～、懐～、焼け～
(注)[1]は「グ」も。

～区域　（A型）　○○○クイキ
管轄～、係留～、制限～、調整～、通学～、防災～

～口　○○○グチ、○○○グチ
上がり～[1]、勝手～、通い～[3]、からす～[3]、就職～、乗車～[3]、電話～、にじり～[3]、登り～[1]、非常～[2]、奉公～[4]　(注)[1]は「クチ」も。[2]は（B＊）のみ。[3]は（B）のみ。[4]は（B＊）と(平板)。

～組　（平板）　○○○グミ
赤～、消防～、男女～

～組合　○○○グミアイ
企業内～、共済～、協同～、購売～、産業～、消費～、職員～、信用～、農業～、労働～

～雲　（A型）　○○○クﾟモ
いわし～、うろこ～、ちぎれ～、入道～[1]、日照り～、まだら～、夕立～　(注)[1]は（B＊）も。

～供養　（A型）　○○○クヨー
永代～、開眼～、追善～、練り～、針～、筆～

～暮らし　（A型）　○○○クﾟラシ
その日～、1人～、独り～、貧乏～、やもめ～

～軍　（B型）　○○○クﾟン
革命～[1]、義勇～[1]、救世～[1]、国連～[1]、十字～、常勝～[1]、常備～、進駐～[1]、正規～、占領～[1]、駐屯～[1]、駐留～[1]、派遣～[1]、連合～[1]
(注)[1]は（B＊）。

～計　（平板）　○○○ケイ
圧力～、雨量～、寒暖～[1]、気圧～、検流～、地震～、湿度～[2]、身長～、速度～[2]、体重～、電流～[1]、電力～[2]、比重～、風速～[2]、油圧～、流量～、露出～　(注)[1]は（B＊）も。[2]は（B）も。[3]は（B）と（B＊）も。

～芸　（B型）　○○○ケﾟイ
当たり～[1]、隠し～、素人～[2]、大道～[3]、だんな～、殿様～[2]、名人～[3]　(注)[1]は（平板）も。「ゲ」も。[2]は「ゲ」も。[3]は（B＊）。

～経営　（A型）　○○○ケイエイ
学校～、共同～、個人～、多角～

～計画　（A型）　○○○ケイカク
家族～、再建～、作戦～、地方財政～、都市～

～経済　（A型）　○○○ケイザイ
計画～、市場～、自由～、統制～、不～、流通～

～警察　（A型）　○○○ケイサツ
移動～、経済～、公安～、国家～、水上～

～計算　（A型）　○○○ケイサン
往復～、カロリー～、原価～、日割り～、論理～

～芸術　（A型）　○○○ゲイジュツ
映画～、総合～、抽象～、敦煌～

～形態　（A型）　○○○ケイタイ
観念～、経営～、社会～、賃金～

～警報　（A型）　○○○ケイホー
大雨～、大雪～、空襲～、警戒～、洪水～、波浪～

～契約　（A型）　○○○ケイヤク
自由～、双務～、秘密～、保険～、労働～

～外科　（A型）　○○○ゲﾟカ
形成～、口こう～[1]、神経～、整形～、内臓～、脳～　(注)[1]固有名詞などでは「くう」とも。

～劇　（B型）　○○○ゲﾟキ
学校～[1]、時代～[1]、西部～、創作～、童話～、人形～[1]、放送～[1]、野外～[1]　(注)[1]は（B＊）。

～景色　（A型）　○○○ケﾟシキ
春～、冬～、夕～、雪～

～化粧　（A型）　○○○ゲﾟショー
厚～、薄～、早～、舞台～、夕～

～結核　（A型）　○○○ケッカク
こう頭～、小児～、ぞく粒～、腸～、肺～

～結婚　（A型）　○○○ケッコン

学生～、血族～、写真～、自由～、神前～、政略～、見合い～、恋愛～

～犬　(平板)　○○○ケン

軍用～、警察～、日本(ニホン・ニッポン)～、盲導～

～権　(B型)　○○○ケン

監督～(1)、警察～(1)、耕作～(1)、参政～(2)、指揮～、選挙～、選手～(3)、相続～(1)、代表～(2)、団結～(1)、著作(サク・サッ)～(1)、賃貸～(1)、特許～、隣接～(1)　(注)(1)は(B＊)も。(2)は(B＊)。(3)は(平板)も。

～圏　(B型)　○○○ケン

広域～、首都～、勢力～(1)、大気～、大都市～、南極～(1)、北極～(1)
(注)(1)は (B＊) も。

～言語　(A型)　○○○ゲンゴ

音声～、視覚～、自然～、身体～、聴覚～、文字～

～検査　(A型)　○○○ケンサ

会計～、再～、身体～、知能～、徴兵～、適性～、服装～

～現象　(A型)　○○○ゲンショー

社会～、電波～、発光～、反転～、老化～

～元素　(A型)　○○○ゲンソ

化学～、人工～、同位～、放射性～

～建築　(A型)　○○○ケン㋠ク

高層～、耐火～、耐震～、ブロック～、本～、木造～

～限度　(A型)　○○○ゲンド

許容～、最小～、最低～、保有～

～語　(平板)　○○○ゴ

外来～、活用～、慣用～、共通～、接頭～、接尾～、専門～

～港　(B型)　○○○コー

神戸～、自由～(1)、東京～(1)、不凍～(1)、貿易～、輸入～(1)、横浜～
(注)(1)は (B＊)。

～号　(B型)　○○○ゴー

創刊～(1)、特集～(1)、博士(ハクシ)～
(注)(1)は (B＊)。

～行為　(A型)　○○○コーイ

違法～、寄付～、敵対～、不正～、不当労働～、不法～、暴力～

～公園　(A型)　○○○コーエン

国定～、国立～、自然～、森林～

～工学　(A型)　○○○コーガク

機械～、電気～、電子～、都市～、土木～

～工業　(A型)　○○○コーギョー

化学～、家内～、機械～、軍需～、軽～、重～、繊維～、輸出～

～攻撃　(A型)　○○○コーゲキ

正面～、人身～、総～、波状～、包囲～

～高校　(A型)　○○○コーコー

県立～、市立～、私立～、全日(テ・チ)制～、定時制～、都立～、道立～、付属～、府立～

～広告　(A型)　○○○コーコク

あて名～、街頭～、求人～、懸賞～、死亡～、商品～、新聞～

～口座　(A型)　○○○コーザ

銀行～、個人～、総合～、振替～、振込～、預金～

～講座　（A型）　○○○コーザ
教養～、公開～、市民～、文化～

～公債　（A型）　○○○コーサイ
外国～、短期～、利付き～

～工事　（A型）　○○○コージ
基礎～、下水～、護岸～、砂防～、下～、治水～、突貫～、土木～、難～、復旧～

～控除　（A型）　○○○コージョ
基礎～、所得～、税額～、生命保険～、扶養～

～交渉　（A型）　○○○コーショー
関税～、団体～、没～、予備～

～コース（A型）　○○○コース
逆（ギャク・ギャッ）～、ストレート～、直線～、デザート～、ドクター～、ハイキング～

～控訴　（A型）　○○○コーソ
検事～、被告～

～行動　（A型）　○○○コードー
自由～、団体～、単独～、直接～

～航路　（A型）　○○○コーロ
沿海～、欧州～、外国～、大圏～、定期～

～呼吸　（A型）　○○○コキュー
胸式～、深～、人工～、皮膚～、腹式～

～国　（B型）　○○○コク
衛星～[1]、合衆～[1]、開発途上～[1]、加盟～[1]、共和～、君主～、交戦～[1]、好戦～[1]、地震～[1]、戦勝～[1]、先進～[1]、中立～[2]、当事～、同盟～[1]、独立～[2]、文明～[1]、法治（チ）～、保護～、民主～、耶馬台（ヤマタイ）～[1]、理事～、連合～[1]、連盟～[1]
(注)[1]は（B＊）。[2]は（B＊）も。

～国民　○○○コクミン、
○○○コクミン
少～、大～、日本（ニッ・ホン）～[1]、非～
(注)[1]は（A）のみ。

～孤児　（A型）　○○○コジ
残留～、戦災～

～小僧　○○○コゾー
悪たれ～、いたずら～[1]、ひざ（ひざっ）～、一つ目～、わんぱく～
(注)[1]は（A）も。

～国家　（A型）　○○○コッカ
近代～、警察～、世界～、都市～、福祉～、文化～、民族～

～国会　（A型）　○○○コッカイ
通常～、特別～、変則～、臨時～

～ことば　（A型）　○○○コトバ
売り～、買い～、書き～、京～、話し～、早口～、褒（ホ）め～、まくら～

～小屋　（平板）　○○○コ゜ヤ
牛～、掛け～[1]、仮～、芝居～、水車～、炭焼き～、大工～、鳥～、掘っ立て～、見せ物～、物置～、山～　(注)[1]は（B）も。

～祭　（B型）　○○○サイ
慰霊～[1]、記念～[2]、祈念～[2]、降誕～[1]、地鎮～[1]、謝肉～[3]、招魂～[1]、聖誕～[1]、鎮火～、独立～[3]、パリ～、百年～[1]、復活～[3]、文化～
(注)[1]は（B＊）。[2]は（平板）と（B＊）。[3]は（B＊）も。

～債　（B型）　○○○サイ

外国～(2)、金融～(1)、公社～、事業～(1)、地方～(1)、ドル建～、割引～(2)
(注)(1)は（B＊）。(2)は（B＊）も。

～材　（B型）　○○○ザイ
建築～、断熱～、投資～、ラワン～(1)、冷却～　(注)(1)は（B＊）。（平板）も。

～財　（B型）　○○○ザイ
資本～(1)、消費～、文化～(2)
(注)(1)は（B＊）。(2)は（平板）も。

～細工　（A型）　○○○ザイク
きびがら～、ぞうげ～、粘土～、箱根～、寄せ木～

～債券　（A型）　○○○ザイケン
国庫～、宅地～、納税～

～財産　（A型）　○○○ザイサン
永久～、公有～、国有～、私有～、世襲～

～財政　（A型）　○○○ザイセイ
赤字～、均衡～、健全～、地方～、放漫～

～裁判　（A型）　○○○ザイバン
軍事～、刑事～、欠席～、司法～、人民～、即決～、民事～

～裁判所　○○○サイバンショ、
○○○サイバンショ
家庭～、簡易～、高等～、最高～、地方～

～作業　（A型）　○○○ザギョー
一貫～、救助～、共同～、突貫～、流れ～、農～

～策　（B型）　○○○サク
安全～(1)、強行～(1)、善後～、対抗～(1)、び縫～(1)、満塁～(1)、離間～(1)
(注)(1)は（B＊）。

～作物　○○○サクモツ
換金～、自給～、特用～

～座敷　（A型）　○○○ザシキ
裏～、奥～、表～、貸し～、客～、隣～、夏～、2階～、離れ～

～撮影　（A型）　○○○ザツエイ
移動～、間接～、空中～、高速度～、特殊～、夜間～

～雑誌　（A型）　○○○ザッシ
機関～、専門～、総合～、大衆～、同人［ジ(テ)］～

～砂糖　（A型）　○○○ザトー
赤～、角～、黒～、氷～、白～

～作用　（A型）　○○○ザヨー
化学～、交互～、同化～、反～、反射～、風化～、副～

～産　（平板）　○○○サン
アメリカ～、外国～、国内～

～産業　（A型）　○○○ザンギョー
1次～、外食～、基礎～、情報～、成長～、平和～、防衛～

～産物　（A型）　○○○ザンブツ
海～、水～、特～、農～

～死　（B型）　○○○シ
安楽～(1)、自然～(2)、心臓～(2)、戦傷～(2)、戦病～(2)
(注)(1)は（B＊）も。(2)は（B＊）。

～詩　（B型）　○○○シ
交響～(1)、散文～(1)、自由～(1)、象徴～(1)、叙事～、叙情～(1)、新体～(1)、即興～(1)、風物～(2)
(注)(1)は（B＊）。(2)は（B＊）も。

～氏（姓に付く）（B型）　○○○シ

足利～、鈴木～、田中～、徳川～

～士　（B型）　○○○シ

運転～[1]、栄養～[1]、技工～[1]、計理～、建築～、税理～、操縦～[1]、代議～、飛行～[1]、文～[1]、弁護～

(注)[1]は（B＊）。

～師　（B型）　○○○シ

思わく～[1]、講釈～[1]、詐欺～、タテ～、調理～、伝道～[2]、道化～、能楽～[1]、美容～[2]、表具～、振付～、薬剤～[2]

(注)[1]は（B＊）も。[2]は(B＊)。

～詞　（B型）　○○○シ

間投～[1]、感動～[1]、形容～[1]、接続～[2]、前置～、連体～[1]

(注)[1]は（B＊）。[2]は(B＊)も。

～誌　（B型）　○○○シ

機関～[1]、研究～[1]、政党～[1]、専門～[1]、大衆～[1]、同人［ジ(ニ)］～[1]

(注)[1]は（B＊）。

～児　（B型）　○○○ジ

健康優良～[1]、幸運～[1]、混血～[2]、双生～[1]、天才～[1]、風雲～[1]、浮浪～[1]　(注)[1]は（B＊）。[2]は（B＊）も。

～試合　（A型）　○○○ジアイ

完全～[1]、紅白～、正式～[1]、対抗～、他流～、放棄～、奉納～

(注)[1]は「シ」も。

～次官　（A型）　○○○ジカン

大蔵～、外務～、事務～、政務～

～時間　（A型）　○○○ジカン

１～、競技～、勤務～、小一～[1]、実働～、就業～、睡眠～、短～、長～、毎～[2]、労働～

(注)[1]は（頭高）も。[2]は(平板)も。

～式(儀式、数式)(B型)○○○ジキ

開会～[1]、化学～、結婚～[1]、即位～、卒業～[1]、代数～[1]、出初め～、入学～　(注)[1]は（B＊）。

～式（方式）（平板）　○○○ジキ

芋づる～、折り畳み～、空冷～、水洗～、水冷～、大農～、日本(ニホン・ニッポン)～

～事業　（A型）　○○○ジギョー

育英～、公共～、社会～、植林～、大～、独占～、文化～、放送～

～資金　○○○ジキン、○○○ジキン

運転～、越冬～、回転～、経営～、奨学～、政治～、設備～、短期～、長期～

～時雨　（A型）　○○○ジグレ

さ夜(ヨ)～、さんさ～、初～、村～、夕～

～試験　○○○ジケン、○○○ジケン

学年～、国家～、社内～、定期～、入学～、筆記～、模擬～、臨時～

～時刻　（A型）　○○○ジコク

起床～、締め切り～、同～、到着～、夏～

～地獄　（A型）　○○○ジゴク

生き～、交通～、試験～、焦熱～、無間（ムゲン）～

～仕事　（A型）　○○○ジゴト

隠居～、手間～、野良～、半端～、一～[1]、山～　(注)[1]は（B）も。

～資産　（A型）　○○○ジサン

金融～、固定～、在外～、凍結～、含み～、簿外～

～市場　（A型）　○○○ジジョー
株式～、金融～、流通～、割引～

～事情　（A型）　○○○ジジョー
海外～、食糧～、特殊～、放送～

～地震　（A型）　○○○ジシン
大(オー)～、海底～、火山性～、断層～、直下型～

～施設　○○○シセツ、
○○○シセツ
加工～、公共～、福祉～、補給～、保全～、遊休～

～思想　（A型）　○○○ジソー
衛生～、外来～、近代～、自由～、中華～、排外～、封建～

～しだい《次第》（A型）○○○ジダイ
相手～、お好み～、勝手～、手当たり～、出来～、望み～

～事態　（A型）　○○○ジタイ
異常～、緊急～、新～、非常～

～時代　（A型）　○○○ジダイ
飛鳥(アスカ)～、江戸～、少年～、戦国～、白鳳(ハクホー)～、封建～、室町～、幼年～

～支度　（A型）　○○○ジタク
帰り～、旅～、逃げ～、冬～、身～、嫁入り～

～室　（B型）　○○○シツ
応接～(2)、実験～(1)、事務～、診察～(2)、陳列～(2)、電話～
(注)(1)は（B＊）。(2)は（B＊）も。

～質　（B型）　○○○シツ
神経～(1)、せん病～(1)、胆汁～(1)、たんぱく～(2)、でんぷん～(1)、粘液～、有機～　(注)(1)は(B＊)。(2)は(B＊)も。

～失業者　○○○シツキ゜ョーシャ
一時～、完全～、潜在～

～質問　○○○シツモン、
○○○シツモン
一般～、関連～、緊急～、職務～

～辞典　（A型）　○○○ジテン
アクセント～、英和～、漢和～、国語～、独和～、発音～、仏和～、和英～

～自動車　○○○ジドーシャ
貨物～、消防～、装甲～、乗合～

～芝居　（A型）　○○○ジバイ
田舎～、歌舞伎～、素人～、壮士～、人形～

～資本　（A型）　○○○ジホン
金融～、経営～、産業～、自己～、社会～、大～、独占～、民族～

～じま《縞》　(平板)　○○○ジマ
格子～、碁盤～、サントメ～、縦～、段だら～、弁柄～、弁慶～、結城～、横～

～島田　（A型）　○○○シマダ
下げ～、高～、つぶし～、投げ～

～自慢　（A型）　○○○ジマン
腕～、お国～、顔～、器量～、国～、声～、力～、のど～、娘～

～事務所　○○○ジムショ
税務～、地方～、農林～、法律～

～社　（B型）　○○○シャ
合作～(1)、雑誌～、出版～(2)、新聞～(2)、赤十字～、葬儀～
(注)(1)は（B＊）も。(2)は（B＊）。

～社会　（A型）　○○○シャカイ
共同～、近代～、実(ジッ)～、資本主義～、市民～、社会主義～、上流～、地域～

～じゃくし《杓子》
○○○ジャクシ
網～、おたま～、貝～、金(カナ)～

～射撃　（A型）　○○○シャゲキ
一斉～、援護～、実弾～、対空～

～写真　（A型）　○○○○シャシン
青～(1)、X線～、街頭～、顔～(1)、活動～、カラー～、記念～、スナップ～、手配～、電子～、電送～、天体～、早取り～、分解～、モンタージュ～、立体～　(注)(1)は「ジャ」。

～茶わん　（A型）　○○○ジャワン
紅茶～、天目～、みょうと～(1)、飯～、湯飲み～　(注)(1)は「メオト」も。

～手　（B型）　○○○シュ
運転～(1)、外野～、交換～(1)、内野～、遊撃～(2)
(注)(1)は（B＊）。(2)は（B＊）も。

～州　（B型）　○○○シュー
五大～(1)、六十余～、六大～(1)
(注)(1)は（B＊）。

～集　（B型）　○○○シュー
金葉～(1)、古今～(1)、勅選～(1)、八代～(1)、万葉～(1)　(注)(1)は（B＊）。

～宗教（A型）○○○シューキョー
原始～、新興～、類似～

～住宅　（A型）　○○○ジュータク
簡易～、組み立て～、県営～、公営～、公団～、市営～、都営～、文化～

～主義　（A型）　○○○シュギ
官僚～、客観(キャッ/カン)～、共産～、軍国～、形式～、現実～、合理～、個人～、実存～、資本～、社会～、自由～、人道～、保守～、民主～、無政府～、利己～、理想～、ロマン～

～主義者　○○○シュギシャ
社会～、自由～、平和～

～樹脂　（A型）　○○○ジュシ
アクリル～、けい素～、合成～、ビニール～

～手術　（A型）　○○○シュジュツ
開腹～、整形～、不妊～

～手段　（A型）　○○○シュダン
慣用～、常とう～、非常～、不正～、報復～

～出資　（A型）　○○○シュッシ
共同～、個人～、単独～、労務～

～出版　（A型）　○○○シュッパン
限定～、自費～、電子～、秘密～、予約～

～じゅ(じ)ばん《襦袢》　（A型）
○○○ジュバン、○○○ジバン
汗～、長～、肉～、肌～

～趣味　（A型）　○○○シュミ
悪～、多～、無～、露悪～

～需要　（A型）　○○○ジュヨー
最終～、潜在～、中間～、有効～

～準備　（A型）　○○○ジュンビ
下(シタ)～、受験～、正貨～、だ換～

～商　（B型）　○○○ショー
小売～(1)、呉服～、古物～、雑貨～、貿易～(2)

(注)[1]は（平板）も。[2]は（B＊）も。

～省　（B型）　○○○ショー

運輸～、大蔵～、外務～、厚生～[1]、国務～、自治～、通商産業～[1]、農林水産～[1]、法務～、文部～、郵政～[1]、労働～[1]　(注)[1]は（B＊）。

～抄　（B型）　○○○ショー

愚管～[1]、十訓(ジッキン・ジュッキン)～[1]、歎異～、梁塵秘～　(注)[1]は（B＊）。

～上　（平板）　○○○ジョー

一身～、学問～、教育～、形じ～、便宜～、歴史～

～場　（平板）　○○○ジョー

演芸～、競馬～、浄水～、操車～、駐車～、飛行～、養魚～、留置～

～城　（B型）　○○○ジョー

青葉～、江戸～、白鷺～、大阪～、不夜～、竜宮～[1]

(注)[1]は（B＊）と（平板）。

～償却　（A型）　○○○ショーキャク

減価～、定額～、定率～、特別～

～証書　（A型）　○○○ショーショ

為替～、公正～、卒業～、預金～

～小説　（A型）　○○○ショーセツ

科学～、社会～、推理～、探偵～、歴史～、恋愛～、私〔ワタクシ(シ)〕～

～装束　（A型）　○○○ショーゾク

狩り～、黒～、死に～、白～、旅～、能～、舞～

～状態　（A型）　○○○ジョータイ

こん睡～、混乱～、無重力～、無政府～、無風～、飽和～

～浄土　（A型）　○○○ジョード

安楽～、極楽～、西方(サイホー)～、寂光(ジャッコー)～

～商人　（A型）　○○○ショーニン

近江～、御用～、大道～、旅～、露天～

～少年　（A型）　○○○ショーネン

ぐ犯～、美～、非行～、不良～

～商売　（A型）　○○○ショーバイ

縁起～、客～、人気～、水～

～勝負　（A型）　○○○ショーブ

一六～、一本～、真剣～、出たとこ～

～証明　（A型）　○○○ショーメイ

印鑑～、車庫～、内容～、配達～、不在～、身分～

～証明書　○○○ショーメイショ、○○○ショーメイショ

血液～[1]、通勤～、党籍～、身分～

(注)[1]は（尾高）のみ。

～条約　（A型）　○○○ジョーヤク

講和～、国際～、通商～、同盟～、不可侵～、不戦～、不平等～、平和～

～じょうゆ《醤油》（A型）

○○○ジョーユ

掛け～、からし～、生(キ)～、たまり～、わさび～

～浄瑠璃　（A型）　○○○ジョールリ

江戸～、狂言～、古～、人形～

～色　（B型）　○○○ショク

郷土～、銀白～[1]、警戒～[2]、国際～[2]、鮮紅～[2]、乳白～[1]、保護～

(注)[1]は（B＊）も。[2]は（B＊）。

～職　（B型）　○○○ショク

一般～[1]、侍従～[2]、守護～、特別

〜[3]、名誉〜　(注)[1]は(B＊)。[2]は(B＊)。「シキ」も。[3]は（B＊）も。

〜植物　○○○ショクブツ
観葉〜、顕花〜、高山〜、食虫〜、熱帯〜、薬用〜、有毒〜、裸子〜

〜所帯　(A型)　○○○ジョタイ
大〜、男〜、女〜、新〜、貧乏〜、寄り合い〜

〜所得　(A型)　○○○○ショトク
一時〜、勤労〜、国民〜、個人〜、雑〜、資産〜、不労〜、利子〜

〜処分　(A型)　○○○○ショブン
仮〜、強制〜、行政〜、けん責〜、除名〜、滞納〜、停学〜、廃棄〜

〜汁　(A型)　○○○ジル
うしお〜、けんちん〜、しじみ〜、澄まし〜、たぬき〜

〜汁粉　(A型)　○○○ジルコ
田舎〜、小倉〜、懐中〜、氷〜、ごぜん〜

〜司令官　○○○シレイカン
艦隊〜、軍〜、最高〜、総〜

〜人　(B型)　○○○ジン
アメリカ〜、イギリス〜、一般〜[1]、外国〜、帰化〜、原始〜、財界〜[2]、社会〜[2]、自由〜[2]、知識〜、中国〜、ドイツ〜、日本（ニホン/ニッポン）〜[3]、フランス〜、文化〜、民間〜[2]、有名〜[2]　(注)[1]は(A)と(B＊)。[2]は(B＊)。[3]は(A)。

〜神宮　○○○ジングー、
○○○ジングー
熱田〜、伊勢〜、鹿島〜、橿原（カシハラ）〜、香取〜、皇大（タイ）〜、平安〜、明治〜

〜神経　(A型)　○○○ジンケイ
運動〜、交感〜、視〜、自律〜、中枢〜、無〜、迷走〜

〜信号　(A型)　○○○ジンゴー
赤〜、音声〜、危険〜、警戒〜、手旗〜、同期〜、発火〜

〜申告　(A型)　○○○ジンコク
青色〜、移動〜、確定〜、事前〜

〜審査　(A型)　○○○ジンサ
違憲〜、継続〜、国民〜、再〜

〜神社　(A型)　○○○ジンジャ
厳島〜、稲荷〜、英彦山（ヒコサン）〜、大山祇（オーヤマズミ）〜、吉備津〜、貴船（キブネ）〜、浅間（センゲン）〜、二荒山（フタラサン）〜、三保〜、靖国〜、弥彦〜

〜人種　(A型)　○○○ジンシュ
黄色〜、白色〜、有色〜

〜人物　(A型)　○○○ジンブツ
怪〜、好〜、大〜、注意〜、中心〜、登場〜

〜新聞　(A型)　○○○ジンブン
赤〜、英字〜、学生〜、学校〜、壁〜、機関〜、大学〜、日刊〜、夕刊〜

〜尋問　(A型)　○○○ジンモン
交互〜、反対〜、誘導〜、臨床〜

〜心理学　○○○シンリガク
教育〜、形態〜、社会〜、深層〜、動物〜、臨床〜

〜図　(B型)　○○○ズ
心電〜[1]、設計〜[1]、断面〜[1]、地形〜[1]、天気〜、平面〜[1]
(注)[1]は（B＊）。

〜水域　（A型）　○○○スイイキ
経済〜、制限〜、専管〜、中央〜、防衛〜、保護〜
〜水準　（A型）　○○○スイジュン
価格〜、給与〜、消費〜、生活〜
〜水晶　（A型）　○○○ズイショー
黄〜、草入り〜[1]、黒〜、煙（ケムリ）〜、紫〜　(注)[1]は「ス」も。
〜水素　（A型）　○○○スイソ
塩化〜、過酸化〜、炭化〜、よう化〜、硫化〜
〜水路　（A型）　○○○スイロ
短〜、長〜、用〜
〜づえ《杖》（A型）　○○○ズエ
金剛〜、仕込み〜、松葉〜
〜ずきん　（A型）　○○ズキン
赤〜、おこそ〜、かぶと〜、大黒〜、袋〜[1]、山〜　(注)[1]は〜ズキンも。
〜筋　○○○スジ、○○○スジ
大手〜[1]、思わく〜、外交〜[2]、玄人〜、権威〜、消息〜[3]、政府〜、太刀〜、道中〜[4]、ひいき〜　(注)[1]は(B)のみ。[2]は(B＊)のみ。[3]は(B)と（B＊)。[4]は(B＊)と(A)。
〜住まい　（A型）　○○○ズマイ
仮〜、借家〜、長屋〜、独り〜、町〜、マンション〜、わび〜
〜相撲　（A型）　○○○ズモー
引退〜、大〜、勧進〜、天覧〜、半端〜、独り〜、奉納〜、指〜、横綱〜
〜つる《鶴》（A型）　○○○ズル
折り〜[1]、千羽〜[2]、丹頂〜、なべ〜[2]　(注)[1]は(B)（平板)も。[2]は(B)も。
〜生　（B型）　○○○セイ
書記〜、卒業〜[1]、同期〜、特待〜[1]、優等〜[1]、練習〜[1]　(注)[1]は(B＊)。「落花〜」は(平板)も。植物の「1年生・2年生」は(平板)。
〜性　（平板）　○○○セイ
安定〜、関連〜、危険〜、社会〜、将来〜、信ぴょう〜、積極〜、適応〜、必然〜、夜行〜
〜制　（平板）　○○○セイ
全日（チ）〜、定時〜、道州〜、バーター〜、歩合〜、輪番〜、連記〜
〜製　（平板）　○○○セイ
外国〜、鋼鉄〜、自家〜、日本〜[1]　(注)[1]は「ニホン」「ニッポン」両様。
〜税　（B型）　○○○ゼイ
間接〜、固定資産〜[1]、住民〜[1]、所得〜、相続〜[2]、贈与〜、町村〜[1]、直接〜[2]、都市計画〜、物品〜[1]　(注)[1]は（B＊)。[2]は（B＊）も。
〜生活　（A型）　○○○セイカツ
共同〜、私〜、新婚〜、耐乏〜、独身〜、二重〜、日常〜、文化〜
〜政策　（A型）　○○○セイサク
外交〜、金融〜、経済〜、社会〜、対外〜、低物価〜、封じ込め〜
〜政治　（A型）　○○○セイジ
政党〜、専制〜、独裁〜、民主〜
〜精神　（A型）　○○○セイシン
運動〜、国民〜、古代〜、自治〜、フロンティア〜
〜制度　（A型）　○○○セイド

一院～、階級～、家族～、社会～、徴兵～、二院～、陪審～、封建～

～政府　(A型)　○○○セイフ

仮～、新～、人民～、中央～

～整理　(A型)　○○○セイリ

行政～、区画～、耕地～、交通～、残務～、人員～

～責任　(A型)　○○○セキニン

保証～、無～、無限～、有限～、連帯～

～せっけん　(A型)　○○○セッケン

逆性～、化粧～、粉～、洗濯～、薬用～、浴用～

～繊維　(A型)　○○○センイ

化学～、ガラス～、合成～、人造～、ビニール～

～選挙　(A型)　○○○センキョ

地方～、直接～、普通～、補欠～、予備～、理想～

～線香　(A型)　○○○センコー

蚊取り～、蚊やり～、花火～

～戦術　(A型)　○○○センジュツ

ゲリラ～、人海～、泣き落とし～、暴露～、ゆさぶり～

～前線　(A型)　○○○ゼンセン

温暖～、寒冷～、最～、桜～、停滞～、梅雨(バイウ)～

～戦争　(A型)　○○○センソー

局地～、心理～、侵略～、全面～、代理～、独立～、南北～、百年～

～センター　(A型)　○○○センター

スポーツ～、テーブル～、ニュース～、ビジネス～、プレス～、文化～、ヘルス～

～奏　(B型)　○○○ソー

弦楽4重～(1)、5重～(1)、3重～(1)、2重～(1)　(注)(1)は(B＊)

～層　(B型)　○○○ソー

オゾン～(1)、活断～(1)、観客～(2)、古生～(1)、社会～(1)、沖積～(2)、電離～、読者～　(注)(1)は(B＊)。(2)は(B＊)も。

～争議　(A型)　○○○ソーキ゚

家庭～、小作～、人権～、労働～

～草子　(A型)　○○○ゾーシ

浮世～、御伽～、仮名～、無名～

～掃除　(A型)　○○○ソージ

大～、どぶ～、掃き～(1)、ふき～、耳～　(注)(1)は(平板)(尾高)も。

～走者　(A型)　○○○ソーシャ

短距離～、中距離～、長距離～

～相続　(A型)　○○○ソーゾク

跡目～、遺産～、家督～、均分～

～装置　(A型)　○○○ソーチ

安全～、加速～、浄化～、暖房～、舞台～、冷却～、冷房～、録音～

～相場　(A型)　○○○ソーバ

為替～、米～、通り～、変動～

～草履　(A型)　○○○ゾーリ

麻裏～、上(ウワ)～、突っかけ～、冷や飯～、わら～

～族　(B型)　○○○ゾク

社用～(1)、斜陽～(1)、太陽～(1)、団地～、転勤～(1)、暴走～(1)、窓際～
(注)(1)は(B＊)。

～速度　(A型)　○○○ソクド

回転～、高～、最高～、巡航～、法定～

〜組織　(A型)　〇〇〇ソシキ
細胞〜、社会〜、地下〜、農民〜、未〜

〜訴訟　(A型)　〇〇〇ソショー
行政〜、刑事〜、人事〜、認知〜、民事〜

〜体　(平板)　〇〇〇タイ
自治〜、絶縁〜、弾性〜、直方〜、病原〜、免疫〜、有機〜、立方〜

〜帯　(平板)　〇〇〇タイ
快感〜、湿地〜、草原〜、放射能〜(1)、無風〜、緑地〜　(注)(1)は(B＊)。

〜隊　(平板)　〇〇〇タイ
音楽〜、海兵〜、機動〜、軍楽〜、航空〜、自衛〜、守備〜、消防〜、親衛〜、聖歌〜、保安〜、レスキュー〜

〜代(代金)(平板)　〇〇〇ダイ
お茶〜、小屋〜(1)、新聞〜、水道〜、線香〜(2)、たばこ〜　(注)(1)は(B)も。(2)は(B＊)も。

〜大学　(A型)　〇〇〇ダイカ゜ク
医科〜、旧制〜、公立〜、国立〜、歯科〜、私(シ)立〜(1)、新制〜、総合〜、単科〜、短期〜、帝国〜、防衛〜、放送〜、薬科〜　(注)(1)は「ワタクシ」も。

〜体系　(A型)　〇〇〇タイケイ
価値〜、給与〜、賃金〜、物価〜

〜大根　(A型)　〇〇〇ダイコン
青首〜、おろし〜、尾張〜、かいわれ〜、切り干し〜、桜島〜、聖護院(ショーゴイン)〜、時なし〜、練馬〜

〜大使　(A型)　〇〇〇タイシ
アメリカ〜、移動〜、全権〜、駐日〜、特派〜

〜大社　(A型)　〇〇〇タイシャ
出雲〜、官幣〜

〜大将　(A型)　〇〇〇タイショー
青〜(1)、海軍〜(2)、がき〜、侍〜、総〜、陸軍〜(2)、若〜　(注)(1)は(平板)も。(2)は(タ)。

〜大臣　(A型)　〇〇〇ダイジン
右〜、運輸〜、大蔵〜、海軍〜、外務〜、建設〜、厚生〜、国務〜、左〜、自治〜、総理〜、太(ダイ)政〜、通商産業〜、農林水産〜、法務〜、無任所〜、文部〜、矢〜、郵政〜、陸軍〜、労働〜

〜体操　(A型)　〇〇〇タイソー
器械〜、柔軟〜、準備〜、テレビ〜、徒手〜、美容〜、ラジオ〜

〜打者　(A型)　〇〇〇ダシャ
強〜、指名〜、先頭〜、左〜、4番〜

〜たばこ　(A型)　〇〇〇タバコ
葉〜、葉巻〜、巻き〜、輸入〜

〜足袋　(平板)　〇〇〇タビ
黒〜、紺〜(1)、地下(ジカ)〜、白〜
(注)(1)は(A)も。

〜玉　(平板)　〇〇〇ダマ
かんしゃく〜、こんにゃく〜、じゅず〜、ひょうろく〜、風船〜

〜だるま　(A型)　〇〇〇ダルマ
血〜(1)、火〜、雪〜
(注)(1)は(平板)も。

〜談　(B型)　〇〇〇ダン

懐旧～(1)、苦心～(1)、経験～(1)、後日～、事実～、車中～(1)、冒険～(1)
(注)(1)は（B＊）。

～団 （B型） ○○○ダン
応援～(1)、合唱～(1)、観光～(1)、少年～(1)、暴力～ (注)(1)は（B＊）。

～段 （平板） ○○○ダン
上がり～(1)、はしご～、踏み～
(注)(1)は（B）も。

～炭素 （A型） ○○○タンソ
一酸化～、活性～、含水～、二酸化～、硫化～

～団体 （A型） ○○○ダンタイ
圧力～、右翼～、加盟～、公共～、思想～、宗教～、政治～、任意～

～短調 ○・タンチョー、
○タンチョー
イ～、ト～、ニ～、ハ～、ヘ～、ホ～、ロ～
（例外）嬰○短調、変○短調
エイ（ヘン）○タンチョー

～担保 （A型） ○○○タンポ
危険～、浮動～、無～、輸入～

～地 （B型） ○○○チ
干拓～(1)、現在～(2)、住宅～(1)、出身～(2)、植民～(2)、所在～(2)、水源～(2)、生産～(2)、租借～(1)、中心～(2)、本籍～(1) (注)(1)は（B＊）も。(2)は（B＊）。

～地域 （A型） ○○○チイキ
交戦～、指定～、平和～、ポンド～

～知事 （A型） ○○○チジ
官選～、県～、都～、道～、府～、副～、府県～、民選～

～地帯 ○○○チタイ、
○○○チタイ
安全～、危険～、工業～、穀倉～、国境～、中立～、要さい～

～地方 ○○○チホー、
○○○チホー
関西～、関東～、北九州～、九州～、近畿～、四国～、中国～、中部～、東海～、東北～、北陸～、北海道～

～中 （平板） ○○○チュー
勤務～、午前～、在学～、在住～、四六時～、話し～

～注意報 ○○○チューイホー
大雨～、大雪～、強風～、洪水～、津波～

～注射 （A型） ○○○チューシャ
カンフル～、血清～、静脈～、食塩～、皮下～、予防～

～中毒 （A型） ○○○チュードク
アルコール～、ガス～、自家～、食～、鉛～、ニコチン～、農薬～

～庁 （B型） ○○○チョー
海上保安～(1)、宮内～(2)、経済企画～(2)、警視～、検察～(2)、消防～(1)、文化～、防衛～(1)、法王～(1)、林野～
(注)(1)は（B＊）。(2)は（B＊）も。

～鳥 （平板） ○○○チョー
九官～、極楽～、七面～、慈悲心～(1)、保護～(2) (注)(1)は（B＊）（平板）。(2)は（B）も。

～帳 （平板） ○○○チョー
えんま～、勧進～(1)、大福～、電話

〜、捕物〜[2]、日記〜、奉加（ホーガ）〜　(注)[1]は（B＊）(平板)。[2]は（B）も。

〜調　(平板)　○○○チョー
演説〜、漢語〜、漢文〜、口語〜、講談〜、五七〜、七五〜、美文〜、文語〜、翻訳〜、ロココ〜

〜長官　(A型)　○○○チョーカン
官房〜、国務〜、司令〜、地方〜

〜調査　(A型)　○○○チョーサ
家計〜、国勢〜、戸口(ココ)〜、サンプル〜、市場〜、視聴率〜、実態〜、土壌〜、標本〜、面接〜、世論(ヨロ)〜

〜長調　○・チョーチョー、
○チョーチョー
イ〜、ト〜、ニ〜、ハ〜、ヘ〜、ホ〜、ロ〜
(例外) 変○長調、嬰○長調
ヘン(エイ)○チョーチョー

〜貯金　(A型)　○○○チョキン
社内〜、住宅〜、通常〜、積立〜、定額〜、天引き〜、非課税〜、振替〜、郵便〜

〜賃金　(A型)　○○○チンギン
基準〜、基準外〜、最低〜、実質〜、統一〜、平均〜

〜通貨　(A型)　○○○ツーカ
安定〜、基軸〜、希少〜、国際〜、潜在〜、法定〜

〜手当　(A型)　○○○テアテ
応急〜[1]、家族〜、時間外〜、住宅〜、退職〜、月〜、特別〜
(注)[1]は「〜手当て」。

〜手形　(A型)　○○○テガタ
受取〜、銀行〜、信用〜、不渡り〜、貿易〜、約束〜、割引〜

〜的　(平板)　○○○テキ
科学〜、客観（キャッカン）〜、効果〜、社会〜、世界〜、積極〜、総合〜、天才〜、文化〜

〜哲学　○○○テツガク、
○○○テツガク
印度〜、実存〜、社会〜、宗教〜、人生〜、東洋〜、分析〜

〜鉄道　(A型)　○○○テツドー
軽便〜、国有〜、地下〜、臨港〜

〜鉄砲　(A型)　○○○デッポー
紙〜、ひじ〜、豆〜、水〜、無〜[1]
(注)[1]は「テッポー」。

〜天　(B型)　○○○テン
韋駄〜[1]、有頂〜[2]、大黒〜[3]、帝釈〜[3]、摩利支〜　(注)[1]は(平板)。[2]は(平板)と（B＊）。[3]は（B＊）も。

〜伝　(B型)　○○○デン
自叙〜、水滸〜、武勇〜[1]、立志〜、ルカ〜　(注)[1]は（B＊）。

〜殿　(B型)　○○○デン
神楽〜、紫宸〜[1]、大極（ダイゴク）〜、大仏〜、伏魔〜　(注)[1]は「シシン」「シシー」の両様（B＊）。

〜電気　(A型)　○○○デンキ
空中〜、高圧〜、水力〜、静〜、熱〜

〜電子　(A型)　○○○デンシ
陰〜、拘束〜、自由〜、熱〜、陽〜

〜電車　(A型)　○○○デンシャ

快速～、郊外～、始発～、終～、登山～、特急～、花～、路面～

～天井　(A型)　○○○デンジョー
青～、鏡～、組み～、格(ゴ)～、つり～、円(マル)～

～伝染　(A型)　○○○デンセン
空気～、接触～、土壌～、飛まつ～

～電池　(A型)　○○○デンチ
乾～、太陽～、蓄～、２次～

～電報　(A型)　○○○デンポー
暗号～、海外～、外国～、至急～

～電流　(A型)　○○○デンリュー
音声～、感応～、地～、熱～

～電話　(A型)　○○○デンワ
赤～、携帯～、公衆～、国際～、自動～、卓上～、長距離～、直通～、夜間～、予約～、留守番～

～刀　(平板)　○○○トー
指揮～、青竜～、彫刻～、日本～(1)
(注)(1)は「ニホン」「ニッポン」両様。

～湯　(平板)　○○○トー
独じん～、はんにゃ《般若》～、微温～

～灯　(平板)　○○○トー
屋外～、蛍光～、集魚～、進入～、走馬～、白熱～、標識～、誘導～

～糖　(平板)　○○○トー
有平～、かんしょ～(1)、金平～、てんさい～、麦芽～、はっか～、ぶどう～　(注)(1)は「カンシャ」も。

～とうがらし　○○○トーガ゚ラシ
七味～、七色～

～道具　(A型)　○○○ドーク゚
大～、家財～、小～、商売～、所帯～、責め～、茶～(1)、釣り～(2)、飛び～、七つ～、古～(1)、嫁入り～
(注)(1)は(平板)も。(2)は(尾高)も。

～投資　(A型)　○○○ドーシ
海外～、過剰～、国内～、在庫～、設備～、独立～、分散～

～動詞　(A型)　○○○ドーシ
可能～、形容～、助～、複合～、補助～

～投手　(A型)　○○○ドーシュ
勝ち～、最優秀～、左腕～、主戦～

～闘争　(A型)　○○○ドーソー
階級～、拠点～、権力～、順法～、条件～、大衆～、法廷～、理論～

～投票　(A型)　○○○ドーヒョー
一般～、記名～、決選～、国民～、信任～、人気～、不在者～、無～、無記名～

～豆腐　(A型)　○○○ドーフ
揚げ出し～、いり～、おぼろ～、高野～、ごま～、しみ～、田楽～、焼き～(1)、やっこ～、湯～　(注)(1)は(尾高)も。

～動物　(A型)　○○○ドーブツ
下等～、原生～、水生～、せきつい～、草食～、軟体～、肉食～、両生～、冷血～

～同盟　(A型)　○○○ドーメイ
運賃～、期成～、攻守～、総～、不買～

～道路　(A型)　○○○ドーロ
高速～、弾丸～、防衛～、舗装～、

有料～

～時計　（A型）　○○○ドケイ

腕～、置き～、掛け～、原子～、水晶～、デジタル～、電気～、柱～、砂～、目覚まし～、夜光～

～都市　（A型）　○○○ドシ

衛星～、工業～、姉妹～、新産業～、大～、地方～、中核～、中小～、田園～

～年　（B型）　○○○ドシ

明くる～(1)、当たり～(2)、生まれ～(2)、なり～　（注）(1)は「トシ」。（尾高）も。(2)は（平板）も。

～図書館　○○○トショカン

移動～、区立～、公立～、国立～、児童～、市立～、町立～、点字～

～友達　（A型）　○○○トモダチ

遊び～、幼～、茶飲み～、飲み～

～ドラマ　（A型）　○○○ドラマ

テレビ～、ホーム～、メロ～、ラジオ～、連続～

～とんぼ　（A型）　○○○トンボ

赤～、塩辛～、しり切れ～、竹～、とうしみ～(1)、むぎわら～　（注）(1)は「トースミ」も。

～内　（B型）　○○○ナイ

区域～、範囲～、領土～

～内閣　（A型）　○○○ナイカク

後継～、政党～、責任～、連立～

～難　（B型）　○○○ナン

交通～(1)、就職～、住宅～、生活～(2)、入学～

（注）(1)は（B＊）。(2)は（B＊）も。

～日記　（A型）　○○○ニッキ

十六夜(イザヨイ)～、和泉式部～、懐中～、蜻蛉(カゲロー)～、更級(サラシナ)～、常用～、旅～、当用～、土佐～、紫式部～

～女房　（A型）　○○○ニョーボー

姉～、姉さん～、押しかけ～、恋～、世話～

～人形　（A型）　○○○ニンキ゚ョー

繰り～、市松～、唐子～、菊～、京～、五月～、博多～、ひな～、武者～、ろう～、わら～

～値段　（A型）　○○○ネダン

卸～、仕入れ～、指定～、つぶし～

～年金　（A型）　○○○ネンキン

企業～、厚生～、国民～、福祉～、郵便～、養老～、老齢～

～年度　（A型）　○○○ネンド

営業～、会計～、食糧～、米穀～

～農業　（A型）　○○○ノーキ゚ョー

近代～、集約～、有機～、有畜～

～賠償　（A型）　○○○バイショー

技術～、現金～、実物～、損害～

～配達　（A型）　○○○ハイタツ

牛乳～、新聞～、郵便～

～配当　（A型）　○○○ハイトー

株式～、記念～、追加～、特別～、無～、予想～、利益～

～売買　（A型）　○○○バイバイ

相対(アイタイ)～、青田～、委託～、権利～、人身～

～俳優　（A型）　○○○ハイユー

映画～、歌舞伎～、新劇～、性格～、テレビ～

～羽織　（A型）　○○○バオリ

あわせ～、絵羽（ㇵ）～(1)、陣～(2)、茶～、夏～、ひとえ～　(注)(1)は「ハ」も。(2)は（頭高）も。

～はがき　（A型）　○○○ハガ゚キ
絵～、往復～、私製～、年賀～、封かん～、郵便～

～博士　（A型）　○○○ハクシ
医学～、工学～、商学～、農学～、文学～、法学～、薬学～、理学～
(注)「物知り～」「文章～」は「ハカセ」。

～白書　（A型）　○○○ハクショ
運輸～、海上保安～、科学技術～、環境～、観光～、教育～、経済～、警察～、原子力～、建設～、厚生～、交通安全～、国土利用～、国民生活～、消防～、青少年～、世界経済～、地方財政～、中小企業～、通信～、通商～、土地～、犯罪～、防衛～、防災～、林業～、労働～

～幕府　（A型）　○○○バクフ
江戸～、鎌倉～、徳川～、室町～

～発電　（A型）　○○○ハツデン
火力～、原子力～、自家～、水力～、太陽熱～、地熱～、風力～

～羽二重　（A型）　○○○ハブタエ
黒～、白～、綿～、紋～

～針　（A型）　○○○バリ
小町～、サントメ～、しつけ～、千人～

～犯　（B型）　○○○ハン
凶悪～(1)、現行～(2)、殺人～(2)、常習～(2)、政治～、知能～(2)、連続～(1)
(注)(1)は（B＊）も。(2)は（B＊）。

～板　（平板）　○○○バン
案内～、回覧～、掲示～、告知～、速報～

～盤　（平板）　○○○バン
ＳＰ～、ＬＰ～、将棋～、シングル～、ドーナツ～、配線～、文字～

～半球　（A型）　○○○ハンキュー
北～、西～、東～、南～

～番組　（A型）　○○○バングミ
帯～、音楽～、科学～、教育～、教養～、クイズ～、社会～、スポーツ～、ドキュメンタリー～、特別～、農事～、放送～、報道～、幼児～

～番号　（A型）　○○○バンゴー
暗証～、原子～、背～、整理～、電話～、通し～、郵便～

～犯罪　（A型）　○○○ハンザイ
完全～、凶悪～、軽～、少年～、戦争～、風俗～

～半紙　（A型）　○○○バンシ
改良～、生（キ）～、土佐～、わら～

～反射　（A型）　○○○ハンシャ
条件～、部分～、乱～

～判断　（A型）　○○○ハンダン
価値～、状況～、姓名～、夢～

～反応　（A型）　○○○ハンノー
化学～、核融合～、原子核～、生活～、連鎖～

～販売　（A型）　○○○ハンバイ
委託～、クレジット～、月賦～、自由～、巡回～、信用～、通信～、

予約～、割賦～[1] (注)[1]は「ワップ」「カップ」の両様。

～半分 (A型) ○○○ハンブン
遊び～[1]、おもしろ～、四～[1]、話～[1]、やけ～ (注)[1]は～ハンブンも。

～費 (B型) ○○○ヒ
維持～、研究～[1]、光熱～[2]、生活～[2]、製作～[2]、補助～、予備～
(注)[1]は(B＊)。[2]は(B＊)も。

～飛行 ○○○ヒコー、
○○○ヒコー
横断～、低空～、無着陸～、夜間～

～美術 (A型) ○○○ビジュツ
近代～、原始～、現代～、工芸～、商業～、造形～、仏教～

～表 (平板) ○○○ヒョー
一覧～、記録～、献立～、時間～、時刻～、正誤～、定価～、予定～

～標 (平板) ○○○ヒョー
測量～、灯浮～、里程～

～病 (平板) ○○○ビョー
胃腸～、精神～、潜水～、伝染～、糖尿～、日射～、風土～、婦人～、老人～

～標識 (A型) ○○○ヒョーシキ
距離～、航空～、航路～、道路～

～描写 (A型) ○○○ビョーシャ
客観(ｷｬｯｶﾝ)～、自然～、心理～、多元～、同時～、平面～

～びょうぶ《屛風》(A型)
○○○ビョーブ
金～、逆さ～、そで～、まくら～

～日和 (A型) ○○○ビヨリ
秋～、菊～、小春～

～肥料 (A型) ○○○ヒリョー
化学～、酸性～、速効性～、遅効性～、窒素～、天然～、無機～、有機～

～比例 (A型) ○○○ヒレイ
案分～、逆～、正～、反～[1]、複～
(注)[1]は「ピ」。

～婦 (B型) ○○○フ
家政～[1]、看護～、保健～[1] (注)[1]は(B＊)。

～部 (B型) ○○○ブ
沿岸～[1]、高圧～、山間～[1]、女子～、大たい～[2] (注)[1]は(B＊)。

～歩合 (A型) ○○○ブアイ
基準～、公定～、固定～

～フィルム (A型) ○○○フィルム
加燃性～、カラー～、高感度～、白黒～、赤外線～、不燃性～、マイクロ～、ロール～

～風(気象) ○○○フー、
○○○フー
季節～、貿易～

～風(一般) (平板) ○○○フー
異国～、上方～、下町～、西洋～、当世～、都会～、日本～、破傷～

～福祉 ○○○フクシ、○○○フクシ
経済～、児童～、社会～

～符号 (A型) ○○○フゴー
発音～、モールス～、呼び出し～

～節 (平板) ○○○ブシ
河東～[1]、木曾～、削り～、新内～、説経～、なにわ～、安来(ﾔｽｷﾞ)～(注)[1]は(B＊)も。

〜扶助　（A型）　○○○フジョ
教育〜、公的〜、生活〜、相互〜、法律〜

〜普請　（A型）　○○○フシン
貸家〜、仮〜、数寄屋〜、道〜、安〜

〜婦人　（A型）　○○○フジン
貴〜、賢〜[1]、職業〜
（注）[1]は「プ」。

〜札　（B型）　○○○フダ
貸家〜、下足〜、取り〜、番号〜[1]、迷子〜、守り〜、読み〜
（注）[1]は（B＊）。

〜部隊　（A型）　○○○ブタイ
外人〜、機甲〜、機動〜、地上〜、トラック〜

〜舞台　（A型）　○○○ブタイ
二重〜、能〜、初〜、独り〜、ひのき〜、平〜、本〜、回り〜

〜仏教　（A型）　○○○ブッキョー
上座部〜、大乗〜

〜物資　（A型）　○○○ブッシ
隠匿〜、戦略〜、放出〜、見返り〜、やみ〜

〜物質　（A型）　○○○ブッシツ
希少〜、蛍光〜、抗生〜、発がん〜、放射性〜

〜布団　（A型）　○○○ブトン
掛け〜、こたつ〜、敷〜、羽根〜

〜舞踊　（A型）　○○○ブヨー
古典〜、新〜、西洋〜、創作〜、日本〜、民族〜

〜文　○○○ブン、○○○ブン
暗号〜[1]、かな交じり〜[2]、紀行〜[1]、金石〜[2]、決議〜、口語〜、広告〜、商業〜[3]
（注）[1]は（平板）と（B＊）。[2]は（B）のみ。[3]は（B＊）のみ。

〜分　（B型）　○○○ブン
滋養〜[1]、相続〜、取り〜、持ち〜
（注）[1]は（B＊）。

〜分解　（A型）　○○○ブンカイ
因数〜、加水〜、空中〜、電気〜

〜文学　（A型）　○○○ブンガ゜ク
英〜、英米〜、外国〜、現代〜、国〜、古典〜、純〜、少年〜、中国〜、ドイツ〜、日本（ニホン・ニッポン）〜、農民〜、フランス〜

〜文化財　○○○ブンカザイ
重要〜、放送〜、無形〜

〜分析　（A型）　○○○ブンセキ
価格〜、経営〜、精神〜、定量〜

〜文法　（A型）　○○○ブンポー
英〜、学校〜、規範〜、口語〜、国〜、文語〜

〜兵器　（A型）　○○○ヘイキ
宇宙〜、核〜、化学〜、科学〜、新〜、戦略〜、特殊〜、報復〜

〜部屋　（平板）　○○○ベヤ
空き〜、大〜、化粧〜、子ども〜、仕事〜、支度〜、勉強〜

〜変化　（A型）　○○○ヘンカ
化学〜、語尾〜、時代〜、物理〜

〜便所　（A型）　○○○ベンジョ
共同〜、公衆〜、水洗〜、有料〜

〜弁当　（A型）　○○○ベントー
腰〜、手〜、日の丸〜、昼〜

〜簿　（B型）　○○○ボ

学籍～、家計～[1]、戸籍～、出勤～[1]、人名～[1]、出納～[1]、通信～[1]、登記～　(注)[1]は（B＊）。

～貿易　（A型）　○○○ボーエキ
委託～、海外～、外国～、加工～、管理～、協定～、互恵～、三角～、自由～、多角～、仲介～、中継～、通貨～、東西～、特恵～、内国～、南蛮～、保護～、補償～、密～、輸出～、輸入～

～奉公　（A型）　○○○ボーコー
お礼～、年期～、屋敷～、渡り～

～報告　（A型）　○○○ボーコク
経過～、決算～、現地～、中間～

～奉仕　（A型）　○○○ボーシ
勤労～、社会～、無料～

～帽子　（A型）　○○○ボーシ
大黒～、鳥打ち～、中折れ～、麦わら～、山高～、綿～

～褒章　（A型）　○○○ボーショー
黄(オ)綬～、紅綬～、紺綬～、紫綬～、藍綬～、緑綬～

～方針　（A型）　○○○ボーシン
教育～、施政～、指導～、編集～

～坊主　（A型）　○○○ボーズ
海～[1]、お数寄屋～、小～、茶～、三日～　(注)[1]は伝統アクセント（頭高）。

～放送　（A型）　○○○ボーソー
衛星～、FM～、学校～、公共～、国際～、試験～、実況～、ステレオ～、選挙～、全国～、中継～、テレビ～、文字～、有線～、ラジオ～

～包丁　（A型）　○○○ボーチョー
刺し身～、出刃～、菜切り～[1]、肉切り～　(注)[1]は「ナッキリ」も。

～保険　（A型）　○○○ボケン
火災～、簡易～、健康～、社会～、傷害～、生命～、損害～、団体～

～菩薩　（A型）　○○○ボサツ
月光(ガッコー)～、観世音～、勢至(セイシ)～、弥勒(ミロク)～

～保障　（A型）　○○○ホショー
安全～、警備～、社会～

～補償　（A型）　○○○ホショー
刑事～、国家～、災害～、融資～

～ボタン　（A型）　○○○ボタン
五つ～、押し～、隠し～、金～

～骨　（平板）　○○○ボネ
あばら～[1]、貝殻～、土性～、屋台～[2]　(注)[1]は(B)も。[2]は（B＊）も。

～本　（平板）　○○○ボン
活版～、希こう～、教則～、講談～、こっけい～、浄瑠璃～、ぞっき～、単行～、文庫～

～間　（平板）　○○○マ
板の～、応接～、西洋～、茶の～、床の～、日本～

～米　（平板）　○○○マイ
外国～、還元～、救援～、古々～[1]、自主流通～、人造～、年貢～、はい芽～、早場～、保有～
(注)[1]は（B）も。

～麻酔　（A型）　○○○マスイ
局部～、全身～、腰つい～

～祭　（A型）　○○○マツリ
葵(アオイ)～、賀茂～、神田～、祇

園～、三社(サンジャ)～、時代～

～窓　(A型)　○○○マド
明かり～、回転～、飾り～、ガラス～、格子～

～まね　(平板)　○○○マネ
泣き～、口～、猿～、人～、もの～　(注)「手まね」は(頭高)。

～まんじゅう《饅頭》(A型)
○○○マンジュー
押しくら～、くず《葛》～、くり《栗》～、そば《蕎麦》～、土(ド)～、毒～、肉～、よね《米》～

～身ごろ　(A型)　○○○ミゴロ
うしろ～、裏～、片～、前～

～見舞い　(A型)　○○○ミマイ
火事～、近火～、暑中～、陣中～、病気～、水～、雪～

～民族　(A型)　○○○ミンゾク
海洋～、漢～、騎馬～、少数～、先住～、農耕～、大和～、ラテン～

～向き　(平板)　○○○ムキ
あつらえ～、一般～、家事～、勝手～、暮らし～、実用～、勤め～、当世～、万人(バンニン・マンニン)～、左～、前～

～息子　(A型)　○○○ムスコ
跡取り～、孝行～、総領～、道楽～、どら～、一人～

～名詞　(A型)　○○○メイシ
固有～、代～、人称代～、普通～

～命令　(A型)　○○○メイレイ
行政～、執行～、出動～、取り立て～、略式～

～眼鏡　(A型)　○○○メガネ
色～、お～[1]、黒～、遠～、のぞき～、鼻～、虫～　(注)[1]は(平板)も。

～面　(B型)　○○○メン
暗黒～、衛生～[1]、経済～[1]、社会～[1]、水平～[1]、切断～[1]、断層～[1]
(注)[1]は(B＊)。

～網　(B型)　○○○モー
交通～[1]、情報～[1]、組織～、通信～[1]、鉄条～[1]、鉄道～[1]、放送～[1]
(注)[1]は(B＊)。

～物語　○○○モノガタリ
伊勢～、雨月～、宇治拾遺(シュイ)～、宇津保(ボ)～、栄華～、落窪～、源氏～、今昔(コンジャク)～、狭衣～、千一夜～、曽我～、堤中納言～、平家～、平治～、平中(ヘイジュー)～、保元(ホーゲン・ホゲン)～、大和～

～模様　(A型)　○○○モヨー
市松～、織り～、かすり～、唐草～、しま～、すそ～、染め～、花～、水玉～

～もよう　(A型)　○○○モヨー
雨～、荒れ～、空～、雪～

～門　(B型)　○○○モン
大手～、かぶ木～、桜田～、透かし～[1]、朱雀(スザク)～[1]、通用～[2]
(注)[1]は(平板)も。[2]は(B＊)。

～文句　(A型)　○○○モンク
脅し～、決まり～、殺し～、さわり～、はやり～

～問題　(A型)　○○○モンダイ
応用～、国際～、試験～、時事～、社会～、政治～、都市～、労働～

～野球 （A型） ○○○ヤキュー
草～、高校～、硬式～、親善～、大学～、都市対抗～、軟式～、プロ～

～役者 （A型） ○○○ヤクシャ
歌舞伎～、千両～、名題～、花形～

～約束 （A型） ○○○ヤクソク
空(カラ)～、仮～、口～、夫婦～

～役人 （A型） ○○○ヤクニン
上～、小～、村～、ろう～

～屋敷 （A型） ○○○ヤシキ
上～、下～、化け物～、武家～

～屋根 （A型） ○○○ヤネ
板～(1)、板ぶき～、かやぶき～、かわら～、草～(1)、草ぶき～、わらぶき～ （注）(1)は（平板）も。

～融資 （A型） ○○○ユーシ
大口～、還元～、救済～、小口～

～郵便 （A型） ○○○ユービン
書留～、軍事～、航空～、小包～

～郵便局 ○○○ユービンキョク
移動～、簡易～、中央～、特定～

～猶予 （A型） ○○○ユーヨ
起訴～、執行～、支払い～

～輸出 （A型） ○○○ユシュツ
技術～、逆～、直(チョク/ジキ)～、プラント～、密～

～用 （平板） ○○○ヨー
家庭～、業務～、工業～、個人～、護身～、自家～、実験～、装飾～、贈答～、婦人～

～ようかん （A型）
○○○ヨーカン
芋～、くり～、練り～、水～、蒸し～

～用語 （A型） ○○○ヨーゴ
現代～、新聞～、専門～、放送～

～用紙 （A型） ○○○ヨーシ
画～、記録～、原稿～、投票～

～曜日 （A型） ○○○ヨービ
火～、金～、月～、水～、土～、何(ナニ/ナン)～、日～、木～

～預金 （A型） ○○○ヨキン
銀行～、拘束性～、指定～、たんす～、定期～、当座～、普通～

～浴場 （A型） ○○○ヨクジョー
海水～、共同～、公衆～

～予算 （A型） ○○○ヨサン
均衡～、暫定～、追加～、当初～、文教～、補正～、本～、臨時～

～力 （平板） ○○○リキ
金剛～(1)、神通(ジンズー/ジンツー)～(2)、千人～、百人～ （注）(1)は（B＊）も。(2)は（B＊）。

～力学 ○○○リキガク
行動～、政治～、統計～(1)、波動～、流体～(1)、量子～(1) （注）(1)は（A）も。

～率 （B型） ○○○リツ
円周～(1)、回転～(1)、棄権～(1)、視聴～(1)、死亡～(1)、出生(シュッ/ショー)～(1)、進学～、百分～(1)、離婚～(1) （注）(1)は（B＊）。

～律 （B型） ○○○リツ
因果～、音数～(1)、排中～(1)、不文～(1) （注）(1)は（B＊）。

～流 （平板） ○○○リュー
一刀～、小笠原～、勘亭～、自己～、水府～、当世～、二刀～、山

鹿～

～料　（B型）　○○○リョー

貸付～、下足～(1)、授業～(2)、出演～(2)、手数～(2)、電気～、電話～、入場～(2)　(注)(1)は(B＊)と(平板)も。(2)は（B＊)。

～領　（B型）　○○○リョー

イギリス～、自治～、フランス～

～寮　（B型）　○○○リョー

家族～、社員～(1)、主馬(シュメ)～、所帯～(1)、世帯～(1)、独身～(1)、母子～　(注)(1)は（B＊)。

～料金　（A型）　○○○リョーキン

休日～、深夜～、水道～、電気～、冬期～、夜間～、割引～

～療法　（A型）　○○○リョーホー

化学～、食事～、大気～、対症～、電気～、物理～、放射線～

～料理　（A型）　○○○リョーリ

イタリア～、おせち～、会席～、懐石～、関西～、広東～、郷土～、精進～、西洋～、即席～、中国～、なべ～、フランス～、北京～

～力　（B型）　○○○リョク

記憶～、原子～、瞬発～、生活～、精神～(1)、説得～、創造～(1)、粘着～、復原～(1)、労働～(1)　(注)(1)は(B＊)。(2)は（B＊）も。

～旅行　（A型）　○○○リョコー

宇宙～、海外～、修学～、新婚～、大名～、団体～、みつ月～、無銭～

～列車　（A型）　○○○レッシャ

貨物～、観光～、急行～、終～、専用～、長距離～、特別～

～連合　（A型）　○○○レンゴー

アラブ～、国際～、放送～

～レンズ　（A型）　○○○レンズ

色消し～、凹～、魚眼～、コンタクト～、接眼～、対物～、凸～、望遠～

～労働　（A型）　○○○ロードー

家内～、筋肉～、時間外～、重～、頭脳～、賃金～

～労働者　○○○ロードーシャ

季節～、筋肉～、頭脳～、組織～、出稼ぎ～

～録　（B型）　○○○ロク

回想～(1)、議事～、講義～、住所～、職員～(1)、紳士～、黙示（モクジ）～　(注)(1)は（B＊)

～ロケット　○○○ロケット、○○○ロケット

宇宙～、月～、無人～、有人～

～和歌集　○○○ワカシュー

古今(コキン)～、後拾遺～、後撰～、詞花～、拾遺(シュウイ)～

～話法　（A型）　○○○ワホー

間接～、直接～

4　数詞＋助数詞の発音とアクセント一覧表

○一覧表（次ページから）の見方

＊現代の日常会話でふつうに使われている発音を尊重し、代表的なものを掲載した。２通り以上の発音がある場合には、（　）で示した。

〈例〉２試合　ニジアイ　（フタジアイ）

（注）ふつう「ニジアイ」の発音を基準とするが、（フタジアイ）の発音もあることを示す。

＊複数のアクセントがある場合には、代表的なアクセントを掲載した。ただし、代表的なアクセントが２つある場合は並記した。

○基準となる数詞の発音

イチ	ニ	サン	ヨン （シ）	ゴ	ロク	ナナ （シチ）	ハチ	キュー （ク）	ジュー

○数詞に名詞（助数詞や単位）が付く場合の発音

（１）漢語名詞が付く場合

〈例〉２回　５周年　７階

イチ （ヒト）	ニ （フタ）	サン	ヨン （ヨ、シ）	ゴ	ロク	ナナ （シチ）	ハチ	キュー （ク）	ジュー

（　）内の発音は、古くからの慣用の強いものである。個々のことばの使い方は、次ページ以降の表を参照のこと。

（２）外来語名詞が付く場合

〈例〉５グラム　８ポイント　２シーズン

イチ （ヒト）	ニ （フタ）	サン	ヨン	ゴ	ロク	ナナ	ハチ	キュー	ジュー

（　）内の発音は、古くからの慣用の強いものである。個々のことばの使い方は、次ページ以降の表を参照のこと。

（３）和語名詞が付く場合

〈例〉２切れ　３皿

ヒト	フタ	ミ	ヨ	イツ	ム	ナナ	ヤ	ココノ	ト

和語が付く場合も、古くからの慣用が固定しているものや、古風な表現に用いられるものを除いて、「基準となる数詞の発音」に従うものが多い（その傾向は数字が大きくなるに従って強くなる）。個々のことばの使い方は、次ページ以降の表を参照のこと。

語　例	1	2	3	4	5
【 あ 行 】					
アール	イチアール	ニアール	サンアール	ヨンアール	ゴアール
アンペア	イチアンペア，イチアンペア	ニアンペア，ニアンペア	サンアンペア，サンアンペア	ヨンアンペア，ヨンアンペア	ゴアンペア，ゴアンペア
位（一般）	イチイ	ニイ	サンイ（サンミ）	ヨンイ	ゴイ
位（旧官位）	イチイ	ニイ	サンイ（サンミ）	シイ	ゴイ
色	㋪トイロ	㋫タイロ	ミイロ	ヨイロ（ヨンイロ）	イツイロ（ゴイロ）
インチ	イチインチ	ニインチ	サンインチ	ヨンインチ	ゴインチ
円	イチエン	ニエン（㋫タエン）	サンエン	ヨエン（ヨンエン）	ゴエン
オーム	イチオーム	ニオーム	サンオーム	ヨンオーム	ゴオーム
億	イチオク	ニオク	サンオク	ヨンオク	ゴオク
オクターブ	イチオ㋗ターブ	ニオ㋗ターブ	サンオ㋗ターブ	ヨンオ㋗ターブ	ゴオ㋗ターブ
オンス	イチオンス	ニオンス	サンオンス	ヨンオンス	ゴオンス
【 か 行 】					
日［カ］	ツイタチ	㋫ツカ	ミッカ	ヨッカ	イツカ
課	イッカ	ニカ	サンカ	ヨンカ	ゴカ
階	イッカイ	ニカイ	サンカ゚イ	ヨンカイ	ゴカイ
回	イッカイ	ニカイ	サンカイ	ヨンカイ	ゴカイ
回忌	イッカイキ	—	サンカイキ	—	—
階級	イ㋖カイキュー（イッカイキュー）	ニカイキュー	サンカイキュー	ヨンカイキュー	ゴカイキュー
海里	イ㋖カイリ	ニカイリ	サンカイリ	ヨンカイリ	ゴカイリ
か月	イッカゲツ	ニカゲツ	サンカゲツ	ヨンカゲツ	ゴカゲツ
か国	イッカコク	ニカコク	サンカコク	ヨンカコク	ゴカコク

6	7	8	9	10	備考
ロクアール	ナナアール	ハチアール	キューアール	ジューアール	
ロクアンペア，ロクアンペア	ナナアンペア，ナナアンペア	ハチアンペア，ハチアンペア	キューアンペア，キューアンペア	ジューアンペア，ジューアンペア	
ロクイ	ナナイ	ハチイ	キューイ	ジューイ	「三位一体」などは[サンミ]。
ロクイ	㋛チイ	ハチイ	クイ	ジューイ	「正三位」などは[サンミ]。
ムイロ（ロクイロ）	ナナイロ	ハチイロ	キューイロ	トイロ(ジューイロ)	
ロクインチ	ナナインチ	ハチインチ	キューインチ	ジューインチ	
ロクエン	ナナエン	ハチエン	キューエン	ジューエン《トーエン》	経済市況などでは[フタ、トー]。
ロクオーム	ナナオーム	ハチオーム	キューオーム	ジューオーム	
ロクオク	ナナオク	ハチオク	キューオク	ジューオク	
ロクオ㋗ターブ	ナナオ㋗ターブ	ハチオ㋗ターブ	キューオ㋗ターブ	ジューオ㋗ターブ	
ロクオンス	ナナオンス	ハチオンス	キューオンス	ジューオンス	
ムイカ	ナノカ《ナヌカ》	ヨーカ	ココノカ	トーカ	「初7日」などは「ナヌカ」も。
ロッカ	ナナカ	ハ㋠カ	キューカ	ジ（ュ）ッカ	
ロッカイ	ナナカイ	ハ㋠カイ(ハッカイ)	キューカイ	ジ（ュ）ッカイ	
ロッカ゚イ	ナナカイ	ハ㋠カ゚イ(ハッカ゚イ)	キューカイ	ジ（ュ）ッカ゚イ	
—	㋛チカ゚イキ（ナナカ゚イキ）	—	—	—	
ロッカ゚イキュー（ロ㋗カ゚イキュー）	ナナカ゚イキュー	ハ㋠カ゚イキュー	キューカ゚イキュー	ジ（ュ）ッカ゚イキュー	
ロッカ゚イリ	ナナカ゚イリ	ハ㋠カ゚イリ	キューカ゚イリ	ジ（ュ）ッカ゚イリ	
ロッカ゚ケ゚ツ	ナナカ゚ケ゚ツ	ハ㋠カ゚ケ゚ツ（ハッカ゚ケ゚ツ）	キューカ゚ケ゚ツ	ジ（ュ）ッカ゚ケ゚ツ	
ロッカ゚コク	ナナカ゚コク	ハ㋠カ゚コク（ハッカ゚コク）	キューカ゚コク	ジ（ュ）ッカ゚コク	

（　）は許容の発音・アクセント、《　》は備考欄を参照

語例	1	2	3	4	5
重ね	㋪トカサネ	㋫タカサネ	ミカサネ	ヨカサネ	ゴカサネ
か所	イッカショ	ニカショ	サンカショ	ヨンカショ	ゴカショ
か条	イッカジョー	ニカジョー	サンカジョー	ヨンカジョー	ゴカジョー
家族	イ㋠カゾク（イッカゾク，㋪トカゾク）	ニカゾク（㋫タカゾク）	サンカゾク	ヨンカゾク	ゴカゾク
型［ガタ］	イチカ゚タ	ニカ゚タ	サンカ゚タ	ヨンカ゚タ	ゴカ゚タ
月［ガツ］	イチカ゚ツ	ニカ゚ツ	サンカ゚ツ	シカ゚ツ	ゴカ゚ツ
学期	イチカ゚ッキ	ニカ゚ッキ	サンカ゚ッキ	ヨンカ゚ッキ	ゴカ゚ッキ
学級	イチカ゚ッキュー	ニカ゚ッキュー	サンカ゚ッキュー	ヨンカ゚ッキュー	ゴカ゚ッキュー
か年	イッカネン	ニカネン	サンカネン	ヨンカネン	ゴカネン
株	㋪トカブ	㋫タカブ	サンカブ（ミカブ）	ヨンカブ（ヨカブ）	ゴカブ（イツカブ）
日目［カメ］	イチニチメ	㋫ツカメ	ミッカメ	ヨッカメ	イツカメ
カラット	イ㋠カラット，イ㋠カラット	ニカラット，ニカラット	サンカラット，サンカラット	ヨンカラット，ヨンカラット	ゴカラット，ゴカラット
カロリー	イ㋠カロリー	ニカロリー	サンカロリー	ヨンカロリー	ゴカロリー
缶	㋪トカン	㋫タカン	サンカン	ヨンカン	ゴカン
巻［カン］	イッカン	ニカン	サンカン	ヨンカン	ゴカン
貫	イッカン	ニカン	サンカ゚ン	ヨンカン	ゴカン
貫目	イッカンメ	ニカンメ	サンカ゚ンメ	ヨンカンメ	ゴカンメ
機	イッキ	ニキ	サンキ	ヨンキ	ゴキ
期	イッキ	ニキ	サンキ	ヨンキ	ゴキ
碁	イッキ	ニキ	サンキ	ヨンキ	ゴキ
騎	イッキ	ニキ	サンキ	ヨンキ	ゴキ
気圧	イ㋠キアツ	ニキアツ	サンキアツ	ヨンキアツ	ゴキアツ

6	7	8	9	10	備考
ロ㋗カサネ	ナナカサネ	ハチカサネ	キューカサネ	ジューカサネ	
ロッカショ	ナナカショ	ハ㋠カショ（ハッカショ）	キューカショ	ジ（ュ）ッカショ	
ロッカジョー	ナナカジョー	ハ㋠カジョー（ハッカジョー）	キューカジョー	ジ（ュ）ッカジョー	
ロッカゾク（ロ㋗カゾク）	ナナカゾク	ハ㋠カゾク	キューカゾク	ジ（ュ）ッカゾク	
ロクカタ	ナナカタ	ハチカタ	キューカタ	ジューカタ	
ロクカツ	㋛チカツ	ハチカツ	クカツ	ジューカツ	ジューイチカツ，ジューニカツ
ロクカッキ	ナナカッキ	ハチカッキ	キューカッキ	ジューカッキ	
ロクカッキュー	ナナカッキュー	ハチカッキュー	キューカッキュー	ジューカッキュー	
ロッカネン	ナナカネン	ハ㋠カネン（ハッカネン）	キューカネン	ジ（ュ）ッカネン	
ロッカブ	ナナカブ	ハ㋠カブ	キューカブ	ジ（ュ）ッカブ	
ムイカメ	ナノカメ	ヨーカメ	ココノカメ	トーカメ	
ロ㋗カラット，ロ㋗カラット	ナナカラット，ナナカラット	ハ㋠カラット，ハ㋠カラット	キューカラット，キューカラット	ジ（ュ）ッカラット，ジ（ュ）ッカラット	
ロ㋗カロリー（ロッカロリー）	ナナカロリー	ハ㋠カロリー	キューカロリー	ジ（ュ）ッカロリー	
ロッカン	ナナカン	ハ㋠カン	キューカン	ジ（ュ）ッカン	
ロッカン	ナナカン	ハ㋠カン（ハッカン）	キューカン	ジ（ュ）ッカン	
ロッカン	ナナカン	ハ㋠カン（ハッカン）	キューカン	ジ（ュ）ッカン	
ロッカンメ	ナナカンメ	ハ㋠カンメ（ハッカンメ）	キューカンメ	ジ（ュ）ッカンメ	
ロッキ	ナナキ	ハ㋠キ（ハッキ）	キューキ	ジ（ュ）ッキ	
ロッキ	ナナキ	ハ㋠キ（ハッキ）	キューキ	ジ（ュ）ッキ	
ロッキ	ナナキ	ハ㋠キ（ハッキ）	キューキ	ジ（ュ）ッキ	
ロッキ	ナナキ（㋛チキ）	ハ㋠キ（ハッキ）	キューキ	ジ（ュ）ッキ	古典では［シチ］も。
ロッキアツ	ナナキアツ	ハ㋠キアツ	キューキアツ	ジ（ュ）ッキアツ	

語例	1	2	3	4	5
機種	イ㋠キシュ	ニ㋖シュ	サン㋖シュ	ヨン㋖シュ	ゴ㋖シュ
脚	イッキャク	ニキャク	サンキャク	ヨンキャク	ゴキャク
客	イッキャク	ニキャク	サンキャク	ヨンキャク	ゴキャク
級	イッキュー	ニキュー	サンキュー	ヨンキュー	ゴキュー
球	イッキュー	ニキュー	サンキュー	ヨンキュー	ゴキュー
球目	イッキューメ	ニキューメ	サンキューメ	ヨンキューメ	ゴキューメ
行	イ㋠キ゜ョー	ニキ゜ョー	サンキ゜ョー	ヨンキ゜ョー	ゴキ゜ョー
曲	イッキョク	ニキョク	サンキョク	ヨンキョク	ゴキョク
局	イッキョク	ニキョク	サンキョク	ヨンキョク	ゴキョク
切れ	㋪トキレ	㋫タキレ	ミキレ	ヨンキレ（ヨキレ）	ゴキレ（イ㋡キレ）
キロ	イ㋠キロ	ニキロ	サンキロ	ヨンキロ	ゴキロ
キログラム	イ㋠キログラム	ニキログラム	サンキログラム	ヨンキログラム	ゴキログラム
キロメートル	イ㋠キロメートル	ニキロメートル	サンキロメートル	ヨンキロメートル	ゴキロメートル
キロリットル	イ㋠キロリットル	ニキロリットル	サンキロリットル	ヨンキロリットル	ゴキロリットル
キロワット	イ㋠キロワット	ニキロワット	サンキロワット	ヨンキロワット	ゴキロワット
斤	イッキン	ニキン	サンキ゜ン（サンキン）	ヨンキン	ゴキン
句	イック	ニク	サンク	ヨンク	ゴク
区	イック	ニク	サンク	ヨンク	ゴク
区間	イ㋠クカン（イッ㋗カン，㋪ト㋗カン）	ニ㋗カン（㋫タ㋗カン）	サン㋗カン	ヨン㋗カン	ゴ㋗カン
ロ［クチ］	㋪ト㋗チ	㋫タ㋗チ	ミ㋗チ	ヨ㋗チ	ゴ㋗チ
組（第〇学年〇組）	イ㋠クミ	ニクミ	サンクミ	ヨンクミ	ゴクミ
組（一般）	㋪トクミ	㋫タクミ	ミクミ（サンクミ）	ヨンクミ（ヨクミ）	ゴクミ（イ㋡クミ）

6	7	8	9	10	備考
ロッキシュ	ナナキシュ	ハチキシュ	キューキシュ	ジ（ュ）ッキシュ	
ロッキャク	ナナキャク	ハチキャク（ハッキャク）	キューキャク	ジ（ュ）ッキャク	
ロッキャク	ナナキャク	ハチキャク	キューキャク	ジ（ュ）ッキャク	
ロッキュー	ナナキュー	ハチキュー（ハッキュー）	キューキュー	ジ（ュ）ッキュー	
ロッキュー	ナナキュー	ハチキュー	キューキュー	ジ（ュ）ッキュー	
ロッキューメ	ナナキューメ	ハチキューメ	キューキューメ	ジ（ュ）ッキューメ	
ロクキ゚ョー	ナナキ゚ョー（シチキ゚ョー）	ハチキ゚ョー	キューキ゚ョー	ジューキ゚ョー	
ロッキョク	ナナキョク	ハチキョク（ハッキョク）	キューキョク	ジ（ュ）ッキョク	
ロッキョク	ナナキョク	ハチキョク	キューキョク	ジ（ュ）ッキョク	
ロッキレ（ムキレ）	ナナキレ	ハチキレ（ヤキレ）	キューキレ	ジ（ュ）ッキレ（トキレ）	
ロッキロ	ナナキロ	ハチキロ	キューキロ	ジ（ュ）ッキロ	
ロッキログラム	ナナキログラム	ハチキログラム	キューキログラム	ジ（ュ）ッキログラム	
ロッキロメートル	ナナキロメートル	ハチキロメートル	キューキロメートル	ジ（ュ）ッキロメートル	
ロッキロリットル	ナナキロリットル	ハチキロリットル	キューキロリットル	ジ（ュ）ッキロリットル	
ロッキロワット	ナナキロワット	ハチキロワット	キューキロワット	ジ（ュ）ッキロワット	
ロッキン	ナナキン	ハチキン	キューキン	ジ（ュ）ッキン	
ロック	ナナク	ハック（ハチク）	キューク	ジ（ュ）ック	
ロック	ナナク	ハチク	キューク	ジ（ュ）ック	
ロックカン	ナナクカン	ハチクカン（ハックカン）	キュークカン	ジ（ュ）ックカン	
ロックチ	ナナクチ	ハックチ	キュークチ	ジ（ュ）ックチ	
ロックミ	ナナクミ	ハチクミ	キュークミ	ジ（ュ）ックミ	
ロックミ	ナナクミ	ハチクミ	キュークミ	ジ（ュ）ックミ（トクミ）	

語例	1	2	3	4	5
クラス	㋪トクラス（㋪トクラス）	㋫タクラス（㋫タクラス）	サンクラス	ヨンクラス	ゴクラス
グラム	イチグラム	ニグラム	サングラム	ヨングラム	ゴグラム
グループ	イチグループ（ヒトグループ）	ニグループ（フタグループ）	サングループ	ヨングループ	ゴグループ
系統	イ㋠ケイトー（イッケイトー）	ニケイトー	サンケイトー	ヨンケイトー	ゴケイトー
けた	㋪トケタ	㋫タケタ	ミケタ（サンケタ）	ヨケタ（ヨンケタ）	ゴケタ（イ㋡ケタ）
件	イッケン	ニケン	サンケン	ヨンケン	ゴケン
軒	イッケン	ニケン	サンゲン	ヨンケン	ゴケン
戸	イッコ	ニコ	サンコ	ヨンコ	ゴコ
個	イッコ	ニコ	サンコ	ヨンコ	ゴコ
校（校正）	ショコー（イッコー）	サイコー（ニコー）	サンコー	ヨンコー	ゴコー
校（学校）	イッコー	ニコー	サンコー	ヨンコー	ゴコー
合	イチゴー	ニゴー	サンゴー	ヨンゴー（シゴー）	ゴゴー（ゴンゴー）
号	イチゴー	ニゴー	サンゴー	ヨンゴー	ゴゴー
工程	イ㋠コーテイ（イッコーテイ）	ニコーテイ	サンコーテイ	ヨンコーテイ	ゴコーテイ
光年	イ㋠コーネン	ニコーネン	サンコーネン	ヨンコーネン	ゴコーネン
項目	イ㋠コーモク（イッコーモク）	ニコーモク	サンコーモク	ヨンコーモク	ゴコーモク
石	イッコク	ニコク	サンコク	ヨンコク	ゴコク
【さ行】					
歳	イッサイ	ニサイ	サンサイ	ヨンサイ	ゴサイ
サイクル	イ㋠サイクル	ニサイクル	サンサイクル	ヨンサイクル	ゴサイクル
冊	イッサツ	ニサツ	サンサツ	ヨンサツ	ゴサツ
皿	㋪トサラ	㋫タサラ	ミサラ	ヨサラ（ヨンサラ）	イ㋡サラ（ゴサラ）

6	7	8	9	10	備考
ロックラス	ナナクラス	ハチクラス（ハックラス）	キュークラス	ジ（ュ）ックラス	
ロククラム	ナナクラム	ハチクラム	キュークラム	ジュークラム	
ロクグループ	ナナグループ	ハチグループ	キューグループ	ジューグループ	
ロッケイトー（ロクケイトー）	ナナケイトー	ハチケイトー	キューケイトー	ジ（ュ）ッケイトー	
ロッケタ	ナナケタ	ハチケタ（ハッケタ）	キューケタ	ジ（ュ）ッケタ	
ロッケン	ナナケン	ハチケン	キューケン	ジ（ュ）ッケン	
ロッケン	ナナケン	ハチケン	キューケン	ジ（ュ）ッケン	
ロッコ	ナナコ	ハチコ	キューコ	ジ（ュ）ッコ	
ロッコ	ナナコ	ハチコ（ハッコ）	キューコ	ジ（ュ）ッコ	
ロッコー	ナナコー	ハチコー	キューコー	ジ（ュ）ッコー	
ロッコー	ナナコー	ハチコー	キューコー	ジ（ュ）ッコー	
ロクコ゚ー	ナナコ゚ー	ハチコ゚ー	キューコ゚ー	ジューコ゚ー	古くは［シコ゚ー、ゴンコ゚ー］も。
ロクコ゚ー	ナナコ゚ー（シチコ゚ー）	ハチコ゚ー	キューコ゚ー	ジューコ゚ー	
ロッコーテイ（ロクコーテイ）	ナナコーテイ	ハチコーテイ	キューコーテイ	ジ（ュ）ッコーテイ	
ロッコーネン（ロクコーネン）	ナナコーネン	ハチコーネン	キューコーネン	ジ（ュ）ッコーネン	
ロッコーモク（ロクコーモク）	ナナコーモク	ハチコーモク	キューコーモク	ジ（ュ）ッコーモク	
ロッコク	ナナコク	ハチコク	キューコク	ジ（ュ）ッコク	
ロクサイ	ナナサイ	ハッサイ	キューサイ	ジ（ュ）ッサイ	
ロクサイクル	ナナサイクル	ハチサイクル	キューサイクル	ジ（ュ）ッサイクル	
ロクサツ	ナナサツ	ハッサツ	キューサツ	ジ（ュ）ッサツ	
ロクサラ	ナナサラ	ハチサラ	キューサラ	トサラ（ジ（ュ）ッサラ）	

語例	1	2	3	4	5
市	イッシ	ニシ	サンシ	ヨンシ	ゴシ
児	イチジ	ニジ	サンジ	ヨジ（ヨンジ）	ゴジ
次	イチジ	ニジ	サンジ	ヨジ（ヨンジ）	ゴジ
時	イチジ	ニジ	サンジ	ヨジ	ゴジ
字	イチジ	ニジ	サンジ	ヨジ（ヨンジ）	ゴジ
試合	イッシアイ（㋪トシアイ）	ニシアイ（㋫タシアイ）	サンシアイ	ヨンシアイ	ゴシアイ
CC	イ㋠シーシー	ニシーシー	サンシーシー	ヨンシーシー	ゴシーシー
シーズン	イ㋠シーズン（イッシーズン，㋪トシーズン）	ニシーズン（㋫タシーズン）	サンシーズン	ヨンシーズン	ゴシーズン
シート	イ㋠シート	ニシート	サンシート	ヨンシート	ゴシート
時間	イチジカン	ニジカン	サンジカン	ヨジカン	ゴジカン
時限	イチジゲン	ニジゲン	サンジゲン	ヨジゲン	ゴジゲン
次元	イチジゲン	ニジゲン	サンジゲン	ヨジゲン	ゴジゲン
室	イッ㋛ツ	ニ㋛ツ	サン㋛ツ	ヨン㋛ツ	ゴ㋛ツ
社	イッシャ	ニシャ	サンシャ	ヨンシャ	ゴシャ
尺	イッシャク	ニシャク	サンジャク	ヨンシャク	ゴシャク
車線	イッシャセン	ニシャセン	サンシャセン	ヨンシャセン	ゴシャセン
種	イッシュ	ニシュ	サンシュ	ヨンシュ	ゴシュ
首	イッシュ	ニシュ	サンシュ	ヨンシュ	ゴシュ
周	イッシュー	ニシュー	サンシュー	ヨンシュー	ゴシュー
週	イッシュー	ニシュー	サンシュー	ヨンシュー	ゴシュー
重	イチジュー	ニジュー	サンジュー	ヨンジュー	ゴジュー
周年	イッシューネン	ニシューネン	サンシューネン	ヨンシューネン	ゴシューネン

6	7	8	9	10	備考
ロクシ	ナナシ	ハッシ（ハチシ）	キューシ	ジ（ュ）ッシ	
ロクジ	ナナジ	ハチジ	キュージ	ジュージ	
ロクジ	ナナジ	ハチジ	キュージ	ジュージ	
ロクジ	シチジ	ハチジ	クジ	ジュージ	
ロクジ	ナナジ（シチジ）	ハチジ	キュージ	ジュージ	
ロクジアイ	ナナジアイ	ハッジアイ（ハチジアイ）	キュージアイ	ジ（ュ）ッジアイ	
ロクシージー	ナナシージー	ハチシージー	キューシージー	ジ（ュ）ッシージー	
ロクシーズン	ナナシーズン	ハチシーズン（ハッシーズン）	キューシーズン	ジ（ュ）ッシーズン	
ロクシート	ナナシート	ハチシート	キューシート	ジ（ュ）ッシート	
ロクジカン	シチジカン（ナナジカン）	ハチジカン	クジカン（キュージカン）	ジュージカン	
ロクジケ゚ン	シチジケ゚ン	ハチジケ゚ン	クジケ゚ン（キュージケ゚ン）	ジュージケ゚ン	
ロクジケ゚ン	シチジケ゚ン（ナナジケ゚ン）	ハチジケ゚ン	クジケ゚ン（キュージケ゚ン）	ジュージケ゚ン	
ロクツ	ナナツ	ハッツ	キューツ	ジ（ュ）ッツ	
ロクシャ	ナナシャ	ハッシャ	キューシャ	ジ（ュ）ッシャ	「三社祭」は［サンジャ～］。
ロクシャク	ナナシャク	ハッシャク	キューシャク（クシャク）	ジ（ュ）ッシャク	
ロクシャセン	ナナシャセン	ハッシャセン（ハチシャセン）	キューシャセン	ジ（ュ）ッシャセン	
ロクシュ	ナナシュ	ハッシュ（ハチシュ）	キューシュ	ジ（ュ）ッシュ	
ロクシュ	ナナシュ	ハッシュ	キューシュ	ジ（ュ）ッシュ	
ロクシュー	ナナシュー	ハッシュー	キューシュー	ジ（ュ）ッシュー	
ロクシュー	ナナシュー	ハッシュー	キューシュー	ジ（ュ）ッシュー	
ロクジュー	ナナジュー	ハチジュー	クジュー（キュージュー）	ジュージュー	
ロクシューネン	ナナシューネン（シチシューネン）	ハッシューネン（ハチシューネン）	キューシューネン	ジ（ュ）ッシューネン	

語例	1	2	3	4	5
種目	イッシュモク	ニシュモク	サンシュモク	ヨンシュモク	ゴシュモク
種類	イッシュルイ（ⓔ下シュルイ）	ニシュルイ（ⓞタシュルイ）	サンシュルイ	ヨンシュルイ	ゴシュルイ
巡	イチジュン	ニジュン	サンジュン	ヨンジュン	ゴジュン
女（姉妹）	チョージョ	ジジョ	サンジョ	ヨンジョ	ゴジョ
女（人数）	イチジョ	ニジョ	サンジョ	ヨンジョ	ゴジョ
勝	イッショー	ニショー	サンショー	ヨンショー	ゴショー
章	イッショー	ニショー	サンショー	ヨンショー	ゴショー
升	イッショー	ニショー	サンジョー	ヨンショー	ゴショー
床	イッショー	ニショー	サンショー	ヨンショー	ゴショー
錠	イチジョー	ニジョー	サンジョー	ヨンジョー（ヨジョー）	ゴジョー
条	イチジョー	ニジョー	サンジョー	ヨンジョー（ジジョー）	ゴジョー
乗	イチジョー	ニジョー	サンジョー	ヨンジョー	ゴジョー
畳	イチジョー，イチジョー	ニジョー，ニジョー	サンジョー，サンジョー	ヨジョー（ヨンジョー）	ゴジョー
色	イッショク	ニショク	サンショク	ヨンショク	ゴショク
審	イッシン	ニシン	サンシン	ヨンシン	ゴシン
寸	イッスン	ニスン	サンズン	ヨンスン	ゴスン
世紀	イッセイキ	ニセイキ	サンセイキ	ヨンセイキ	ゴセイキ
隻	イッセキ	ニセキ	サンセキ	ヨンセキ	ゴセキ
世帯	イッセタイ	ニセタイ	サンセタイ	ヨンセタイ	ゴセタイ
節	イッセツ	ニセツ	サンセツ	ヨンセツ	ゴセツ
戦	イッセン	ニセン	サンセン	ヨンセン	ゴセン
選	イッセン	ニセン	サンセン	ヨンセン	ゴセン

6	7	8	9	10	備考
ロクシュモク	ナナシュモク	ハッシュモク（ハチシュモク）	キューシュモク	ジ（ュ）ッシュモク	
ロクシュルイ	ナナシュルイ	ハッシュルイ（ハチシュルイ）	キューシュルイ	ジ（ュ）ッシュルイ	
ロクジュン	ナナジュン	ハチジュン	キュージュン	ジュージュン	
ロクジョ	シチジョ	ハチジョ	キュージョ	ジュージョ	
ロクジョ	シチジョ（ナナジョ）	ハチジョ	キュージョ	ジュージョ	
ロクショー	ナナショー	ハッショー	キューショー	ジ（ュ）ッショー	
ロクショー	ナナショー	ハッショー	キューショー	ジ（ュ）ッショー	
ロクショー（ロクショー）	ナナショー	ハッショー	キューショー	ジ（ュ）ッショー	
ロクショー	ナナショー	ハッショー	キューショー	ジ（ュ）ッショー	
ロクジョー	ナナジョー	ハチジョー	キュージョー	ジュージョー	
ロクジョー	ナナジョー《シチジョー》	ハチジョー	キュージョー《クジョー》	ジュージョー	固有名詞には［シ、シチ、ク］あり。
ロクジョー	ナナジョー	ハチジョー	キュージョー	ジュージョー	
ロクジョー	ナナジョー	ハチジョー	キュージョー（クジョー）	ジュージョー，ジュージョー	「四畳半」は［ヨ］のみ。
ロクショク	ナナショク	ハッショク	キューショク	ジ（ュ）ッショク	
ロクシン	ナナシン	ハッシン	キューシン	ジ（ュ）ッシン	
ロクスン	ナナスン	ハッスン	キュースン《クスン》	ジ（ュ）ッスン	「九寸五分（刀）」は［ク］。
ロクセイキ	ナナセイキ	ハッセイキ	キューセイキ	ジ（ュ）ッセイキ	
ロクセキ	ナナセキ	ハッセキ	キューセキ	ジ（ュ）ッセキ	
ロクセタイ	ナナセタイ	ハッセタイ（ハチセタイ）	キューセタイ	ジ（ュ）ッセタイ	
ロクセツ	ナナセツ	ハッセツ	キューセツ	ジ（ュ）ッセツ	
ロクセン	ナナセン	ハッセン	キューセン	ジ（ュ）ッセン	
ロクセン	ナナセン	ハッセン	キューセン	ジ（ュ）ッセン	

語例	1	2	3	4	5
銭	イッセン	ニセン	サンセン	ヨンセン	ゴセン，ゴセン
ぜん（膳）	イチゼン	ニゼン	サンゼン	ヨンゼン	ゴゼン
センチ	イッセンチ	ニセンチ	サンセンチ	ヨンセンチ	ゴセンチ
センチメートル	イッセンチメートル	ニセンチメートル	サンセンチメートル	ヨンセンチメートル	ゴセンチメートル
セント	イッセント	ニセント	サンセント	ヨンセント	ゴセント
層	イッソー	ニソー	サンソー	ヨンソー	ゴソー
そう（艘）	イッソー	ニソー	サンソー	ヨンソー	ゴソー（ゴソー）
足	イッソク	ニソク	サンゾク	ヨンソク	ゴソク
そろい（揃）	㋪トソロイ	㋫タソロイ	ミソロイ	ヨソロイ	イ㋡ソロイ
【た行】					
ダース	イチダース	ニダース	サンダース	ヨンダース	ゴダース
体	イッタイ	ニタイ	サンタイ	ヨンタイ	ゴタイ
台	イチダイ	ニダイ	サンダイ	ヨンダイ（ヨダイ）	ゴダイ
代	イチダイ	ニダイ	サンダイ	ヨンダイ	ゴダイ
題	イチダイ	ニダイ	サンダイ	ヨンダイ	ゴダイ
第○日	ダイ・イチニチ	ダイ・ニニチ	ダイ・サンニチ	ダイ・ヨンニチ	ダイ・ゴニチ
第○幕	ジョマク，ダイ・イチマク	ダイ・ニマク	ダイ・サンマク	ダイ・ヨンマク	ダイ・ゴマク
第○番	ダイ・イチバン	ダイ・ニバン	ダイ・サンバン	ダイ・ヨンバン（ダイ・ヨバン）	ダイ・ゴバン
代目	イチダイメ	ニダイメ	サンダイメ	ヨンダイメ（ヨダイメ）	ゴダイメ
打席	イチダセキ	ニダセキ	サンダセキ	ヨンダセキ	ゴダセキ
束	㋪トタバ	㋫タタバ	ミタバ	ヨタバ（ヨンタバ）	イ㋡タバ（ゴタバ）
たび（度）	㋪トタビ	㋫タタビ	ミタビ	ヨタビ	イ㋡タビ（ゴタビ）

6	7	8	9	10	備考
ロ㋗セン	ナナセン	ハッセン	キューセン	ジ（ュ）ッセン	
ロクセン	ナナセン	ハチセン	キューセン	ジューセン	
ロ㋗センチ	ナナセンチ	ハッセンチ	キューセンチ	ジ（ュ）ッセンチ	
ロ㋗センチメートル	ナナセンチメートル	ハッセンチメートル	キューセンチメートル	ジ（ュ）ッセンチメートル	
ロ㋗セント	ナナセント	ハッセント	キューセント	ジ（ュ）ッセント	
ロ㋗ソー	ナナソー	ハッソー	キューソー《クソー》	ジ（ュ）ッソー	「九層倍」は［ク］。
ロ㋗ソー（ロ㋗ソー）	ナナソー	ハッソー	キューソー	ジ（ュ）ッソー	
ロ㋗ソク	ナナソク	ハッソク	キューソク	ジ（ュ）ッソク	
ムゾロイ	ナナゾロイ	ハ㋠ゾロイ	キューゾロイ	ジ（ュ）ッゾロイ	「三つぞろい」は別。
ロクダース	ナナダース	ハチダース	キューダース	ジューダース	
ロ㋗タイ	ナナタイ	ハ㋠タイ（ハッタイ）	キュータイ	ジ（ュ）ッタイ	
ロクダイ	ナナダイ（㋛チダイ）	ハチダイ	キューダイ（クダイ）	ジューダイ	
ロクダイ	ナナダイ	ハチダイ	キューダイ《クダイ》	ジューダイ	古典では［クダイ］も。
ロクダイ	ナナダイ（㋛チダイ）	ハチダイ	キューダイ	ジューダイ	
ダイ・ロクニチ	ダイ・㋛チニチ	ダイ・ハチニチ	ダイ・クニチ（ダイ・キューニチ）	ダイ・ジューニチ	
ダイ・ロクマク	ダイ・ナナマク	ダイ・ハチマク	ダイ・キューマク	ダイ・ジューマク	「1」は「序幕」または[イチ]。オペラは［イチ］。
ダイ・ロクバン	ダイ・ナナバン（ダイ・㋛チバン）	ダイ・ハチバン	ダイ・キューバン（ダイ・クバン）	ダイ・ジューバン	音楽では［ヨン、ナナ、ク］。
ロクダイメ	ナナダイメ《㋛チダイメ》	ハチダイメ	キューダイメ《クダイメ》	ジューダイメ	芸能関係などでは［ヨ、シチ、ク］。
ロクダセキ	ナナダセキ	ハチダセキ	キューダセキ	ジューダセキ	
ロ㋗タバ	ナナタバ	ハ㋠タバ	キュータバ	ジ（ュ）ッタバ（トタバ）	
ムタビ	ナナタビ	ヤタビ	キュータビ（クタビ）	ジ（ュ）ッタビ（トタビ）	

語 例	1	2	3	4	5
玉［タマ］	㋪トタマ	㋫タタマ	ミタマ（サンタマ）	ヨタマ（ヨンタマ）	ゴタマ
段（段位）	ショダン	ニダン	サンダン	ヨダン	ゴダン
段（一般）	イチダン	ニダン	サンダン	ヨンダン（ヨダン）	ゴダン
段階	イチダンカイ	ニダンカイ	サンダンカイ	ヨンダンカイ	ゴダンカイ
段式	イチダン㋛キ	ニダン㋛キ	サンダン㋛キ	ヨンダン㋛キ（ヨダン㋛キ）	ゴダン㋛キ
地区	イ㋠チク（イッ㋠ク）	ニ㋠ク	サン㋠ク	ヨン㋠ク	ゴ㋠ク
地点	イ㋠チテン	ニ㋠テン	サン㋠テン	ヨン㋠テン	ゴ㋠テン
着（到着）	イッチャク	ニチャク	サンチャク	ヨンチャク	ゴチャク
着（衣服）	イッチャク	ニチャク	サンチャク	ヨンチャク	ゴチャク
町	イッチョー	ニチョー	サンチョー	ヨンチョー	ゴチョー（ゴチョー）
丁	イッチョー	ニチョー	サンチョー	ヨンチョー	ゴチョー（ゴチョー）
丁目	イッチョーメ	ニチョーメ	サンチョーメ	ヨンチョーメ	ゴチョーメ
対［ツイ］	イッツイ	ニツイ	サンツイ	ヨンツイ	ゴツイ
月［ツキ］	㋪ト㋡キ	㋫タ㋡キ（㋫タ㋡キ）	ミ㋡キ	ヨ㋡キ	イツ㋡キ
粒	㋪トツブ	㋫タツブ	サンツブ（ミツブ）	ヨンツブ（ヨツブ）	ゴツブ（イ㋡ツブ）
坪	㋪トツボ	㋫タツボ	サンツボ（ミツボ）	ヨンツボ（ヨツボ）	ゴツボ
DK	イチディーケー	ニディーケー	サンディーケー	ヨンディーケー	ゴディーケー
滴［テキ］	イッテキ	ニテキ	サンテキ	ヨンテキ	ゴテキ
デシベル	イチデシベル	ニデシベル	サンデシベル	ヨンデシベル	ゴデシベル
店	イッテン	ニテン	サンテン	ヨンテン	ゴテン
点	イッテン	ニテン	サンテン	ヨンテン	ゴテン
店舗	イ㋠テンポ	ニテンポ	サンテンポ	ヨンテンポ	ゴテンポ

6	7	8	9	10	備考
ロ㋗タマ	ナナタマ	ハ㋠タマ(ハッタマ)	キュータマ	ジ（ュ）ッタマ	
ロクダン	㋛チダン	ハチダン	クダン	ジューダン	
ロクダン	ナナダン(㋛チダン)	ハチダン	キューダン(クダン)	ジューダン	
ロクダンカイ	ナナダンカイ	ハチダンカイ	キューダンカイ	ジューダンカイ	
ロクダン㋛キ	ナナダン㋛キ	ハチダン㋛キ	キューダン㋛キ	ジューダン㋛キ	
ロ㋗チク	ナナ㋠ク	ハ㋠チク(ハッ㋠ク)	キュー㋠ク	ジ（ュ）ッ㋠ク	
ロ㋗チテン	ナナ㋠テン	ハ㋠チテン（ハッ㋠テン）	キュー㋠テン	ジ（ュ）ッ㋠テン	
ロ㋗チャク	ナナチャク	ハッチャク	キューチャク	ジ（ュ）ッチャク	
ロ㋗チャク	ナナチャク	ハッチャク	キューチャク	ジ（ュ）ッチャク	
ロ㋗チョー（ロ㋗チョー）	ナナチョー	ハッチョー	キューチョー	ジ（ュ）ッチョー	
ロ㋗チョー（ロ㋗チョー）	ナナチョー	ハッチョー	キューチョー	ジ（ュ）ッチョー	
ロ㋗チョーメ	ナナチョーメ	ハッチョーメ	キューチョーメ	ジ（ュ）ッチョーメ	
ロ㋗ツイ	ナナツイ	ハッツイ	キューツイ	ジ（ュ）ッツイ	
ム㋡キ	ナナ㋡キ	ヤ㋡キ	ココノ㋡キ	ト㋡キ	
ロ㋗ツブ	ナナツブ	ハ㋠ツブ(ハッツブ)	キューツブ	ジ（ュ）ッツブ（トツブ）	
ロ㋗ツボ	ナナツボ	ハ㋠ツボ(ハッツボ)	キューツボ	ジ（ュ）ッツボ（トツボ）	
ロクディーケー	ナナディーケー	ハチディーケー	キューディーケー	ジューディーケー	
ロ㋗テキ	ナナテキ	ハッテキ	キューテキ	ジ（ュ）ッテキ	
ロクデシベル	ナナデシベル	ハチデシベル	キューデシベル	ジューデシベル	
ロ㋗テン	ナナテン	ハッテン(ハ㋠テン)	キューテン	ジ（ュ）ッテン	
ロ㋗デン	ナナテン	ハッデン(ハ㋠デン)	キューテン	ジ（ュ）ッデン	
ロ㋗デンポ	ナナデンポ	ハ㋠デンポ	キューデンポ	ジ（ュ）ッデンポ	

語　例	1	2	3	4	5
度（回数）	イチド	ニド	サンド	ヨンド（ヨド）	ゴド
度(温度・体温・角度)	イチド	ニド	サンド	ヨンド	ゴド
頭	イットー	ニトー	サントー	ヨントー	ゴトー
等	イットー，イットー	ニトー，ニトー	サントー，サントー	ヨントー，ヨントー	ゴトー，ゴトー
とおり	㋪トトーリ	㋫タトーリ	ミトーリ（サントーリ）	ヨトーリ（ヨントーリ）	ゴトーリ
度目	イチドメ	ニドメ	サンドメ	ヨンドメ（ヨドメ）	ゴドメ
トン	イットン	ニトン	サントン	ヨントン	ゴトン
【 な 行 】					
男（兄弟）	チョーナン，チョーナン	ジナン	サンナン，サンナン	ヨンナン，ヨンナン	ゴナン，ゴナン
男（人数）	イチナン	ニナン	サンナン	ヨンナン	ゴナン
人	㋪トリ（イチニン）	㋫タリ（ニニン）	サンニン	ヨニン	ゴニン
人前	イチニンマエ	ニニンマエ	サンニンマエ	ヨニンマエ	ゴニンマエ
年	イチネン	ニネン	サンネン	ヨネン	ゴネン
年生（学校）	イチネンセー	ニネンセー	サンネンセー	ヨネンセー	ゴネンセー
ノット	イチノット	ニノット	サンノット	ヨンノット	ゴノット
【 は 行 】					
派	イッパ	ニハ	サンパ	ヨンパ	ゴハ
波	イッパ	ニハ	サンパ	ヨンパ	ゴハ
パーセント	イ㋠パーセント（イッパーセント）	ニパーセント	サンパーセント	ヨンパーセント	ゴパーセント
杯	イッパイ	ニハイ	サンバイ	ヨンハイ	ゴハイ
敗	イッパイ	ニハイ	サンパイ	ヨンパイ	ゴハイ
倍	イチバイ	ニバイ	サンバイ	ヨンバイ	ゴバイ

6	7	8	9	10	備　考
ロクド	ナナド（シチド）	ハチド	キュード	ジュード	
ロクド	ナナド（シチド）	ハチド	キュード（クド）	ジュード	
ロクトー	ナナトー	ハットー（ハチトー）	キュートー	ジ（ュ）ットー	
ロクトー，ロクトー	ナナトー，ナナトー	ハットー，ハットー（ハチトー，ハチトー）	キュートー，キュートー	ジ（ュ）ットー，ジ（ュ）ットー	
ロクトーリ	ナナトーリ	ハチトーリ（ハットーリ）	キュートーリ	ジ（ュ）ットーリ	
ロクドメ	ナナドメ（シチドメ）	ハチドメ	キュードメ（クドメ）	ジュードメ	
ロクトン	ナナトン	ハチトン（ハットン）	キュートン	ジ（ュ）ットン	
ロクナン，ロクナン	シチナン，シチナン	ハチナン，ハチナン	キューナン，キューナン	ジューナン，ジューナン	「九男坊」などは［ク］も。
ロクナン	シチナン	ハチナン	キューナン	ジューナン	
ロクニン	シチニン	ハチニン	クニン（キューニン）	ジューニン	
ロクニンマエ	シチニンマエ（ナナニンマエ）	ハチニンマエ	クニンマエ（キューニンマエ）	ジューニンマエ	
ロクネン	シチネン（ナナネン）	ハチネン	クネン（キューネン）	ジューネン	特にはっきりさせたい時［ナナ］。1977年は「ナナジューナナ」または「ナナジューシチ」。
ロクネンセー	シチネンセー	ハチネンセー	キューネンセー	ジューネンセー	
ロクワット	ナナワット	ハチワット	キューワット	ジューワット	
ロッパ	ナナハ	ハチハ	キューハ	ジ（ュ）ッパ	
ロッパ	ナナハ	ハチハ	キューハ	ジ（ュ）ッパ	
ロクパーセント（ロッパーセント）	ナナパーセント	ハチパーセント	キューパーセント	ジ（ュ）ッパーセント	
ロッパイ（ロクハイ）	ナナハイ（シチハイ）	ハッパイ（ハチハイ）	キューハイ	ジ（ュ）ッパイ	
ロッパイ（ロクハイ）	ナナハイ（シチハイ）	ハッパイ（ハチハイ）	キューハイ	ジ（ュ）ッパイ	
ロクバイ	ナナバイ	ハチバイ	キューバイ	ジューバイ	

語例	1	2	3	4	5
拍	イッパク	ニハク	サンパク	ヨンパク(ヨンハク)	ゴハク
泊	イッパク	ニハク (㋫タハク)	サンパク	ヨンパク(ヨンハク)	ゴハク
箱	㋪トハコ	㋫タハコ	ミハコ (サンバコ)	ヨハコ (ヨンハコ)	ゴハコ (イツハコ)
場所（相撲）	㋪トバショ	㋫タバショ	サンバショ	ヨンバショ	ゴバショ
柱	㋪トハシラ	㋫タハシラ (㋫タハシラ)	ミハシラ	ヨハシラ	イ㋡ハシラ (ゴハシラ)
鉢	㋪トハチ	㋫タハチ	ミハチ	ヨハチ (ヨンハチ)	ゴハチ
発	イッパツ	ニハツ	サンパツ	ヨンパツ(ヨンハツ)	ゴハツ
バレル	イチバレル	ニバレル	サンバレル	ヨンバレル	ゴバレル
班	イッパン	ニハン	サンパン	ヨンパン	ゴハン
犯	イッパン	ニハン	サンパン	ヨンパン	ゴハン
版	イッパン，ショハン	ニハン	サンパン	ヨンパン	ゴハン
番	イチバン	ニバン	サンバン	ヨンバン (ヨバン)	ゴバン
番地	イチバンチ	ニバンチ	サンバンチ	ヨンバンチ	ゴバンチ
番手	イチバンテ	ニバンテ	サンバンテ	ヨンバンテ (ヨバンテ)	ゴバンテ
番目	イチバンメ	ニバンメ	サンバンメ	ヨンバンメ (ヨバンメ)	ゴバンメ
尾［ビ］	イチビ	ニビ	サンビ	ヨンビ	ゴビ
ppm	イ㋠ピーピーエム	ニピーピーエム	サンピーピーエム	ヨンピーピーエム	ゴピーピーエム
匹	イッ㋪キ	ニ㋪キ	サンビキ	ヨン㋪キ	ゴ㋪キ
俵	イッピョー	ニヒョー	サンビョー	ヨンヒョー	ゴヒョー
票	イッピョー	ニヒョー	サンビョー	ヨンヒョー	ゴヒョー
秒	イチビョー	ニビョー	サンビョー	ヨンビョー	ゴビョー
品目	イ㋠ヒンモク	ニヒンモク	サンヒンモク	ヨンヒンモク	ゴヒンモク

6	7	8	9	10	備　考
ロッパク(ロクハク)	ナナハク	ハッパク(ハチハク)	キューハク	ジ（ュ）ッパク	
ロッパク(ロクハク)	ナナハク	ハッパク(ハチハク)	キューハク	ジ（ュ）ッパク	
ロクハコ(ロッパコ)	ナナハコ	ハチハコ(ハッパコ)	キューハコ	ジ（ュ）ッパコ（下ハコ）	
ロクバショ	ナナバショ	ハチバショ	キューバショ	ジューバショ	
ムハシラ（ロクハシラ）	ナナハシラ	ヤハシラ（ハチハシラ）	キューハシラ	トハシラ	
ロクハチ	ナナハチ	ハッパチ	キューハチ	ジ（ュ）ッパチ（下ハチ）	
ロッパツ(ロクハツ)	ナナハツ	ハッパツ	キューハツ	ジ（ュ）ッパツ	
ロクバレル	ナナバレル	ハチバレル	キューバレル	ジューバレル	
ロッパン	ナナハン	ハチハン(ハッパン)	キューハン	ジ（ュ）ッパン	
ロッパン	ナナハン	ハチハン(ハッパン)	キューハン	ジ（ュ）ッパン	
ロッパン(ロクハン)	ナナハン(㋛チハン)	ハチハン(ハッパン)	キューハン	ジ（ュ）ッパン	
ロクバン	ナナバン(㋛チバン)	ハチバン	キューバン(クバン)	ジューバン	音楽では［ヨン、ナナ、ク］。
ロクバンチ	ナナバンチ	ハチバンチ	キューバンチ	ジューバンチ	
ロクバンテ	ナナバンテ	ハチバンテ	キューバンテ	ジューバンテ	
ロクバンメ	ナナバンメ	ハチバンメ	キューバンメ（クバンメ）	ジューバンメ	
ロクビ	ナナビ（㋛チビ）	ハチビ	キュービ	ジュービ	
ロ㋗ピーピーエム	ナナピーピーエム	ハ㋠ピーピーエム	キューピーピーエム	ジ（ュ）ッピーピーエム	
ロッ㋪キ(ロク㋪キ)	ナナ㋪キ	ハチ㋪キ(ハッ㋪キ)	キュー㋪キ	ジ（ュ）ッ㋪キ	
ロッピョー（ロ㋗ヒョー）	ナナヒョー	ハ㋠ヒョー（ハッピョー）	キューヒョー	ジ（ュ）ッピョー	
ロッピョー（ロ㋗ヒョー）	ナナヒョー	ハ㋠ヒョー（ハッピョー）	キューヒョー	ジ（ュ）ッピョー	
ロクビョー	ナナビョー	ハチビョー	キュービョー	ジュービョー	
ロ㋗ヒンモク	ナナヒンモク	ハ㋠ヒンモク	キューヒンモク	ジ（ュ）ッピンモク（ジューヒンモク）	

語　例	1	2	3	4	5
部	イチブ	ニブ	サンブ	ヨンブ	ゴブ
分（割合）	イチブ	ニブ	サンブ	ヨンブ（シブ）	ゴブ
フィート	イ㋠フィート	ニフィート	サンフィート	ヨンフィート	ゴフィート
フラン	イ㋠フラン	ニフラン	サンフラン	ヨンフラン	ゴフラン
振り	㋪トフリ	㋫タフリ	ミフリ	ヨフリ	ゴフリ
ブロック	イチブロック	ニブロック	サンブロック	ヨンブロック	ゴブロック
分［フン］	イップン	ニフン	サンプン	ヨンプン	ゴフン
分目	イチブンメ，イチブンメ	ニブンメ，ニブンメ	サンブンメ，サンブンメ	ヨンブンメ，ヨンブンメ	ゴブンメ，ゴブンメ
平方センチメートル	イ㋠ヘイホーセンチメートル	ニヘイホーセンチメートル	サンヘイホーセンチメートル	ヨンヘイホーセンチメートル	ゴヘイホーセンチメートル
平方メートル	イ㋠ヘイホーメートル	ニヘイホーメートル	サンヘイホーメートル	ヨンヘイホーメートル	ゴヘイホーメートル
ページ	イ㋠ページ（イッページ）	ニページ	サンページ	ヨンページ	ゴページ
ヘクタール	イ㋠ヘ㋗タール	ニヘ㋗タール	サンヘ㋗タール	ヨンヘ㋗タール	ゴヘ㋗タール
ペソ	イ㋠ペソ	ニペソ	サンペソ	ヨンペソ	ゴペソ
部屋	㋪トヘヤ	㋫タヘヤ	ミヘヤ	ヨヘヤ（ヨンヘヤ）	ゴヘヤ（イ㋡ヘヤ）
ヘルツ	イチヘルツ	ニヘルツ	サンヘルツ	ヨンヘルツ	ゴヘルツ
編	イッペン	ニヘン	サンペン	ヨンペン	ゴヘン
遍［ヘン］	イッペン	ニヘン	サンベン	ヨンヘン	ゴヘン
歩	イッポ	ニホ	サンポ	ヨンポ	ゴホ
ポイント	イ㋠ポイント（イッポイント）	ニポイント	サンポイント	ヨンポイント	ゴポイント
ボルト	イチボルト	ニボルト	サンボルト	ヨンボルト	ゴボルト
本	イッポン	ニホン	サンボン	ヨンホン	ゴホン
ポンド	イ㋠ポンド（イッポンド）	ニポンド	サンポンド	ヨンポンド	ゴポンド

6	7	8	9	10	備考
ロクブ	ナナブ	ハチブ	キューブ	ジューブ	
ロクブ	ナナブ（シチブ）	ハチブ	キューブ（クブ）	ジューブ	「四分六(分)」、「七分咲き」などは［シ、シチ］。
ロクフィート	ナナフィート	ハチフィート	キューフィート	ジュッフィート	
ロクフラン	ナナフラン	ハチフラン	キューフラン	ジ（ュ）ッフラン（ジューフラン）	
ロクフリ	ナナフリ	ハチフリ	キューフリ	ジ（ュ）ッフリ	
ロクブロック	ナナブロック	ハチブロック	キューブロック	ジューブロック	
ロップン	ナナフン	ハチフン（ハップン）	キューフン	ジ（ュ）ップン	
ロクブンメ，ロクブンメ	ナナブンメ，ナナブンメ	ハチブンメ，ハチブンメ	キューブンメ，キューブンメ		
ロクヘイホーセンチメートル	ナナヘイホーセンチメートル	ハチヘイホーセンチメートル	キューヘイホーセンチメートル	ジューヘイホーセンチメートル	
ロクヘイホーメートル	ナナヘイホーメートル	ハチヘイホーメートル	キューヘイホーメートル	ジューヘイホーメートル	
ロクページ（ロッページ）	ナナページ	ハチページ（ハッページ）	キューページ	ジ（ュ）ッページ	
ロクヘクタール	ナナヘクタール	ハチヘクタール	キューヘクタール	ジューヘクタール	
ロクペソ	ナナペソ	ハチペソ	キューペソ	ジ（ュ）ッペソ	
ロクヘヤ	ナナヘヤ	ハチヘヤ	キューヘヤ	トヘヤ	
ロクヘルツ	ナナヘルツ	ハチヘルツ	キューヘルツ	ジュッヘルツ	
ロッペン（ロクヘン）	ナナヘン（シチヘン）	ハチヘン（ハッペン）	キューヘン	ジ（ュ）ッペン	
ロッペン	ナナヘン（シチヘン）	ハチヘン（ハッペン）	キューヘン	ジ（ュ）ッペン	
ロッポ	ナナホ	ハチホ（ハッポ）	キューホ	ジ（ュ）ッポ	
ロクポイント	ナナポイント（シチポイント）	ハチポイント（ハッポイント）	キューポイント	ジ（ュ）ッポイント	
ロクボルト	ナナボルト	ハチボルト	キューボルト	ジューボルト	
ロッポン（ロクホン）	ナナホン	ハチホン（ハッポン）	キューホン	ジ（ュ）ッポン	
ロクポンド	ナナポンド	ハチポンド	キューポンド	ジ（ュ）ッポンド	

語例	1	2	3	4	5
【ま行】					
枚	イチマイ	ニマイ	サンマイ	ヨンマイ（ヨマイ）	ゴマイ
マイクロメートル	イチマイクロメートル	ニマイクロメートル	サンマイクロメートル	ヨンマイクロメートル	ゴマイクロメートル
マイル	イチマイル	ニマイル	サンマイル	ヨンマイル	ゴマイル
幕	㋪トマク	㋫タマク，㋫タマク	サンマク（ミマク）	ヨンマク（ヨマク）	ゴマク
幕目（古典歌舞伎）	ジョマク（㋪トマクメ）	㋫タマクメ	ミマクメ	ヨマクメ	イツマクメ
マルク	イチマルク	ニマルク	サンマルク	ヨンマルク	ゴマルク
ミクロン	イチミクロン	ニミクロン	サンミクロン	ヨンミクロン	ゴミクロン
ミリメートル	イチミリメートル	ニミリメートル	サンミリメートル	ヨンミリメートル	ゴミリメートル
ミリリットル	イチミリリットル	ニミリリットル	サンミリリットル	ヨンミリリットル	ゴミリリットル
棟	㋪トムネ	㋫タムネ	サンムネ（ミムネ）	ヨンムネ（ヨムネ）	ゴムネ（イツムネ）
名	イチメイ	ニメイ	サンメイ	ヨンメイ（ヨメイ）	ゴメイ
メートル	イチメートル	ニメートル	サンメートル	ヨンメートル	ゴメートル
毛	イチモー	ニモー	サンモー	ヨンモー	ゴモー
目［モク］	イチモク	ニモク	サンモク	ヨンモク	ゴモク
文［モン］	イチモン	ニモン	サンモン	ヨンモン	ゴモン
問	イチモン	ニモン	サンモン	ヨンモン	ゴモン（ゴモン）
匁	イチモンメ	ニモンメ	サンモンメ	ヨンモンメ	ゴモンメ
【や行】					
夜［ヤ］	イチヤ	ニヤ	サンヤ	ヨンヤ	ゴヤ
ヤード	イチヤード	ニヤード	サンヤード	ヨンヤード	ゴヤード
役	㋪トヤク	㋫タヤク	サンヤク	ヨンヤク	ゴヤク

6	7	8	9	10	備　考
ロクマイ	ナナマイ(㋛チマイ)	ハチマイ	キューマイ	ジューマイ	
ロクマイクロメートル	ナナマイクロメートル	ハチマイクロメートル	キューマイクロメートル	ジューマイクロメートル	
ロクマイル	ナナマイル	ハチマイル	キューマイル	ジューマイル	
ロクマク	ナナマク(㋛チマク)	ハチマク	キューマク	ジューマク	
ムマクメ	ナナマクメ	ハチマクメ	キューマクメ	ジューマクメ	
ロクマルク	ナナマルク	ハチマルク	キューマルク	ジューマルク	
ロクミクロン	ナナミクロン	ハチミクロン	キューミクロン	ジューミクロン	
ロクミリメートル	ナナミリメートル	ハチミリメートル	キューミリメートル	ジューミリメートル	
ロクミリリットル	ナナミリリットル	ハチミリリットル	キューミリリットル	ジューミリリットル	
ロクムネ	ナナムネ	ハチムネ	キュームネ	ジュームネ(トムネ)	
ロクメイ	ナナメイ(㋛チメイ)	ハチメイ	キューメイ	ジューメイ	
ロクメートル	ナナメートル	ハチメートル	キューメートル	ジューメートル	
ロクモー	ナナモー(㋛チモー)	ハチモー	キューモー	ジューモー	
ロクモク	ナナモク(㋛チモク)	ハチモク	キューモク	ジューモク	
ロクモン	ナナモン(㋛チモン)	ハチモン	キューモン	ジューモン	
ロクモン	ナナモン(㋛チモン)	ハチモン	キューモン	ジューモン	
ロクモンメ	ナナモンメ (㋛チモンメ)	ハチモンメ	キューモンメ (クモンメ)	ジューモンメ	
ロクヤ	㋛チヤ (ナナヤ)	ハチヤ	キューヤ (クヤ)	ジューヤ	「七日七夜」などは[～ナナヨ]。
ロクヤード	ナナヤード	ハチヤード	キューヤード	ジューヤード	
ロクヤク	ナナヤク	ハチヤク	キューヤク	ジューヤク	

語　例	1	2	3	4	5
【　ら 行　】					
里	イチリ	ニリ	サンリ	ヨリ	ゴリ
リットル	イチリットル	ニリットル	サンリットル	ヨンリットル	ゴリットル
立方センチメートル	イチリッポーセンチメートル	ニリッポーセンチメートル	サンリッポーセンチメートル	ヨンリッポーセンチメートル	ゴリッポーセンチメートル
立方メートル	イチリッポーメートル	ニリッポーメートル	サンリッポーメートル	ヨンリッポーメートル	ゴリッポーメートル
両	イチリョー	ニリョー	サンリョー	ヨンリョー	ゴリョー
輪［リン］	イチリン	ニリン	サンリン	ヨンリン（ヨリン）	ゴリン
ルクス	イチル㋗ス	ニル㋗ス	サンル㋗ス	ヨンル㋗ス	ゴル㋗ス
列	イチレツ	ニレツ	サンレツ	ヨンレツ	ゴレツ
連	イチレン	ニレン	サンレン	ヨンレン	ゴレン
【　わ 行　】					
把［ワ］	イチワ	ニワ	サンワ	ヨンワ	ゴワ
羽［ワ］	イチワ	ニワ	サンバ（サンワ）	ヨンワ（ヨンバ）	ゴワ
ワット	イチワット	ニワット	サンワット	ヨンワット	ゴワット
割［ワリ］	イチワリ	ニワリ	サンワリ	ヨンワリ	ゴワリ
椀［ワン］	㋪トワン	㋫タワン	ミワン	ヨワン	ゴワン

6	7	8	9	10	備考
ロクリ	ⓝナリ	ハチリ	クリ	ジューリ	
ロクリットル	ナナリットル	ハチリットル	キューリットル	ジューリットル	
ロクリッポーセンチメートル	ナナリッポーセンチメートル	ハチリッポーセンチメートル	キューリッポーセンチメートル	ジューリッポーセンチメートル	
ロクリッポーメートル	ナナリッポーメートル	ハチリッポーメートル	キューリッポーメートル	ジューリッポーメートル	
ロクリョー	ナナリョー	ハチリョー	キューリョー	ジューリョー	
ロクリン	ナナリン	ハチリン	キューリン	ジューリン	
ロクルⓚス	ナナルⓚス	ハチルⓚス	キュールⓚス	ジュールⓚス	
ロクレツ	ナナレツ	ハチレツ	キューレツ	ジューレツ	
ロクレン	ナナレン	ハチレン	キューレン	ジューレン	
ロクワ	ナナワ	ハチワ	キューワ	ジ（ュ）ッパ	
ロッパ（ロクワ）	ナナワ（ⓝナワ）	ハチワ（ハッパ）	キューワ	ジ（ュ）ッパ（ジューワ）	
ロクワット	ナナワット	ハチワット	キューワット	ジューワット	
ロクワリ	ナナワリ（ⓝナワリ）	ハチワリ	キューワリ	ジューワリ	
ロクワン	ナナワン	ハチワン	キューワン	ジューワン	

共通語の発音とアクセント

金　田　一　春　彦

第１章　共通語とは

1.《共通語》ということばは、《平和》《自由》《民主主義》などと並んで、戦後になって著しく使われるようになった、ことばの花形である。しかし、このことばの意味は、かならずしもはっきりしていない。《共通語》は《標準語》とどうちがうのか。東京のことばがすなわち共通語なのか。しばしばいろいろの疑問が発せられる。

《共通語》ということばは戦前にもあった。日本の文化人とインドの文化人とが話をしようとする。おたがいのことばが使えないし、わかりもしないしするので、やむをえず英語を使って話す。こういう場合の英語は《共通語》と呼ばれた。同様に、日本の中でも、はなはだしくちがった方言の持ち主が話をする場合に、おたがいにわかるようなことばで話し合う。そのことばが《共通語》と呼ばれたものである。そういう場合の共通語の実体は、その時その時によってちがい、東京のことばに近いことばである場合もあれば、大阪のことばに近いことばである場合もあった。戦後、《共通語》と呼ばれていることば、特に、この辞典で《共通語》と呼ぶところのことばは、そういう《共通語》ではない。

2. 明治の世、日本が独立国として諸外国とまじわりを結ぶようになった時に、あらためて感じられたことの一つは、日本各地の方言のちがいの激しさだった。外国の人に示すためにも、《これが標準的な日本語だ》というものを作っておく必要がある。そういうことから《標準語》の制定ということが急がれた。といって、新しい日本語を作るのも大仕事だ、というわけでとりあえず候補に上がったのが、首都東京のことばだった。

当時の国語学・言語学の最高権威上田万年（かずとし）氏は、明治29年の「帝国文学」１に発表した論文「標準語について」の中で《願はくは予をして新に発達すべき日本の標準語につき、一言せしめたまへ。予は此点に就ては、現今の東京語が他日其名誉を享有すべき資格を供ふる者なりと確信す。(中略)予の云ふ東京語とは、教

育ある東京人の話すことばと云ふ義なり。……》こういう発言をした。ここで、東京のことばは、にわかに標準語候補の資格を占めた。そうして明治40年になると、東京語は一躍イコール標準語の地位を得た。というのは、上田万年氏は東京で開かれた全国郡視学集会で、「帝国語の標準は、現在の東京に於て、教育ある社会に普通に行はれて居ります言葉をいふのでございます」と断言しているからである〔石黒魯平氏の『標準語』2～3ページによる〕。これは、東京のことばがイコール標準語とみなされた最初であり、明治40年は記念すべき年だった。

東京のことば――“教養ある人たちの”という限定があったとしても、とにかく現実の東京のことばが日本でいちばん正しいことばだ、という考え方は、以後明治・大正の時代を通じて強かった。が、これには、当然のことながら批判が現れた。デッカイとかベランメーとかいうことばは、教養ある人たちの口にはのぼらないからいいけれども、オッコチルとかイッチャッタとかいうことばはそういう人たちの口からも飛び出しかねない。オッコチル・イッチャッタ、こういう東京のことばがはたして標準語と呼ぶにあたいするか。こういう異論は、東京以外の地域の人たち、特に関西地方の人たちの間から起こった。この傾向が強まった昭和2年には、安藤正次氏の注目すべき発言が現れた。《標準語は現実の言語ではない。標準語は我々の理想的な言語であって、現実の東京語その他をもととして、これに彫琢(ちょうたく)を加へて作っていくその理想の言語が標準語である》。安藤氏が『言語学概論』の中に述べた趣旨を要約するとこうなる。現実の東京語が標準語ではない。この言い方は多くの地方の人たちの耳に快くひびいたようだ。「標準語＝理想的日本語」という考えは、以後昭和敗戦に至る20年間、学界では支持されてきた。

しかし、この標準語がイコール東京語ではないという考え方は学界では歓迎されたけれども、学界以外では標準語はまだ実在しないという理想主義はかならずしも通らなかった。それは実際的ではなかった。たとえば、教育界では、成長していく世代にことばを教える場合、実際に何かことばを教えなければいけないが、そういう時には標準語という理想的な日本語が誕生するまで手をつかねているわけにはいかないからである。だから文部省では、実際に東京のことばのうちの雅純な部分をえらび、――つまりオッコチル・イッチャウのような品位に欠けるような要素を除き、それで一つのことばの体系を作り、これを国語・日本語あるいは標準語と呼んで、教科書にも使うという明治以来の行き方を改めなかっ

た。このことばは新聞・雑誌の文章あるいは小説の地の文とも大体一致することばであったから、明治以後全国に普及し、少なくとも書きことばとしては動かしがたい勢力となった。これは《現実の標準語》と呼んで、学者の考えた《理想の標準語》と区別すべきものである。

こういう情勢が着々進んでいた大正の末にＮＨＫが創設された。さっそくの問題はどのような日本語で放送を行うかということである。ここでも事情は教育界とまったく同じことで、《理想の標準語》の完成を待ってから放送にとりかかるわけにはいかない。あすからマイクにのせることばに困る。そこで、当時社会に広く行われていた教科書にあるような、新聞・雑誌や小説の地の文に書かれているようなことばを《放送用語》とした。つまり東京のことばのうち雅純なものをえらんでこれをアナウンサーに使わせ全国にながした。このようにして今までは主として書きことばとして普及していた《現実の標準語》が話しことばとして広まっていったことは、きわめて自然である。

戦後になってみると、この《現実の標準語》は、日本のすみずみにまで親しまれ、代表的な日本語としての位置はゆるぎないものになっていた。東京のことばに対する対抗意識のもっとも強かった関西地方でも、若い人の間には、どんどん《現実の標準語》が浸透していく。私は、戦前、関西地方で育った人たちの間には、東京語の文法・語彙(ごい)はともかくとして東京語のアクセントをあやつる人はいないように思っていたが、戦後大阪の小学校などをたずねて調べてみると、子どもたちの間には、大阪の町中で育ちながら家庭の事情その他の関係で、みごとな東京アクセントを身につけている子どもを何人か見つけて驚いた。このような事態になると《現実の標準語》が、いくらその実質が東京のことばそっくりであろうと、それを理由として日本語の代表と見ることに反対することはむずかしくなった。

こうなれば、あとは《標準語》という名前だけの問題となる。こうして《現実の標準語》の代わりに《共通語》という語が新たに用いられ、これが教育界その他にひろめられた。名づけ親は国立国語研究所あたりらしい。

元来、標準語もこの《共通語》も、方言に対する名前であるが、標準語という術語を使うと、それに対する方言は不正のもの、卑しいもの、やがて統一され消滅すべきものという語感をもつ。《共通語》という術語を使えば、それに対する《方言》はそのような下位の言語という気分は感じられず、共通語は公の席で使うことば、方言は私的生活で使うことば

という対等の価値をもつ言語という色合いになる。そういう点から言っても、《共通語》ということばは望ましいもので、一般にも受け入れられた。

この辞典で《共通語》と呼んでいるものは、そういう意味の言語で、従来は、《標準語》とも呼ばれていたもの、そうしてやかましく言うと《現実の標準語》と呼ばれるべきものである。その実質は簡単に言えば東京語の精選されたもので、恐らく将来作られるはずの《標準語》にとって基礎的な資料になるはずの言語である。したがって、戦前言われていた——この章の1.に述べた共通語とは内容はちょっとちがうものである。1.に述べた共通語は、その使われる場面によってその内容がいろいろなものになろうが、共通語のうち、全国的な場面で使われる共通語が、この項にいう共通語だと言えば、まずいいかもしれない。その意味でこの辞典にいう《共通語》は《全国共通語》の略称だと言ってもいい。

3.　前項に述べたようなことから、この辞典に出てくる発音・アクセントは共通語の発音・アクセントであるが、その正体は東京語の発音・アクセントというのとあまりちがわないものになっている。これは関西方言の人にはあるいは不満があるであろうか。戦後、文化人類学者の梅棹忠夫氏によって京都・大阪あたりの方言を基礎として《第2標準語》というものを作れ、という声があがったことがある。今ここで東京語というものをもっとよく観察してみることが必要のようだ。

東京は関東平野の中央にある。したがって東京のことばは関東のことばの代表だ——と考えたくなるが、どうもそう考えてはいけないようだ。

東京という土地からちょっと離れて、周辺部をまわってみると、関東地方のことばは、東京のことばとはかなりちがうことに気づく。たとえば関東一帯に広まっているイクベー（行くべえ）・ケールベー(帰るべえ)ということばは東京ではまったく使われない。関東一帯でソレデヨー、コーシテヨーという間投助詞を使うが、東京ではだいたい使わない。関東地方一帯は敬語表現の乏しいところで、元来デス・マス体を使用しない地方であるのに対して、東京語には、敬語表現があり、デス・マス体を使う、等、等、等。

調べてみると、東京のていねい表現の類はすべて実は関西起源のもののようである。その証拠は：——

(1)　見ナイ・行カナイがデス・マス体になると、見マセン・行キマセンとなる。見マシナイ・行キマシナイとは言わない。ンという否定の表示は、関西の言い方で、関東にはない言い方だ。

(2) 白イ・嬉シイをゴザイマス体で言うと、白ウゴザイマス・嬉シュウゴザイマスと言って、白クゴザイマス・嬉シクゴザイマスとは言わない。白ウ・嬉シュウという語法は関西の言い方で、関東にはない言い方だ。

(3) シテイマス・見テイマスより一段ていねいな言い方に、シテオリマス・見テオリマスという言い方がある。存在する意味をオルと言うのは関西の言い方で、関東の言い方ではない。

だいたいこの調子で、敬語表現と言われるものは関西方言の文法の上に成り立っている。語彙の面で言えば、東京人がショッパイを使わずカライで代用し、ヤル（自分から他人へ）とクレル（他人から自分へ）とを区別して使うなど、関西的であって関東的ではない。オハギ・オデン……といった一連の女性語・ていねい語も、明らかに京阪語からの輸入である。

発音の面などでも、今の千葉県や埼玉県東部の方言の発音を聞くと、東京語の発音は京阪語の発音にむしろ近く、あるいはそっくりだと言ってもいいくらいである。恐らく、江戸の地固有の方言の発音はもっと京阪語とちがった、ナマリの激しいものではなかったか。それが京阪語の影響で今日のようになったものと考えられる。

元来東京の前身であった江戸の町は、近世の初めに出来た新興都市であったが、その時関東の人だけが集まって都市を作ったわけではない。三河武士が多く入り込んできたとともに、東海道一帯から近畿地方にかけての人が多く集まって商店街を作った。今でも東京に三河屋・尾張屋・伊勢屋・近江屋などの名が多いのは、そのなごりである。そういうわけで江戸のことばは、相当関西方言的な色彩を帯びた関東ことばであった。『膝栗毛』に出てくる江戸っ子・弥次喜多あたりは知ラナイの過去形を知ラナンダと言っている。それを明治以後知ラナカッタと言うようになったのは、関西色を振り捨てた例である。しかし、また発音の面でウの母音など、今の東京語の発音は、一時代前とちがい、くちびるをとがらせる習慣が強まりつつあり、これなどは西日本の方言に近づきつつあるものである。アクセントの点だけは、関西方言と激しい対立をなすが、あとに述べるとおり、日本全国を通じていちばん普通の、いわばクセの少ないものであると言える。

以上のような事実を総合すると、東京語は、関東方言の一種というよりも、全国方言のうちの一つの方言という性格をもっていると言うべきである。そう考えれば、東京語を全

国共通語と称することは、その言語の内容だけから考えても、妥当なのかもしれない。

第2章　共通語の音声

第1節　拍とは

1.　どんな言語でも、一つ一つの単語は発音の面でいくつかの単位に分かれる。その言語を使って生活している一般の人は、その単語がいくつかの単位に分かれるということを頭に置いて扱っているが、その一つ一つを《拍》という。たとえば、日本語で、「山」という単語は〈ヤ〉〈マ〉という二つの拍から出来ており、「桜」という単語は、〈サ〉〈ク〉〈ラ〉の三つの拍から出来ている。日本人が俳句をひねろうとして、指を折って5・7・5と数える。あの時の5とか7とかはすべて5拍・7拍という意味である。拍はこういう意味でその言語のリズムの単位である。

日本では、日本語を表すために、カナという文字をもっている。このカナは、原則として、1文字が一つの拍を表す。〈ア〉〈イ〉〈ウ〉〈エ〉〈オ〉、〈カ〉〈キ〉〈ク〉〈ケ〉〈コ〉……などすべてそうである。ただし、例外として、《拗音(ようおん)》のカナと呼ばれるものがあって、〈キャ〉〈キュ〉〈キョ〉〈シャ〉〈シュ〉〈ショ〉……のようなものは、2字集まって一つの拍を表す。

日本のカナは現在全部で48字ある。有限である。多少例外があるが、同じカナは同じ拍を表し、ちがうカナはちがう拍を表す。このことが示すように、拍の種類はその言語では有限である。日本語では上に述べたように一つのカナが表す48の拍のほかに、拗音(ようおん)の拍があり、さらに《はねる音》《つめる音》というような少数の特殊な拍があるので、全体で111ばかりの拍がある。この111の拍が組み合わせられて、すべての——何十万という日本語の単語が出来ているわけである。

2.　一つ一つの拍を、学者はさらに小さく分けて考える。たとえば、〈サクラ〉の〈サ〉を［sa］と分け、〈ク〉を［ku］と分けるのがそれである。この［s］［a］［k］［u］という一つ一つを単音（einzelnlaut）という。［ ］で囲んで書かれる、いわゆる《発音記号》の一つ一つは単音を表す。

単音は拍よりも精密な分析の結果であるが、拍のようなしっかりした単位ではない。たとえば日本語で何種類の単音を使うかということはちょっと言えない。たとえば、〈カ〉〈キ〉〈ク〉〈ケ〉〈コ〉はローマ字で書くと、ka・ki・ku・ke・koと書かれるから、このkの部分はみな同じ発音かと思うが、実際はそうではない。いっしょに組み合わせられる母音が、［a］であるか［i］であるか［u］であるかによって微妙にちがう。〈ハ〉

（ヒ）（フ）（ヘ）（ホ）などはその極端な場合で、ローマ字でこそha、hiなどと書かれるが、（ヒ）の時は、iという母音の影響を受けて、ドイツ語の“ich（私）”という場合のchと似た音である。（フ）の時には母音uの影響を受けて、上下のくちびるを近づける音でfに似た音が現れる。（ハ）（ヘ）（ホ）も同様で微妙にちがう。はねる音の（ン）にいたっては、次に来る拍のちがいによって、[m]になったり、[n]になったり、[ŋ]になったり、あるいは種々の鼻母音になったりする。つまり環境によってちがった単音が現れる。発音記号で書くときには、印刷の都合もあって、少数の文字しか使わないが、ほんとうに精密に表そうとしたら、いくらでもふえる。その数ははっきりいくつということは言えないほどである。

このように単音の数をはっきり言えないのは不便なことである。それでは記号で表すことは正確ではないことになる。拍より小さい単位をもっけて、しかも、いくつというきまった数のものにしたい。こういう考えで設定された単位が、言語学でやかましい《音素》（phoneme）という単位である。

音素を設定するには次のようにする。たとえば、はねる（ン）は、その次の拍がカ行音であるかサ行音であるかタ行音であるかによって微妙にちがうけれども、《次の音が出やすいような口構えをして、鼻から声を出す》という点を抽象すれば、そういう性質をもった一つの音だと解釈できる。hで表されるハ行の子音も、《次の母音が出るのに都合のいいような口腔(こうこう)の中のどこかをせばめて出す息の音》と考え、そういう音をhという記号で表すのだと解すれば、ハ行の子音は《h》という一つの音だと解釈することができる。このようにして一つ一つの単音の似た点を抽象し、ちがいはその環境によって起こるのだと解釈する。そのように考えて到達した一つ一つの単位、これが、《音素》である。音素は/h/というように、2本の斜線の間にはさんで書かれるのが普通である。

日本語の音素は、このように考えると、次の24種類と認められる。

〔母音〕　/a/　/i/　/u/
　　　　/e/　/o/
〔子音〕　/k/　/g/　/ŋ/
　　　　/s/　/c/（＝ts）
　　　　/z/　/t/　/d/　/n/
　　　　/h/　/p/　/b/
　　　　/m/　/j/　/r/　/w/
〔特殊音素〕　/ɴ/（はねる音）/ᴛ/
　　　　（つめる音）/ʀ/（引く音）

ローマ字という文字は、元来ラテン語の一つ一つの音素を表そうとしたものである。単音を表そうとしたものではない。

3.　前々項に述べた拍は、音素が連続して出来たと見なすことがで

きる。音素一つで出来上がったものもあるが、二つ以上で出来ているものもある。その場合、《音素がどのように結びついて拍を作るか》ということが言語・言語によってちがう。そうしてそのちがいがその言語の発音の根本的な性格を形づくる。日本語の拍はどのような性格をもっているか。

第２節　日本語の拍

1.　日本語の拍は前節**1.**に書いたように111個ある。これらのものも、**2.3.**で述べたように、音素の組み合わせで出来ている。ところが日本語には《音素の組み合わせ方が非常に単純だ》という著しい特色がある。

たとえば、《サクラ》の《サ》は/s/＋/a/であり、《ク》は/k/＋/u/で２個の音素の組み合わせである。《サイタ》の《イ》は/i/という音素１個だけから出来ている。(キャ)とか(キュ)とかいう拍はいちばん複雑であるが、これとて/kja/あるいは/kju/であるから、３個の音素の組み合わせにすぎない。一方、はねる音の《ン》とか、つめる音の《ッ》とかは、それ以上分析できない１個の音素だけから出来ている拍で、このような拍は、外国人の目には、非常に特殊なものとして映じることで知られている。

アメリカ人などがしゃべる日本語を聞くと、相当じょうずな人でも、はねる音やつめる音の発音がおかしい。「日本の着物はきれいですね」というようなことばを、[ニッポンノゥキモゥノゥワー　キレィデスネィ]のように言う。《ニッポンノ》というところは日本語では五つの拍であるが、アメリカ人の耳には三つの拍としてとらえられる。これは、英語では、nip（嚙む）という単語は１拍の単語として扱い、weaponのponとか、pingpongのpongとかを１拍として扱い、そのために、日本語の《ニッポン》に対して、ニッを１拍、ポンを１拍と意識するというわけである。

そういうわけだから、逆に日本人は英語の１拍を２拍以上に感じるということになる。ピンポンというような単語は、むこうでは２拍であるが、日本語になると４拍になっている。strikeというような単語は、むこうでは１拍であるというものの、日本語ではストライクという５拍の単語になっている。われわれが、まだよく知らない英語の歌を歌おうとすると、フシだけ先に終わってしまって歌詞が残ってしまいそうになることがあるが、♩の一つにむこうの拍一つをあてはめることに慣れないためである。

これを要するに、日本語の拍は、英語の拍に比べて著しく組織が単純である。《一つの子音プラス一つの母音》というのが標準的な形で、そのあとにもう一つ別の子音が来るというようなことはない。このことは、

日本語に、《一つ一つの拍は母音で終わる》という基本的な性格を生み出している。母音で終わる拍は《開音節》と呼ばれているところから、日本語という言語は《開音節言語》だと呼ばれることがある。

ヨーロッパの言語では、イタリア語が開音節言語だとして有名である。イタリア語のほとんどすべての単語は母音で終わっている。が、徹底した開音節言語は、ハワイからニュージーランド方面のポリネシアの言語である。開音節の言語は、メロディーにのせて歌うのに便利であるので、音楽的な言語と言われる。アメリカの言語学者マリオ・ペイが『言葉の話』(The Story of Language) という本の中で、日本語を、イタリア語・スペイン語と並べて世界の言語の中の最もひびきの美しい言語としてほめているのは、この開音節言語であるためである。

2.　日本語の拍は、前項に述べたように、組織が簡単である。音素が一つか二つかせいぜい三つ集まって一つの拍が出来ている。そうしてその音素の種類が少ない。というところから《日本語の拍の種類は非常に少ない》ということになる。さきに、日本語の拍の種類は111だと言った。英語の拍の種類はいくつあるか。英語学者の楳垣実氏の『バラとさくら』には、氏が計算したところ30,000以上あったことが報じられている。イタリア語などは少ないようであるが、それでも日本語よりは多い。中国語の北京官話も、拍の少ない言語だと言われながらも、411個ある。ハワイ語あたりは世界で一番拍数の少ない言語の代表で43個しかないが、日本語も少ない方である。

拍の種類が少ないことは、同時に不都合な事態の原因にもなる。少数の単位で、無限に多数の内容を表そうとするのであるから、当然同音語が多くなる。それを避けようとすると、日本語の単語は長大になる。「赤」と「垢(あか)」、「秋」と「明き」と「飽き」、「朝」と「麻」など同音語の例はいくらでも拾える。これはシャレを言うことを趣味とする人にとっては便利な言語かもしれない。しかし、ラジオでアナウンスをする場合などには、やっかいな言語だということになる。「子ども」「かいこ」「なまこ」「こな」などは古い時代には、すべて短くただ「こ」と言った。それではまぎらわしいというわけで、今日のようなコドモ・カイコ・ナマコ・コナという長い形の単語を使うようになった。日本語の会話は、英語に比べて非能率的だと言われることの原因の一つはここにある。

同音語による誤解を防ぐためであるかのように日本語の単語は、どの拍をどの拍より高く言うというきまりをもっている。「赤」と「垢(あか)」の区別、「朝」と「麻」の区別はそれによ

ってなされる。あとで述べる日本語で《アクセント》と言われるものがそれで、これは同音語を文字に書かずに区別する重要な要素である。

第3節 共通語の拍

1. 日本語の中で前章に述べた共通語にはどのような種類の拍があり、それらはどのような内容のものか。この節ではこれを具体的に述べることにする。

2. 共通語にはまず標準的なものとして次の111種類の拍が存在する。[ ]の中はその音価を単音に分析して示したものである。

(1) 直音節に属するもの

《ア》[a] 口を広く開いて発する母音。

《イ》[i] くちびるを横に引き、舌の上面の前の部分を上あごの手前の部分に近づけて発音する母音。注意すべきはこの《イ》が《セイト》〔生徒〕、《テイネイ》〔丁寧〕のように、エ列の拍の次に来た場合で、自然な発音では《セート》《テーネー》のように、《引く音》に変化する。

ただし、《タテイト》〔縦糸〕のように、その間に意味の切れ目がある場合は、そうはならない。

《ウ》[u] 舌の上面の奥の方を高めて上あごの奥の方に近づけて発する母音。以前《ウ》に限らずウ列の母音は、くちびるをとがらせず、自然のままにして発音する、つまり[ɯ]の音で発音するのが標準的とされていたが、近ごろくちびるをとがらせるのが一般的になりつつある。そうなってみれば、その方が発音がはっきりしていいにちがいない。《ウマ》〔馬〕、《ウメ》〔梅〕のように、マ行音の直前に来た場合、単語によっては自然の発音で《はねるの音》の《ン》になるのが以前は正式だったが、近ごろは《ウ》と発音する人も増えた。

《エ》[ȩ] 舌の位置・くちびるの形ともに《ア》と《イ》の中間の音。

《オ》[ǫ] 舌の位置は《ア》と《ウ》との中間の音。くちびるをまるめて発音する。

《カ》[ka] [k]は舌の上面の奥の部分を上あごの奥の部分に付けて閉鎖を作って発する無声の破裂音。それと母音[a]との複合した音。

《キ》[ḳi] [ḳ]の部分は、無声の破裂音であることは[k]と同じであるが、次の[i]の音に引かれて《カ》の[k]より舌の手前の部分が、上あごの手前の部分に付いて発音される。このように、ある子音が次に来る母音[i]の影響でその調音位置がずれる

ことを《口蓋化》と呼ぶ。また、（キ）の音は、カ行音・サ行音・タ行音・パ行音の直前そのほか、限られた位置に来た場合、自然の発音では、口構えだけを残して声帯を振動させずに、息だけで発音することがある。いわゆる《母音の無声化》である（「母音の無声化」については227ページを参照）。

（ク）[ku]、（ケ）[kè]、（コ）[ko]　[k] の閉鎖が作られる場所が（ク）（ケ）（コ）により、多少ずつ異なる。服部四郎氏によると、（コ）の [k] は（カ）の [k] よりさらに奥。（ク）（ケ）の[k]は（カ）の[k]より手前で、（キ）よりは奥という。（ク）は、その立つ位置により、《母音の無声化》が起こる。

（ガ）[ga]　[g] は [k] の有声音。それと [a] と結合した音。単語の語中・語尾に来たときに、ガのカナが [ga] と発音されるか [ŋa] と発音されるかがしばしば問題になる。

（ギ）[ġi]　[ġ] は（キ）の [k] と同じく口蓋化を起こし、[i]のために（ガ）の [g] より手前に近い部位で発音される。[ŋi] とまぎれる点については [ga] に準じる。

（グ）[gu]、（ゲ）[gè]、（ゴ）[go]　[g] も（ク）（ケ）（コ）の [k] と同じように多少ずつ位置がずれている。

（カ°）[ŋa]　[ŋ] は [g] と同じ口構えで出す有声の鼻音。《ガ行鼻音》と呼ばれる音で、ことばの最初には現れない。カナでは[ga]と同じ文字で書かれるが、どのような場合に [ga] と発音され、どのような場合に [ŋa] と発音されるかについては228ページおよび12ページ（Q＆A）を参照。

（キ°）[ŋ̇i]　（キ）（ギ）の[k] [ġ] に準じる。[ŋ]の口蓋化した音。ガ行鼻音で、ことばの最初には現れない点など（カ°）に同じ。

（ク°）[ŋu]、（ケ°）[ŋè]、（コ°）[ŋo]（ク）（ケ）（コ）（グ）（ゲ）（ゴ）の場合に準じて [ŋ] の位置は多少ずれる。ガ行鼻音で、ことばの最初には現れないことなど、[ŋa] に準じる。

（サ）[sa]　[s]は舌のさきが上あごのいちばん手前の部分に近づいて発する無声の摩擦音。

（シ）[ʃi]　[s]とちがい、舌の上面の前の部分が上あごの手前に近づいて発せられる、いわゆる《口蓋化》を起こして発せられる摩擦音。英語のsheのshとちょっと似ているが、くちびるをまるくするようなことはせず、やはり [s]に近い。場合により、《母音の無声化》を起こす。

（ス）[su]　[s] の部分は（サ）に

準じる。以前、東京地方で《ス》の母音に対してくちびるをまるめず、また舌のむしろ前の部分を上あごに近づけて発音する個人があった。これを[ɯ̈]で表す。が、漸次そういう発音は聞かれなくなりつつある。環境により《母音の無声化》を起こす。

《セ》[sè]、《ソ》[so] [s]はサの[s]に準じる。[è] [o]は《エ》《オ》に準じる。

《ザ》[dza] 単なる《サ》の有声音ではない。ていねいに発音すると、舌のさきをまず上歯の根元にあて、破裂させるとともにそれをずらして[z]の位置になおしてから[a]を発する音である。いわば《ヅァ》とも書くべき音である。ただし、語中・語尾のものは、むぞうさな発音では[za]で発音されることもある。

《ジ》[ḍʒi] これも単なる《シ》の有声音ではない。舌のさきをまず上あごの手前の部分に付けて閉鎖を作り、破裂とともに舌のさきをややうしろにずらして摩擦音を出し、次に[i]に移る音。カナで書くならば《ジ》より《ヂ》がぴったりの音。

《ズ》[dzu] [dz]の部分は《ザ》の[dz]の部分に準じる。したがってカナで書いたら《ズ》よりむしろ《ヅ》と書いた方がぴったりの音。これも《ス》《ツ》と同様に以前には[dzɯ̈]で発音する個人があった。

《ゼ》[dzè]、《ゾ》[dzo] [dz]の部分は、《ザ》に準じる。《ヅェ》《ヅォ》と書いた方が実はふさわしい音。

《タ》[ta] [t]は舌のさきを上歯の根元のあたりに付けて発する無声の破裂音。

《チ》[ṭʃi] [ṭ]は、[t]に似て舌のさきと上あごの手前の部分との間で作られる無声の破裂音。つまり[t]の口蓋化(こうがいか)した音である。[tʃ]はその音から《シ》の子音の[ʃ]に移行する破擦音。環境により母音が無声化する場合がある。

《ツ》[tsu] [ts]は《タ》におけると同じような[t]の音から、《ス》の音に移行する破擦音。東京では、《ス》の場合同様、母音の部分を発音するときに[ɯ̈]の音で発音する個人もあった。環境により、母音が無声化することがある。

《テ》[tè]、《ト》[to] 《タ》の[t]に似た音と、[è] [o]との結合。

《ダ》[da]、《デ》[dè]、《ド》[do] [d]は[t]の有声音。《タ》《テ》《ト》に準じる。

《ナ》[na] [n]は舌のさきを前歯の根元あたりに付けて発する鼻音。

（ニ）[ɲi]　[ɲ] は [n] とちがい舌の前の部分を上あごの手前の部分に付けて閉鎖を作った鼻音。つまり（n）の口蓋化（こうがいか）した音。

（ヌ）[nu]、（ネ）[nȇ]、（ノ）[no]　子音の部分は（ナ）と同じ。

（ハ）[ha]　この場合の [h] の部分は、[a] を発音する口構えを作るに先立ち、舌の上面の奥の部分と上あごのいちばん奥の部分とをせばめて作る摩擦音。したがって[h]という発音記号は、子音化した [ḁ] で表記した方が正確だと言われる。たとえば、神保格著『国語音声学綱要』83～84ページ、国語学会編『国語学辞典』の992ページを参照。

（ヒ）[çi]　[ç] は [i] より、舌と上あごとの間をもっと狭くして発する無声の摩擦音。子音化した [i̥] と考えてもいい。場合により、母音が無声化する。東京の人の（ヒ）は、京都・大阪の人の（ヒ）より舌と上あごのすきまが狭く、摩擦のひびきが激しい。いわゆる江戸っ子の発音ではそれが極端になり、[ʃi] との間に混同を起こすことは有名である。

（フ）[Φu]　[Φ]は両唇間の無声の摩擦音。子音化した [u̥] と考えてもいい。場合により、母音が無声化する。

（ヘ）[hȇ]　[h] の部分は、（エ）の口構えより舌の上面と上あごとの開きをもう少し狭くして発する無声の摩擦音。子音化した [ȇ̥] と言ってもいい。

（ホ）[ho]　[h] の部分は、（オ）の口構えより、舌の上面と上あごとの開きをもう少し狭くして発する無声の摩擦音。くちびるのまる味の加わった一種の [x] であるが、子音化した [o̥] と言ってもいい。

（バ）[ba]、（ビ）[bi]、（ブ）[bu]、（ベ）[bȇ]、（ボ）[bo]　[b]は上下のくちびるを閉じて発する有声の破裂音。（ビ）の場合でも特に口蓋化（こうがいか）することはない。

（パ）[pa]、（ピ）[pi]、（プ）[pu]、（ペ）[pȇ]、（ポ）[po]　[p]は上下のくちびるを閉じて発する無声の破裂音。（ピ）の前でも口蓋化（こうがいか）はしない。（ピ）（プ）は、場合により、母音が無声化する。

（マ）[ma]、（ミ）[mi]、（ム）[mu]、（メ）[mȇ]、（モ）[mo]　[m]は上下のくちびるを閉じて発する鼻音。（ミ）の場合でもその調音位置は変わらない。

（ヤ）[ja]　[j]は[i]の音よりも、やや舌と上あごとの間を狭くして発する有声の摩擦音。もっとも [i] で発音してもいいから、[i̯a] と表記してもいい。

（ユ）[ju]　[j] は（ヤ）の場合に同じ。むぞうさな発音で[ju]全

体がしばしば、[i]に近く発音される。

《ヨ》[jo]　[j]は《ヤ》の場合に同じ。

《ラ》[ra]　子音の部分の発音にはずいぶん個人差がある。側面音の[l]を用いる人、いわゆる巻き舌の音の[r]を用いる人もいるが、服部四郎氏によれば、標準的な発音法は語頭と語頭以外とで異なり、《ラジオ》のような語頭では舌のさきとそれに続く舌の下側の面とが上歯のうしろの付近にふれて発音されるゆるい有声の閉鎖音であり、《カラス》のような語中では語頭の[r]と同じ位置で発音される有声のはじき音――舌のさきが、歯ぐきあるいはその付近にむかってはじくような運動をただ一回いとなむ音である。服部四郎著『音声学』(岩波全書)の54ページおよび94ページを参照。

《リ》[ṛi]子音の部分[ṛ]は《ラ》の[r]とちがって[l]であることはまれである。語頭で弱い破裂音、語頭以外ではじき音になることは《ラ》の[r]と同様であるが、次の[i]に引かれて、口蓋化(こうがいか)を起こし、舌の上面の前の部分が上あごの方に持ち上がる。

《ル》[ru]　[r]は《ラ》の子音に準じる。語頭と語頭以外とで異なることも同じ。ただし、側面音になることは少ない。舌のさきがぶつかる上あごの場所は《リ》の場合よりは奥、《ラ》の場合よりは手前になる傾向がある。

《レ》[rè]　《ラ》の子音に準じる。語頭と語頭以外とで異なることも同じ。個人により側面音の[l]になったり、いわゆる巻き舌の音の[r]であったりする。舌のさきは《ラ》の場合よりも上あごの手前、《ル》の場合よりは奥のあたりにぶつかる傾向がある。

《ロ》[ro]　[r]の部分の発音は《ラ》《レ》に準じる。個人により、側面音の[l]になったり、いわゆる巻き舌の音の[r]になったりする。また多くの人の場合、語頭では弱い破裂音に、語頭以外でははじき音になり、両方の場合を通じて舌のさきのぶつかる上あごの場所は、《ラ》の場合よりもっと奥である傾向がある。

《ワ》[wa]　[w]は上下のくちびるの間を狭くして発せられる有声の摩擦音。ただし、摩擦が少なく、母音の[u]と同じ音で発音されることも多いから、[u̯a]と表記してもいい。

このほかに特殊な直音節として《ツァ》[tsa]と《ウォ》[wo]がある。《ツァ》[tsa]は、オトッツァン[おとっつぁん＝父親]のような俗語だけに使われ(外来語は3.参照)、《ツ》

の子音に母音[a]がついた拍である。
《ウォ》[wo]は、「こわい（剛）」に「ございます」をつけた「剛うございます」というような場合の第2拍や、文章語「加うるに」の第2拍に現れることがあるが、これをただの《オ》[o]で発音する人も多く、標準的な拍とは見なされていない。

(2)　拗音節に属するもの

(キャ)[ķja]、(キュ)[ķju]、(キョ)[ķjo]　《キ》の子音である口蓋化した[ķ]の位置から[j]を経て、母音[a][u][o]に移動する音。《キュ》は用例が少なく、そのあとには多くは引く音が来る。

(ギャ)[ġja]、(ギュ)[ġju]、(ギョ)[ġjo]　《キャ》《キュ》《キョ》の子音が[ķ]であると同様に、[ġ]は[g]の音が口蓋化して変わったもの。《ギュ》は用例が少ない。

(ギ゚ャ)[ŋ̇ja]、(ギ゚ュ)[ŋ̇ju]、(ギ゚ョ)[ŋ̇jo]　《キャ》《キュ》《キョ》の[ķ]同様、[ŋ]の口蓋化した[ŋ̇]を子音とする。[カ゚][キ゚][ク゚][ケ゚][コ゚]と同様に、語頭には来ない。《キ゚ュ》は中でも用例が少なく、《スイキ゚ュー》(水牛)のように次に引く音が来る位置にしか来ない。

(シャ)[ʃa]　《シ》の子音[ʃ]に母音[a]がついたもの。拗音節の中では用例が多い。

(シュ)[ʃu]　《シ》の子音[ʃ]に母音[u]がついたもの。ウ列の拗音の中では最も用例が多い。ただし、環境により、無声化することがある。次に一般の直音節またはつめる音が来ると、東京の方言では《シ》に変化する傾向がある。例、「静粛」「輸出」。

(ショ)[ʃo]　《シ》の子音[ʃ]に母音[o]がついたもの。拗音節の中では用例が多い。

(ジャ)[ḑʒa]　カナ書きから考えれば、また歴史的に見ても[ʒa]であってよいはずであるが、《ザ》《ジ》が[za][ʒi]ではなく、[dza][ḑʒi]であるのと同様に、はじめに[d]がはいって、破擦音であるのが標準的な発音である。つまり、カナで書けば《ヂャ》と書く方がふさわしい。[ḑ]は口蓋化した[d]のこと。拗音節の中では用例は多い。

(ジュ)[ḑʒu]　《ジャ》と同様に、[ʒu]ではなくて、[ḑʒu]である。東京の方言では、次に一般の拍やつめる拍が来る場合には、《ジ》[ḑʒi]に転化する傾向がある。例、「算術」「新宿」など。

(ジョ)[ḑʒo]　《ジャ》《ジュ》と同様に、[ʒo]ではなく前に[d]がはいる。

(チャ)[ţʃa]　《チ》の子音である破擦音[ţʃ]に母音[a]がついたもの。

(チュ)[ţʃu]、(チョ)[ţʃo]　《チャ》の子音と同じ子音[ţʃ]に母音[u]

がついたもの。《チュ》の場合は次に来る拍は原則として引く拍である。

《ニャ》[ɲa]、《ニュ》[ɲu]、《ニョ》[ɲo]　《ニ》の子音[ɲ]に母音[a][u][o]がついたもの。《ニュ》は用例が限られている。

《ヒャ》[ça]、《ヒュ》[çu]、《ヒョ》[ço]　《ヒ》の子音[ç]に母音[a][u][o]がついたもの。《ヒュ》は用例がきわめて少なく、地名の「日向」のほかには、「ヒューヒュー（風が吹く）」という擬音語ぐらいしかない（外来語は3.参照）。

《ビャ》[bja]、《ビュ》[bju]、《ビョ》[bjo]　《バ》《ビ》……の子音から[j]を経て、[a][u][o]に至る音。《ビュ》の用例は位置が限られており、きわめて少ない（外来語は3.参照）。

《ピャ》[pja]、《ピュ》[pju]、《ピョ》[pjo]　《パ》《ピ》……の子音から[j]を経て、[a][u][o]に至る音。《ピュ》の用例はきわめて少なく、「ピューピュー（風が吹く）」以外にはない（外来語は3.参照）。

《ミャ》[mja]、《ミュ》[mju]、《ミョ》[mjo]　《マ》《ミ》……の子音から[j]を経て[a][u][o]に至る音。《ミュ》の用例はきわめて少なく、知られているものは、「大豆生田」（オーマミューダ）という姓ぐらいしかない（外来語は3.参照）。

《リャ》[rja]、《リュ》[rju]、《リョ》[rjo]　《リ》の子音[r]から[j]を通って母音[a][u][o]に移るもの。《リュ》は用例が少ない。

このほかに、標準的でないものとして、《チェ》[tʃè]があり、さらにもっと標準的でないものに、《シェ》[ʃè]がある。《チェ》は「残念だ」という気持を表す感動詞「チェッ」に現れる。《シェ》はひところ、子どもが漫画のまねをして驚きを表す「シェー」に現れたが、今は使われなくなった（外来語は3.参照）。

(3)　特殊の拍

《ン》[m][n][ŋ]……等。

いわゆる、《はねる音》であるが、この音は、次の音が発音されるそのままの口構えで声を鼻から出す音で、したがって次の拍の音によってさまざまに異なる。マ行音・バ行音・パ行音の直前では[m]になり、ナ行音・タ行音・ダ行音・ザ行音の直前では[n]になり、カ行音・ガ行音・カ゜行音の直前では[ŋ]になるのをはじめとして、ラ行音や《ニ》や《ジ》の拍の前では[ɲ]の音に、《キ》《ギ》《キ゜》の拍の前では[ŋ̇]の音に、サ行音・ヤ行音や《イ》《ヒ》の拍、および《エ》《ヘ》の拍の直前では[Ĩ]またはそれに近い鼻母音に、ワ行音・《ウ》《ア》《ハ》《オ》

《ホ》の直前では、[ũ] またはそれに近い鼻母音に変わる。「何々さん」のように、語末に来た場合はこれらに対し、[ŋ] よりもっと奥の部分で閉鎖が行われる鼻音で発音され、これは、佐久間鼎氏はnに修飾をつけた記号で表し、有坂秀世氏は、ɴ という記号で表した。これは、口形が日常自然の位置へ復帰していく過程の形と見られる。《ン》の音が、語頭に来る場合の例としては、ンマ（馬）・ンメ（梅）など、マ行の拍の直前に来る場合が有名で、これらは破裂のない [m]で発音されるが、これらの単語は、ウマ・ウメと書かれることが原因で、改まった発音では文字に引かれて [u] に発音する人が多くなってきた。

《ッ》[p] [t] [k] [s] ……等。

いわゆる《つめる音》であるが、次に来る子音が発音されようとするその状態のままで、1拍分息をこらえる音である。したがって口構えは次の拍の子音によって異なり、パ行音の前では破裂のない [p]、タ行音・ツァ行音の前では[t]、ただし、《チ》の拍の前では[ṭ]、カ行音の前では [k] または [ḳ]、サ行音の前では「s」、ただし、《シ》の拍の前では「ʃ」となる。語末に来たときは、浜田敦氏は [t] になると言ったが、服部四郎氏は喉頭の閉鎖音になると言うというように個人差があるらしい。この拍は、《はねる音》とちがい、限られた拍の直前にしか来ず、語頭にも来ない。《はねる音》の次にも来にくいが、「ロンドンっ子」《ロンドンッコ》のような例もある。

《ー》[a] [i] [u] [ẽ] [o] 等。

普通に《長音》と呼ばれるが、長音とは、《コー》とか《ソー》とかいう2拍分を言う術語で、ここは、《コー》《ソー》から《コ》《ソ》を除いた，《ー》で表される部分だけを言うので、「引く音」と呼ぶ方が適当である。直前の母音を1拍分引いて発するので、《カ》《サ》《タ》……のあとでは [a] の音が、《キ》《シ》《チ》……の拍のあとでは [i] の音がひびく。したがって、「里親」《サトオヤ》と「砂糖屋」《サトーヤ》とは、ほとんど同じ音になってしまうが、理論的にはちがうはずである。呼応《コオー》と好悪《コーオ》のような例は、誰でも言い分けている。引く音は、《はねる音》や《つめる音》の直後には来ず、もちろん語頭にも来ない。

3．以上あげた111種の拍、特殊なものを入れて115種の拍は、和語または漢語に見られる拍の種類である

が、明治以後輸入された外来語、やかましく言えば洋語の類には、以上のほかにちがった拍も見られる。おもなものは次のようである。

(ジェ) [d̥ʒè] 例、 ジェスチャー
(ティ) [t̥i] 例、 ティーパーティー
(トゥ) [tu] 例、 トゥーストライク
(ディ) [d̥i] 例、 ディーゼルエンジン
(デュ) [d̥ju] 例、 プロデューサー
(ファ) [Φa] 例、 ファースト
(フィ) [Φi] 例、 フィルム
(フェ) [Φè] 例、 フェルト
(フォ) [Φo] 例、 フォックストロット
(イェ) [jè] 例、 イェール
(ウィ) [wi] 例、 ウィンブルドン
(ウェ) [wè] 例、 ウェリントン
(ツェ) [tsè] 例、 ツェツェバエ
(ツォ) [tso] 例、 スケルツォ
(クァ) [kwa] 例、 クァルテット

このほか、《ヴァ》[va]、《ヴィ》[vi]、《ヴ》[vu]、《ヴェ》[vè]、《ヴォ》[vo]、あるいは《スィ》[si]、《ズィ》[dzi]も一部の人に行われているが、一般的ではない。先に問題になった《ツァ》[tsa]、《ウォ》[wo]、《シェ》[ʃè]、《チェ》[t̥ʃè]の拍は外来語では無視できない地位を占めている。《ヒェ》《テュ》などの拍も遠からずしっかりした存在になるであろう。

(4) 清音と濁音

日本語の拍について注意すべきものに、清濁の対立ということがある。

清音
カ・キ・ク・ケ・コ
サ・シ・ス・セ・ソ
タ・チ・ツ・テ・ト
ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ

濁音
ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ
ザ・ジ・ズ・ゼ・ゾ
ダ・(ヂ)・(ヅ)・デ・ド
バ・ビ・ブ・ベ・ボ

(鼻濁音)
カ゚・キ゚・ク゚・ケ゚・コ゚

(半濁音)
パ・ピ・プ・ペ・ポ

清音と濁音とは、原則として口の中の同じ場所で調音する。

一対の音で、清音は無声子音、濁音は有声子音をもつ拍である。

ただしカ行音には、清音のほかに、鼻濁音があり、現れる場所がちがう。サ行音の濁音は、音声学的には《ヅ

ァ》・《ヂ》・《ヅ》・《ヅェ》・《ヅォ》の発音になっている。タ行音の場合は、《チ》・《ツ》の濁音はサ行の《ジ》・《ズ》の音と同じになっている。ハ行音は最も複雑で、清音はほんとうは《パ》・《ピ》・《プ》・《ペ》・《ポ》の音であったはずであるが、これは半濁音と呼ばれ、《ハ》・《ヒ》・《フ》・《ヘ》・《ホ》というまったくちがう音に席を譲っている。これは音声学的には《ア》・《イ》・《ウ》・《エ》・《オ》の清音というべきもので、これは、今のハ行拍は、古い時代にはパ行の拍だったという歴史があることによる。

同じ対をなす清音の拍と濁音の拍とは、単語によってはどっちを使ってもいいこともあり、「端」はハシとも言い、ハジとも言う。「難しい」はムズカシイとも言い、ムツカシイとも言う。昔はことにこの区別はのんきで、正式な文章には濁音を表す濁点(゛)を書かなかったくらいである。

今ある清音ではじまる語根の前に、何かほかの語根がついて一語を作る場合、濁音に変化することがあり、《連濁》と呼ばれるが、連濁はしないでもよく、してもいい単語は少なくない。「川田」という名字の人は、カワタさんともカワダさんとも呼ばれる。ハ行音はまた難しい変化があって、バ行音になるもの、パ行音になるもののほかに、ワ行音になるものもあり、これは判定に迷うことがある。鳥の数を数えるイチワ・ニワ・サンバ・シワ・ゴワ・ロッパ……ジッパなどはその例である。

第3章　共通語のアクセント

第1節　アクセントとは

1.　《アクセント》ということばはずいぶん大衆化したものだ。音楽の分野で、ある個所を強く歌うことを“アクセントをつけて”と言うことは早くからの習慣であるが、戦後では美術・服飾の分野での愛用語になった。“アクセントのないぼやけた作品”“えりもとにアクセントをつけて……”のような言い方は、映画雑誌・婦人雑誌の記事に毎号のように見られ、アクセントということばが「全体にまとまりを与える重要な部分」という意味に使われている。東京の盛り場にはアクセント・パーラーという店が現れて、店内には最近流行の化粧を施したマネキン人形を飾り、アクセントというＰＲ雑誌さえ出すに至った。

言語の分野で《アクセント》というときには、もちろんこれと同じ意味ではない。言語学でいうアクセントを定義すれば、《個々の語句についてきまっている高低または強弱の配置》ということになる。“個々の語句について”という点と、“高低または強弱”という点については、少し詳しく説明しよう。

2.　“個々の語句について”と

限定するのは、個々の語句についてきまっているのではない高低強弱の配置というものがあるからである。はじめに個々の語句についてきまっている高低変化の例をあげるならば、たとえば、日本語の「雨」と「飴」とは同音語であるが、東京では、これを音の高低配置のちがいで区別する。すなわち、アを高くメを低く言えば“雨”の方になり、アよりメを高く言えば“飴”の方になる。この高低配置は個々の語句についてのきまりであって、「箸」と「橋」のちがい、「肩」と「型」のちがいも同様である。これらはこれらの単語のアクセントである。

これに対して、個々の語句についてきまっているのではない高低強弱の配置というものはどんなものか。たとえば、「雨」という一つの語句は、いろいろの場面・文脈によっていろいろな高低配置をもって使われている。今、家の2階にいた夫が戸外に急に降り出した雨の音に気がついて、“雨！”と叫んだ。階下にいた妻がそれに対して、庭の洗濯物を心配して“雨？”と問い返した。夫がそれに対してもう一度“雨。”と答えたとする。この場合、同じ「雨」ということばが3回くり返されているが、その高低の配置は3回ともはっきりちがう。

最初の夫の“雨！”はいわば発見警告の叫びである。この時は、アもメも高く発音される。メはアよりは低く発音されるが、それでもその人の声の普通の水準よりは高く発音され、したがって高いままで声が終わったという感じがある。発見警告という行為は、全然発言を予期していない人に対し発するのであるから、相手に強い刺激を与える必要があり、そのためには高い調子の発音が望ましい。次に妻の“雨？”は、アは特色をもたないが、メはアよりいったん下がったあとで上昇のカーブをとり、いちばん高くなったところで声が切れるという変わった形をとる。これは問いかけの調子であるが、この調子の特異性はだれにでも容易に気づかれるであろう。

次に2回目の夫の発言“雨。”は、問いに対する答えである。この場合は“雨？”のような特殊なフシがないので最初の発見警告の“雨！”とちょっと似て聞こえるが、やはりちがう。発見警告の“雨！”とちがい、メの下がり方が大きい。発見警告の場合にはメはアよりわずかに下がるだけ——音楽でいったら2度ぐらいでもいいが、この答えのときには、音楽でいう1オクターブは優に下がる。そうして、声帯は休止の状態に近づくので、聞いた感じはいかにも安定した、一つの発言が終わったという印象を与える。

これを要するに「雨」という一つの単語が、その場面その場面により、

ちがった高低配置をもって発音される。これは、断じて「雨」という単語についてきまっている高低配置ではない。「雨」という単語を使う人のその時の心理を反映した高低配置である。こういうものは高低配置であってもアクセントとは呼ばれない。《イントネーション》と呼ばれている。アクセントに対して“個々の語句について”という限定を加えたのは、イントネーションとのちがいをはっきりさせるためである。

アクセントとイントネーションとのちがいは、個々の語についてであるとかないとかいうにはとどまらない。たとえばイントネーションの方には、どういう内容はどういう高低変化で表すかということに対して合理的な結び付きがあるという特色がある。発見警告のイントネーションは、全体を高く言い、高いままで終わる。そういう曲調が何の予期もしない人に対する曲調として有効であることは前に述べた。次の問いかけのイントネーションが上昇調であり、断定のイントネーションが下降調であるのも合理的である。これは、われわれにとっていちばん自然な調子は、はじめと終わりが低く中間が高いものである。赤んぼうがオギャアとウブ声を上げるときには、どんな赤んぼうでも、オを低く、ギャを高く、アをまた低く言う。声帯は休止の状態にはじまり、また休止の状態に返ることを思えば、はじめと終わりとが低くなるのが自然であることは明らかである。

ところで問いかけというのは次に相手の発言を求める行為である。相手は特に発言したくないかぎり、だまってこっちの言うのを聞いているのかもしれない。問いかけという行為はそういう相手の態度を変えさせようとする試みである。そのためには、何か相手の耳を刺激して相手の発言を促したい。その手段として用いられる方法が、低く下がって終わるだろうと期待される末尾を、ぐっと上げてきわだたせる発音である。断定のときは、特に相手の発言を求めるわけではない。したがって、下降する声の自然の勢いをそのまま実現させることになる。イントネーションの曲調はこのように、内容に対してきわめて自然的・合理的な結び付きをもっている。アクセントはこうではない。

「雨」と「飴（あめ）」に対して、なぜ「雨」はメを下げるか、「飴（あめ）」はメを上げるか、その説明を求めることは無理である。理屈をこのむ人は、「雨」は空から降るから下降調に言うのだと言うかもしれない。が、そういう理屈は通らない。「雪」も上から降るが、キがユより高く発音される。したがって、「飴（あめ）」は将来、値が上がるからメが上がるのだというようなのも、でたらめだ。アクセントはそういう

わけで内容に対して自然的・合理的ではない。特に不合理に出来ているとは言えないが、少なくとも合理的に出来ているというようなものではない。

イントネーションは内容に対して合理的であるため、どこの国語でもだいたい同じような内容は同じような曲調で言う傾向がある。問いかけ調はどこの国語でも上昇であり、断定調はどこの国語でも下降調が普通である。このため、イントネーションでは特にこれが正しいイントネーションだというようなことはあまり言われない。

アクセントは国語がちがえばもちろんのこと、方言がちがうだけでも大きくちがう。日本で東京方面と京都・大阪方面で同じ単語のアクセントが大きくちがうことは著名なことで、この本でも平山輝男氏の記述に見えるとおりである。したがって、アクセントにおいてはこの国語での正しいアクセントがこうだという規範がやかましく問題にされる。

アクセントにおいて、内容と形式との間に合理的な結び付きがないということは、アクセントの価値をそれだけ弱めるように思う人があるだろうか。思う人があったら、それはまちがいである。なぜならば、合理的な結び付きがないことこそ言語の本体であり、そのためにこそ言語のはたらきが今日のような偉大な発達を遂げるに至っているからである。

早い話が、われわれは「雨」を《アメ》すなわち《ア》という拍と《メ》という拍とを並べて表現する。これはこの音の配列がいちばん合理的であるためかというと、決してそうではない。その証拠に英語では「雨」をレインと言い、フランス語ではプリュイと言い、中国語ではユィーと言う。日本人が「雨」を《アメ》という音で表すのは、別に、《ア》という音と《メ》という音の組み合わせが「雨」の内容を最もよく表すから、というわけではないことを知るべきである。スイスの言語学者のソシュールは、言語に見られるこの性格をさして、“言語は恣意(しい)的(arbitraire)だ”と言ったが、言語は恣意(しい)的なればこそ、われわれはこれをもって森羅(しんら)万象は言うに及ばず、いやしくもわれわれの念頭に浮かぶものごとすべてをなんとか命名できたのである。もし言語が内容に対して自然的・合理的にだけ出来ていたら、それはサルの叫び声のようなもので、《ニトサンオタストゴニナル》というような簡単な表現さえ不可能であったろう。人類がこの地上に輝かしい文化を築き上げることができたことについては、言語のはたらきを原因の一つに数えるのが普通であるが、言語のはたらきということは、同時に言語の恣意(しい)性のはたらきと言うべきである。この意味でアクセントが内容に対し

て自然的・合理的でないということは、つまり、ソシュールの術語を使えば恣意的なのであって、結局は言語的・人間的なのである。一方イントネーションが合理的・自然的であるということは、イントネーションは前言語的であり、生物的であることを表す。恐らく、言語が発明される以前から人間の叫び声にまつわりついたものが残存しているのだと言ってもいいのかもしれない。

3.　アクセントを規定して“個々の語について……”と言ったことの説明は以上で終わるとして、“高低または強弱の配置”といったことについて。“高低または強弱”とふたまたかけた表現をしたのは、言語によってちがいがあり、ある言語では単語についてきまっているものが高低の配置であり、ある言語ではそれが強弱の配置であるというようになっているからである。

日本語はそのうち、高低の配置がきまっているほうである。《アメ》という拍の連結が「雨」を表すか「飴」を表すかは、《ア》を高くするか、《メ》を高くするかによってきまり、《ア》を強くするか、《メ》を強くするかによってきまるのではない。前項で“雨！”という発見警告の表現と“雨？”という返答期待の表現において、前者は全体が高調であり、後者は語尾が上がるということはあったが、ともに《ア》から《メ》へ一度下がるという点は欠くことができなかった。つまり、どのようなイントネーションが加わっても、「雨」という単語は《ア》を高く《メ》を低く発音するというきまりがある。つまり、高低に関するきまりがあるわけである。

これに対して、英語などでは単語が強弱に関するきまりをもっている。たとえば、“permit”という単語は「許可」という名詞としての意味と「許可する」という動詞としての意味をもっているが、そのいずれであるかは、perの部分を強く発音するか、mitの部分を強く発音するかによってきまる。perを高くするか、mitを高くするかによってはきまらないという事実がある。したがって、もし、“許可？”という問いかけ調で“permit”という単語をアメリカ人が使うならば、perよりmitの部分があっさり上がってしまって、日本語の“雨？”において《ア》からいちおう《メ》に下げて言うような手数はとらないからである。この結果、“許可だ”と肯定的に言うときのように、mitをperより低く言うのとはまったく反対の高低配置になるわけで、日本語とは大いにちがう。これはpermitという単語には高低の配置に関するきまりが存在しないことによる。

日本語と英語とでは事情がこのようにちがう。しかし、ちがうけれども、一方に《ア》を高く言うとか《メ》

を高く言うとかいうきまりがあり、一方にはperを強く言うとかmitを強く言うとかいうきまりがあるわけで、単語についてきまりがある点では同一である。“高く言う”“強く言う”この二つを抽象すると、“きわだたせて言う”と言うことができる。そこで、今、《日本語にも英語にも個々の語句について、どこをきわだたせて発音するかというきまりがある、それをアクセントと言う》と規定することができる。《きわだたせ》ということばが誤解を起こさないならば、アクセントを規定してそう言ってもいい。ただし一方は高低のきまり、他方は強弱のきまりということは、はっきり心得ていなければならぬ。そこで日本語のアクセントは《高低アクセント》であり、英語のようなアクセントは《強弱アクセント》であるというように言う。

第2節　日本語のアクセント

1.　日本語のアクセントは、高低アクセントである。強弱アクセントではない。日本語には強弱アクセントはない。

《日本語に強弱アクセントはない》という言い方はあるいは誤解を招くかもしれない。《われわれは日本語を話しながら、ちゃんと強弱の変化をつけているではないか？》と言う人がありそうだ。

日常の日本語の会話に強弱の変化があることは明らかな事実である。

“こんなところに落書きしたやつはどこのだれだ！”というようなことばを興奮して言うときには《ドコ》の《ド》、《ダレ》の《ダ》は強く発音される。しかしそれは興奮して言っている、その人のそのときの感情がそこへ露呈したまでのことだ。興奮しないで、平静な調子でしゃべっているときは、《ドコ》の《ド》、《ダレ》の《ダ》は別に強く言わない。つまり、「どこ」という単語には、《ド》を強く発音するというきまりはないのだ。したがってそれは「どこ」ということばのアクセントと見ることはできない。英語で“permit”(許可)という語のperを強く言うのは、別に興奮していないときでも、そのように言うわけで、日本語の場合とははっきりちがう。日本語では感情がこもるときに、あるいは、そこが大切だというときに限って、それを強く言う。大切な部分を強く言うことは《プロミネンス》という。

同様に、英語には強弱アクセントがあるが、高低アクセントはないと言われる。これも日常の英語に高低変化がないという意味ではない。朗らかな気分のときには上がり下がりが激しくなるし、あるいはイントネーションの加減で相手に問いかけるときは、ことばの最後が上がる。これは個々の語についてきまっている高低変化ではないので、アクセント

と言わないだけのことである。

2.　とにかく日本語のアクセントは高低アクセントである。高低アクセントの日本語はどういう性格を有するか。一般的に言って、日本語の高低アクセントは、高低アクセントとしては、比較的単純な性格をもつと言える。日本語のアクセントは方言によっていろいろ違いがあり、京都・大阪のアクセントなどは東京のアクセントよりよほど複雑であるが、それでも外国の高低アクセントよりはよほど単純だ。単純だということは、《アクセントの《段》の数が少ないということ》と、《高さの変わりめは原則として一つの拍から次の拍へ移る間だけに行われる》ということとによるもので、結局《型》の種類が少ないということになるが、このことを言う前に、アクセントの本質について少し述べておかなければならない。

第1節の**3.**でわたしはアクセントは《高低変化についてのきまり》だと述べた。《高低変化のきまり》はもっと詳しく言うと、《相対的な高低変化のきまり》である。「雨」は《ア》が高いと言って、その《ア》の高さは1秒間の声帯の振動数がいくらぐらいだとか、ハ調のラでなければいけないとかいうようなきまりはない。また、《ア》が高く《メ》が低いといって、その開きは1秒間の振動数が1倍半になるとか、音楽でいう4度の音程だとかいうようなきまりもない。要するに、《メ》が《ア》より低ければいいというはなはだ大ざっぱなきまりである。

「飴（あめ）」の《ア》が《メ》より低いというのも同様で、どのくらい上がらなければいけないというきまりはない。この場合などは「雨」の発音よりもっとルーズで、《メ》が《ア》より下がりさえしなければいいとさえ言えるほどである。

要するに、アクセントにおける高いとか低いとかいうものはきわめて漠然としたものである。「雨」の《ア》を高、《メ》を低と呼び、「飴（あめ）」の《ア》を低、《メ》を高と呼ぶというようにしていくと、日本語のすべての単語のアクセントは/高/と/低/の組み合わせだということになる。どんな長い単語でも――たとえば「アメリカ合衆国」といった単語でも《ア》が/低/、《メ・リ・カ・ガ・ッ・シュ》の6拍が/高/、《ー・コ・ク》の3拍が/低/である。この/高/とか/低/とかいうものは、音韻の面でいう《音素》に該当する、音調の面での単位である。これは《段》と呼ぶ。また《音素》にまねて《トネーム》(toneme)すなわち《調素》と呼ぶこともある。日本語の調素は/高/と/低/の二つしかない。これは共通語でも各地の方言でも同様である。これは数が少ないと言うべきである。日本語で《段》の数が少ないことは、日本語に音素

の数が少ないことと対応している。

もっとも《段》の数は、元来外国語でもそれほど多くない。中国語でも北京官話や上海語では日本語と同じく/高/と/低/の2段しかない。しかし、広東語となると/高//中//低/の3段である。タイ語も3段ある。D.ジョーンズの“フォネーム”(Phoneme)やK.L.パイクの“音調言語”(Tone Language)によると、スーダン地方のアフリカの住民の言語や北アメリカの住民の言語にも3段の言語があるようだ。メキシコのマザテコ語のごときは、/最高/・/高/・/低/・/最低/の4段があるというが、私が調査したところでは、中国雲南省に住む少数民族・サニイ族の言語のアクセントには、/最高/・/高/・/中/・/低/・/最低/の5段階の区別があった。これが高低アクセントの最も発達した言語と言うべきであろう。

次に日本語に戻ると、「雨」のアクセントは《ア》が/高/、《メ》が/低/で、/高/から/低/に移るところは《ア》という拍と《メ》という拍との境目である。高さは一つの拍から他の拍へ移るところで変わる。「飴（あめ）」も高さが変わるところは拍と拍との境目だということでは、「雨」と同じである。このことは《ア》とか《メ》とかいう一つ一つの拍は、/高/とか/低/とかいうたった一つの調素から出来ているということである。一つの拍が一つの調素から出来ている――これは日本語のアクセントの大きな特色である。このことは共通語にも方言にもあてはまる。わずかに近畿地方の方言――たとえば京都・大阪の言葉では、「雨」の《メ》は、下降調でつまり/高/という調素と/低/という調素の複合である。しかしこういうのは例が少ない。いくら京都・大阪でも、「雨」の《ア》は/低/の調素だけから出来ているし、「飴（あめ）」の方は《ア》も《メ》も/高/の調素から出来ているというふうになっている。日本語では、原則として1拍1調素であり、そのために段の変化は拍から拍に移るところに起こるのが原則である。このことは一つ一つの拍がアクセントの点で単純であることを示すもので、前章に述べた、一つ一つの拍が音声の面から見て構成が単純だというのと揆（き）を一にする。

日本語のように段が2種類で、しかも一つの拍についての段が一つに限るというのは、実は《強弱アクセント》に見られる性格である。強弱アクセントの言語では、段は強弱の2種類だけであり、一つの拍の中で、強から弱に変化するということはない。この意味で日本語のアクセントは、高低アクセントでありながら、強弱アクセントのような性格をもつ、ということは言ってよい。

以上のようでアクセントというものは、/高//低/あるいは/強//弱/の組

み合わせである。組み合わせの材料である段は二つ～四つであるが、とにかくこれは有限である。またその組み合わせも言語によっては、/最低・高・低/のような複雑なものがあったとしても、無限に複雑なものがあるわけではないから、とにかくこれも有限である。

有限なものが有限の組み合わさり方をして出来たものは結局有限のはずで、したがってある言語のある拍数の語を集めてみればそこに見られるアクセントの型の種類というものは有限のはずである。日本語のような段が2種類、そうして一つの拍において段の組み合わせられることがない、というような言語は特に有限であることが明りょうで、たとえば2拍語には、

/高高/型　/高低/型
/低高/型　/低低/型

の4種類が代表的なもので、ほかに限られた方言において

/低高低/型や/高高低/型
/低高低/型　/低低高/型

などがあるにすぎない。

もし、一つの方言――たとえば共通語でもいい――をとってそこに存在する型の種類を調べてみると、この全部をもっているものはほとんどなく、このうちのいくつかをもっているにすぎないことがわかる。同じ型に属する語は、音韻の面で言うと、「雨」と「飴(あめ)」のような同音語に相当するものであるが、日本語では型の種類が少ないために、アクセントの同じ語、つまり同型語の数は他国語に比しても著しく多いことになる。

3.　日本語のアクセントは型の種類が少ない。これは一つの特色である。このことと、音韻の面で日本語の拍の種類が少ないということといっしょに考えてみれば、日本語の音韻組織は単純であることを根本的な性質とすると言えるかもしれない。

ただし、日本語の拍の種類が少ないと言っても、日本語のアクセントでは、単独では、まったく同じ型の単語でも、《助詞がつく》とか、あるいは《直後にほかの文節が来る》とかいう場合に、性質のちがいが現れて、それがついた全体の形がちがってくることがあることは注意すべきである。たとえば、東京語で「鼻」と「花」とは単独の場合はともに、/低高/型でちがいない。ところがこれに「が」「を」「に」「と」……のような助詞がつくと、

/低高高/
ハナが　(鼻が)
/低高低/
ハナが　(花が)

のようなはっきりした区別ができる。動詞「吹く」は単独では/高低/型と/低高/型のアクセントをもち、/低高/型の場合は動詞「拭く」と区別がない。しかし名詞がそのあとにつくと、

/低高低低/
フクモノ　（吹くもの）
/低高高高/
フクモノ　（拭くもの）
のように区別が出来る。この「鼻」と「花」、「吹く」と「拭く」とは、そうすると単独では同じ高低配置で発音されるけれども、アクセントの性質からいうとちがうと言わなければならない。この辞典などで「鼻」と「花」、「吹く」と「拭く」とに対して、
ハナ（鼻）　ハナ（花）
フク、フク（吹く）　フク（拭く）
のように表記し分けているのはそのちがいを表す。3拍の単語にも同様な区別があり、「お年」（オトシ）と「落とし」（オトシ）、「鎖」（クサリ）と「腐り」（クサリ）とでは単独では同じであるが、助詞がつくとちがいが現れる。

第3節　共通語のアクセント

1.　共通語のアクセントと言う場合、日本では、現実の東京語のアクセントがそれになっている。この場合は、現実の東京語の音韻が共通語の音韻に擬せられている以上に東京語は優遇されている。アクセントに関するかぎり東京語はよい点も悪い点も共通語として採用されている。

これには当然問題が多い。東京語のアクセントでは、多くの方言で区別のある「雲」と「蜘蛛」の区別がない。「折る」と「織る」の区別がない。音韻の面では、《アノ　シトワ　シドイ　シトダ》というような言い方は、下町ナマリと見られ、いくら東京人の発音でも、共通語の場合には採用されていない。が、アクセントとなると、これは下町ナマリだと言って排斥された例はまずない。こんなふうであるから、特に古い伝統をほこる京都・大阪方面の人たちからは、異論が出るのは当然で、そういう人たちにしてみれば、『古今集』『源氏物語』をはじめとする数々の古典作品を産み出した美しいことばである京阪語をさしおいて、東京語のような成り上がりのことばのアクセントだけを共通語のアクセントとすることはあるまいという考えの出るのはまことに自然である。ことに京都・大阪語のアクセントは東京語ではできないような語の区別をすることがあり、尊重したくなるのは当然である。これはどう考えたらいいか。

2.　京阪語のアクセントが東京語のアクセントに比べて同音語の区別に多く役立っているのは事実である。先の「雲」と「蜘蛛」は言うに及ばず、「川」と「皮」、「恋」と「鯉」なども東京では区別ができないが、京都方面では区別ができる。ことに、「神田」と「新田」、「神米」と「新米」からはじまって「神蔭流」と「新蔭流」に至るまで、「神何々」と「新何々」という一対のことばが見事に言い分けられるのは目をみはるばか

りである。これは、京阪語の方が東京語よりも型の種類が多いためである。そのために京阪語のアクセントは東京語に比べて全体の構造がはるかに複雑である。が、ここに問題がある。

一体アクセントは何のためにあり、どういうはたらきをするものなのであるか。すぐに思いつくことは、同音語のような二つの単語の区別をするのに役立つということだ。「雨」と「飴(あめ)」、「雲」と「蜘蛛(くも)」の場合はそうだ。しかし、アクセントのはたらきはそればかりではない。というよりも、アクセントのもつもっとも大切なはたらきはほかにあるのだ。それは何だろう？

今、東京語のアクセントと大阪語のアクセントの型を3拍の名詞について比較してみよう。助詞のついた形を掲げる。大阪のマッチガの型は類例に乏しいが、まあ数語であるのであげておく。

東　京	大　阪
ノハラガ゜(野原)	ココロガ（心）
ココロガ゜(心)	カガミガ（鏡）
カガ゜ミガ゜(鏡)	サクラガ（桜）
サクラガ゜(桜)	ノハラガ（野原）
	スズメガ（雀）
	マッチガ（燐寸）

型の種類は大阪語の方が多く、東京語には大阪語にあるような○○○○型、○○○○型、○○○○型というようなものがない。なぜないのだろう？　ここに問題がある。東京語の型を検討してみると、この四つの型には次のような法則がはたらいていることが知られる。

第1法則　高いところは1拍か、そうでなければ連続した数拍かである。すなわち、○○○○型とか○○○○○型というような型は存在しない。

第2法則　第1拍が/高/ならば第2拍は/低/、第1拍が/低/ならば第2拍はかならず/高/で、つまり、第1拍と第2拍とは高さがかならずちがう。だから大阪にあるような、○○○○型、○○○○型、○○○○型、○○○○型というような型はないことになる。

このうちで、第1法則の方は大阪語にも見られる性格だから、ここで特に重要視することはない。もっともなぜこういう法則がはたらいているかをたずねてみることは意味がある。なぜ○○○○というような型はないのか。この答えは容易だ。○○○○のような離れた二つの拍が高い曲調を聞くと、全体が一つの単語ではなくて、二つの単語のように受けとられる。アクセントが単語についてきまっている高低配置だとすると、○○○○のようなのは好ましくないのだ。

それでは第2法則の方はなぜ存在するのだろう。これを考えた学者は

故有坂秀世氏であり、かれは『国語音韻史の研究』という本の中でそのナゾを解いている。かれによると、第1拍と第2拍とでかならず高さがちがうというのは、ここがことばのはじまりだということを明示するものだと解した。“ことばのはじまりを明示する”――うまいではないか。つまり、単語がいくつか集まってセンテンスを作る。その場合、どこが新しい単語のはじまりかを知ることは、相手のことばを理解するうえで便利なのにちがいない。東京語のような場合には、“拍の高さが変わった、ホラ、新しいことばのはじまりだ、”と心得ることができるわけで、われわれはふだんいちいちそんなことに心をとめてはいないけれども、これは大きなプラスになっているにちがいない。

ハンガリー語は強弱アクセントの言語だが、この言語では、すべての単語は第1拍を強く発音する。マジャール（ハンガリー）でもブタペシュト（ブダペスト）でも。つまり、アクセントの型はただ一つしかない。第1拍を強く言う型だけだ。したがって、もしアクセントが同音語の区別をするということを役目とするならば、この言語ではアクセントが何の役もなしていないことになる。が、実際はどうだ。たくさんの単語が全部第1拍が強く発音されるとすれば、聞く人にとっていちいち新しい単語のはじまりがわかってこんな好都合なことはなかろう。

第2法則が示す、この語のはじまりを表すはたらき、これを第1法則が示す1語であるということを表すはたらきと総合するならば、アクセントは、ことばのまとまりを示し、ことばの切れ目を表すはたらきをもつと言えよう。アクセントは、同音語の区別に役立つと同時に、ことばのまとまりを示し、ことばの切れ目を表すのだ。事実、次のような同音のセンテンスで、東京語はよくことばの切れ目を示している。

ニワニワニワトリガイル（庭には鶏がいる）

ニワニワニワトリガイル（庭には2羽鳥がいる）

ニワニワニワトリガイル（2羽庭には鳥がいる）

京都・大阪のことばに型の種類が多いというのは、東京語にあるような第2の法則がはたらいていないためである。そのために○○○○型とか、○○○○型というような型が存在している。こんなことから京都・大阪のアクセントは同音語の区別に役立つという点では東京語を上まわるけれども、ことばの切れ目の示すはたらきの点では、東京アクセントをはるかに下まわる。てっとりばやい話が、先の「庭には鶏がいる」というセンテンスは、京都・大阪ではこういうアクセントになる。

ニワニワニワトリガイル

東京アクセントは京都・大阪アクセントに比べて、同音語の区別を示す点ではややおとるけれども、語のまとまりを示すという点で、東京アクセントは京阪のアクセントよりはるかに上であると言える。この点から評価すれば京都・大阪アクセントよりも東京アクセントの方が共通語のアクセントとしてふさわしいものとも言えるのではなかろうか。

考えてみれば、英語などでも同音語の区別にアクセントが役立つことは全体のごく一部である。語のまとまりを示すはたらきの方がはるかに大きい。有名なblack bird（黒い鳥）とblackbird（ツグミ）の例でもそうだ。強弱アクセントの言語は大体こんな調子である。先に、アクセントの形態から言って、日本語のアクセントは強弱アクセントに性格が似ていると言ったが、ここで考察したアクセントの機能の面から言っても、日本語のアクセント――特に東京語のアクセントは、強弱アクセントに似た高低アクセントだと言える。

3.　東京アクセントを共通アクセントとすること、ことに京阪アクセントをさしおいて共通アクセントとすることには、もう一つもっともらしい理由をつけることができる。それは、日本全国のアクセントを調査してみると、東京式のアクセントの方が、京都・大阪式アクセントよりもはるかに広い地域に行われ、多くの人によって使われているということである。その分布状況は平山氏の作製する地図にゆずるとして、概算およそ日本全人口の半数以上が東京式というべきアクセントを使っているのではなかろうか。

であるから、もし、日本語の共通アクセントを一つに選定する場合、《多くの人に用いられているものをえらぶのが民主主義的だ》という理屈をつけるならば、共通アクセントには京阪アクセントではなくて、当然東京のアクセントが採用されることになるわけである。この意味でも東京アクセントは、共通アクセントとしての資格をそなえていると言っていい。

しかし、これは思えば日本人にとって幸運なことだった。明治の世に東京語を標準語の候補に立てた時に、アクセントまでも東京のものが共通アクセントにえらばれる運命にあったわけだった。が、その場合、東京式アクセントが理論的にすぐれたアクセントであるという証明はしてなかったし、また東京と同じようなアクセントが全国の広い地域に分布していることも明らかになってはいなかった。当時の人は、京都・大阪のアクセントは東京アクセントとははなはだしくちがっていたことは知っていたが、その西の中国や九州の入り口に東京と同じ種類のアクセントが

行われているとは夢にも予期していなかった。東京語が標準語ないしは共通語の地位を占めるようになってのちに、全国のアクセントを調べてみたら東京式のアクセントが日本の半数以上の人たちに使われていることがわかったわけである。東京語こそ日本の標準語だと言った上田万年翁の霊も地下でこのことを知ったら、会心の笑みを浮かべているかもしれない。

ただ、細かい点を言うならば、東京語のアクセントは、同じように東京式というべき方言のアクセントに比して、はたして特にすぐれたものと言えるかという点には疑問が残る。たとえば、山梨県や長野県の方言の中には、東京で区別のない「雲」と「蜘蛛（くも）」や「折る」と「織る」の区別をもっているものがある。こういう方言より東京語の方がすぐれているとはちょっと言いかねるであろう。しかし、そういう例は少ないようだ。

共通語というもののアクセントをもっとよいものにして標準アクセントというものにするためには、そういう単語の調査を今後進める必要がある。その点を除けば東京語のアクセントは、共通語のアクセントとしてまことにふさわしいものと言ってよい。

4.　前項までに述べたとおり、日本語の共通アクセントは、現在のところ東京語のアクセントである。東京語アクセントとは具体的にはどのようなものか。その基本的な性格の概略を述べれば次のようになる。

第1に、東京アクセントは前節に述べたように、高低二つの段からなり、音の上がり下がりは一つの拍から次の拍へ移るところに現れる。したがって、すべての拍は高い拍や低い拍かのいずれかである。

第2に、東京アクセントはその型がそういう高い拍と低い拍との組み合わせであるが、ただし、前々項に述べたような、一つ一つの単語のまとまりと切れ目を示すという力がはたらいて、

1)　/高/の拍が2か所に分かれて存在することはない。

2)　第1拍と第2拍とは高さがかならずちがう。

という法則が存在する。それから、これまた前節に述べたように、最後が/高/で終わる型には、次に何か別の語が来た場合に、それが高くつく類と、それが低くつく類と二つのものがある。そこで、ありうる型の種類は「(表1)名詞のアクセント」(175ページ）のようになり、拍の数をSとすると、S拍の語に存在する型の数は、S＋1個である。したがって4拍語は5種の型を、5拍語は6種の型をもち、3拍語に比して、中高型の種類が一つずつふえていく勘定である。

東京語にある何十万という単語は、

これらのうちのどの型かで発音されるわけであるが、最後に、これらの型の相互の関係について一言触れておきたい。

まず、この表に見られるように、東京語では、たとえば３拍語に/低高低/という型のほかに、/低高高/という型がある。そのために、もし《ヒカ゜…》というような拍の連絡が、第１拍が低く、第２拍が高く発音されるような場合、第３拍が低く発音されるか高く発音されるかは重要な意味をもつ。それによってたとえば、《ヒカ゜シ》が「干菓子」であるか、「東」であるかが区別されるからである。

ところが、これに対して、/低高低/という型のほかに/高高低/という型はない。そこで、/低高低/という型は、第３拍が第２拍より低く発音されさえすれば、第１拍は特に低くなくても、つまり高くてもかまわないことになる。第１拍が第２拍よりもっと高くなってはまずいが、第１拍と第２拍とが同じ高さであってもかまわない。つまり、/低高低/の型は、〔低高高〕に実現されては困るが、〔高高低〕と実現されるのは別に不都合はないという性格をもつに至る。これは東京語のアクセントにとって一つの重要な性格で、一般的な言い方をすれば、どの拍からどの拍へ移るときに音が上がるかはそれほど重要ではなく、どの拍からどの拍へ移るときに音が下がるかが重要だということになる。こういう傾向は実は東京語のアクセントに限らず、日本の多くの方言のアクセントに見られる性格である。この辞典で/低高低/のような型を○○̄○型のように、一方だけにカギを付けて表記しているが、これは声の上昇する個所よりも声が下降する個所をはっきり示しているわけである。この章の第１節で、「雨」は《メ》が《ア》より下がることが必要であるが、「飴（あめ）」の場合は《メ》が《ア》より下がりさえしなければよい、平らでもかまわないのだと述べたのは、やはり東京語で下がる個所が重要だということの表れである。上がる個所より下がる個所が重要だ。このことは二つの語がつづいて発音されるときに、全体がどのような型になるかという場合のアクセント変化の上にも影響を与えるものである。

[1966年８月初出、1997年５月改稿]

全日本の発音とアクセント

平　山　輝　男

全日本の発音とアクセントを三つの章に分けて述べる。第1章では、日本方言の発音とアクセントの特徴を、方言別に述べる。第2章では、それらの主なる特徴を取り上げ、それが全国でどう分布するかを述べる。

そして第3章では、この辞典の性格から、アクセントに的をしぼり、アクセント分布の諸相、代表方言のアクセント体系、若年層のアクセントの特徴などについて述べ、さらに全国主要地点の語アクセント比較表を載せる。

第1章　日本各地方言の発音とアクセントの概観

日本の方言は本土方言と琉球方言の二つに大別され、本土方言は八丈・東部・西部・九州の四つに分けられる。本土方言を東部方言と八丈方言から見ていく。

第1節　東部方言と八丈方言

東部方言は、北海道方言、奥羽方言、関東方言、越後方言、東海・東山道方言、北部伊豆諸島方言からなる。また、八丈方言は八丈島本島と青ガ島の方言からなる(125頁地図1参照)。

母音の体系　共通語の母音は、ウ/u/、オ/o/、ア/a/、エ/e/、イ/i/の5母音である。これを図式化して概略的に示すと、図1のようになる。

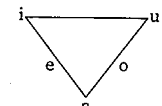


図1　共通語の母音体系

東京語をはじめとして多くの方言がこの体系をとるが、東部方言の中には5母音体系のほか、6母音体系、7母音体系、8母音体系をとるものなど多彩である。6母音体系として青森市方言を例にとると、

[meːta]/meʀta/（見えた）
[mɛːta]/mɛʀta/（蒔いた）

のようにエ/e/のほかにエァ/ɛ/を有する（図2参照）。

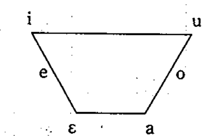


図2　青森市方言の母音体系

さらに新潟県長岡市方言をとると、図3のように7母音体系をとる。図

共通語のアクセント

秋　永　一　枝

第１章　アクセントには法則がある

わたしどもは、日常生活の中で、文法をいちいち考えて話をしているわけではない。生まれてはじめて使う動詞でも、無意識に活用させて、けっこうまちがわないものである。それは、どういうグループの動詞がどういう活用をするかという文法の法則の種のようなものを、自分の頭の中にもっていて、無意識に自分の覚えている動詞から類推していくからである。

アクセントもまた同様である。アクセントによる型の区別のない人のほかは、だれでもその方言のアクセント法則をもっている。わたしどもが親兄弟や友だちなど、周囲の人から聞いてアクセントを覚えたことばの数は、たかが知れている。それだけで、わたしどもの話しことばのすべてをまかなうことはできない。まして、日常の話しことばではほとんど使われないような漢語や外来語の語彙（ごい）も、数えきれないほど多い。

ところが、そうした一度も聞いたことのないようなことばでさえ、ほぼ自分の方言のアクセント法則にかなったアクセントで話すものである。

たとえば、「アイウエオ」というアクセントで話す人は、「カ㋖クケコ」も「アカサタナ」、「ハマヤラワ」も同じ「○○○○○型」で発音する。これをひっくり返して、まったく意味のない「ワラヤマハ」、「ナタサカア」という語をつくっても、同じアクセントの型である。この○○○○○型は５拍語名詞にもっとも多い安定型である。

また、「花子」「和子」など「子」の付く女子名を「ハナコ」「カズコ」と頭高型に発音する人は、はじめて見た名前でもほかに何らかの音韻上のさまたげがない限り、すべて無意識に○○子型に発音する。

こうしたアクセントの法則は、名詞・動詞・形容詞などの品詞によっても異なるし、それがまた、他の品詞からできた転成語であるとか、複合のしかたによっても異なる。また、２拍語とか、３拍語とか、拍数によっても法則が異なるし、さらに和語であるか、漢語であるか、外来語で

あるかによってもグループがわかれる。それゆえ、法則の数は多く複雑であるが、幸いに、共通アクセントの法則はほかの地方のものと比べて、比較的規則的な体系をもっている。そこで、基本的な単語のアクセントとアクセント法則さえよく覚えておけば、あとはどんどんそれぞれのアクセントの型を類推していけるものである。そのほうが個々の単語のアクセントを丸暗記するよりずっと楽で、効果的なことうけあいである。

第2章　名詞のアクセント

第1節　名詞のアクセントの型

名詞の型の数は**表1**に示すように拍数より一つだけ多いが、それらに所属する語彙にはかたよりがある。たとえば、1拍語、2拍語では頭高型が多い。漢語、外来語、日常あま

表1　名詞のアクセント

型の種類＼拍数		1　拍　語	2　拍　語	3　拍　語	4　拍　語	5　拍　語
平板式		ハガ（葉）	ミズガ（水）	サクラガ（桜）	オハナミガ（お花見）	アルコールガ
起伏式	尾高型		ヤマガ（山）	ヤスミガ（休み）	イモートガ（妹）	モモノハナガ（桃の花）
	中高型			オカシガ（お菓子）	ミズウミガ（湖）	ワタシブネガ（渡し船）
	中高型				ノミモノガ（飲み物）	チョコレートガ
	中高型					オカーサンガ（お母さん）
	頭高型	キガ（木）	ハルガ（春）	ミドリガ（緑）	サンガツガ（3月）	アクセントガ

り用いられない語、新造語などは、ほとんどこの型である。3拍語には平板型が多く、漢語、外来語はこのほか頭高型も多い。4拍語も平板型が多く、このほか○○○○型、○○○○型も複合語などに多くみられる。5拍語は○○○○○型が多く、平板型がこれに続く。伝統的なアクセントも、これらの所属語彙の多いほうへと変化していく傾向がある。

第2節　転成名詞

転成名詞の法則はだいたい規則的な体系をもっている。その語がどんな品詞からできたか、動詞ならば単純動詞からか複合動詞からか、形容詞なら口語からか文語からかなどによって法則が異なるので、まずもとのグループが何かを考えていただきたい。

1．動詞からできたもの

(1)　単純動詞からできたもの

原則として、動詞のアクセントの式を変えない。動詞のアクセントが平板式ならば平板式に、起伏式ならば起伏式のうちのほとんどが尾高型になる。ただし、4拍語の尾高型は、○○○○型にも平板型にも発音する傾向がある（**表2**参照）。

(2)　「動詞＋動詞」の複合動詞からできたもの

その動詞のアクセントにかかわら

表2　転成名詞のアクセント

平板式			起伏式		
○○→○○	ウク→ウキ	(浮)	○○→○○	クム→クミ	(組)
	カス→カシ	(貸)		フル→フリ	(降)
	フル→フリ	(振)		ヨム→ヨミ	(読)
○○○→○○	アレル→アレ	(荒)	○○○→○○	オチル→オチ	(落)
	ソメル→ソメ	(染)		ハジル→ハジ	(恥)
	ユレル→ユレ	(揺)		ノビル→ノビ	(伸)
○○○→○○○	オワル→オワリ	(終)	○○○→○○○	ハナス→ハナシ	(話)
	タタム→タタミ	(畳)		ヒカル→ヒカリ	(光)
	ツカウ→ツカイ	(使)		ヤスム→ヤスミ	(休)
	ノボル→ノボリ	(上)	○○○→○○○	カエル→カエリ	(帰)
○○○○→○○○	キコエル→キコエ	(聞)		トール→トーリ	(通)
	ミトメル→ミトメ	(認)	○○○○→○○○	タスケル→タスケ	(助)
	ムカエル→ムカエ	(迎)		ツトメル→ツトメ	(勤)
				ナガレル→ナガレ	(流)
○○○○→○○○○	タタカウ→タタカイ	(戦)	○○○○→○○○○、○○○○、○○○○		
	ハタラク→ハタラキ	(働)		アツマル→アツマリ、アツマリ、アツマリ	(集)
	ハジマル→ハジマリ	(始)		オドロク→オドロキ、オドロキ、オドロキ	(驚)
	ヒロガル→ヒロガリ	(広)		コトワル→コトワリ、コトワリ、コトワリ	(断)

ず。すべて平板型になる。

○○○

試合、仕組み、似合い、煮出し、見合い、見込み

○○○○

言い合い、受取、売り出し、書き抜き、聞き取り、乗り換え

○○○○○

有り合わせ、忍び泣き、取り調べ、焼け出され

○○○○○○

払い戻し、申し送り、やり損ない、譲り渡し

2．形容詞からできたもの

(1)　口語形容詞からできたもの

形容詞の終止形が平板式のものは原則として尾高型に、起伏式のものは形容詞の連用形と同じ型になる。

トーイ→トーク（遠くへ行く）
フルイ→フルク（古く）
チカイ→チカク（近く）（無声化でアクセントがずれたもの）、チカク

(2)　文語形容詞からできたもの

口語形容詞の終止形が平板式のものは平板式に、起伏式のものは起伏式になる。

アカシ（アカイ）→アカシ（灯）
オモシ（オモイ）→オモシ（重石）
スシ（スイ）→スシ（若い層は、スシ）（鮨）

(3)　形容詞の語幹からできたもの

ほとんど2拍名詞で、頭高型である。

アカ、シロ、クロ、フル、ホソ、ワカ、ワル

(4)　連体形の名詞的用法

格助詞の類を付けて用いるもので、文語連体形が平板型のものは尾高型、または中高型になるが、新しい傾向として平板型の現れることもある。頭高型・中高型のものは同じ型になる。

オモキ（重きを置く）
ヨキ（良きにはからえ）
ツヨキ（強きをくじき）
タカキ（高きにおく）

3．接尾語が付いてできたもの

(1)　形容詞（形容動詞）の語幹に「さ」の付いたもの

形容詞類が平板式のものは平板式になるが、拍数が多くなると中高型になる傾向がある。

アマイ→アマサ（甘）
オモイ→オモサ（重）
カタイ→カタサ（堅）
ツメタイ→ツメタサ（冷）
セイカク→セイカクサ（正確）

形容詞類が起伏式のものは原則として起伏式になるが、3拍語には平板型の現れるものもある。

ヨイ→ヨサ（良）
コイ→コサ（濃）
ワカイ→ワカサ（若）
タカイ→タカサ（高）
スルドイ→スルドサ、スルドサ（鋭）
アリガタイ→アリガタサ、アリガタサ（有難）
ウレシイ→ウレシサ、ウレシサ（嬉）

アタラシイ→アタラシサ、アタラシサ（新）
オロカ→オロカサ（愚）
ゲンキ→ゲンキサ（元気）

(2) 形容詞（形容動詞）の語幹に「み」の付いたもの

形容詞類が平板式ならば原則として平板式になるが、拍数が多くなると、中高型の現れる傾向がある。

アマイ→アマミ（甘）
オモイ→オモミ（重）
アカルイ→アカルミ（明）
シンケン→シンケンミ、シンケンミ（真剣）

形容詞類が起伏式ならば原則として尾高型だが、4拍語以上では、特に若い層では中高型、平板型になる傾向がある。

ニガイ→ニガミ（苦）
シブイ→シブミ（渋）
オモシロイ→オモシロミ（面白）
シンセツ→シンセツミ、シンセツミ、シンセツミ（親切）

(3)「け」「げ」の付くもの

前の語が平板式ならば原則として平板式だが、4拍以上の語には中高型の現れることもある。起伏式ならば原則として3拍語は尾高型に、4拍以上の語は中高型になる。

ネムイ→ネムケ（眠）
アブラ→アブラケ（油）
オトナ→オトナゲ（大人）
アブナイ→アブナゲ、アブナゲ（危）
ハク→ハキケ（吐）
クウ→クイケ（食）
サムイ→サムケ（寒）
クルシイ→クルシゲ（苦）

第3節　複合名詞

複合名詞は、その複合の度合いが強いかどうか、何拍語であるか、後部の語が名詞であるか動詞であるか、それがどのようなグループの語か、そのアクセントはどうかなどによって全体のアクセントが定まる。前部・後部とも2拍以下の語は、法則がたてにくいが、それ以上の語は比較的規則的なアクセント法則を示す。

1．前部・後部とも2拍以下のもの

もっとも複合の度合いの強い名詞で、複合語としての法則によるよりも、単純語の法則に支配される傾向がある。和語の場合は、はっきりした法則がたてにくいが、漢語では次のような傾向がある。

(1) 2拍語（漢字1字1拍＋漢字1字1拍）

古くからの語を除き、多くは頭高型である。ただし、あとで述べる「アクセントを変化させるもの（音韻の法則）」（218ページ）によって、1拍ずれて尾高型になったものも多い。

カチ（価値）　キジュ（喜寿）
シュギ（主義）　チリ（地理）
ムチ（無知）
キシャ、キシャ（汽車）
キソ、キソ（基礎）

(2) **3拍語**

(漢字1字2拍＋漢字1字1拍
漢字1字1拍＋漢字1字2拍)

ほとんどが頭高型か平板型かである。なお、無声化のために1拍後ろにずれて中高型になったものも多い。そのほか、古くからの語には尾高型・中高型がみられる。

(3) **4拍語**

過半数は平板型で、新造語や複合の度合いの強い語はほとんどこの型になる。また、古くからの語や複合の度合いの弱い語には、頭高型が多くみられる。

〔注意〕 なお次のようなものが連体詞のようにかかるときは頭高型になりやすい。

「以」「各」「貴」「現」「故」「今」
「諸」「先」「前」「尊」「当」「同」
「某」「本」「両」

ショケイ（諸兄） カクジン（各人）
トーシャ（当社） ドーコー（同校）
ボージョ（某女） ボージツ（某日）

2. 前部が漢字2字以上または拍数が3拍以上で、後部が漢字1字1・2拍名詞のもの

複合名詞として規則的な法則がある。原則として、前部に関係なく、後部の種類によってアクセントが決定される。

(1) **一般グループ**

原則として、前部の最後の拍まで高い。

<後部和語>

チノミコ゜（乳飲み子）
タウエウタ（田植え歌）
スミダカ゜ワ（隅田川）
オーサカズシ（大阪ずし）
タニカ゜ワダケ（谷川岳）
オナカ゜ドリ（尾長鶏）
ウズラマメ（うずら豆）
テントリムシ（点取り虫）

<後部漢語>

ショーカキ（消火器）
チヨダク（千代田区）
チバシ（千葉市）
ベンコ゜シ（弁護士）
ザッシシャ（雑誌社）
ナイヤシュ（内野手）
トショヒ（図書費）
カンコ゜フ（看護婦）
ケイリブ（経理部）
カイシャイン（会社員）
ヨーチエン（幼稚園）
フボカイ（父母会）
シンリカ゜ク（心理学）
エイカ゜カン（映画館）
テレビキョク（テレビ局）
ニシタマグ゜ン（西多摩郡）
カナカ゜ワケン（神奈川県）
ニューカ゜クシキ（入学式）
ジョードシュー（浄土宗）
モンブショー（文部省）
オーサカジョー（大阪城）

サクラダモン（桜田門）
デンワリョー（電話料）
アンキリョク（暗記力）

〔**注意**〕ただし、よく使われる語などは平板型にも発音されることが多い。

(2) 平板化グループ

次のような語などが後部に付くと、全体が平板型になる傾向がある。

〈後部和語〉

「色」「型」「髪」「側」「際」「組」「縞」「玉」「面」「寺」「沼」「村」「山」「小屋」

サクライロ（桜色）
ヒマンガタ（肥満型）
ヒダリガワ（左側）
ゴニングミ（5人組）
コーシジマ（格子縞）
シジューズラ（四十面）
シャボンダマ（しゃぼん玉）
キヨミズデラ（清水寺）
インバヌマ（印旛沼）
シラカワムラ（白川村）
アタゴヤマ（愛宕山）
スミヤキゴヤ（炭焼き小屋）

〈後部漢語〉

「科」「家」「課」「画」「語」「座」「派」

ショーニカ（小児科）
セイジカ（政治家）
ジンジカ（人事課）
ニホンガ（日本画）
ガイコクゴ（外国語）
カブキザ（歌舞伎座）

「鏡」「教」「場」「性」「制」「製」「線」「隊」「中」「亭」「展」「刀」「党」「灯」「堂」「版」「盤」「表」「病」「米」「用」「流」

テンリキョー（天理教）
シケンジョー（試験場）
ニホンセイ（日本製）
トーカイドーセン（東海道線）
ヨビタイ（予備隊）
シャカイトー（社会党）
ニガツドー（二月堂）
ショクサツバン（縮刷版）
エルピーバン（LP盤）
シンゾービョー（心臓病）
フジンヨー（婦人用）
ニトーリュー（二刀流）

(3) 混合グループ

次のような語などが付くものは、一般グループと平板化グループの両様に発音される。

〈後部和語〉

「顔」「紙」「風」「口」

デイリグチ、デイリグチ（出入り口）

〈後部漢語〉

「油」「所」「炎」「艦」「計」「罪」「剤」「船」「戦」「店」「人」「文」「法」

ジュンカツユ、ジュンカツユ（潤滑油）
ボーカザイ、ボーカザイ（防火剤）
キッサテン、キッサテン（喫茶店）
カンゴニン、カンゴニン（看護人）

(4) 中高化グループ

後部が頭高型の和語名詞が付くときに多くみられる。

〈後部和語〉

「汗」「雨」「船」「空」「杖」「傘」「窓」「麦」

アイアイガ゚サ（相合い傘）
マツバズエ（松葉杖）
ワタシブネ（渡し船）
ガラスマド（ガラス窓）

3．後部が漢字2字または3拍以上の名詞のもの

複合名詞として規則的な法則がある。原則として、前部のアクセントに関係なく、後部の種類によってアクセントが決定される。

(1)　**後部が平板型、尾高型、頭高型のもの**は、原則として後部の第1拍まで高い中高型となる。

後部平板型

〈後部和語〉

トノサマガ゚エル（殿様がえる）
コナグ゚スリ（粉薬）
ニグ゚ルマ（荷車）
ヤマザクラ（山桜）
ホシジルシ（星印）
ビョーキミマイ（病気見舞い）

〈後部漢語〉

カブシキガ゚イシャ（株式会社）
コートーガッコー（高等学校）
ニホンギンコー（日本銀行）
コクリツコーエン（国立公園）
トクガ゚ワジダイ（徳川時代）
キョーイクホーソー（教育放送）

後部尾高型

〈後部和語〉

ハナシアイテ（話し相手）
イシアタマ（石頭）
タタミオモテ（畳表）
ゴガ゚タキ（碁がたき）
ムラマツリ（村祭り）

〈後部漢語〉

ハナヨメドーグ゚（花嫁道具）
シケンジゴ゚ク（試験地獄）

後部頭高型

〈後部和語〉

ウレシナミダ（嬉し涙）
イエコーモリ（家蝙蝠）
ヤマトダマシー（大和魂）

〈後部漢語〉

ナマガ゚シ（生菓子）
ミンシュシュギ゚（民主主義）
アサゴハン（朝御飯）
シャカイジギョー（社会事業）
セイヨーリョーリ（西洋料理）
ガキダイショー（餓鬼大将）

(2)　**後部が中高型の語**は、原則として後部のもとの高さの切れ目まで高い。ただし、拍数の多いものは高さの切れ目が前にずれて、安定型になる傾向がある。

〈後部和語〉

ゲンジモノガ゚タリ（源氏物語）
ヒダリウチワ、ヒダリウチワ（左うちわ）
ホシズキヨ、ホシズキヨ（星月夜）

〈後部漢語〉

キョーイクイインカイ（教育委員会）
ニューシャシケン、ニューシャシケン（入社試験）

4．後部が動詞、形容詞などでできたもの（前部・後部ともに2拍以下のものは除く）

(1)　2拍以下の動詞の付くもの

前の部分が後の動詞に、修飾的、副詞的にかかるものは原則として平板型になる。連濁する。

サンニンガケ（3人掛け）
ニジュードリ（二重取り）
ユトーヨミ（湯桶読み）

後の動詞が前の部分を目的格とし、「～するもの・こと・ひと」のような意味をもつ他動詞のときは、原則として前部の最後の拍まで高い。連濁しない。

ボーシカケ（帽子掛け）
ニンキトリ（人気取り）
ロンゴヨミ（論語読み）

(2)　3拍以上の動詞の付くもの

原則として、後部の第1拍まで高い。連濁するものが多い。

ヒアソビ（火遊び）
ビジンゾロイ（美人ぞろい）
イエツヅキ（家続き）
オヤナカセ（親泣かせ）
ブタイビラキ（舞台開き）

5．複合の度合いの弱い名詞

(1)　**2．3．よりもはるかに複合の度合いの弱いもの**で、「ことばの連続とアクセント」(213ページ）の法則に準じるので、そちらを参照していただきたい。原則として、前の語のアクセントを生かし、連濁はしない。ただし、この中でも複合の度合いの多少強いものは、複合名詞のアクセント法則に準じる傾向がある。

アカイハネ（赤い羽根）
アオイトリ（青い鳥）
イーコ（いい子）

(2)　対照語・対立語・並立語なども複合の度合いが弱く(1)に似る。原則として前部の語のアクセントを生かす傾向があり、連濁はしない。ただし、対照・対立・並立の度合いがうすれたものや、熟語になったものは、平板型になる傾向がある。

A．前部が平板型・尾高型の名詞は前部の最後の拍まで高く、前部が頭高型・中高型の名詞は、前部のアクセントを生かして後部は低く付く。

ウエ＋シタ→ウエシタ（上下）
ウシロ＋マエ→ウシロマエ（後ろ前）
クサ＋キ→クサキ（草木）
ヒル＋ヨル→ヒルヨル（昼夜）
メ＋ハナ→メハナ（目鼻）
ヨル＋ヒル→ヨルヒル（夜昼）
アサ＋バン→アサバン（朝晩）
ク＋ラク→クラク（苦楽）
ジョー＋ゲ→ジョーゲ（上下）
コー＋オツ→コーオツ（甲乙）
ソン＋トク→ソントク（損得）

B．動詞・形容詞からのものも、上記と似る。前部の動詞が平板型のものは前部の最後の拍まで高い。起伏式のものは、前部のアクセントを生かして後部は低く付くが、

近年は前部の最後の拍まで高く言う傾向が多くみられる。
アゲル→アゲサゲ（上げ下げ）
ノル→ノリオリ（乗り降り）
ノム→ノミクイ、ノミクイ（飲み食い）
ヨム→ヨミカキ、ヨミカキ（読み書き）
ヨシ→ヨシアシ、ヨシアシ（善し悪し）

第4節　固有名詞

固有名詞のアクセントは、普通名詞と多少異なったアクセント法則があるので、別に項をもうけた。このうち、固有名詞に「川」「山」「市」「県」「区」「町」「大学」「会社」などの普通名詞が付いて、複合固有名詞をつくるものは、「複合名詞」の法則に準じるので、そちらを参照していただきたい。

1．男子名・女子名

男子名・女子名のアクセントは、規則的なものがほとんどであるが、種類が多いので、代表的なものだけをここにあげることにする。

(1)　**1拍語・2拍語**はすべて頭高型になる。
アヤ、エミ、カン、キン、テツ、ハル、マリ、リュー
ミヨ、チヨ、チエ、リエ

(2)　**3拍語**は、次のA、B、Cの3種類に分かれる。

A．転成語

(A)　動詞からできた名は、すべて平板型になる。
イサム、カオル、ススム、タモツ、マモル、ミノル

(B)　形容詞、形容動詞からできた名は、すべて頭高型になる。
キヨシ、タカシ、ヒロシ、ヤスシ
アキラ、シズカ、ユタカ

(C)　名詞からできた名は、もとのアクセントを生かす傾向がある。
サナエ（早苗）　ミドリ（緑）
ミサオ（操）　チドリ（千鳥）

B．きまった後部をもつ名は、規則的な法則をもつ。

(A)　「江・枝」「代・世」「夫・男・雄」「吉」「作」「七」「助・介・輔」の付くものは平板型となる。なお、「也・弥・哉」の付くものは、古くは平板型だが、近年、頭高型が多くみられる。
カズエ、マサエ　カズヨ、マサヨ
カズオ、マサオ　サキチ、リキチ
サシチ　ヨサク　ゴスケ、サスケ
カズヤ、カズヤ　マサヤ、マサヤ

(B)　「子」「樹」「人（と）」「吾」「二・治・次」「太」「一・市」「平」「郎」の付くものは頭高型となる。
マサコ、ヨシコ　マサキ、ヨシキ
マサト、ヨシト　ショーゴ、ケンゴ
ショージ、ケンジ　ショータ、ケンタ
タイチ、リイチ　タヘイ、リヘイ
タロー、クロー、ジロー

C．転成語でなく、またきまった後部ももたない名は、ほとんど漢

語で頭高型が多い。ただし、古くからの名や画家、文人、芸人などの名には平板型が多く見られる。

カフー（荷風）　ロハン（露伴）
キョーカ（鏡花）　バキン（馬琴）
リューシ（竜子）　サンバ（三馬）

(3)　**4拍語**

A．きまった後部をもつものは規則的な法則をもつ。

(A)　「一・市」「吉」「作」「六」「七」「八」の付くものは、平板型・尾高型・○○○○型の3様になる。

ショーイチ、ショーイチ、ショーイチ
ダイハチ、ダイハチ、ダイハチ

(B)　「三・蔵・造」「郎」の付くものは、平板型、○○○○型の両様となる。

コーゾー、コーゾー
サブロー、サブロー

(C)　「彦」「助・介・輔」の付くものは、前部の最後の拍まで高い型になる。ただし「助」の前部が漢語で、第2拍が撥音（はつおん）・引き音・連母音の後部のようなものは頭高型になる。

カズヒコ、フミヒコ、マサヒコ
フクスケ、タカスケ
ショースケ、ダイスケ、カンスケ

(D)　「平」の付くものは平板型になる。

ヨシヘイ、リョーヘイ、カンペイ

B．きまった後部をもたないものや名乗りのたぐいは、和語で多く○○○○型になる。漢語では多く頭高型となる。ただし、古くからの名や画家、文人、芸人などの名は和語では平板型が、漢語では平板型や○○○○型が多く見られる。

ヨシイエ（義家）
アキナリ（秋成）
マサムネ（正宗）
キヨモリ（清盛）
ツラユキ（貫之）
マサシゲ（正成）
キヨマサ（清正）
ヒデヨシ、ヒデヨシ（秀吉）
シュンゼイ（俊成）
ベンケイ（弁慶）
ダイカン（大観）
ショーヨー（逍遥）
ボクスイ（牧水）
エンチョー（円朝）
リューキョー（柳橋）

2．姓

普通名詞の法則に似る。前部・後部とも2拍以下の複合語は、はっきりした法則がたてにくいが、その他はだいたい規則的である。

(1)　**名詞からの転成語**は、2拍語・3拍語ともに、多く頭高型である。

オカ（岡）　アズマ（東）
スギ（杉）　カツラ（桂）
タニ（谷）　タイラ（平）
ニシ（西）　ミナミ（南）
ハタ（畑）　ヤナギ（柳）

(2)　**前部または後部が3拍以上のものや複合の度合いの弱いもの**は、「複合名詞」2．3．5．の法則にほ

ぼ準じる。

サクラガワ（桜川）

サカキバラ（榊原）

ワカバヤシ（若林）

3．人名などに接尾語が付いたもの

人名などに尊敬や愛称を表す接尾語が付くときは、原則として人名のアクセントを変えない。

(1)「様」、「さん」、「ちゃん」、「殿」、「君」が付くもの

前が平板式ならば全体が平板式、起伏式ならば前部のアクセントを変えず低く下がって付く。

ナカムラサマ、ナカムラサン、マサオチャン、ナカムラドノ、マサオドノ、ナカムラクン、ヤマシタサマ、ヤマシタサン、カズヒコチャン、ヤマシタドノ、カズヒコドノ、カズヒコクン、カトーサマ、カトーサン、ハナコチャン、カトードノ、ハナコドノ、カトークン、

(2)「氏」が付いたもの

前の語が平板式ならば前部の最後の拍まで高く、起伏式ならばアクセントを変えず低く下がって付く。

ナカムラシ、ヤマダシ、ヤマシタシ、カトーシ

4．地名

姓のアクセント法則に似る。

(1) 1拍語・2拍語

ほとんど頭高型だが、旧国名には高年層で尾高型がみられる。

アワ（安房）　サド（佐渡）

イセ（伊勢）　ナラ（奈良）

サガ（佐賀）　ヒダ（飛騨）

トサ、トサ（土佐）

ミノ、ミノ（美濃）

(2) 3拍語

県名や旧国名はほとんど頭高型だが、旧国名には高年層で尾高型がみられる。

アキタ（秋田）　トヤマ（富山）

イズモ（出雲）　ナガノ（長野）

オーミ（近江）　キョート（京都）

サツマ、サツマ（薩摩）

ミカワ、ミカワ（三河）

その他、東京人に親しい地名は平板型になる傾向があるが、はっきりした法則はたてにくい。

(3) 4拍語

県名は○◯○○型が多く、平板型がそれに次ぐ。

旧国名も○◯○○型が多いが、古くからの語には高年層では尾高型がみられる。

カナザワ（金沢）

フクオカ（福岡）

ヤマガタ（山形）

リクゼン（陸前）

シモーサ、シモーサ（下総）

ヒロシマ（広島）

オキナワ（沖縄）

その他、東京人に親しい地名は平板型になる傾向があるが、はっきりした法則はたてにくい。

(4) 前部または後部が3拍以上のものや複合の度合いの弱いものは、

「複合名詞」2．3．5．の法則に準じる。

アキハバラ（秋葉原）
シンオークボ（新大久保）
オチャノミズ（御茶の水）

(5) なお、**地名のアクセント**は、その地方のアクセントと著しく異なって、その土地の者には耳ざわりに感じられることがしばしばある。例えば東京では、マエバシ（前橋）、ナゴヤ（名古屋）と言うが、その土地ではマエバシ、ナゴヤというたぐいである。

このようなことは東京の地名や建造物などにもいえることである。エコーイン（回向院）、ハマチョー（浜町）などの伝統的なアクセントは一般にはエコーイン、ハマチョーと潜在アクセントから類推して安定型に発音されるようになったが、これなどもその近辺の人間には耳ざわりに感じられるものである。

地域の放送では、その地方のアクセントのように地名などを発音する場合もある。これについては11ページを参照していただきたい。

第5節　外来語名詞

外来語および、あとの部分だけが外来語のアクセントは大きく二つにわけることができる。それは、古くはいった語で日本語になりきっているような語と、新しくはいった語でまだ外国語のにおいの強い語とである。すっかり日本語化したものは単純語も複合語もほぼ日本語のアクセントの法則に準じるが、まだすっかり日本語になりきっていないような語や、外国語に親しい人の発音では、原語に近いアクセントの影響がみられる。

なお、固有名詞の場合も一般名詞の法則に準じる。

1．単純語

(1)　2拍語・3拍語

原則として頭高型である。ただし、特殊な拍で終わる3拍語には中高型がみられる。

ガス、カリ、ジャム、パイ、ピン
クラス、ケーキ、センス
グレー、スキー、ブルー
ズボン、ズボン
ジョン、アリス、カント、メリー
タイ、パリ、インド、カナダ、
スイス、ドイツ、パナマ、ハワイ、
ビルマ、ペルー、ローマ

(2)　4拍以上の語

原則として終わりから3拍目まで高い型である。ただし、そこに特殊拍がくるときは、原則として前にずれる。

スカート、ブラウス、スペース
ストライキ、チョコレート、ナトリューム、ヒューマニスト、ヒューマニズム
スペイン、チベット、プラトン
エベレスト、オーストリア、
オーストラリア、スウェーデン

(3)　古くはいった語など、日常生

活によく使われてすっかり日本語になりきったようなものは、平板型になる傾向がある。

ガラス、キセル、バケツ
アイロン、オルガン、セメント、
プラチナ、アルコール
アメリカ、イギリス、エジプト、
シベリア、アフリカ、イタリア、
フランス、ポルトガル

〔注意〕

近年、仲間うちでよく使われる外来語の中で、起伏式の語が**平板化**する傾向がみられる。若年層に特に目立つが、専門分野の語では中年層以上にも平板化がよくみられる。

(A)　頭高型と平板型の両様

パート、データ、サークル、タレント、オーダー、メーカー、キルティング、オープニング

(B)　中高型と平板型の両様

サポーター、スクーター、スニーカー、デザイナー、マネージャー、ナレーション、マーケティング、レコーディング

(C)　多く平板型

パテント、ジョギング、ガーデニング

(4)　**新しくはいった語でまだ日本語になりきっていないような語や、外国語に親しい人の発音**には、原語に近いアクセントが使われる傾向がある。

アクセント、ガイダンス
ターミナル、ティピカル

2．複合語

「複合名詞」2．3．の法則にほぼ準じる。すなわち、後部が平板型・頭高型の語は後部の第1拍まで高く、中高型の語はアクセントの高さの切れ目まで高い。

パイプオルガン
バスターミナル
プラスマイナス
タンサンガス（炭酸～）
デンキアイロン（電気～）
セイサンカリ（青酸～）
トーナンアジア（東南～）
キタアメリカ（北～）
アイスクリーム
ハンガーストライキ

第6節　助詞の付いた形

助詞が名詞類に付く場合は、複合の度合いが弱く、ほとんど名詞類のアクセントの型を変えず、規則的である。普通名詞、固有名詞、数詞すべて同様で、原則として名詞類が平板ならば高く平らに、起伏式ならば名詞類のアクセントを生かして低く下がって付く。まれに「の」のように尾高型に高く平らに付くものや、「だけ」のように起伏式名詞の型を高く平らに変えて、すべて高く平らに付くような助詞もあるが、これらは例外といえよう。名詞類に助詞が付いた全体の形は、平板式とか起伏式とかの名詞類のグループと、以下に示した［A］～［E］の助詞のグル

ープとの組み合わせできまるものである。それゆえ、どの助詞がどのグループに属するかを知り、表3でどのグループがどのような付き方をするかという基本的なアクセントを覚えれば、あとは類推してゆくことができる。

〈名詞類に付く助詞のグループ〉

（＊印を付けた語は、他のグループにも属するもの）

［A］ か、が、さ、で、と、に、は、へ、も、や、よ、を

から、きり、しか(1)、だけ＊、ほど、として

注(1) このほか平板式名詞に付くときは、助詞の第1拍から低く下

表3 名詞に助詞が付いたときのアクセント

名詞の種類 ＼ 助詞の種類			A	B	C	D	E＊
平板式名詞		1拍語	ハ 葉	ハガ ハカラ	ハノ	ハネ ハカナ	ハヨリ ハカシラ	ハダケ
		2拍語	ミズ 水	ミズガ ミズカラ	ミズノ	ミズネ ミズカナ	ミズヨリ ミズカシラ	ミズダケ
		3拍語	サクラ 桜	サクラガ サクラカラ	サクラノ	サクラネ サクラカナ	サクラヨリ サクラカシラ	サクラダケ
起伏式名詞	尾高型	2拍語	ヤマ 山	ヤマガ ヤマカラ	ヤマノ	ヤマネ ヤマカナ	ヤマヨリ ヤマカシラ	ヤマダケ
		3拍語	ヤスミ 休み	ヤスミガ ヤスミカラ	ヤスミノ	ヤスミネ ヤスミカナ	ヤスミヨリ ヤスミカシラ	ヤスミダケ
		4拍語	イモート 妹	イモートガ イモートカラ	イモートノ	イモートネ イモートカナ	イモートヨリ イモートカシラ	イモートダケ
	中高型	3拍語	オカシ お菓子	オカシガ オカシカラ	オカシノ	オカシネ オカシカナ	オカシヨリ オカシカシラ	オカシダケ
		4拍語	ミズウミ 湖	ミズウミガ ミズウミカラ	ミズウミノ	ミズウミネ ミズウミカナ	ミズウミヨリ ミズウミカシラ	ミズウミダケ
			ノミモノ 飲み物	ノミモノガ ノミモノカラ	ノミモノノ	ノミモノネ ノミモノカナ	ノミモノヨリ ノミモノカシラ	ノミモノダケ
	頭高型	1拍語	キ 木	キガ キカラ	キノ	キネ キカナ	キヨリ キカシラ	キダケ
		2拍語	ハル 春	ハルガ ハルカラ	ハルノ	ハルネ ハルカナ	ハルヨリ ハルカシラ	ハルダケ
		3拍語	ミドリ 緑	ミドリガ ミドリカラ	ミドリノ	ミドリネ ミドリカナ	ミドリヨリ ミドリカシラ	ミドリダケ

がって付くことがある。

ミズシカ、サクラシカ

なお、下記の〔注意①②〕を参照。

［B］　の（ん）

なお、〔注意③〕を参照。

［C］　ね、かな（疑惑）、かね

［D］　かい、かな(感嘆)、こそ、さえ、しも、すら、だの、では、でも、とて、とも、など、なり、ねえ、のみ、まで、やら、ゆえ、より

かしら、くらい(ぐらい)(2)、だって、どころ(2)、ばかり(2)、なんか、なんて、よりか、よりも

注(2)　このほか、起伏式名詞を高く平らに変えて、助詞の第1拍まで高く、2拍から下がって付く傾向がある。

オカシグライ、オカシバカリ

［E］　だけ*

注　このほか、[A]の型のようにも発音される。

〔注意①〕「日」、「上」、「下」、「家(うち)」、「人」、「所」のような平板型名詞の前に、平板型、尾高型の修飾語がきた場合、全体を尾高型に変化させ、助詞が下がって付く傾向がある(助動詞も同じ)。

コンナヒニ、アクルヒワ、シッパイシタヒニワ、ヤマノウエニ、ミズノウエニ、ヤナギノシタニ、トナリノウチカラ、オトコノヒトガ、アンナトコロニ、オナジトコロエ

〔注意②〕 助詞が平板型副詞に付くときは、原則として低く下がって付く（助動詞も同じ）。

コレカラ→コレカラワ

アレダケ→アレダケワ

コレキリ→コレキリニ

キット→キットカ

〔注意③〕 名詞に助詞が付いた場合、名詞のアクセントは、変化しないのが原則である。ところが「の」は、尾高型や、独立性の少ない音韻が最後の拍にきた中高型のものを、平板型と同じように変化させる傾向がある。

ハナ→ハナノ（花）

ヤマ→ヤマノ（山）

ヤスミ→ヤスミノ（休）

オトコ→オトコノ（男）

イモート→イモートノ（妹）

ニホン→ニホンノ（日本）

ニッポン→ニッポンノ（日本）

タイワン→タイワンノ（台湾）

チョーセン→チョーセンノ（朝鮮）

キノー→キノーノ（昨日）

リューキュー→リューキューノ（琉球）

ただし、次のようなものに付いたときは、平板型にならない。

(1)　旧地名に多い尾高型および特殊の語

トサ→トサノクニ（土佐）

ミノ→ミノノクニ（美濃）

ミカワ→ミカワノクニ（三河）

サガミ→サガミノクニ（相模）

ツギ→ツギノヒト（次）

ヨソ→ヨソノクニ（余所）

(2)　無声化でアクセントが1拍後

にずれて、尾高型や中高型になったもの

(キ)キ→(キ)キノトキ（危機）
(シ)キ→(シ)キノ(ヒ)ト（指揮）
(ヒ)ショ→(ヒ)ショノ(ヒ)ト（秘書）
(フ)キ→(フ)キノキャク（不帰）
(シ)キン→(シ)キンノ(フ)ソク（資金）
(フ)キン→(フ)キンノ(ヒ)ト（付近）
(キ)カイ→(キ)カイノハナシ（機械）

ただし、無声化でアクセントのずれた意識があまりないようなものは、両様のアクセントがみられる。

(チ)チ→(チ)チノキャク
(チ)チノキャク（父）
(キ)シャ→(キ)シャノナカ
(キ)シャノナカ（汽車）

表4　名詞に助動詞が付いたときのアクセント

名詞の種類 ＼ 助動詞の種類				a	b	c	d
平板式名詞		1拍語	ハ 葉	ハダ	ハデス	ハダロー	ハラシイ
		2拍語	ミズ 水	ミズダ	ミズデス	ミズダロー	ミズラシイ
		3拍語	サクラ 桜	サクラダ	サクラデス	サクラダロー	サクララシイ
起伏式名詞	尾高型	2拍語	ヤマ 山	ヤマダ	ヤマデス	ヤマダロー	ヤマラシイ
		3拍語	ヤスミ 休み	ヤスミダ	ヤスミデス	ヤスミダロー	ヤスミラシイ
		4拍語	イモート 妹	イモートダ	イモートデス	イモートダロー	イモートラシイ
	中高型	3拍語	オカシ お菓子	オカシダ	オカシデス	オカシダロー	オカシラシイ
		4拍語	ミズウミ 湖	ミズウミダ	ミズウミデス	ミズウミダロー	ミズウミラシイ
			ノミモノ 飲み物	ノミモノダ	ノミモノデス	ノミモノダロー	ノミモノラシイ
	頭高型	1拍語	キ 木	キダ	キデス	キダロー	キラシイ
		2拍語	ハル 春	ハルダ	ハルデス	ハルダロー	ハルラシイ
		3拍語	ミドリ 緑	ミドリダ	ミドリデス	ミドリダロー	ミドリラシイ

(3) 転成名詞などで、尾高型のアクセントが1拍前にずれて中高型になったものには、両様のアクセントがみられる。

イワイ→イワイノテガミ、
イワイノテガミ（祝い）
オモイ→オモイノタケ、
オモイノタケ（思い）
ニオイ→ニオイノ・ナイ、
ニオイノナイ（匂い）

第7節 助動詞の付いた形

助動詞が名詞類に付く場合は、複合の度合いが弱く、ほとんど名詞類のアクセントの型を変えず、規則的である。

普通名詞・固有名詞・数詞すべて同様で、原則として名詞類が平板式ならば高く平らに、起伏式ならば名詞類のアクセントを生かして低く下がって付く。まれに「らしい」のように、起伏式名詞の型を高く平らに変え、すべてに高く平らに付くような助動詞もあるが、例外といえよう。

名詞類に助動詞が付いた全体の形は、平板式とか起伏式とかの名詞類のグループと、下に示した[a]～[d]の助動詞のグループとの組み合わせできまるものである。それゆえ、どの助動詞がどのグループに属するかを知り、**表4**でどのグループがどのような付き方をするかという基本的なアクセントを覚えれば、あとは類推してゆくことができる。

〈名詞類に付く助動詞のグループ〉
（＊印を付けた語は、他のグループにも属するもの）
[a] だ
[b] です、みたい(1)

注(1) このほか、起伏式名詞に付くときは助動詞の前で切れて、助動詞のアクセントがでる傾向がある。
ハル・ミタイ　ミズウミ・ミタイ

[c] だろう、らしい＊、でしょう
[d] らしい＊

注 このほか、[c]の型のようにも発音される。

〔注意①〕 第6節〔注意①〕と同様の傾向がある。
アクルヒダ、ヤマノウエデス、
トナリノウチダ、オトコノ㋪トデス

〔注意②〕 第6節〔注意②〕と同様の傾向がある。
コレカラダ、コレカラデス
コレキリダ、コレキリデス
マッタクダ、マッタクデス
㋖ットダ、㋖ットデス

第3章 動詞のアクセント

第1節 動詞のアクセントの型および活用形

動詞のアクセントは名詞よりも型の種類が少ない。**表5**に示すように、終止形・連体形は2拍語には平板型（○○）と頭高型（○○）、3拍語には平板型（○○○）と中高型（○○

表5　動詞の活用形および助詞が

動詞の種類 ＼ 助詞の種類				動詞の連用形に付く助詞			
				F	G	H	I
平板式動詞	2拍語	1段活用	イル 居る	イテ	イタリ	イワ	イナガラ
		5段活用	ナル 鳴る	ナッテ	ナッタリ	ナリワ	ナリナガラ
	3拍語	1段活用	ハレル 腫れる	ハレテ	ハレタリ	ハレワ	ハレナガラ
		5段活用	アラウ 洗う	アラッテ	アラッタリ	アライワ	アライナガラ
	4拍語	1段活用	クラベル 比べる	クラベテ	クラベタリ	クラベワ	クラベナガラ
		5段活用	オコナウ 行う	オコナッテ	オコナッタリ	オコナイワ	オコナイナガラ
		サ行変格活用	カンズル 感ずる	カンジテ	カンジタリ	カンジワ	カンジナガラ
起伏式動詞 頭高型	2拍語	1段活用	イル 射る	イテ	イタリ	イワ	イナガラ
		5段活用	ナル 成る	ナッテ	ナッタリ	ナリワ	ナリナガラ
	3拍語	5段活用	カエル 帰る	カエッテ	カエッタリ	カエリワ	カエリナガラ
起伏式動詞 中高型		5段活用	ナラウ 習う	ナラッテ	ナラッタリ	ナライワ	ナライナガラ
		1段活用	ハレル 晴れる	ハレテ	ハレタリ	ハレワ	ハレナガラ
	4拍語	1段活用	シラベル 調べる	シラベテ	シラベタリ	シラベワ	シラベナガラ
		5段活用	テツダウ 手伝う	テツダッテ	テツダッタリ	テツダイワ	テツダイナガラ
		サ行変格活用	シンズル 信ずる	シンジテ	シンジタリ	シンジワ	シンジナガラ

付いたときのアクセント

動詞の終止形・連体形に付く助詞					動詞の仮定形に付く助詞	動詞の命令形およびそれに付く助詞
J	K	L	M	N.	O	P
イルト イルホド	イルネ	イルマデ	イルカ イルカシラ	イルダケ	イレバ	イロ イヨ イロヨ
ナルト ナルホド	ナルネ	ナルマデ	ナルカ ナルカシラ	ナルダケ	ナレバ	ナレ ナレヨ
ハレルト ハレルホド	ハレルネ	ハレルマデ	ハレルカ ハレルカシラ	ハレルダケ	ハレレバ	ハレロ ハレヨ ハレロヨ
アラウト アラウホド	アラウネ	アラウマデ	アラウカ アラウカシラ	アラウダケ	アラエバ	アラエ アラエヨ
クラベルト クラベルホド	クラベルネ	クラベルマデ	クラベルカ クラベルカシラ	クラベルダケ	クラベレバ	クラベロ クラベヨ クラベロヨ
オコナウト オコナウホド	オコナウネ	オコナウマデ	オコナウカ オコナウカシラ	オコナウダケ	オコナエバ	オコナエ オコナエヨ
カンズルト カンズルホド	カンズルネ	カンズルマデ	カンズルカ カンズルカシラ	カンズルダケ	カンズレバ	カンジロ カンゼヨ カンジロヨ
イルト イルホド	イルネ	イルマデ	イルカ イルカシラ	イルダケ	イレバ	イロ イヨ イロヨ
ナルト ナルホド	ナルネ	ナルマデ	ナルカ ナルカシラ	ナルダケ	ナレバ	ナレ ナレヨ
カエルト カエルホド	カエルネ	カエルマデ	カエルカ カエルカシラ	カエルダケ	カエレバ	カエレ カエレヨ
ナラウト ナラウホド	ナラウネ	ナラウマデ	ナラウカ ナラウカシラ	ナラウダケ	ナラエバ	ナラエ ナラエヨ
ハレルト ハレルホド	ハレルネ	ハレルマデ	ハレルカ ハレルカシラ	ハレルダケ	ハレレバ	ハレロ ハレヨ ハレヨ ハレロヨ
シラベルト シラベルホド	シラベルネ	シラベルマデ	シラベルカ シラベルカシラ	シラベルダケ	シラベレバ	シラベロ シラベヨ シラベヨ シラベロヨ
テツダウト テツダウホド	テツダウネ	テツダウマデ	テツダウカ テツダウカシラ	テツダウダケ	テツダエバ	テツダエ テツダエヨ
シンズルト シンズルホド	シンズルネ	シンズルマデ	シンズルカ シンズルカシラ	シンズルダケ	シンズレバ	シンジロ シンゼヨ シンゼヨ シンジロヨ

○)、4拍語には平板型（○○○○）と中高型（○○○○）というように、拍数とは関係なく2種類の型しかない。なお、中高型は、高さの切れ目に特殊な拍が来ないかぎり、原則として最後から2拍目まで高い型である。

ナル（鳴）　　ナル（成）
ハレル（腫）　ハレル（晴）
クラベル（比）　シラベル（調）

ただし、「アクセントを変化させるもの（音韻の法則）」（218ページ）の項でくわしく述べるが、特殊な拍にアクセントの高さの切れ目がきたときには1拍ずれて、2拍語・3拍語には尾高型が、3拍語には頭高型が、4拍以上の語には最後から3拍目まで高い型がでる場合がある。

ツク（付）、フク（吹）、
トール（通）、カエル（帰）、
ヤリトース（やり通す）

このほか、強めの意をもつ複合動詞には、タタキキル（たたき切る）、シガミツクのような型もあるが、例外といえよう。

動詞のアクセントは、それぞれ型の種類によって似た性質をもっている。**表5**でおわかりのように、イル（居）、ナル（鳴）、ハレル（腫）、アラウ（洗）のような、終止形・連体形が同じ平板式のものは、イテ、ナッテ、ハレテ、アラッテと同じ平板式の活用を示す。

イル(射)、ナル(成)、ハレル(晴)、ナラウ（習）、カエル（帰）のような終止形・連体形が起伏式のものは、イテ、ナッテ、ハレテ、ナラッテ、カエッテとなり、やはり起伏式の活用を示す。

拍数・活用形式・アクセント型が同じならば、活用形も同じアクセントとなり、助詞や助動詞の付いた形も同様である。

2拍語

（鳴）ナル、ナラナイ、ナリマス、
　　ナッテ、ナレバ、ナレ
（成）ナル、ナラナイ、ナリマス、
　　ナッテ、ナレバ、ナレ
（咲）サク、サカナイ、サキマス、
　　サイテ、サケバ、サケ
（裂）サク、サカナイ、サキマス、
　　サイテ、サケバ、サケ

3拍語

（腫）ハレル、ハレナイ、ハレマス、
　　ハレテ、ハレレバ、ハレロ
（晴）ハレル、ハレナイ、ハレマス、
　　ハレテ、ハレレバ、ハレロ

4拍語

（比）クラベル、クラベナイ、
　　クラベマス、クラベテ、
　　クラベレバ、クラベロ
（調）シラベル、シラベナイ、
　　シラベマス、シラベテ、シラベレバ、シラベロ

それゆえ、**表5**、**表6**で活用形のアクセントを練習して、それらの基本的な型をしっかり身につければ、本文の終止形から容易に活用形のア

クセントを類推することができよう。

動詞を単純動詞と複合動詞にわけると、複合動詞には比較的しっかりしたアクセント法則があるので、別に述べることにする。単純動詞のうち、転成動詞は別として、その他の動詞には法則らしいものがなく、それぞれの方言アクセントから類推して、個別的に覚えるより方法がない。それについては、平山輝男氏の「主要方言のアクセント比較表」(153ページ)を参照していただきたい。

第2節　転成動詞

転成動詞の法則は規則的である。その語がどんな品詞からできたか、動詞からか形容詞からか、名詞からか、動詞ならば平板式か起伏式かなどによって法則が異なるので、まず、もとのグループが何かを考えていただきたい。

原則として、もとの語のアクセントの式を変えず、もとの語が平板式ならば平板式、起伏式ならば中高型となる。

1．動詞からでたきもの

もとのアクセントの式を変えない。

イク→イケル（行）
キル→㋖セル（着）
ヤム→ヤメル（止）
イク→イケル（生・活）
キル→キレル（切）
ヤム→ヤメル（病）
クレル→クラス（暮）
ツズク→ツズケル（続）
モドル→モドス（戻）
オモウ→オモエル（思）

2．形容詞の語幹からできたもの

原則として、もとのアクセントの式を変えない。

ネムイ→ネムル（眠）
マルイ→マルム、マルメル（丸）
㋫トイ→㋫トル（太）
ホソイ→ホソム、ホソメル、ホソル（細）

ただし、マ行5段活用になるものは中高型になる傾向がある。

アヤシイ、アヤシイ→アヤシム（怪）
カナシイ→カナシム（悲）

3．名詞からできたもの

原則として、もとのアクセントの式を変えない。

タイジ→タイジル（退治）
ギュージ→ギュージル（牛耳）
サボ→サボル
アジ→アジル
ダブル→ダブル

第3節　複合動詞

複合動詞の法則は規則的である。前の部分が動詞であるか、形容詞であるか、名詞であるか、動詞ならば平板式か起伏式かで、全体のアクセントがきまる。

1．「動詞＋動詞」のもの

規則的である。前の動詞が平板式ならば全体が中高型となる。前の動

詞が起伏式ならば全体が平板型だが、若い層ではこれを中高型に発音する傾向が強くなった。この辞典では新しい中高型を大幅にとりいれてある。

ネル→ネナオス（寝直す）
フル→フリダス（振り出す）
ハレル→ハレアガ゜ル(腫れ上がる)
デル→デナオス、デナオス（出直す）
フル→フリダス、フリダス（降り出す）
ハレル→ハレアガ゜ル、ハレアガ゜ル（晴れ上がる）

ただし、前の動詞が強めの意味をもつものは、前の動詞のアクセントを生かして、後ろの動詞は低く平らに付く傾向がある。しかし、これらも若い層では後ろから２拍目まで高い中高型にだんだんなってゆく傾向がみられ、この辞典では古めかしいアクセントの型を省略したものもある。

オソレイイル　イタメツケル
オモイキル　カジリツク
コビリツク　タタキツケル
ヒッパリダス

２．「形容詞の語幹＋動詞」のもの

原則として中高型だが、「……すぎる」など中高型・平板型両様のものもある。

タカナル（高鳴る）
チカズク（近づく）
アラダテル（荒だてる）
チカズケル（近づける）
オースギ゜ル、オースギ゜ル(多すぎる)

３．「名詞＋動詞」のもの

原則として中高型になる。

イキズマル（息詰まる）
イロズク（色づく）
ウズマク（渦巻く）
ウラガ゜エス（裏返す）
クチバシル（口走る）
コトキレル（事切れる）
チマヨウ（血迷う）
テツダウ（手伝う）
ヒマドル（暇取る）
ヨコギ゜ル（横切る）

４．複合の度合いの弱いもの

今まで述べた１．２．３．や、次の５．の(1)のグループよりも、複合の度合いの弱いグループがある。この中には、接合部に助詞を入れても意味の変わらないものや、助詞「て」がすでに付いているものもある。これらは、前の部分が単語単独であるか、助詞が付いているかにかかわらず、前の部分のアクセントを生かす傾向がある。前の部分が平板式ならば後の部分のアクセントの高さの切れ目まで高く、前の部分が起伏式ならば、前部のアクセントの高さの切れ目まで高い型になる。この中には複合動詞というより連語としたほうがよいものもあるが、説明のつごう上ここに入れておいた。なお、「～する」の形のものについては、次の５．にまとめてあげておいたので、そちらを参照していただきたい。

(1)　**「名詞＋動詞」のもの**

モノ→モノユー（物言う）

ユメ→ユメミル（夢見る）

ムチ→ムチウツ（鞭打つ）

セイ→セイダス（精出す）

セッパ→セッパツマル（切羽詰まる）

(2)　**「形容詞の連用形＋動詞」のもの**

アカク（赤く）→アカクナル

ヨク（良く）→ヨクナル

アオク（青く）→アオクナル

(3)　**「動詞＋助詞『て』＋動詞」のもの**

シテ→シテヤル

ヤッテ→ヤッテクル

ミテ→ミテトル

ウッテ（打って）→ウッテカワル

モッテ（持って）→モッテクル、モッテマワル

フッテ、フッテ（降って）→フッテクル、フッテクル

ただし、複合の度合いが強くなったものは1.～3.の法則に準じる。

ユメミル　セッパツマル

ムチウツ　モッテクル

また、前の部分が起伏式で、拍数の多い語や、前部・後部をきわだてて発音しようとしたときなどには、前部と後部が切れて2語にわかれて発音されることがある。

セッパ・ツマル

ウッテ・カワル

モッテ・マワル

5．「ずる」「じる」「する」の付くもの

ほとんどは「信ずる」「信じる」「愛する」のように、漢字1字の漢語に付いて漢語動詞をつくるもので、これらは複合の度合いが強く、平板型または中高型になる。

このほか、漢語・和語・外来語の名詞に付いて「～をする」という意味をもつサ変動詞があるが、これらは複合の度合いが弱く、前の名詞のアクセントを生かす傾向がある。規則的である。

(1)　**複合の度合いの強いもの**

A．「ずる」「じる」の付くもの

(A)　第2拍が引き音の漢字に付くものは、原則として平板型だが、若い層は中高型に発音する傾向がある。

ツーズル、ツージル（通）

ショーズル、ショーズル、ショージル、ショージル（生）

(B)　第2拍が撥音（はつおん）の漢字に付くものは、原則として平板型と中高型の両様がある。

ジュンズル、ジュンズル、ジュンジル、ジュンジル（準）

アンズル、アンズル、アンジル、アンジル（案）

B．「する」の付くもの

(A)　1拍語に付くものはすべて中高型になる。

カスル（課）　ヒスル（秘）

シスル（死）　リスル（利）

(B)　第2拍が促音のものは平板型だが、若い層は中高型に発音する傾向がある。
ケッスル、ケッスル（決）
ネッスル、ネッスル（熱）
ダッスル、ダッスル（脱）

第2拍が促音以外のものは、原則として中高型になる。
アイスル（愛）　カイスル（会）
グースル（遇）　コースル（抗）
サンスル（産）　ヘンスル（偏）

(2)　複合の度合いの弱いもの

前の部分が漢語・和語・外来語にかかわらず、また、名詞、形容詞、擬声・擬態語にかかわらず、前の部分のアクセントを生かす傾向がある。前の部分が平板型ならば全体が平板型、頭高型ならば頭高型、中高型・尾高型ならば前部のアクセントの高さの切れ目まで高い型になる。

A．名詞に付くもの

(A)　名詞が平板型のもの
トクスル（得）
キネンスル（記念）
ケンキュースル（研究）
ツキ゚スル（継）

(B)　名詞が尾高型のもの
タビスル（旅）
セワスル（世話）
キカスル（帰化）

(C)　名詞が中高型のもの
アンナイスル（案内）
ガクモンスル（学問）
オミットスル
ゴールインスル

(D)　名詞が頭高型のもの
ソンスル（損）
イジスル（維持）
キョカスル（許可）
ホーコースル（奉公）
ナミダスル（涙）
オンブスル　バックスル
ダッコスル　マークスル

B．形容詞および擬声・擬態語の付くもの
アカクスル　シロクスル
ボンヤリスル　フンワリスル
ピンピンスル　ヨロヨロスル
ピカピカスル、ピカピカスル

第4節　助詞の付いた形

助詞が動詞に付く場合は、複合の度合いが弱く、ほとんど動詞のアクセントの型を変えない。規則的である。まれに「だけ」のように、起伏式動詞の型を高く平らに変えて、すべて高く平らに付くような助詞もあるが、例外といえよう。また、「ながら」のように、起伏式動詞の型を高く平らに変え、助詞の第1拍まで高く発音するものもあるが、それでも動詞が平板式ならば全体が平板式、起伏式ならば起伏式というような区別をもっている。

動詞に助詞が付いた全体の形は、平板式とか起伏式とかの動詞類のグループと、以下に示した［F］～［P］の助詞のグループとの組み合わせで

きまるものである。それゆえ、どの助詞がどのグループに属するかを知り、**表5**でどのグループがどのような付き方をするかという基本的なアクセントを覚えれば、あとは類推してゆくことができる。

〈動詞に付く助詞のグループ〉

（＊印を付けた語は、他のグループにも属するもの）

[F]　て（で）

[G]　さえ*、たり（だり）、つつ*、ては（では）、ても（でも）、てよ（でよ）

[H]　は（～しない）、さえ*、つつ*、に[1]

注(1)　アソビニユク、ハタラキニデルなどのように、目的を表す「に」が平板式動詞に付くときは、高く平らに付く。

[I]　ながら

[J]　が（格助）、と、な（詠嘆）、に*、は*、も*、よ、を*、きり、しか*、だけ*、ほど、ものの

注　が（格助）、と（引用・列挙）は、このほか、[M]の類のようにも発音される。

[K]　ぜ*、ぞ*、ね

[L]　さえ、すら*、とか*、とて*、とも*、なあ、ねえ、のみ、まで、ゆえ、より*、かな（感嘆）

くらい[2]（ぐらい）、どころ[2]、ばかり[2]、よりか*、よりも*

注(2)　このほか、起伏式動詞の型を高く平らに変え、助詞の第1拍まで高く、2拍から下がって付く傾向がある。

シラベルグ゚ライ

テツダウドコロノ

[M]　か、が（接続）、さ、し、ぜ*、ぞ*、な（禁止）、に*、の、は*、も*、や、を*、かい、かな（疑惑）、かね、から、しか*、すら*、だの、とか*、とて*、とも*、など、なり、ので、のに、やら、より*、わよ、んで、かしら、けれど、なんて、よりか*、よりも*、けれども

[N]　だけ*

注　このほか、[J]の型のようにも発音される。

[O]　ど、ば、ども

[P]　と、や、よ

第5節　助動詞の付いた形

助動詞が動詞に付く場合は規則的である。動詞の終止形・連体形に付くときと、その他の活用形に付くときとで付き方が異なる。終止形・連体形に付く場合は、複合の度合いが弱く、ほとんど動詞のアクセントの型を変えない。まれに「まい」のように、起伏式動詞の型を高く平らに変えて、すべて高く平らに付くような助動詞もあるが例外といえよう。

（鳴）ナル→ナルヨーダ、
ナルダロー

（成）ナル→ナルヨーダ、
ナルダロー

その他の活用形に付く場合は、複

表 6　動詞に助動詞が

動詞の種類			助動詞の種類	動詞の終止形・連体形に付く助動詞 e	f	g
平板式動詞	2拍語	1段活用	イル 居る	イルヨーダ	イルダロー	イルマイ
		5段活用	ナル 鳴る	ナルヨーダ	ナルダロー	ナルマイ
	3拍語	1段活用	ハレル 腫れる	ハレルヨーダ	ハレルダロー	ハレルマイ
		5段活用	アラウ 洗う	アラウヨーダ	アラウダロー	アラウマイ
	4拍語	1段活用	クラベル 比べる	クラベルヨーダ	クラベルダロー	クラベルマイ
		5段活用	オコナウ 行う	オコナウヨーダ	オコナウダロー	オコナウマイ
		サ行変格活用	カンズル 感ずる	カンズルヨーダ	カンズルダロー	カンズルマイ
起伏式動詞 頭高型	2拍語	1段活用	イル 射る	イルヨーダ	イルダロー	イルマイ
		5段活用	ナル 成る	ナルヨーダ	ナルダロー	ナルマイ
	3拍語	5段活用	カエル 帰る	カエルヨーダ	カエルダロー	カエルマイ
起伏式動詞 中高型	3拍語	5段活用	ナラウ 習う	ナラウヨーダ	ナラウダロー	ナラウマイ
		1段活用	ハレル 晴れる	ハレルヨーダ	ハレルダロー	ハレルマイ
	4拍語	1段活用	シラベル 調べる	シラベルヨーダ	シラベルダロー	シラベルマイ
		5段活用	テツダウ 手伝う	テツダウヨーダ	テツダウダロー	テツダウマイ
		サ行変格活用	シンズル 信ずる	シンズルヨーダ	シンズルダロー	シンズルマイ

※无尾高型动词

付いたときのアクセント

動詞の未然形に付く助動詞			動詞の連用形に付く助動詞		
h	i	j	k	l	m
イサセル	イナイ	イヨー	イタ	イタイ	イマス
ナラセル	ナラナイ	ナロー	ナッタ	ナリタイ	ナリマス
ハレサセル	ハレナイ	ハレヨー	ハレタ	ハレタイ	ハレマス
アラワセル	アラワナイ	アラオー	アラッタ	アライタイ	アライマス
クラベサセル	クラベナイ	クラベヨー	クラベタ	クラベタイ	クラベマス
オコナワセル	オコナワナイ	オコナオー	オコナッタ	オコナイタイ	オコナイマス
カンジサセル	カンジナイ	カンジヨー	カンジタ	カンジタイ	カンジマス
イサセル	イナイ	イヨー	イタ	イタイ	イマス
ナラセル	ナラナイ	ナロー	ナッタ	ナリタイ	ナリマス
カエラセル	カエラナイ	カエロー	カエッタ	カエリタイ	カエリマス
ナラワセル	ナラワナイ	ナラオー	ナラッタ	ナライタイ	ナライマス
ハレサセル	ハレナイ	ハレヨー	ハレタ	ハレタイ	ハレマス
シラベサセル	シラベナイ	シラベヨー	シラベタ	シラベタイ	シラベマス
テツダワセル	テツダワナイ	テツダオー	テツダッタ	テツダイタイ	テツダイマス
シンジサセル	シンジナイ	シンジヨー	シンジタ	シンジタイ	シンジマス

合の度合いが強く、全体が一つの動詞のようになるが、ほとんどのものはもとの動詞のアクセントの式を変えない。

(腫) ハレル→ハレナイ、ハレタ、ハレソーダ

(晴) ハレル→ハレナイ、ハレタ、ハレソーダ

動詞に助動詞が付いた全体の形は、平板式とか起伏式とかの動詞類のグループと、以下に示した[e]~[m]の助動詞のグループとの組み合わせできまるものである。それゆえ、どの助動詞がどのグループに属するかを知り、表6でどのグループがどのような付き方をするかという基本的なアクセントを覚えれば、あとは類推してゆくことができる。

〈動詞に付く助動詞のグループ〉

[e] そう(だ)、よう(だ)、みたい

注 このほか、起伏式動詞に付くときは、助動詞の前で切れて、助動詞のアクセントがでる傾向がある。

クル・ヨーダ
ナラウ・ソーダ
カエル・ミタイ

[f] だろう、でしょう、らしい(1)

注(1) このほか、起伏式動詞に付くときは、動詞の型を高く平らに変え、助動詞の第2拍まで高く、3拍から下がって付くことがある。

クルラシイ、カエルラシイ

[g] まい

[h] せる、れる、させる、られる

[i] ない

[j] う、よう、まい

[k] た(だ)

[l] たい、そう(だ)

[m] ます

第4章 形容詞のアクセント

第1節 形容詞のアクセントの型および活用形

形容詞のアクセントは名詞よりも型の種類は少ない。**表7**に表すように、終止形、連体形では2拍語には頭高型(○○)のみ、3拍語には平板型(○○○)と中高型(○○○)、4拍語には平板型(○○○○)と中高型(○○○○)というように、2拍語は1種類、3拍以上の語には2種類しかない。なお、中高型は、高さの切れ目に特殊な拍がこない限り、原則として最後から2拍目まで高い型である。

アツイ(厚)　　アツイ(熱)
ツメタイ(冷)　ミジカイ(短)
ヤサシイ(優)　ウレシイ(嬉)

ただし、「アクセントを変化させるもの(音韻の法則)」(218ページ)の項でくわしく述べるが、特殊な拍にアクセントの高さの切れ目がきたときは1拍ずれて、3拍語には頭高型が、4拍語以上の語には最後から3拍目まで高い型がでる場合がある。

オーイ(オオイ)(多)
マドーイ、マドオイ(間遠)

エンドーイ（縁遠）

なお、若い層では平板型形容詞を中高型に発音する傾向が多くなった。ただし、これは終止形に目立つ現象で、連体形や、そのほかの活用形にはまだあまり及んでいない。そこで、この辞典では3拍形容詞の中高型はおさえる方針をとったが、4拍以上

表7　形容詞の活用形および助詞が付いたときのアクセント

助詞の種類 ／ 形容詞の種類				形容詞の終止形・連体形に付く助詞					形容詞の連用形およびそれに付く助詞	形容詞の仮定形に付く助詞
				Q	R	S	T	U	V	W
平板式形容詞		3拍語	アツイ 厚い	アツイト アツイホド	アツイネ	アツイノミ	アツイカ アツイカシラ	アツイダケ	アツク アツクテ	アツケレバ
平板式形容詞		4拍語	ツメタイ 冷たい	ツメタイト ツメタイホド	ツメタイネ	ツメタイノミ	ツメタイカ ツメタイカシラ	ツメタイダケ	ツメタク ツメタクテ	ツメタケレバ
平板式形容詞		4拍語	ヤサシイ 優しい	ヤサシート ヤサシーホド	ヤサシーネ	ヤサシーノミ	ヤサシーカ ヤサシーカシラ	ヤサシーダケ	ヤサシク ヤサシクテ ヤサシクテ	ヤサシケレバ
起伏式形容詞	頭高型	2拍語	ナイ 無い	ナイト ナイホド	ナイネ	ナイノミ	ナイカ ナイカシラ	ナイダケ	ナク ナクテ	ナケレバ
起伏式形容詞	中高型	3拍語	アツイ 熱い	アツイト アツイホド	アツイネ	アツイノミ	アツイカ アツイカシラ	アツイダケ	アツク アツクテ	アツケレバ
起伏式形容詞	中高型	4拍語	ミジカイ 短い	ミジカイト ミジカイホド	ミジカイネ	ミジカイノミ	ミジカイカ ミジカイカシラ	ミジカイダケ	ミジカク ミジカク ミジカクテ ミジカクテ	ミジカケレバ ミジカケレバ
起伏式形容詞	中高型	4拍語	ウレシイ 嬉しい	ウレシート ウレシーホド	ウレシーネ	ウレシーノミ	ウレシーカ ウレシーカシラ	ウレシーダケ	ウレシク ウレシク ウレシクテ ウレシクテ	ウレシケレバ

には相当数、中高型を認めている。

このほか、強めなど感情のこもった接頭辞が付くものは、コヤカマシイ（小喧しい）、ナマヤサシイ（生易しい）のような頭高型がみられるが、例外といえよう。

形容詞のアクセントは、それぞれの型の種類によって似た性質をもっている。**表7**でおわかりのように、アツイ(厚)、ツメタイ、ヤサシイのような終止形・連体形が同じ平板式のものは、アツク、ツメタク、ヤサシクと同じ平板式の活用を示す。アツイ(熱)、ミジカイ、ウレシイのような終止形・連体形が起伏式のものは、アツク、ミジカク、ミジカク、ウレシク、ウレシクとなり、やはり起伏式の活用を示す。

拍数やアクセント型が同じならば、活用形式も同じアクセントとなり、助詞や助動詞の付いた形や文語の終止形も同様である。

(厚)　アツイ、アツク、アツクテ、
　アツカッタ、アツケレバ、アツシ
(赤)　アカイ、アカク、アカクテ、
　アカカッタ、アカケレバ、アカシ
(熱)　アツイ、アツク、アツクテ、
　アツカッタ、アツケレバ、アツシ
(白)　シロイ、シロク、シロクテ、
　シロカッタ、シロケレバ、シロシ

それゆえ、**表7**、**表8**で活用形のアクセントを練習して、それらの基本的な型をしっかり身につければ、本文の終止形から容易に活用形のアクセントを類推することができよう。

複合形容詞には法則があるので別に述べることにする。単純形容詞のうち、転成形容詞には法則があるが、その他の形容詞には法則らしいものがない。だが、平板型形容詞はわずかなので、それだけを暗記すれば、その他は中高型ということになる。地方によっては方言アクセントから類推して、対応関係で覚えていく方法もあり、それについては平山輝男氏の「主要方言のアクセント比較表」(153ページ)を参照していただきたい。

第2節　転成形容詞

転成形容詞の法則は規則的である。その語がどんな品詞からできたか、動詞からか形容詞からか、形容詞ならば平板式か起伏式かで法則が異なるので、まずもとのグループが何かを考えていただきたい。

原則として、もとのアクセントの式を変えず、もとの語が平板式ならば平板型、起伏式ならば中高型となる。ただし、若い層では、平板型を中高型に発音する傾向がある。なお、「……しい」型のものはすべて中高型になる。

1．動詞からできたもの

アカル→アカルイ（明）
クスグル→クスグッタイ（擽）
コウ→コイシイ（恋）
サワグ→サワガシイ（騒）
ナヤム→ナヤマシイ（悩）

2．形容詞からできたもの

ケムイ→ケムタイ、ケムタイ（煙）

ニクイ→ニクラシイ（憎）

㋖タナイ→㋖タナラシイ（汚）

3．形容動詞の語幹からできたもの

コマカイ（細）

アタタカイ（暖）

ヤワラカイ（柔）

4．「畳語＋『しい』」の形のもの

すべて中高型になる。

オオシイ（雄々しい）

アラアラシイ（荒々しい）

ドクド㋗シイ（毒々しい）

ナレナレシイ（馴れ馴れしい）

ニガ゜ニガ゜シイ（苦々しい）

バカバカシイ（馬鹿馬鹿しい）

第3節　複合形容詞

複合形容詞の法則は、複合動詞ほど規則的ではない。前の部分が動詞であるか名詞であるか、後ろの部分が平板式であるか起伏式であるかで、全体のアクセントがきまる。

1．「動詞＋形容詞」のもの

接尾語的な形容詞が多く、ほとんど中高型になる。

ヤリヨイ（遣りよい）

カキヨイ（書きよい）

コゲ゜㋗サイ（焦げ臭い）

ヤリニクイ（遣りにくい）

ミヤスイ（見やすい）

ネグ゜ルシイ（寝苦しい）

ムシアツイ（蒸し暑い）

2．「形容詞の語幹＋形容詞」のもの

接頭語的な形容詞の付くことが多く、原則として平板型だが、若い層は中高型に発音する傾向がある。また、拍数の多いものは多く中高型になる。

ウスグ゜ライ、ウスグ゜ライ（薄暗い）

アサグ゜ロイ、アサグ゜ロイ（浅黒い）

アオジロイ、アオジロイ（青白い）

3．「名詞＋形容詞」のもの

後部の形容詞が平板式のものは平板型と中高型だが、そのほかはすべて中高型になる傾向がある。

テアツイ、テアツイ（手厚い）

ホドトーイ、ホドトーイ（ほど遠い）

マジカイ（間近い）

㋗サブカイ（草深い）

ココロヨイ（快い）

モノスゴ゜イ（物すごい）

第4節　助詞の付いた形

助詞が形容詞に付く場合は、複合の度合いが弱く、ほとんど形容詞のアクセントの型を変えない。規則的である。「だけ」のように、起伏式形容詞の型を高く平らに変えて付くような助詞や、「か」「かしら」のように、平板式形容詞の最後の拍を低く平らに変え、すべてに低く下がって付くような助詞もあるが、例外といえよう。

形容詞に助詞が付いた全体の形は、平板式とか起伏式とかの形容詞類のグループと、以下に示した[Q]～[W]の助詞のグループとの組み合わせで

きまるものである。それゆえ、どの助詞がどのグループに属するかを知り、**表7**でどのグループがどのような付き方をするかという基本的なアクセントを覚えれば、あとは類推してゆくことができる。

〈形容詞に付く助詞のグループ〉

（＊印を付けた語は、他のグループにも属するもの）

[Q]　と、な（詠嘆）、よ（告示）、だけ*、ほど、ものの

[R]　ぜ*、ぞ*、ね

[S]　ごと、さえ、とか、とて*、とも*、なあ、ねえ、のみ、まで、ゆえ、より*、かな（感嘆）、くらい[1]（ぐらい）、どころ[1]、ばかり[1]、よりか*、よりも*

注(1)　このほか、起伏式形容詞の型を高く平らに変え、助詞の第1拍まで高く、2拍から下がって付く傾向がある。

ミジカイクライ

ウレシードコロノ

タカイバカリデ

[T]　か、が、さ、し、ぜ*、ぞ*、の、わ、も、や、を、かい、かな（疑惑）、かね、から、だの、とか*、とて*、とも*、など、なり、ので、のに、やら、より*、わよ、んで、かしら、けれど、なんて、よりか*、

表8　形容詞に助動詞が付いたときのアクセント

形容詞の種類 ＼ 助動詞の種類			形容詞の終止形・連体形に付く助動詞				形容詞の未然形に付く助動詞
			n	o	p	q	r
平板式形容詞	3拍語	アツイ 厚い	アツイヨーダ	アツイダロー	アツイデス	アツイラシイ	アツカロー
平板式形容詞	4拍語	ツメタイ 冷たい	ツメタイヨーダ	ツメタイダロー	ツメタイデス	ツメタイラシイ	ツメタカロー
平板式形容詞	4拍語	ヤサシイ 優しい	ヤサシーヨーダ	ヤサシーダロー	ヤサシーデス	ヤサシーラシイ	ヤサシカロー
起伏式形容詞 頭高型	2拍語	ナイ 無い	ナイヨーダ	ナイダロー	ナイデス	ナイラシイ	ナカロー
起伏式形容詞 中高型	3拍語	アツイ 熱い	アツイヨーダ	アツイダロー	アツイデス	アツイラシイ	アツカロー
起伏式形容詞 中高型	4拍語	ミジカイ 短い	ミジカイヨーダ	ミジカイダロー	ミジカイデス	ミジカイラシイ	ミジカカロー
起伏式形容詞 中高型	4拍語	ウレシイ 嬉しい	ウレシーヨーダ	ウレシーダロー	ウレシーデス	ウレシーラシイ	ウレシカロー

よりも*、けれども

[U]　だけ*

注　このほか、[Q]の型にも発音される。

[V]　て、は(2)、も、ても、

注(2)　このほか、平板式形容詞の型を高く平らに変え、助詞の第1拍から低く下がって付く傾向がある。

アカクワ、アカルクワ

[W]　ば、ど、ども、

第5節　助動詞の付いた形

助動詞が形容詞に付く場合は、規則的である。形容詞の終止形・連体形に付くときと、未然形などに付くときとで、付き方が異なる。終止形・連体形に付く場合は、複合の度合いが弱く、形容詞のアクセントを変えないものが多い。「です」「らしい」のように、同じ型になるような助動詞もあるが、例外といえよう。未然形に付く「う」の場合は、複合の度合いが強く、全体が一つの形容詞のようになり、同じ型となる。

形容詞に助動詞が付いた全体の形は、平板式とか起伏式とかの形容詞類のグループと、以下に示した[n]～[r]の助動詞のグループとの組み合わせできまるものである。それゆえ、どの助動詞がどのグループに属するかを知り、**表8**で、どのグループがどのような付き方をするかという基本的なアクセントを覚えれば、あとは類推してゆくことができる。

<形容詞に付く助動詞のグループ>

（＊印を付けた語は、他のグループにも属するもの）

[n]　そう(だ)、よう(だ)、みたい

注　このほか、起伏式形容詞に付くときは、助動詞の前で切れて、助動詞のアクセントがでる傾向がある。

タカイ・ソーダ、タカイ・ヨーダ、ミジカイ・ミタイ

[o]　だろう、でしょう、らしい*

[p]　です

[q]　らしい*

注　このほか、[o]の型にも発音される。

[r]　う

第5章　その他の単語のアクセント

第1節　形容動詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞など

これらのアクセントには原則として尾高型がない。

尾高型の名詞や数詞が副詞的に使われるようなときは、平板型に変化する傾向があるが、これについては、第4節を参照していただきたい。なお、活用形のあるものは、名詞に助詞・助動詞の付いたときのアクセントと同様である。

第2節　一般グループ

このグループは、特殊な意味や形をもたないものである。漢語のもの

は、漢語名詞のアクセント法則に準じる。

(丈夫) ジョーブ、ジョーブダ、ジョーブナ、ジョーブニ、ジョーブデ

(綺麗) キレイ、キレイダ、キレイナ、キレイニ、キレイデ

和語のものは、はっきりした法則はないが、転成語は原則としてもとの語のアクセントに準じる。

第3節　擬声・擬態語のグループ

擬声・擬態語の形をもつものは、その語がさらに漢語であるか、和語であるか、またその用い方はどうかで異なった法則をもっている。規則的である。なお複合の度合いの弱いものは、前の部分のアクセントを生かす傾向がある。

1．漢語

(1)　同じ語や似た語が重複したものは、原則として平板型だが、○○○○型に発音されるものも多い。

コンコン（懇々）
モンモン（悶々）
リンリン、リンリン（凛々）
コーコー（煌々、皓々）
モーモー（濛々）
ユーユー、ユーユー（悠々）
ガクガク（諤々）
モクモク（黙々）
コーコツ（恍惚）
モーロー（朦朧）
サンラン（燦爛）

(2)　なお「然」の付くものは、原則として平板型だが、4拍語には、○○○○型に発音されるものもある。

キゼン（毅然）　ソーゼン（騒然）
ガゼン（俄然）　セイゼン（整然）

2．和語

(1)　同じ語や似た語が重複したものは、その活用のしかたによりアクセントが異なる。

A．「と」の付くものおよび、単独で用いられものは頭高型になる。

キラキラト、キラキラ（～光る）
ソロソロト、ソロソロ（～歩く）
ツルツルト、ツルツル（～滑る）
キリキリト、キリキリ（～痛む）
トントント、トントン（～たたく）
カンカント、カンカン（～照る）
ジタバタト、ジタバタ（～する）
ドタバタト、ドタバタ（～走る）
チラホラト、チラホラ（～咲く）
ヤキモ㋖ト、ヤキモ㋖（～する）
カッカト、カッカ（～する）
パッパト、パッパ（～使う）

ただし、形容詞・動詞などが重複した擬声・擬態語的なものは、○○○○型になる傾向がある。

アキア㋖ト、アキア㋖スル（飽き飽き）
ノビノビト、ノビノビスル（伸び伸び）
サムザムト、サムザムスル(寒々)
アオアオト、アオアオスル(青々)
ハヤバヤト、ハヤバヤ（早々）
ハルバルト、ハルバル（遥々）

B．　「だ」「な」「に」の付くも

のは平板型になる。

カンカンダ、カンカンニ
ザラザラダ、ザラザラニ
ツルツルダ、ツルツルニ
ノビノビダ、ノビノビニ

(2)　**きまった語尾をもつものは**、その語尾により、アクセントが異なる。

A.「り」で終わるもの

「と」が付いても用いられるもので、3拍語は、中高型・尾高型の両様、4拍語は、中高型になる。

キラリ、キラリ　ツルリ、ツルリ
コロリ、コロリ　キリリ、キリリ
ヒリリ、ヒリリ　ピリリ、ピリリ
ガッカリ、タップリ、ピッタリ
シンミリ、フンワリ、ヤンワリ

B.「ん」で終わるもの

「と」が付いても用いられもので、中高型になる。

カタン、コトン、ストン、ブラン、
ツルン、カッタン、コットン、
ストン、ブラリン、ツルリン

C.「か」で終わるもの

「だ」、「な」、「に」が付いて用いられるもので、3拍語は頭高型、4拍語は中高型になる。

ハルカ、ハルカダ、ハルカナ、
ハルカニ
サヤカ、シズカ、ホノカ、ユタカ
サワヤカ、ニギヤカ、フクヨカ、
ウララカ、ホガラカ

第4節　名詞類の副詞的用法

名詞や数詞が副詞的に用いられた場合、アクセントは変化しないのが原則である。

ハル→ハルユク（春行く）
キョー→キョーユク（今日行く）
ヒトツ→ヒトツカウ（一つ買う）
ゴネン→ゴネンマッタ（五年待った）

ところが、「数」「時」「量」を表す名詞や数詞のうち、尾高型のものや、独立性の少ない音韻が最後の拍にきた中高型のものは、平板型に変化する傾向がある。

フタツ→フタツタベタ（二つ）
ムッツ→ムッツタベタ（六つ）
イチド→イチドタベタ（一度）
ニド→ニドタベタ（二度）
フタリ→フタリイタ（二人）
ヨッタリ→ヨッタリイタ（四人）
フタツキ→フタツキヤスンダ
（二月）
イチガツ→イチガツイッタ（一月）
ショーガツ→ショーガツイッタ
（正月）
ナツ→ナツカエル（夏）
フユ→フユカエル（冬）
アシタ→アシタカエル（明日）
ユーベ→ユーベカエッタ（夕べ）
ロクジュー→ロクジューアル（六十）
シジュー→シジューアル（四十）
ヨニン→ヨニンイル（四人）
サンニン→サンニンイル（三人）
サンカイ→サンカイヤル（三回）
イッカイ→イッカイヤル（一回）

オーゼイ→オーゼイイル（大勢）
タクサン→タクサンアル（沢山）
キノー→キノーイッタ（昨日）
オトトイ→オトトイイッタ（一昨日）

第5節　指示・疑問を表すグループ

1．**指示を表す語**には平板型が多い。
ココ、コレ、コノ、コチラ、コー（～いう）、コンナ
ソコ、ソレ、ソノ、ソチラ、ソー（～いう）、ソンナ
アソコ、アレ、アノ、アチラ、アー（～いう）、アンナ

2．**疑問を表す語**は、頭高型になる。
ドコ、ドレ、ドノ、ドチラ、ドー（～という）、ドンナ、ナニ、ナゼ、ダレ、イツ、ナニカ、ナンシデ

第6節　助詞や助動詞が付いてできたグループ

このグループは、名詞とか動詞とかのそれぞれの形に、助詞や助動詞が付く場合のアクセント法則に準じる。ただし、この中には転成語とみるべきものも多い。

キューニ（急に）、タマニ（偶に）
ジツニ（実に）、タンニ（単に）
ワガ（我が）、カネテ（予て）
キワメテ（極めて）
イタッテ（至って）
スルト、コレカラ
ヨクモ（良くも）、カラクモ（辛くも）
アラヌ（～うわさ）
ダガ、ダカラ、デモ、デワ

第7節　感動を表すグループ

感動詞のアクセントは、イントネーションに影響されやすいので、他とくらべて特殊である。疑問の意味を含む場合は、尾高型のように発音する傾向がある。
オヤ？、アラ？

1．**単純語**は、原則として頭高型である。
アー、エー、オー、ナー、ネー、マー、ヤー、アラ、コラ、オイ、ハイ、ヤイ、オヤ、ウン、フン

2．**転成語**は、原則としてもとのアクセントを生かすが、2拍語は頭高型になる傾向がある。
コレ、ソレ、アレ、ドレ、ナニ、ヨシ（～来た）、モシ
シマッタ、シツレイ（失礼）

第8節　助詞および助動詞

1．**名詞・動詞・形容詞に助詞・助動詞が付いたときのアクセント**は、前に述べた。どのような助詞・助動詞が、どのような語に付き、どのようなアクセントの型を示すかは、後にあげる(1)「助詞索引」および(2)「助動詞索引」によって調べていただきたい。

2．**助詞が、名詞・動詞・形容詞以外の語に付いたもの**

(1)　**助詞が、副詞・連体詞・代名詞などに付いたときのアクセント**は、名詞に付いたときのアクセントに準

じる。

ソレニ、コチラニ、　ガッカリト、

ダレカ、イツカ

すでに助詞が付いているものに、さらに助詞が付くときは、助詞が助詞に付くときのアクセントに準じる。

キューニワ、ソレニワ、タマニワ、コチラニモ、ガッカリトワ、ダレカニ、イツカワ、コレカラデモ

(2)　**助詞が助詞に付いたもの**

すでに助詞が付いているものに、さらに助詞が付くときは、原則として低く下がって付く。前部が平板型のときは、後ろの助詞から下がって付き、前が頭高型・中高型のときは、低く平らに付く。

ミズデ→ミズデサエ、ミズデワ

ヤッテ→ヤッテサエ、ヤッテワ

ヤマニ→ヤマニサエ、ヤマニワ

ハルデ→ハルデサエ、ハルデワ

タベテ→タベテサエ、タベテワ

ナラッテ→ナラッテサエ、

　ナラッテワ

ただし、「と」、「きり」、「しか」、「だけ」は、前部が平板型の場合、高く平らに付く傾向がある。

ミズデダケ、ミズデダケ

ヤッテダケ、ヤッテダケ

(3)　**助詞が助動詞に付いたもの**

その助動詞の種類によって、付き方が異なる。その助動詞が動詞型ならば、動詞に付くときの付き方に準じるし、名詞型ならば、名詞に付くときの付き方に準じる。

アラワセル→アラワセルト、

　アラワセルマデ、

　アラワセナガラ

ナラワセル→ナラワセルト、

　ナラワセルマデ、

　ナラワセナガラ

3．助動詞が名詞・動詞・形容詞以外の語に付いたもの

(1)　**助動詞が、副詞・連体詞・代名詞などに付いたときのアクセント**は、名詞に付いたときのアクセントに準じる。ただし、平板型の副詞に付くときは、低く下がって付く傾向がある。

ソレデス、ガッカリデス、

ドコダロー、ダカラダロー、

マッタクデス、セッカクデスガ

すでに助詞が付いているものに助動詞が付くときは、助動詞が助詞に付くときのアクセントに準じる。

キューニデス、ソレニデス、

コレカラダロー

(2)　**助動詞が助詞に付いたもの**

すでに助詞が付いているものに助動詞が付くときは、原則として低く下がって付く。前部が平板型のときは、後ろの助動詞が低く下がって付き、前が頭高型・中高型のときは、低く平らに付く。

ミズデ→ミズデデス

ナクト→ナクトダ

オトコニ→オトコニデス

ハルニ→ハルニデス

ヨムト→ヨムトデス

(3) 助動詞が助動詞に付いたもの

その助動詞の種類によって、付き方が異なる。その助動詞が動詞型ならば、動詞に付くときの付き方に準じるし、名詞型ならば、名詞に付くときの付き方に準じる。

アラワセル→アラワセラレル、アラワセタ、アラワセタダロー
ナラワセル→ナラワセラレル、ナラワセタ、ナラワセタダロー

(1) 助詞索引

(2) 助動詞索引

第6章　ことばの連続とアクセント

これまでは、主として単語のアクセント法則を述べてきた。

ここでは、そうした単語が二つ以上連続して用いられるときのアクセント法則についてふれることにする。

まず、ことばの連続の法則は、大きく三つにわけることができる。

しかし、必ずどれか一つのグループに入るというのではなく、ある時にはそれぞれが分離したり、またある時には弱い複合のしかたをしたりするものである。特に慣用句の場合には三とおりのアクセント連続になることもあるが、表10（214ページ）の対照表を参照していただきたい。

1．分離グループ

一つ一つの意味をはっきりさせようとして発音すると、ひとつづきにならずにおのおのが分離して、もとのアクセントどおりに発音される。

表9　複合の比較(1)

後部文節 ＼ 前部文節	平板式		起伏式	
	分離グループ	複合の弱いグループ	分離グループ	複合の弱いグループ
平板式	サクラ・サク トリガ・ナク ナク・トリ ツメタイ・ミズ ヤマダ・カズオ	サクラサク トリガナク ナクトリ ツメタイミズ ヤマダカズオ	サク・ハナ カゼガ・フク カゼガ・ツヨイ カゼガ・フイタ ヤマダ・ハナコ	サクハナ カゼガフク カゼガツヨイ カゼガフイタ ヤマダハナコ
起伏式	ハナ・サク フク・カゼ ハナガ・サイタ アオイ・トリ ツヨイ・カゼ アム・ミズ ハルノ・ミズ ヤマシタ・カズオ	ハナサク フクカゼ ハナガサイタ アオイトリ ツヨイカゼ アムミズ ハルノミズ ヤマシタカズオ	ヤマ・タカイ ヤマ・タカシ ヤマガ・タカイ アオイ・ソラ ハルノ・ヤマ ソラガ・アオイ ハルノ・ソラ ヤマシタ・ハナコ	ヤマタカイ (ヤマタカシ) ヤマガタカイ (アオイソラ) ハルノヤマ ソラガアオイ (ハルノソラ) (ヤマシタハナコ)

トリカ゚・ナイタ
ハナカ゚・サイタ

しかし、これでは小学校1年生の読み方のようで、あまり自然な会話とはいえない。ただし、それぞれの文節が長いものや、前部の文節が起伏式で、後部の文節が頭高型のものは、このグループにはいる傾向がある。

2．複合の弱いグループ

普通の会話では、一つ一つの意味をはっきりさせようと、努力して、おのおのを分離させて発音させることはまず少ない。ひとつづきに、一語のように発音するほうが楽であるし、自然な会話である。

トリカ゚ナイタ
ハナカ゚サイタ

このような発音の場合は、前部の文節はもともとが平板式ならば平板式に、起伏式ならば起伏式に、もとのアクセントどおりに発音されるが、後部の文節は多少変化して発音される。それぞれの例については**表9**、**表10**を参照していただきたい。

(1)　**前部の文節が平板式のもの**は、後部の文節のアクセントの高さの切れ目まで高い型になる。そのため、後部が平板型、尾高型、中高型のものは、第1拍が高く変化して前部に高く平らに接続する。

(2)　**前部の文節が起伏式のもの**は、前部のアクセントを生かして、前部のアクセントの高さの切れ目まで高い型になる。

そのため、後部の文節のアクセントは、すべて低く平らに変化して接続する。

ただし、後部の文節が頭高型のものは複合しにくい傾向がある。

3．複合の強いグループ

これらは慣用句など、始終続けて発音されるようなことばの連続に多くあらわれる。

後部文節が名詞のものが多く、複

表10　複合の比較(2)

語例＼グループ別	分離グループ	複合の弱いグループ	複合の強いグループ
自縄自縛	ジジョー・ジバク	ジジョージバク	ジジョージバク
言わぬが花	イワヌカ゚・ハナ	イワヌカ゚ハナ	イワヌカ゚ハナ
至れり尽くせり	イタレリ・㋡クセリ	イタレリ㋡クセリ	イタレリ㋡クセリ
取っ替え引っ替え	トッカエ・㋪ッカエ	トッカエ㋪ッカエ	トッカエ㋪ッカエ
暗中模索	アンチュー・モサク	アンチューモサク	アンチューモサク
年百年中	ネンピャク・ネンジュー	ネンピャクネンジュー	ネンピャクネンジュー
件の如し	クダンノ・コ゚トシ	クダンノコ゚トシ	クダンノコ゚トシ
飲まず食わず	ノマズ・クワズ	ノマズクワズ	ノマズクワズ
どうにかこうにか	ドーニカ・コーニカ	ドーニカコーニカ	ドーニカコーニカ
豊臣秀吉	トヨトミ・ヒデヨシ	トヨトミヒデヨシ	トヨトミヒデヨシ

合名詞の法則に似た複合のしかたをする。つまり、前部のアクセントに関係なく、後部の文節が平板式ならば後部の第１拍まで高い型になり、後部の文節が起伏式ならばその高さの切れ目まで高い型になる。

ただし、複合の度合いのはなはだしいものは、その拍数での安定型になることもある。それぞれの例については、**表10**を参照していただきたい。

第７章　古いアクセントと新しいアクセント

どの時代でも、どんな地方でも、アクセントは少しずつ常に変化しているものである。平安時代の京都アクセントと現代の京都アクセントをくらべてみても、アクセントの型がグループ別に変化していることが証明できる。

ただし、ここにあげるアクセントの移り変わりというのは、アクセントの型そのものの変化ではなく、現在、東京で、どういう単語がどんなふうに変化しつつあるかという、東京アクセントの表情をとらえ、その代表例をとりあげたものである。

このような、東京語の個々のアクセントの変遷は、明治25・26年の山田美妙『日本大辞書』以来、いくつかの辞書に注記されたアクセントの変遷をみても明らかである。日本放送協会編の『日本語発音アクセント辞典』でも、昭和18年版、26年版、41年版、60年版で相当の異なりがみられる。

こうした現代東京アクセントの推移の問題については、佐久間鼎氏、神保格氏、三宅武郎氏、金田一春彦氏が何度かふれておられるし、国立国語研究所、ＮＨＫ放送文化研究所などの調査もあり、流動の状態をつかむことができる。

では、その傾向はどうかというと、所属語彙の少ない型の語は、所属語彙の多い安定型に変わりつつあるということが一つ言える。たとえば、２拍語・３拍語の尾高型は、平板型や頭高型に変化しやすいとか、４拍語・５拍語の尾高型は、中高型や平板型に変化しやすいとか、５拍語の頭高型は、中高型に変化しやすいとかである。

たとえば『日本語発音アクセント辞典』の26年版で、中高型と頭高型の新旧両様注記されていた「赤とんぼ」「鬼が島」「鬼がわら」「肩車」「陣太鼓」「東海道」「中仙道」の頭高型のたぐいは、現在、高年層でも新しい中高型の勢いが強くて、古いアクセントから新しいアクセントへの交替も間近いグループである。41年版以後は、古い型の省かれたものが多い。

また、前部が起伏式動詞の複合動詞は、26年版では平板型のみ記載されていたが、若い層では中高型が多

新旧アクセント対照表

	古いアクセント	新しいアクセント	語例
1拍語	○	$\overline{○}$⌉	〈九〉、〈五〉、巣、帆
2拍語	○$\overline{○}$	$\overline{○}$⌉○	《姉》、《鍬》、《梅雨》、武家、巫女、《籾》
	○$\overline{○}$⌉	○$\overline{○}$	北、鹿、〈虹〉…
	○$\overline{○}$⌉	$\overline{○}$⌉○	〈神〉、《熊》、髭、鮨、唾、〈母〉、《晴れ》、《風呂》、八重// 〈千葉〉、土佐、肥後
	$\overline{○}$⌉○	○$\overline{○}$	僕、姪
	○$\overline{○}$⌉	$\overline{○}$⌉○、○$\overline{○}$	酔い
3拍語	○$\overline{○○}$	○$\overline{○}$⌉○	〈糸屋〉、桶屋、〈乙女〉、お鍋、お針〈足袋屋〉//《赤い》、《厚い》、《暗い》…//〈怒る〉、勇む、△来出す、出会う、《望む》、見入る、見込む…
	○$\overline{○○}$	$\overline{○}$⌉○○	《苺》、〈疫痢〉、《家老》、〈漁業〉、〈赤痢〉、〈町家〉、蝶々、幕府、みこし//姫路
	○$\overline{○○}$⌉	○$\overline{○○}$	いくさ、〈五日〉、豆腐、〈七日〉、林、東…
	○$\overline{○○}$⌉	$\overline{○}$⌉○○	会議、爺や、婆や//〈尾張〉、〈上総〉、〈熊野〉、信濃、駿河、摂津、栃木、〈長野〉、△三河、〈吉野〉…
	○$\overline{○}$⌉○	$\overline{○}$⌉○○	青葉、〈朝日〉、〈落ち葉〉、〈黄粉〉、〈若葉〉
	$\overline{○}$⌉○○	○$\overline{○○}$	親父、浮き名、映画、《高座》、持病、電車、〈電話〉、〈冬至〉、〈流転〉、〈路頭〉
	$\overline{○}$⌉○○	○$\overline{○}$⌉○、○$\overline{○○}$	憂き世
	$\overline{○}$⌉○○	○$\overline{○}$⌉○	△青く、《熱く》、△黒く…
4拍語	○$\overline{○○○}$	○○$\overline{○}$⌉○	お七夜// 《明るい》、《悲しい》…//書き抜く、《感じる》、《感ずる》、《達する》、《通じる》、《通ずる》、出直す、《発する》、見上げる、読み切る…
	○$\overline{○○○}$	○$\overline{○}$⌉○○	糸巻き//△射通す、見返す、見通す…//岩代、△葛飾、松前//家康、〈鎌足〉、信長、秀吉、△広重…
	○$\overline{○○○}$	$\overline{○}$⌉○○○	〈航海〉、〈工業〉、《興業》、〈商業〉、〈農業〉、《町人》//《数人》、《数年》、△千円、△千年//△阪東//△鉄斎、△北斎…
	○$\overline{○○○}$、○○$\overline{○}$⌉○	$\overline{○}$⌉○○○	△千人
	○$\overline{○○○}$⌉	○$\overline{○}$⌉○○	△二色、〈二組〉、三月…//下総…
	○$\overline{○○○}$⌉	○$\overline{○}$⌉○○、○$\overline{○○○}$	〈小魚〉、〈煮魚〉
	○$\overline{○○○}$⌉、○○$\overline{○}$⌉○	○$\overline{○○○}$	《足音》、《雷》、苦しみ、喜び…
	$\overline{○}$⌉○○○	○$\overline{○○○}$	〈開運〉、△改易、〈糾明〉、執念、〈襲名〉、〈親類〉、相続、対決、〈忠勤〉、股立、〈立秋〉、〈立春〉、籠城、飼い猫、初孫
	$\overline{○}$⌉○○○	○$\overline{○○○}$、○○$\overline{○}$⌉○	陣笠
	$\overline{○}$⌉○○○	○$\overline{○}$⌉○○	初産、狩人、玄人、素人//△青くて、《熱くて》、△黒くて…//△落合、△小泉//△浜町
	$\overline{○}$⌉○○○、○$\overline{○}$⌉○○	○$\overline{○○○}$	匕首、〈言い分〉

	古いアクセント	新しいアクセント	語　例
5拍語	○○○○○	○○○○○	書き直す、読み上げる…//薄暗い、むずかしい…
	○○○○○	○○○○○	△書き通す、△吹き通る、読み返す…
	○○○○○	○○○○○	緋縮緬、絽縮緬
	○○○○○	○○○○○	〈石畳〉、〈飛び道具〉、〈水薬〉、〈水車〉、焼き豆腐
	○○○○○、○○○○○	○○○○○	痛み入る、思い切る…
	○○○○○	○○○○○	〈こざっぱり〉、△こめんどう…
	○○○○○、○○○○○	○○○○○	こうるさい、こ汚い…//こきつかう…
	○○○○○	○○○○○	赤とんぼ、海坊主、お月様、〈鬼が島〉、〈鬼がわら〉、影法師、〈肩車〉、〈しゃりこうべ〉、陣太鼓、陣羽織、〈高島田〉、〈種子島〉、段袋、△女護島//〈壇ノ浦〉//松平//△勘右衛門、三太夫、△団右衛門…
	○○○○○	○○○○○	△回向院//△二十円、△二十年…
	○○○○○	○○○○○、○○○○○	こ生意気…
6拍語	○○○○○○	○○○○○○	黒縮緬、紋縮緬//△数千人、△何千人
	○○○○○○	○○○○○○	〈青天井〉、〈石灯籠〉、〈釣灯籠〉、〈円天井〉
	○○○○○○、○○○○○○	○○○○○○	痛めつける、思い当たる…
	○○○○○○、○○○○○○	○○○○○○	思い返す、〈まかり通る〉…
	○○○○○○、○○○○○○	○○○○○○	こ憎らしい、こむずかしい、こやかましい、生易しい…
	○○○○○○	○○○○○○	小一時間//△三百円、△三百年、△数百人、何百人…
	○○○○○○	○○○○○○	食いしん坊、〈中学校〉、△ひいじいさん、△ひいばあさん//〈東海道〉、〈中仙道〉//△文左衛門、〈門左衛門〉…//△三十円、三十日、△三十年、△三十歳、△数十人、何十人…
	○○○○○○	○○○○○○	お稲荷さん

〈 〉この辞典に古いアクセントが掲げてないもの
《 》この辞典に新しいアクセントが掲げてないもの
△　この辞典にその単語がないもの
…　そのグループの代表例のみをここに掲げたもので、同様の形の語はそのアクセントの型になることを示す。

くなり、41年版以後は、両様記載してある。新しい型のほうが優先の場合も相当ある。

カキナオス→カキナオス、
　カキナオス（書き直す）
ヨミアゲル→ヨミアゲル、
　ヨミアゲル（読み上げる）

また、若い層で平板型形容詞の終止形を、中高型に発音する傾向があらわれてきた。しかし、その人たちでも連体形は依然として平板型が多く、そのほかの活用形のアクセントや、アクセントの機能から考えて、中高型は示さないことにした。

私は、アクセントの機能性から考えて、古いアクセントの型が高年層の中でも生きている以上は、それら伝統的なアクセントの型を切り捨てるにしのびないものがある。この辞典にあげないということで、共通アクセントの枠からしめ出されるというのは、いかにも惜しい。

そこで、著しくアクセントの変化した単語の代表例をあげ、対照表にしてみた。

第8章　アクセントを変化させるもの（音韻の法則）

これまでは音韻とは関係なしにアクセントの法則を説明してきた。しかし、それらすべての法則に関係するのが、次に述べる音韻とアクセントの関係の法則である。

諸方言のアクセントをながめると、音韻がアクセントを動かす方言と動かさない方言とがある。近畿の大部分、四国のうち高知、愛媛、徳島県および香川県の西半分、九州の西南部、北海道に飛んで新十津川、重内といった京阪式アクセントの地方などでは、音韻がアクセントを動かさない傾向がある。

たとえば、京都方言では、コンバン、コイサン、チューガク、ヒクイのような、独立性の少ない音韻にアクセントの高さの切れ目がきても、アクセントの位置が変化しない。

ところが、東京式のアクセントの地方などでは、撥音・引き音・連母音の後部・促音、母音の無声化する拍など、独立性の少ない音韻にアクセントの高さの切れ目がきたとき、それを前後にずらす傾向がある。

たとえば、東京ではホーソーキョク（放送局）をホーソーキョク、シンブンシャ（新聞社）をシンブンシャ、ネガイ（願）をネガイ、㋖シャ（汽車）を㋖シャのようにアクセントを変化させる。

この法則は大きく二つに分類することができる。

第1節　撥音（はつおん）・引き音・連母音の後部・促音に高さの切れ目がきた場合

これらの拍は、高さの切れ目がおきにくい。そのため、アクセントの高さの切れ目がそこにくると、原則として1拍前にずれる。

たとえば、動詞のアクセントの型は、原則として平板型・中高型の2種類だが、次のような場合は1拍ずれて頭高型になる。

トール、トース（通）

カエル、カエス（返）

また、起伏式動詞からできた2拍、3拍名詞は尾高型になるのが原則だが、最後の拍が母音で、前の母音といっしょになって二重母音のように発音する場合は、中高型になる傾向がある（以下、*を付けた語は、規則型のあるもの）。

コイ（恋）、ヨイ*（酔）

オモイ（思）、ニオイ（匂）

ネガイ（願）、ヤトイ（雇）

マヨイ*（迷）、クルイ（狂）

イワイ（祝）、サカイ（境）

オボエ*（覚）、コタエ*（答）

ソナエ*（備）

このような変化型は、複合語、特に複合名詞に顕著である。たとえば、ジムキョク(事務局)、デンワキョク(電話局)、テレビキョク（～局）などのたぐいは、複合名詞の法則から、前部の最後の拍まで高い型になる。

ところが、その拍に撥音・引き音などがくると、1拍前にずれて、シュッパンキョク(出版局)、ユービンキョク(郵便局)、ホーソーキョク（放送局)、ヘンシューキョク(編集局)、ゾーヘイキョク（造幣局）のように変化する。このたぐいは、220ページに規則的な型と変化した型との対照表をあげておいたので、参照していただきたい。

なお、促音ではオンガッカイ（音楽会)、サンカッケイ（3角形）などの例があげられるが、数は少ない。

第2節　母音の無声化する拍に高さの切れ目がきた場合

母音の無声化する拍には高さの切れ目がおきにくい。そのため、アクセントの高さの切れ目がそこにくると、原則として1拍前後にずれる。

1．単純語および複合の度合いの強いもの

原則として1拍後ろにずれる。

たとえば、「子」の付く女子名は、ハナコ、カズコと頭高型になるのが原則である。ところが、第1拍に母音の無声化する拍がくると1拍後ろにずれて、ヒサコ、フサコ、フクコと中高型になる。

また、3拍の起伏式形容詞の連用形は、アオク、シロク、タカクと頭高型になるのが原則だが、第1拍に母音の無声化する拍がくると、チカク、ヒクク、フカク、フトクのように中高型に変化する。

また、連用形がカイテ(書)、フイテ（吹)、ツイテ（付）というアクセントの型をもつ動詞の終止形は、カクのように頭高型になるのが原則だが、母音の無声化のために1拍ずれて、フク*、ツク*のような尾高型もあらわれる。同じように、クル（来る)、フル(降る)の連用形も、キテ、

フッテ、キタ、フッタとなるわけだが、無声化のために、キテ*、フッテ*、キタ*、フッタ*と発音する傾向が強い。

擬声・擬態語の類も、ピクピク、シクシク、スタスタと頭高型だが、1拍後ろにずれてピクピク*、シクシク*、スタスタ*のようになる傾向が強い。

なお、漢語名詞で漢字2字2拍の尾高型や、3拍の中高型は、無声化のためにずれてできたものが相当ある。

キシャ*（汽車、記者、喜捨）
シキ*（四季、士気、死期）
キカイ（機械）
シキン*（資金）

注　ただし、近年若い層では、無声化しても高さの切れ目をずらさずに、キシャ、ヒサコ、フッテ、シクシク、シキのように発音する傾向が増加してきており、この辞典でも両様をあげたものが多い。それはこの辞典の目指すアクセントが、従来の東京アクセントから首都圏アクセントへと大きく変化したからにほかならない。

第3節　規則型・変化型対照表

複合語の法則に合う規則的な型と、音韻がアクセントを動かした変化型をとりだして表にしてみた。

ただし、ここに例外がある。独立性の少ない音韻といっても、その独立性の少なさに多少のちがいがある。たとえば、撥音・引き音・促音はもっとも独立性が少なく、そこにアクセントの高さの切れ目がくることはない。ところが、二重母音のように発音される連母音の後ろの拍や、母

表11　規則型・変化型対照表

変化型／規則型	撥音による	引き音による	連母音による	母音の無声化による
デンワキ（電話機）	ロクオンキ（録音機）	ヒコーキ（飛行機）	ダッスイキ（脱水機）	センタクキ・センタクキ（洗濯機）
オーサカシ（大阪市）	ムロランシ（室蘭市）	キタキューシューシ（北九州市）	センダイシ（仙台市）	ナガサキシ、ナガサキシ（長崎市）
カンリシャ（管理者）	セキニンシャ（責任者）	ロードーシャ（労働者）	チューカイシャ（仲介者）	アイドクシャ、アイドクシャ（愛読者）
シシャカイ（試写会）	トーロンカイ（討論会）	コーシューカイ（講習会）	オサライカイ（おさらい会）	オンガクカイ、オンガクカイ（音楽会）
ガイムショー（外務省）	ツーサンショー（通産省）	ロードーショー（労働省）	コーセイショー（厚生省）	ケンセツショー、ケンセツショー（建設省）
ドーギシン（道義心）	ジソンシン（自尊心）	アイコーシン（愛校心）	イライシン（依頼心）	アイコクシン、アイコクシン（愛国心）

音の無声化する拍は、それにくらべて多少独立性がある。そして、それらの変化型を後部とする複合語は、変化する以前のアクセントで複合する傾向がある。たとえば、無声化の法則で、㋛ケンが1拍ずれて㋛ケンになったような語が複合語の後部にきたとき、アクセントがずれる以前の型が復活して、ニューガ゚ク㋛ケン、ニューガ゚ク㋛ケンの両型があらわれる。次の例も同様である。

㋛キン→カイテン㋛キン、
　　　カイテン㋛キン

なお、こうした例外は無声化によるものばかりでなく、次のようなものも含まれる

サカイ→ケンザカイ（県境）
　　　クニザカイ（国境）

[1966年8月初出、1998年2月改稿]

数詞・助数詞の発音とアクセント

桜井茂治
秋永一枝

第1章　数詞・助数詞の発音とアクセント

数詞および、数詞に助数詞が付いたときの発音やアクセントは、きわめて複雑である。

たとえば、数詞では、イチ（1）ニ（2）サン（3）……と漢語の数詞の系列があるかと思うと、ヒト（一）フタ（二）ミ（三）……という和語の系列もあるし、また、ヒト（一）フタ（二）サン（三）ヨン（四）……という漢語と和語のまじった系列もあるといった状態である。

数詞に助数詞が付いた場合の発音やアクセントにしても、付く数詞によって、イチ（1）に「羽」が付くときは、イチワ（1羽）と助数詞の語頭が、ワと清んだ音で発音されるが、サン（3）に付くと、サンバ、サンワ（3羽）の両方になり、また、ロク（6）に付くと、ロッパ、ロクワ（6羽）の両方に発音される。

さらに、こうした発音の問題にアクセントがからんでくると、さらに複雑になる。しかし、こうした複雑ななかにも、数詞、「数詞＋助数詞」の発音やアクセントには、それぞれ、法則というべきものがみられる。ここでは、以上のような数詞、「数詞＋助数詞」の発音・アクセントについてまとめてみる。

第2章　数詞の発音とアクセント

数詞のアクセント法則は、名詞の法則とは異なり、なかなか複雑である。数詞が和語か漢語か、漢語なら単純語か複合語かで異なった法則をもっている。

なお中高型・尾高型の数詞が副詞的に用いられるときは、平板型に変化する傾向があるが、これについては、「名詞類の副詞的用法」（209ページ）を参照していただきたい。

第1節　単純語

1．和語

促音を含むもの、および「二つ」は尾高型になるが、他はすべて中高型である。

ヒトツ、フタツ、ミッツ、ヨッツ、イツツ、ムッツ、ナナツ、ヤッツ、ココノツ

なお、次の類はすべて頭高型である。

ヒー、フー、ミー、ヨー、イツ、
ムー、ナナ、ヤー、コノ、トー

2．漢語

平板型の「三」と、古くは平板型だったが、現在ではほとんど頭高型に発音される「五」「九」と、それ以外の数の3つのグループに分かれる。複合数詞になった場合も、その性質が反映するので注意したい。1拍語は頭高型、2拍語は平板型の「三」と頭高型の「十」「千」を除き、尾高型になる。

第2節　複合語

1．複合の度合いの強いもの

2つの数詞が複合してできたものは、複合の度合いが強く、全体が1語のように発音される。**(表1)**をご覧いただきたい。

(1)「二十」〜「九十」
「二十」「三十」「四（よん）十」「九（きゅう）十」は頭高型、その他は中高型。

(2)「二百」〜「九百」

表1　数詞のアク

10　＋		×　1	10	100	1000	10,000
ジューイチ	1	イチ	ジュー	ヒャク	セン	イチマン
ジューニ	2	ニ	ニジュー	ニヒャク	ニセン	ニマン
ジューサン	3	サン	サンジュー	サンビャク	サンゼン	サンマン
ジューシ ジューヨン	4	シ ヨン	シジュー ヨンジュー	(シヒャク) ヨンヒャク	ヨンセン	ヨンマン
ジューゴ	5	ゴ	ゴジュー	ゴヒャク	ゴセン	ゴマン
ジューロク	6	ロク	ロクジュー	ロッピャク	ロクセン	ロクマン
ジューシチ ジューナナ	7	シチ ナナ	シチジュー ナナジュー	(シチヒャク) ナナヒャク	(シチセン) ナナセン	シチマン ナナマン
ジューハチ	8	ハチ	ハチジュー	ハッピャク	ハッセン	ハチマン
(ジューキュー) ジューク	9	キュー ク	キュージュー (クジュー)	キューヒャク	キューセン	キューマン (クマン)
ニジュー	10	ジュー				ジューマン

表2　数詞のアク

前部＼後部	サン	ロク	ナナ
ゴジュー	ゴジューサン	ゴジューロク	ゴジューナナ
ゴヒャク	ゴヒャクサン	ゴヒャクロク	ゴヒャクナナ
ニジュー	ニジューサン	ニジューロク、ニジュー・ロク	(ニジューナナ)、ニジュー・ナナ
サンビャク	サンビャクサン	サンビャクロク、サンビャク・ロク	(サンビャクナナ)、サンビャク・ナナ
ゴヒャクサンジュー	ゴヒャクサンジューサン	ゴヒャクサンジューロク、 ゴヒャクサンジュー・ロク	(ゴヒャクサンジューナナ)、 ゴヒャクサンジュー・ナナ

「三百」「四(よん)百」「九(きゅう)百」は頭高型、その他は尾高型。ただし、「七(なな)百」は中高型。

(3)「千」「万」の付くもの
原則として、うしろから2拍目まで高い中高型。ただし、十万台、百万台は例外があるので注意。

(4)「十一」～「十九」
「十三」「十五」「十九(く)」は頭高型、「十四(よん)」「十七(なな)」「十九(きゅう)」は中高型、その他は尾高型。

2．複合の度合いの弱いもの

複合数詞にさらに数詞が続く場合は、複合の度合いが弱い。前部の複合数詞のアクセントによって、2つのグループに分かれる。**(表2)**をご覧いただきたい。

(1)　前の複合数詞が中高型・尾高型のものは、全体が1語のように続けて発音される。うしろの数詞が平板型ならば全体が平板

セント　(1)

100,000	1,000,000	10,000,000	100,000,000
ジューマン	ヒャクマン	イッセンマン	イチオク
ニジューマン、ニジューマン、ニジューマン	ニヒャクマン	ニセンマン	ニオク
サンジューマン、サンジューマン、サンジューマン	サンビャクマン、サンビャクマン	サンゼンマン	サンオク
ヨンジューマン、ヨンジューマン、ヨンジューマン	ヨンヒャクマン、ヨンヒャクマン	ヨンセンマン	ヨンオク
ゴジューマン、ゴジューマン	ゴヒャクマン	ゴセンマン	ゴオク
ロクジューマン、ロクジューマン	ロッピャクマン	ロクセンマン	ロクオク
シチジューマン、シチジューマン ナナジューマン、ナナジューマン	(シチヒャクマン) ナナヒャクマン	(シチセンマン) ナナセンマン	シチオク ナナオク
ハチジューマン、ハチジューマン	ハッピャクマン	ハッセンマン	ハチオク
キュージューマン、キュージューマン キュージューマン	キューヒャクマン、キューヒャクマン	キューセンマン	キューオク
			ジューオク

セント　(2)

ゴジュー	ゴジューイチ	ニジュー
——	——	——
ゴヒャクゴジュー	ゴヒャクゴジューイチ	ゴヒャクニジュー
——	——	——
サンビャクゴジュー、サンビャク・ゴジュー	サンビャクゴジューイチ、サンビャク・ゴジューイチ	サンビャク・ニジュー
——	——	——

型、起伏型ならば後部数詞のアクセントの高さの切れ目まで高い型になる。ただし、あまり長いものは、途中で切れて別々の数詞のように発音される傾向がある。

(2) 前の複合数詞が頭高型のものは、2語に分かれて別々の数詞のように発音する場合と、分かれずに1語のように発音する場合と両様ある。1語のように発音する場合は、うしろの数詞が、平板型・尾高型・中高型のもので、前の部分のアクセントを生かして、低く付く傾向がある。

第3章 「数詞＋助数詞」の発音とアクセント

1. 数詞に助数詞が付いたときのアクセント

数詞や助数詞が、和語であるか、漢語であるか、外来語であるか、また単純語であるか複合語であるか、古くからある助数詞か、新しくできた助数詞かなどで、いくつかのグループに分かれる。

漢語の単純数詞に、新しくできた助数詞の付いたものは、規則的であり、複合名詞の法則に似ている。たとえば、漢字1字の漢語助数詞(時・個など) が付くときは、イチジ、ニジ、ヨジ、ハチジのように原則として数詞の最後の拍まで高い型になる。数詞の語末が引き音・促音・撥(はつ)音のものだけがサンジ、ジューージ、イッコ、ヨンコのように頭高型である。また、漢字2字以上(時間など)、あるいは外来語で3拍以上（グラム、ブロックなど）の助数詞が付くときは、複合名詞の法則に似ている。たとえば、助数詞が単独で平板型・頭高型ならばイチジカン、イチグラムのように助数詞の第1拍まで、中高型ならばイチブロックのように助数詞のアクセントの高さの切れ目まで高い型になるものが多い。

[1966年8月初出、1998年1月改稿]

共通語の発音で注意すること

桜　井　茂　治

第１章　母音の無声化

第１節　共通語の母音の無声化

共通語では、たとえば、「菊」という語を、自然に発音すると、〔ki̥ku〕のように、〔ki̥〕の母音を、口構えだけをのこして、声帯を振動させず、息だけで発音する現象がみられる。これを《母音の無声化》という。

共通語の母音の無声化には、次のような一般的な決まりがある。

決まりⅠ　《キ》《ク》《シ》《ス》《チ》《ツ》《ヒ》《フ》《ピ》《プ》《シュ》などの拍が、《カ》《サ》《タ》《ハ》《パ》などの各行の拍の直前にきたとき。

例　キク（菊）の《キ》、タシカメル（確かめる）の《シ》、ガクシャ（学者）の《ク》

決まりⅡ　《キ》《ク》《シ》《ス》《チ》《ツ》《ピ》《プ》《シュ》などの拍が、息の切れ目の直前にきて、その拍のアクセントが低いとき。

例　アキ（秋）の《キ》、カラス（烏）の《ス》、アリマス（有ります）の《ス》

以上のような一般的な決まりのほかに、次のような無声化の傾向がみられる。

(1)　アクセントが低い語頭の《カ》《コ》の拍で、次に、同音の高い拍がくるとき。

例　カカシ（案山子）の最初の《カ》、ココロ（心）の最初の《コ》

(2)　アクセントの低い語頭の《ハ》《ホ》の次に、母音の〔a〕または〔o〕を含む拍がくるとき。

例　ホコリ（埃）の《ホ》、ハカ（墓）の《ハ》

以上のように、共通語の母音の無声化には、一般的な決まりⅠ、Ⅱおよび(1)(2)の傾向があるが、実際の発音では、以上の決まりどおりに無声化はおこらない。また、個人によっても差がある。これが、共通語の母音の無声化の実態である。

なお、本編での無声化の表示については、「この辞典の使い方」（５ページ）を参照のこと。

第２節　母音の無声化の例外

先の決まりⅠとⅡには、それぞれ、

次のような例外がある。

〈決まりⅠの例外〉

(1)　無声化する拍のアクセントが高く、次の拍が低いとき。

例　シソン（子孫）の（シ）、ハチホン（８本）の（チ）

(2)　無声化する拍が、２つ続いたときの、一方の拍。

例　キキカタ（聞き方）の２拍目の（キ）、タキツケル（焚き付ける）の（キ）、レキシテキ（歴史的）の２拍目の（キ）

(3)　無声化する拍が３つ以上続くときの、まん中の拍。

例　キキステル（聞き捨てる）の２拍目の（キ）、キキツケル（聞き付ける）の２拍目の（キ）

〈決まりⅡの例外〉

決まりⅡで無声化する拍の次に、有声子音をもつ拍がくるとき。

例　アキガ（秋が）の（キ）、カラスワ（烏は）の（ス）、ソーデスネ（そうですね）の（ス）

〈そのほか〉

アクセントや前後の子音との関係で、次のような傾向もみられる。

(1)　無声化する拍と、アクセントの切れ目（高から低に変わるところ）が重なったときは、次の２つの場合がある。

(ｱ)　そのまま無声化する。

例　イツク（居つく）の（ツ）、ガラスキ（ガラス器）の（ス）、ショキカン（書記官）の（キ）

(ｲ)　アクセントの切れ目が、後にずれる。

例　ツク→ツク（付く）、キテ→キテ（来て）、シキ→シキ（四季）

(2)　無声化する拍の次に、サ行音やハ行音、そして（シャ）（シュ）（ショ）などの拍がくると、アクセントに関係なく無声化しにくく、また、無声化しなくても、不自然に聞こえない。

例　スサル（退る）の（ス）、スシ（鮨）の（ス）、クハイ（苦杯）の（ク）、クフー（工夫）の（ク）、シュショク（主食）の（シュ）、シシュー（詩集）の（シ）

(3)　サ行音、ハ行音が次にきて、意味の切れ目があるときは、無声化しないことがある。

例　キョーアクハンニン（凶悪犯人）の（ク）、ボーエキスイジュン（貿易水準）の（キ）

(4)　語末でも、アクセントに関係なく、無声化しないことがある。

例　スパイク（spike）の（ク）、スベラカシ（すべらかし）の（シ）、タライマワシ（たらい回し）の（シ）

第２章　ガ行鼻音

第１節　共通語のガ行鼻音

共通語のガ行音は、ガッコー（学

校)の《ガ》、ギンコー(銀行)の《ギ》、グシャ(愚者)の《グ》、ゲンキ(元気)の《ゲ》、ゴハン(ご飯)の《ゴ》のように、語頭では、破裂音の〔g〕で発音されるが、それ以外では、カガ゜ミ(鏡)の《ガ゜》、カギ゜(鍵)の《ギ゜》、ウグ゜イス(鶯)の《グ゜》、カゲ゜(影)の《ゲ゜》、カゴ゜(加護)の《ゴ゜》のように、鼻音の〔ŋ〕で発音される。この〔ŋ〕で発音される音を《ガ行鼻音》という。

共通語のガ行鼻音には、次のような決まりがある。

決まりI　語頭のガ行音は鼻音にならず、破裂音の〔g〕で発音される。

例　ガイコク(外国)、ギリ(義理)、グアイ(具合)、ゲンキ(元気)、ゴハン(ご飯)

ただし、助詞の「が」は、単独でも鼻音の〔ŋ〕で発音される。また「ぐらい(位)」「ごとし(如)」なども、単独で鼻音の〔ŋ〕で発音されることがある。

例　ガ゜(助詞の「が」)、グ゜ライ(位)、ゴ゜トシ(如し)

決まりII　語頭以外のガ行音は、原則として、鼻音の〔ŋ〕で発音される。

例　アガ゜ル(上がる)、カギ゜(鍵)、ヤグ゜ラ(やぐら《櫓》)、ニゲ゜ル(逃げる)、アゴ゜(あご《顎》)

ただし、次のような場合は、鼻音の〔ŋ〕に発音しない。

(1)　擬声語・擬態語で、同じ音の拍が、くりかえされるとき。

例　ゴトゴト(ゴトゴトと音がする)、ガラガラ(ガラガラと鳴る)、ギーギー(ギイギイと鳴る)、グーグー(グーグーと鳴る)、ゴーゴー(ゴーゴーという音)

(2)　数詞の「五」。

例　ジューゴ(十五)、ニジューゴ(二十五)、サンジューゴ(三十五)、ゴヒャクゴジュー(五百五十)

ただし、熟語化したものは、鼻音の〔ŋ〕に発音する。

例　ジューゴ゜ヤ(十五夜)、シチゴ゜チョー(七五調)、キクゴ゜ロー(菊五郎)

(3)　接頭語の次のガ行音。

例　オギリ(お義理)、オゲンキ(お元気)、オグアイ(お具合)

ただし、敬語以外の接頭語が付いたときは、〔g〕〔ŋ〕の両方に発音されることが多い。

例　フギリ～フギ゜リ(不義理)、フゴーリ～フゴ゜ーリ(不合理)

(4)　後部が、ガ行音で始まる複合語で、2語の意識の強いもの。

例　ビヨーガッコー(美容学校)、セカイギンコー(世界銀行)

ただし、後部のガ行音が連濁による場合は、鼻音の〔ŋ〕になる。

例　ヨコカ゜キ（横書き）、カイク゜スリ（買い薬）、ユキク゜ニ（雪国）、ナマコ゜メ（生米）

(5) 後部が、ガ行濁音で始まる複合語でも、複合の度合いによって、いろいろに発音される。

a　複合の度合いが弱く、2語の意識のあるものは、〔g〕と〔ŋ〕の両方に発音される。

例〔g〕〜〔ŋ〕に発音されるもの。

キョーイクガクブ〜キョーイクカ゜クブ（教育学部）、キョーヨーガクブ〜キョーヨーカ゜クブ（教養学部）、トギカイ〜トキ゜カイ（都議会）

例〔ŋ〕〜〔g〕に発音されるもの。

アタリケ゜イ〜アタリゲイ（当たり芸）、オモテケ゜イ〜オモテゲイ（表芸）、シロートケ゜イ〜シロートゲイ（素人芸）、セイケイカ゜クブ〜セイケイガクブ（政経学部）、ネコ゜ザ〜ネゴザ（寝茣蓙）

b　さらに、複合の度合いの弱いものは、〔g〕だけで発音される。

例　オモテゲンカン（表玄関）、チョーギカイ（町議会）、ヒメゴゼ（姫御前）、ミミガクモン（耳学問）、ヨメゴリョー（嫁御寮）

第3章　連濁

第1節　共通語の連濁

共通語には、ホン（本）とハコ（箱）が複合して、ホンバコ（本箱）、タビ（旅）とヒト（人）が複合して、タビビト（旅人）となるように、2つの語が複合（または、それに準ずる結合を）すると、後部の語頭の子音が、濁音に変わる現象がある。これを《連濁》という。

連濁は、共通語では、一般的な音声的現象で、日本語としても、古くからあったようである。漢語でも、連濁のことを新濁といって、本来の濁音の本濁と区別していた。

連濁は、語が複合したときにおこる現象だといっても、必ずしも規則どおりにならないことがある。たとえば、ムギ（麦）とハタケ（畑）が複合すれば、ムキ゜バタケ（麦畑）と連濁するが、タ（田）とハタ（畑）が複合しても、タハタ（田畑）となってタバタ（田畑）とはならない（固有名詞は除く）。

また、名詞と形容詞が複合すると、イキク゜ルシイ（息苦しい）、モノカ゜ナシイ（物悲しい）のように連濁するが、動詞と動詞が複合すると、イキカカル（行きかかる）、フリカケル（振り掛ける）のように、連濁しない。

また、共通語の現状をみると、連濁は、語によっては、次第に使われ

なくなっていく傾向が強い。

以上のように、共通語で連濁がおこる条件は複雑であるが、語が複合しても、連濁しない、あるいは、しにくい一般的な傾向がある。次節にそれをあげる。

第2節　連濁しない、またはしにくいときの一般的傾向

共通語では、次のような場合は連濁しない、またはしにくい傾向があり、それ以外は、普通、連濁する。

(1) 使われることが少ない語は、連濁しない。

例　コースル(航する、抗する)、チョースル(弔する、徴する)

(2) 動詞と動詞が複合するときは、連濁しない。

例　オイカケル（追いかける)、キキコム(聞き込む)、ツレコム(連れ込む)、ツミカサネル(積み重ねる)、フリカケル(振り掛ける)

ただし、前部が連用形名詞として用いられるときは、連濁する。

例　イキズマル（行き詰まる)、イキドマル（行き止まる)

(3) 文法的に、2語のときは、連濁しにくい。

a　前部が後部の目的格になるとき。

例　ホシトリ(星取り)、ヤネフキ（屋根葺き)

ただし、前部が副詞格のときは、連濁する。

例　タテガ゚キ(縦書き)、カワラブキ（瓦葺き)

b　前部と後部が対等のとき。

例　ウエシタ(上下)、サンカイ(山海)、タカヒク（高低)、ヨミカキ（読み書き)

(4) 擬声語・擬態語は、連濁しない。

例　カンカン(〜と照る)、サンサン(〜とふりそそぐ)、クンクン（〜鼻をならす)

(5) 前後の音によって、連濁しにくいものがある。

a　前の音が促音のときは、連濁しない。

例　トッテ(取っ手)、トッツキ(取っ付き)

b　後部の2拍目が濁音・鼻濁音のときは、連濁しにくい。

例　アワセカガ゚ミ（合わせ鏡)、アイカギ゚(合い鍵)、オーカゼ(大風)

〔1966年8月初出、1997年5月改稿〕